

---

# とある幻想殺しの戦い

ヨッシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある幻想殺しの戦い

### 【Nコード】

N6546T

### 【作者名】

ヨッシー

### 【あらすじ】

ransu521さんのとある世界の魔法少女パラレルワールドの闇の書事件後のアナザーストーリーです。この話はプリズマイリアやその他諸々のキャラクター・オリキャラなど多く登場し、そして、上条がチート化。色々と跳んだ物語になっています。

原作一筋の人は気分を悪くしてしまうかもしれませんが、頑張って投稿していきたいと思いますので応援お願いします！

## プロローグ 月夜の救世主（騎士）

とある幻想殺しの戦い

プロローグ 月夜の救世主（騎士）

海鳴市 とある人気の無い道 P M 7 : 0 0 （事件解決から数日）

はやて「遅くなってしまったな〜 . . . シグナムたちお腹すかしているやろうな〜」

ヴィータ「仕方ないだろー、あの安売セールがあそこまで、恐ろしいとは思っていなかったんだから . . . 」

はやてとヴァータは現在、買い出しが終わり、暗い夜道を歩いていた。

はやて家では、最近、備蓄が予想以上に減るスピードが速まっていた。その原因は、今まで買い出しに行っていた居候が1人 . . . 居なくなってしまったからだ . . . 」

はやて「それにしても、すごい人が多かったな〜」

ヴィータ「シャマルやトウマはよくあの戦場を突っ込む気になれるな . . . 」

はやてはトウマという名前に、反応した . . . それは、事件が終わると自分の元いる世界に帰ってしまったからだ . . . 上条も学生 . . . その他諸々あるため、仕方がないとはいえ、いざ、居なくなると寂しくなってくる . . . 」

はやては少し寂しそうな表情になっていた……

ヴィータ「大丈夫だって！トウマもまたすぐに会いにくるって言うてたんだから！！」

はやて「そ…そうやな！これくらいのことです泣いてたら、当麻さんに怒られてしまうやな！」

ヴァータに元気づけられたはやては再び車椅子を進める…上条との再会を期待に膨らまれながら…

道を歩いていると妙な気配が漂ってきた…まるで自分達を狙っているように…

その時、先まで月が出ていた空が雲に隠れ、周りが暗くなってしまった…ちょうど、はやてたちの周りには電灯がない場所だった。

ヴィータ「はやて…」

はやて「ああ…わかってる…わたしたち…狙われている…」

ヴィータ「はやて…私が時間を稼ぐから、そのうちに逃げる！」

はやて「車椅子では無理や…わたしも戦うで…」

やりとりをしていると敵が動き出した！

ガタッ！

ヴィータ「そこか！」

ドーン！

ヴィータの攻撃がしたことにより、敵が姿を現した。

グルルルル！

ヴィータ「何者だ！」

攻撃の直撃した砂煙中から、黒い獣がうなりながら近づいてきた。

はやて「動物．．．いや違う、これは魔力でできた召喚獣に近いものや！」

ヴィータ「はやて．．．まずい．．．囲まれた．．．」

はやてがゆっくり、周りを見ると自分達を狙っていたのは1匹だけではなく、複数の獣に狙われていたのだ！

はやて「落ち着いて．．．ヴィータちゃん、今、シグナム達に連絡取るから．．．」

ヴィータ「はやて．．．今、試したんだけど、通じない．．．」

はやて「しかたない．．．私が魔法で．．．クツ．．．近すぎる」

はやての魔法は、ほとんどが長距離魔法や広範囲魔法．．．そのた

め、近距離で放つと自分やヴィータにもダメージが及んでしまう．．．  
ここで、空に上がってもいいと考えたが、相手の数がまだ、把握しきれていないため、無暗に飛ぶと危険を晒すことになる．．．  
そして、一番問題なのは、最近の入院により、本調子ではないため、魔法や飛行による行動がかなり、制限されてしまうことだった．．．  
そして、まだ足が治っていないため、車椅子での逃走も逃げ切れない．．．  
最後に家に連絡しても繋がらない．．．積んでいた．．．

ヴィータ「はやて！あそこの道を過ぎれば、家だ！わたしが後方を守るから、はやてはシグナム達を．．．」

ヴィータが話している途中に敵が襲いかかってきた！

ヴィータ「はやて！早く！」

はやて「わかったでー！ヴィータちゃん！あまり、無茶はしないでやー！」

ヴィータ「了解だ！」

はやては車椅子を急いで進めた。目の前の敵はヴィータの攻撃で吹き飛んだ．．．  
はやての進行方向の敵を撃破したヴィータははやての後方に入り、襲いかかる敵を薙ぎ払っていった．．．

はやて「もう少しで．．．」

ヴィータ「はやて！右！」

はやて「え？キヤーー！」

はやての右の家の屋根の上から襲いかかってきた．．． はやては、車椅子から投げ出され、地面に転がり．．．隣の塀にぶつかった．．．

ヴィータ「はやて！クッ」

ヴィータははやてを救出に向かいたいが、前の敵に押されおり、助けにいけなかった．．．

はやて「う．．．うう．．．」

はやてはなんとか身体を起こすと．．．今さっき、襲いかかってきた獣と後からきた獣がはやてを狙っていた。

はやて「い．．．いや、こないでや．．．」

そんなはやての願いは届かず、獣達は一步、一步近づいてくる．．．

はやて「誰か助けて．．．ヴィータちゃん．．．なのは．．．フェイト．．．当麻さん．．．」

はやては助けを求めても、ヴィータは後ろの獣に手を焼いており．．．  
．．．なのは、フェイト、上条はその場にいない．．．

はやて「いやだ．．．せつかく、助けてもらったのに、こんな所で、  
終わりなんて．．．」

今のはやてには、なににもできなかった．．．たとえば、バリアジャケ

ツトを身に纏っても、気休めにもならない．．．空を飛んでも、ほかの獣に襲われしまふ．．．もう何もはやてが助かる物はなかった．．．

はやて「うう．．．ゴメン．．．ヴィータちゃん、私もう、駄目や．．．」

はやては泣きながら、自分の最後を受け入れようとしていた．．．

ヴィータ「はやて！邪魔すんな！うわ！」

ヴィータも獣の物量に押され、その場で転倒してしまった。

はやて「最後に当麻さんに告白しておくべきだったな．．．うう．．．当麻さん．．．助けて．．．」

上条はどんな時にも人がピンチになった時に現れ、危機を救ってくれる正義の味方<sup>ヒーロー</sup>であるが、彼は自分の世界にいる．．．どんなに助けを求めても、届くはずもない．．．

獣達が沈黙をやめ、はやてに飛び掛かってきた．．．はやては目を瞑り、自分の最後を待った．．．が

バシユツ！バシユツ！バシユツ！

なにかが切る音がはやての前から聞こえてきた．．．

はやてはゆっくりと目を開けていくと誰かの足が見えた．．．

ヴィータもはやてを助けた．．．誰かを見たが暗くて見えなかった．



．．．

曇っていた空に月が現れ、周りを再び照らし始めた．．．

はやてが目を開き終わった時には、目の前の人の背中が見えていた。

はやてはゆっくり、頭を上げるとそこには．．．

おとぎ話によく出てくるお姫様を助ける騎士（救世主）が立っていた．．．

続く．．．

## プロローグ 月夜の救世主（騎士）（後書き）

プロローグの話はかなり先の話になります！

そこで今回の話で、はやてを助けたのは一体誰だったのでしょうかア  
ンケートを取りたいと思います！

ヒントはあるキャラ・Fateキャラ・リリカルキャラ・オリキ  
ヤラの誰かです！！

期限はプロローグの話から、はやてを助ける話まで取りたいと思  
います！

途中変更もオーケーなので、感想と一緒にお願いいたします！

# 1 魔法少女・・・絶賛募集中!!

1 魔法少女・・・絶賛募集中!?

学園都市 上条当麻の寮(事件終結から数日)

上条「インデックスー！ー！おまえ、また摘み食いしただろ！  
！」

インデックス「摘み食いなんかしてないもん！ただ、冷蔵庫の中のものを食べただけだもん！」

上条「それが、摘み食いというものだー！今週の間までも無くなってて・・・嗚呼・・・数日前のはやて家が恋しい・・・こんな生活破壊獣の世話より、はやての料理を味わいながら、みんなで話し合う生活にもどりたい・・・」

上条もはやてと同様・・・いや、ただ単にインデックスの横暴ぶりに頭を抱えているのだ・・・

インデックス「はやての作るご飯、おいしいの？わたしの食べてみたいかも！」

上条「おまえにははやての飯を食わせられん！働かざる者、食うべからずだ！」

インデックス「そんなことは無いもん！ちゃんと、働いてるもん！」

上条「ほほお．．．例えば．．．」

インデックス「毎日、お祈りをしているもん！シスターとしての仕事をやっているもん！」

上条「お祈りで、お金や飯が降ってくるかー！ー！家事かアルバイトくらいしてみる！」

この馬鹿げたやりとりが続くと．．．思いきや！

キーン

上条「うあ！な．．．なんだ！」

インデックス「当麻！これ魔法陣だよ！」

今さっきのやりとりはどこに行ったのか．．．2人はすぐに警戒態勢に入った。

上条「どうして．．．また．．．ローマ正教の攻撃か？それとも過激派の襲撃か？」

インデックス「わからない．．．これ！攻撃魔法陣じゃない！当麻！これ移動魔法陣だよ！」

上条「なんだって！インデックス！何か来るぞ！！」

上条の言葉にインデックスと上条は警戒から戦闘態勢に切り上げた。

そのとき、魔法陣から移動してくるものが姿を現した！！

ピカッ！

上条「わ！」インデックス「キャ！」

強い光が魔法陣から発し、2人は目を瞑った．．．その時！

ルビー「ジャツジャツジャーン！愛と正義のマジカルステッキ！マジカルルビーちゃんの登場で〜す〜！！！」

2人「．．．．」

ルビー「あれあれ〜なんで、リアクションが無いの〜？」

それは主人公とヒロインとして、失格だよ〜？」

上条「いや〜色々と人の幻想をブチ殺した。拳句、ヘンテコな登場でリアクションを求めるなんて．．．失格もくそもないだろ．．．」

インデックス「わたしも．．．いきなりすぎて、何ていえばいいかわからないかも」

2人は何か自分達を狙う敵が攻めてきたと思い、緊張が最高まで高めた時に出てきたのが意味不明なマジカルステッキだったのだ．．．

さすがに上条も自分の幻想をぶち殺されるなんて予想外だった．．．

ルビー「あは！リアクションを求めたら、逆に突っ込まれてしまいました！さすがこの世界の主人公とヒロインです！！！」

このステッキ．．．いつたいなにを求めているのか．．．上条は色々状況整理を開始していた．．．

ルビー「ま！とにかく、ここに居られるのも、ごくわずかなので、  
単刀直入にいいます！インデックスさん！あなたに魔法少女になっ  
てもらいたいんです！！」

2人「！！」

今度はなにを言い出すと思えば、インデックスに魔法少女になれだ？  
世迷い言も大概にしろ！！と上条は心の中で叫んでいた・・・

ルビー「魔法少女・・・楽しいですよ！空は飛べるし！魔法も使い  
放題！悪をコテンパンに叩き潰して、周りから感謝の言葉が殺到！  
そして、あなたは魔術師・魔道書図書館と、呼ばれるほどの知識を  
もっている！！これはならないのがおかしいですよ？」

上条「コラー！待ちやがれ！これ以上厄介ごとを増やす勧誘を出し  
てんじゃねー！後、なんで俺達のことを知っている！！」

ルビー「ふふ！そ・れ・は・・・企業秘密です？」

上条「インデックス！こいつ何か企んでるぞ！気を付け・・・」  
インデックス「本当に！カナミンと同じような魔法少女になれるの  
~~~~！？」

ルビー「はい~~~~？もちろんですとも！！」

上条「！！」

この馬鹿暴食シスター・・・貴様の完全記憶能力はただの飾りか？こ  
の前のキャッチセールスの惨劇を再び再現するつもりかー！？と  
上条はまた心の中で叫びを上げた。

インデックス「どうすれば！魔法少女になれるの？」

ルビー「簡単です！わたしを持つてください！！」

インデックス「わかった！持てば、いいんだね！」

ルビー（ふっふっふっ！！）

上条が脳内処理が終わらないうちに事態が進んでいた・・・これでは本当に惨劇が再現されてしまう・・・上条は考えるのをやめて、阻止行動を開始するしかなかった。

行動を開始していた時、インデックスはステッキに手に触れそうになっっていた・・・

上条「うおおおお！インデックスやめるー！！」ガシッ

インデックス「キャ、当麻！」

ルビー「キャー！何をするんですか！もう少しで魔法少女がたんじょ・・・あれ？力が抜けていくー！？」

上条が握った手は右手・・・異能の力をすべて、打ち壊す！このルビーも例外ではない・・・

上条「ここから居なくなれー！！」

ルビー「クッ！私だけ消えるわけにもいかない！あなたも一緒に連れていく！上条当麻！！」

上条とルビーのどこのガンダムネタを言いつつ、ルビーは上条の腕に巻きつき、魔法陣にひきずりこんだ！

上条「うわわわわ！！」

インデックス「当麻!!」

インデックスが上条を掴もうと思ったが、上条とルビーと魔法陣は消えていた……

インデックス「大変なことになったんだよ!!急いでみんなに伝えなきゃ!!」

インデックスは急いで部屋の外へ出て行き、助けを求めにいった……

続く……



## 2 只今、喧嘩中!?

ロンドン 時計塔の講堂

凜「この縦ロール!よくもやりあがってわね!」

ルヴィア「そのセリフ!そっくりそのまま、返してやりますわ!遠坂凜!」

この二匹・・・いや・・・この二人は魔術協会の1年で優等生である。赤い服にツインテールの髪をしている少女は遠坂凜。

青いドレスにロールがかかった髪をしている少女はルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。

この二人はとても喧嘩するほど仲良し・・・に見えるわけではない。  
・ 現在、この二人はお互いにガンド（呪い）を打ち合っていた・・・

そうなった理由は凜の宝石魔法の射出角度を間違え（故意の可能性あり）、ルヴィアの額に深く突き刺さった・・・その反撃でルヴィアからガンドが返ってきて、凜もそれにガンドで応戦した。

それが悪化し、現在被害が増加中!誰も彼女らを止められる者がいなかった・・・しかし、奇跡が起きた!!

キーン!ドン!

凜「キャ!何?」

ルヴィア「クッ!なんですか?」

2人の天上の間に魔法陣が出て、何かが2人の間に降ってきたので

あつた！！

??A「クソ！なんで毎度不幸なことに巻き込まれるんだ！」

??B「あなたがわたしのやぼ・運命を邪魔したからですよ！！」

??A「おまえが現れたのが今回の原因だろー！！」

??B「キヤーーーー！！その手でわたしをふれないでー！！」

落下位置には煙が立っており、中の様子がわからないが、男の声と女の悲鳴に近い声・・・これは魔術師とし・・・いや・・・女として2人がやるのが決まっていた・・・

凜「この変態！！煙の中で何、女の子に手を上げてるのよ！！」「ドドドド！！（ガンド）」

ルヴィア「男して恥ずかしく無いのですの！女の敵はここで消えなさい！！」「ドドドド！！（ガンド）」

??A「ギヤーー！不幸だー！！」

??B「キヤーー！まだわたしもいるのにー！！」

凜&ルヴィア「はっ！！！！」

2人は正気を取り戻した。いくら女の敵がいたとしても、一緒に撃つてしまえば、女性にも怪我を負わしてしまうので意味がない・・・二人は少し焦った。

煙が晴れ、二人は中にいた声の主を見た・・・そこにいたのは！

上条「いたたた・・・いきなり攻撃を食らうなんて・・・正直、死ぬかと思った・・・」

ルビー「ひどいです・・・まさか・・・無差別に攻撃してくるなんて、野蠻にもほどがあります・・・」

自分達と同じくらいの少年と意味不明なステッキがいた！

凜「あれ？まさか、私の勘違い？」

ルヴィア「まさか、一般人に向けてガンドを撃ってしまったなんて、エーデルフェルトにあるまじき、行為ですわ・・・」

この二人はやつと反省し始めるはずだったが・・・

ルヴィア「もとはいえば、ミス・遠坂あなたがこの方にガンドを撃つたのが原因ですわ！」

凜「なんですって！あんたが、思いきり！ガンド撃つたのが原因でしょー！！」

上条「あ~~~~」

凜&ルヴィア「外野は黙って（るですわ）なさい」

上条「！！」ビクッ！

上条は困った・・・今の状況やここがどこなのか・・・聞きたいが現在、その場にいるのはこの2人だけである・・・

この状況をどうにかしないと先には進めない・・・しかし、お人良しの上条はこの現状をほおっておくわけがなかった。

上条「お二人さん！いい加減、喧嘩をやめて！落ち着いて・・・」

凜「うるさい！今このゴリラを潰すんだから、邪魔をしないで！！」

ルヴィア「言いましたわね！ニホンザル！あなたに潰されるほど私は甘くはありませんことよー！！」

ドドドドッ ドカーン（ガンドの撃ち合い）

上条「はあ〜仕方ない・・・止めてやるよ！その腐った喧嘩を！！」

上条もこの喧嘩に介入し、両成敗をしようと突っ込んでいった・・・

少し経って喧嘩の終結の声があがった！！

???C「そこまでーーい！！」

3人の動きが止まった。

上条「あなた・・・誰ですか？」

上条は誰なのは質問すると・・・

凜「バカ！何突っ立ってんのよ！頭下げなさい！！」「ドン！

上条「ギャー！ここは人の頭を叩きつけてまで、頭を下げるのかよ！！」

上条は凜に頭を叩きつけられて、何が起こっているか！分からなかった。

ルヴィア「あなた！大師父様の前ですわよ！！しっかりなさい！」

上条「大師父？」

大師父「よくここまで、暴れられたな〜！喧嘩するのはよいが場所を選べ！凜・ルヴィアよ！」

凜&ルヴィア「はい・・・」

大師父「さて・・・少年よ！よくこの二人を止めようとしてくれた・ここの者にいるを代表として、感謝する！」

上条「いえ！自分はなにもしていません！あなたが止めなかったら、終わりはありませんでした！！！」

大師父「ふむ・・・素直でよろしい！そして、己より強い者に臆することなく立ち向かうその勇氣・・・かなりの評価に値する！！！」

上条「はあ？」

大師父「少年よ！」

上条「はい？」

大師父「わしの弟子にならないか？」

上条「え？」

凜&ルヴィア「え〜〜〜〜！！！」

その時の大師父の言葉に周りの魔術師達は驚きとお騒がせの二人の悲鳴が時計塔の中で響き渡った。

続く・・・

### 3 只今、状況確認中!?

3 只今、状況確認中!?

ロンドン 時計塔 大師父の部屋（喧嘩から1時間経過）

大師父「先ほどはすまんかった・・・あの2人に要らん傷を負わせてしまつての〜」

上条「いえ・・・最後は自分から関わってしまったので、気にしないでください・・・」

喧嘩終結後、上条は怪我の治療を受けたが、彼には回復魔術が通じないので、傷口の消毒と包帯を巻いた。治療で済ませたのであった・・・

大師父「ふむ・・・おお！そつえば、名前を聞いていなかったな！」

上条当麻「あ！そうでした。自分は上条当麻。見ての通り、ただの学生です」

大師父「わしはここでは、魔道元帥 キシユア・ゼルレツチ・シユ  
バインオーグじゃ 宝石翁もしくはカレイドスコープ万華鏡と呼ばれておる！好きな呼び方で呼ぶがいい！」

上条「そうですか〜みんな、大師父と呼んでいますので、大師父で構いませんか？」

大師父「ああ！構わないとも、それにしても、上条よ！ただの学生にしては、面白いものを持っているの〜！先ほどの喧嘩でガンドを打ち消していたの〜」

上条「それはこの右手の幻想殺しの力です。異能の力を片っ端から打ち消してしまいます！」

大師父「なるほど！その右手はどんな魔術でも打ち消すことができるか！」

上条「はい！魔法でも魔術でも超能力でもなんでも、打ち消します・  
・そのため、先ほどの回復魔術などの魔術を打ち消して・自分の幸運も消してしまうのが欠点です・不幸だ・」

大師父「不幸か・その割には不幸そうには見えぬ・」

上条「それは自分が、不幸だからこそ、事件に巻き込まれてそこで苦しむ人を助ける機会に恵まれるので、不幸は不幸でも、不幸とは感じません・」

上条は記憶喪失前まで何をしていたかわからないが、最近まで、学園都市のローマ正教の襲撃から天使なつた風斬 氷華を助けたり、フランスのアビニヨンでのローマ正教の暗部、神の右席・左方のテッラを五和と共に闘い、撃退できた。そして、すぐになのは達の世界に飛ばされ、多くの人を救うことができた。

上条にとっては自分が不幸に巻きこまれても結果、誰から幸せになつてくれれば、それでいいという彼にとっての正義であった・

大師父「その若さで、そこまで考えているとは・・さすがは、異世界の主人公の幻想殺しの上条当麻だ！」

上条「え？なんで、異世界から来たとわかるんですか？」

大師父「ふむ、まず本題に入るまえに謝罪させほしい。」

上条「はい？」

大師父「そなたをここへ飛ばしたのは、わしじゃ！」

上条「な・・・なんだって！！」

大師父「前から異世界でどんな魔術でも打ち消す力を持つ者が存在していると知り、ここへ呼びたいと思っていたが何せ、異世界から呼ぶのは、そこらの魔術では不可能でく！そしたら、ちようど、その異世界の道が開かれたので、あのステッキを使い異世界に飛ばして、そなたを説得して連れてくるように言ったのだが・・・すまないことをしてしまった・・・」

上条「いえ・・・今回が初めてではないので・・・お気になさらずに・・・」

そうなのである。上条はなのはの世界に初めて飛んだのはアジャスタに飛ばされたからである。

今回合わせて、何かに拉致・・・もしくは飛ばされるのは2回目、上条は流石に慣れてしまっていた・・・

上条「あのくく聞いてよろしいでしょうか？私は元の世界に戻るのでしょうか？」

大師父「・・・すまん」

上条「・・・ま・・・まさか」



大師父「そなたが来た瞬間・・・そなたの世界への道が閉ざされてしまった・・・」

上条は驚こうとせず、そのまま椅子に座り、置いてあった紅茶を一口つけて、紅茶のカップをテーブルに戻した・・・

上条「大師父・・・ここで騒音を立てても、問題ないでしょうか？」

大師父「ああ！かまわないとも・・・存分に吐きたまえ・・・」

大師父は上条のやりたいことをわかっていたため、あえて、すすきりさせるため、止めなかった・・・

上条「では・・・お言葉に甘えて・・・すうすうすうすう!!」

上条も今まで溜まっていたものを吐き出すように思いきり、部屋中の空気を吸い上げた。そして、限界が来て・・・

上条「ふーーーーーこーーーーーうーーーーだーーーー!!」

上条のお約束のセリフは時計塔の全体まで響き渡り、後の時計塔でのバカ声大賞に上条が選ばれたのは、また別の話であった・・・

続く・・・

## 4 新たな力と決意

### 4 新たな力と決意

大師父「落ち着いてかね。」

上条「ええ・・落ち着きました。今回はとくに・・。」

上条はお決まりのセリフを叫んだ瞬間色んな意味で落ち着くようなスキルを身につけていた。今回はあれだけの大声を上げたため、上条はいつもより冷静になっていた・・。

大師父「では、本題に入ろうか。だが・・その前に、そなたの力を試すと同時にやってもらいたいことがあるのだが・・。」

上条「ええ！構いませんよ！」

大師父「それでは、この封印を打ち消してくれないか！」

大師父が出してきたのは、長い長方形のケースのような箱だった。鍵の部分が見たことがないの形をしていた・・。

上条「なんですか。これ？」

大師父「見ての通り、何かが入っている箱じゃ！」

上条は不思議に思っていた。一見ただの長い楽器を入れるケースに見えるが、ケースの模様とそこに描かれた何かの紋章・・何より一番怪しい鍵の部分である・・そこには、鍵穴が無く、何かの力を加えれば解錠できる仕組みであった・・これは自分の世界の科学的なハイテクロックシステムや魔術的な封印のどちらでもない。

いや、違う・・・これは科学と魔術の両方を兼ね備わった鍵だった！！

大師父「これはとある魔術師がわしに託した物だ・・・これを渡した者はその場で息を引き取ってしまったの・・・あの者が何者でどうして、他人のわしにこれを託し、この箱が何なのか告げず逝ってしまった。・・・そこでわしは中身に何が収まっているのか。確かめるべく、多くの魔術を試したが、すべてが無意味だった。箱の破壊して中身を確かめることもしたが、箱は傷付くどころか汚れも付きはしなかったのじゃ・・・」

上条「そこで、自分の幻想殺して鍵自体を破壊しようとしてここへ呼び出したと？」

大師父「それもあるが・・・まず、これを何かを調べたい・・・手伝ってもらえぬか？」

上条「始めに言ったはずです！構いませんと・・・！！」

大師父「ふむ！では、頼む」

上条「了解しました！それでは・・・」スッ！

上条は右手を構えて、一気に鍵に向けて手を伸ばした！！

バキーン！！

ガラスが割れるような音が部屋中に響き渡った・・・

上条「な・・・なんだ！」

上条は驚いた。ケースの鍵が外れた瞬間、ケースがいきなり、ふたの部分が2つに分かれ、中から白い煙のようなものが出てきたのであった……

大師父「素晴らしい！上条よ！よくやってくれた！これで長年の夢の1つが叶った……」

大師父は喜びと感動に満たされていた。今まで駄目だった物が1人の少年により、解決したのだ……

上条「そんなに喜ばれても……それより中身はなんですか？」

上条はケースの中を見たそこには……

大師父「これは……杖かの……」

上条「こ……これは、デバイス……」

大師父は見たことがないため、これが何なのかわからなかったが、上条はこれの正体が一目で分かってしまった……それはなのはやフェイトが使っているデバイスと変わっているが、これはデバイスだと分かった！！

そして、大師父に箱を渡したのは、ユーノや管理局の人達と同じ世界からやってきた人物だと確信した。

大師父「デバイス？何に使う物の……？」

上条「これは、とある世界で戦闘に使う魔法武器です！自分の知り合いで似ている物を使っていたので、多分これも、同じだと思えます！」

大師父「なんと！そのような物だったとは・・・む！上条よ！それ以上、近ずいてはならん！」

上条「え？うわ！」

上条の反応が遅れた・・・デバイスから光が出て、上条に向けて放った。

デバイス「封印解錠の実行者の適性スキャン開始・・・身体の各箇所の適性クリア！・・・右腕にエラーを確認！・・・原因を解析・・・解析に失敗・・・これより、直接のシンク口を試みます！！」

デバイスから女の声（英語）が聞こえ、上条の身体をスキャンした。本人は英語がわからないため、デバイスが何を話して、何を話しているんだか、さっぱりだった。

デバイスは上条のことを関係なく行動に移った！

デバイスは宙に浮き上条を目掛けて飛んできた！そして、上条は抵抗をすることできずにデバイスと接触し、光に包まれた。

上条「今度は、なんだ？」

上条が周りを見わたすと大師父は驚いていた！

大師父「上条・・・そなた・・・そこ格好は・・・」

上条「え？」

上条は自分の体を見ると・・・

上条「なんだこりゃー！！！」

服装が変わっていた！いつもの学生服ではなく、黒いタイツに青く

光る線が身体中を駆け巡っており、胸部、肩、腕、腰、膝、足にかけて銀色に光る甲冑が付いていた！！（F a t e に出てくるランサーの格好に上の通りの部分に防具を付けた感じですよ！）

だが、右腕だけは不完全だった・・・肘から手にかけての装備がついていなかったのが、デバイスは右手首にブレスレット状の形で装備されていた。

デバイス「シンクロ良好！右腕のエラー原因を特定！これより、幻想殺しとのマッチングを開始します！」

上条はびっくりした！さっきまでのデバイスがしゃべっていたのが英語だったのに・・・日本語に変わっていたのだ！

デバイス「マッチング作業実行中・・・対象者の魔力・・・0・・・原因を特定！幻想殺しによる効果により、右手の魔力回路が破損している模様！・・・至急魔力回路の書き換え修正及び改善に移りませう！」

上条「なんだって！勝手に話を・・・」

上条はデバイスに訴えようとしたが、身体に違和感を覚えた・・・デバイス「対象者の魔力発生源をリンカーコアタイプ・・・エラー・・・魔術回路タイプ・・・クリア！ 改善部分を右腕に集中・・・作業開始！！！」

上条は身体が燃えるように熱く感じ、目まいを生じていた・・・それは魔力がいきなり身体の中を駆け巡ったための副作用に近いものだった・・・そのため、上条は立っているの精一杯だった・・・

デバイス「作業完了！右手から肘までの魔術回路を修正・修正部の魔術回路を回収後、回路接続改善・・・魔術回路の安定化！確認！右腕の装備装着を確認！・・・マッチング作業も無事完了！すべての作業・・・オールグリーン！・・・対象者を持ち主として登録します。」

そして上条の身体の魔力の通り道が繋がったのだ！

上条「ちよつと待てー！ーい！！何勝手に人の身体をいじくり回した挙句、俺を持ち主と決めつけてるんだよ！！」

上条は魔力のいきなりの循環により、ダウンしかけていたが復活していた。さすが、主人公とも言っておくべきか・・・

デバイス「私は前マスターの遺言に従ったままでです！」

上条「どんな遺言なんだ・・・」

デバイス「私を封印していたケースの封印を解いた者を次のマスターにせよと・・・」

上条「なんだ！そのハタ迷惑なアニメの主人公が力を手に入れるような在り来たりな遺言はー！ー！」

いや、おまえ自体がどこぞのアニメの主人公だろ・・・と大師父はそう思った・・・

上条「それにお前は どうして、右手に触れて大丈夫なんだ！普通、お前みたいなデバイスは触れただけで幻想殺しに殺されるだろ！！」

デバイス「それに関しては問題ありません！前マスターも同じような能力をお持ちだったため、そのデータを参考に対策と施しているので・・・」

上条「な・・・んだと、俺と同じような奴がいたのか・・・」

デバイス「それは、何百年も待つていれば！1人か2人・・・似たような方が現れますよ？」

上条「あゝ、たしかにそうだなゝゝ・・・それで、お前はこれ正しいのか？俺みたいな魔力が少ないような奴で・・・」

デバイス「何を言ってるんですか！あなたの魔力量は半端ではありませんよ！」

上条「え？」

デバイス「たしかに、今までは魔力の循環が不可能だったのは幻想殺しが原因でしたが、その能力を右手だけに抑えこみましたら、魔力は通常の魔導師の数十倍はあります！」

上条「なんだって！それはなのは達と同じくらいの魔力があることですか！」

デバイス「なのは？データにないので分かりませんが・・・SSクラス並みの魔導師くらいはくだらないでしょう！」

上条「いやいや、何かの間違いじゃないのか？さすがに魔力があることは認めるが・・・SSクラスはないでしょ・・・」

デバイス「何度もやってみましたが、測定はSSクラス並みです。何かご不満でも？」



上条「不満じゃないが、俺に魔法が使えても、使い道がないぞ・・・  
お前はそれでいいのか？」

デバイス「構いません！私はマスターと運命を共にするように作られたのですから、マスターが力をお使いにならなくても、私はただマスターを見守るだけです・・・」

上条「お前とは気が合いそうだな。え〜と、名前何だっけ？」

デバイス「申し訳ありません。マスター・・・先に名乗るべきでした。私はメサイアと申します！」

上条「メサイア・・・え〜と、日本語でなんて言うんだっけ・・・  
最近習ったのに・・・」

大師父「救世主と言う意味だ・・・いい名前を授かったものだ。」

上条「救世主か・・・なかなかいい名前だな！」  
メサイア「マスター・・・私を使う前に、もっと勉強に励んだ方が・・・」

上条「そこを突っ込まないでくれー！色々あって、勉強ができないんだよ〜！！！」  
メサイア「ふふふ！マスターはなかなか面白い方ですね！そういう人は私は好きですよ？」

上条「お前・・・軽くバカにしてるだろ・・・」  
メサイア「いえいえ、正直に思ったこと言っただけですよ？マスター」

上条「マスターはやめてくれ・・・上条でいいよ！」

メサイア「分かりました。ます・・・いえ、上条！」

上条「今、間違えただろ！人のこと、言えないな」

メサイア「な！失礼な！上条ほど私はバカではありません！」

上条「ば・・・バカだと、認めるが今のお前に言われたくない！」

メサイア「なんですって！私は起きたばかりで、色々と整理が終わってないんです！！」

上条「都合のいい言い訳だな」

大師父はすっかり仲が良くなった2人を見ながら、紅茶を飲んでいった。

大師父「すっかり、仲間はずれにされてしまったの」

大師父は苦笑しながら、長く続く痴話喧嘩を肴にしながら、この愉快な時間を楽しんでいた・・・

1時間経過・・・

上条「まあ、なんだ、これ以上・・・不毛の戦いをやめよう・・・」

メサイア「同感です・・・何をしてるんでしょう・・・私達」

大師父「もう終わりか？もう少し遊んでいてもよかったのに」

上条「大師父！あなたは見てるだけで、止めようと思わなかったのですか！」

メサイア「そうです！ご老体！見ていない止めてください！」

意気投合したコンビに大師父は呆れていた……

大師父「まあ、2人の話はここまででいいかね？」

上条「ああ！構いませんよ！そうだろ、メサイア！」

メサイア「ええ！上条の選択は正しい！私はあなたと共にあります！」

完璧なほど仲良くなったコンビを見て、似たもの同士は団結するのが早いのと大師父は思っていた……

大師父「ここからが本題だ……上条よ！この世界はもうすぐ崩壊する！」

上条「な……なんですって！」メサイア「……」

大師父「崩壊はまだ先だが、予兆が起き始めておる！」

上条「何が原因でそんなことが……」

大師父「これが原因の1つだ……」

取りだしたのはカードであった……

上条「何ですか？このカード」

メサイア「上条……これはクラスカードです。」

上条「クラスカード？」

メサイア「英霊と呼ばれる者の力が宿った危険なカードです。私も現物を見るのは初めてです」

大師父「ほお、これを知っているか……なかなかの知識があるよ

うだな！」

メサイア「私の前マスターは世界の龍脈を調べていたのである程度のデータを備えています。」

上条「メサイア、龍脈ってなんだ？」

メサイア「簡単に説明すると人間と同じようにこの星にも、血が流れる血管と同じような役割を持つ物があるんです！」

上条「それでこのカードと何が関係あるんだ？」

メサイア「前マスターは龍脈にクラスカードが眠っていることを突き止めましたが、在り処を探し当てるできませんでした……」

大師父「その魔術師……いや魔導師か。よくそこまで、調べられたのー」

メサイア「前マスターは2人おり、初代のマスターは魔導師でした。そして前回のマスターは魔術師で、その時に龍脈のことを研究しておりました。」

上条「俺が3代目になるわけか？」

メサイア「そうなりますね！だけど、色んな意味で前回のマスターより上条はまともですよ？」

上条「どのあたりが？」

メサイア「前マスターは自分の能力に絶望し、現実逃避ぎみだったので、上条みたいな前向きなマスターは初代以来ですね！」

上条「ありがとう！」

上条はメサイアの言葉に礼を言って、仲がどんどん深くなっていた。  
・

大師父「とにかく！クラスカードの在り処が判明し、近い内に回収を行いたいのだが、お主にカードの回収を頼みたいのだが・・・」

上条「私は構いませんが、もし、龍脈とクラスカードを放置すれば、どうなるんでせうか？」

メサイア「上条・・・人は血管が詰まると血栓が出来て、血が回らず、死んでしまいます。それが、この星で起きているのです・・・」

上条「なんだって！」

大師父「メサイアの言う通りだ。このままだと地球が死んでしまう。  
・・・」

上条「わかりました！その仕事引き受けましょう！」

上条はやることは決まっていた。元の世界に帰ることができても、ここで帰るわけにいかない・・・上条はこの世界を救うという道しか選ぶものがない・・・

大師父「よく言ってくれた！では任せよう！しかし、今は準備ができていない。回収の仕事は準備ができてからじゃ！」

上条「分かりました！では、準備に掛かりましょう！大師父！」

実にいい返事だった・・・大師父はとても頼もしくおっていたが、まだ、話は終わっていなかった・・・

大師父「上条よ。回収の仕事について、もう一つ話がある……」  
上条「何でしょうか？」

上条は話に耳を傾けた……

大師父「この世界についてだ……」

続く……

## 5 開幕の狼煙

### 5 開幕の狼煙

6ヶ月後・・・日本領海付近の上空 PM7:50

大師父『こちら、マジシャンリーダー！もう少しで作戦開始区域だ！最終チェックと周辺の警戒を怠るな！』

パイロット「マジシャンリーダー、了解！作戦開始区域到着まで、約一分・・・カウントダウンを開始します。」

上条が、この世界に来て約6ヶ月が過ぎようとしていた。そして、クラスカードの回収の仕事を開始する時がきたのであった・・・

上条「おい！大師父・・・これはいつたい・・・何の冗談だ！」

大師父「上条よ！今は作戦行動中だ！私をマジシャンリーダーと呼称せよ！」

上条「どうでもいいわ！どうして、わざわざこんな大胆なことをするだ！普通に行けばいいだろ！普通に！」

上条が怒るのもおかしくはない・・・普通は旅客機で現地に赴くのが魔術師として、隠密に行動するべきだが・・・

上条「人をこんな狭い所に押し込めて、何をやる気だ！」

上条が乗っているのは軍用大型輸送機のコックピットに搭乗しているのでは無く・・・輸送機の格納庫にある少し大き目な人、1人

が入れるくらいなロケットに押し込まれていたのだ……

大師父「仕方なかるゝゝ、そなたが進んで、日本行きの便をゆずったからであるうゝゝ」

上条「だからって、なんでこんな送り方なんだ？一緒にあの時送ればよかったじゃ何か！」

大師父「纏まって行動すると逆に怪しまれてしまからのゝゝそれにちょうどよい！わしは1度、このような潜入ミッションの指揮官になってみたいと思っていたのじゃ！それによい圏になる！」

上条「圏？今、圏と言ったよねー！人をなんだと思っているんだよ！」

大師父「大丈夫じゃ！こんな所で死ぬ主人公はおらんぞ！」

上条「死ぬ！死ぬから！もし、死んだら責任をどうとるつもりだー！ー！！！」

大師父「死んだらそこまでな存在だったということだ……」

上条「鬼だ……ロンドンに鬼がいるぞ……」

パイロット「マジシャンリーダー！作戦開始区域に到着します！無線封鎖を……」

大師父「了解した！上条よ！生きて日本に到着したら、すぐに連絡せよ！それでは、グットラック！」

上条「おいコラー！」



パイロット「ドローン（ロケット）の最終チェックは無事終了・・・すべて、オールグリーン・・・坊主！盛大に送ってやるから、落とされるなよ！！」

上条「まてまて！これはちゃんとステルス積んでいるんだよね？自衛隊や在日アメリカ軍に気づかないようになってるんだよね！」

パイロット「・・・カウントダウン開始！10・9・8・・・」

上条「無視すんな！カウントの予告ぐらいもつとはや・・・」

パイロット「3・2・1・投下！グットラック！！」

ガシャン！（扉）ドン！ゴーーーーー！！（ロケットの噴射音）

上条「ぎゃーーーー！！ふーーーーうーーーーだーーーー！！」

いきなり、投下用の扉が開き、上条が乗っているドローン（ロケット）とダミーロケットを含めて4機が投下され、各ロケットは時間差でエンジンに火が噴き・・・目的地の日本に向かって、突き進んだ！

\*\*\*\*\*

日本 航空自衛隊基地

観測士「緊急事態！領海内に未確認の飛行物体、アンウンが本土に向かって進行中！」

指揮官「きたか！あのでたらめなテロ文章がまさか、ほんとに行うなんて・・・」

副指揮官「指揮官！一刻も猶予ありません！今すぐ、哨戒中の航

空部隊と基地中の全航空部隊に出動を命じるべきです！！」

指揮官「そうだな！全航空部隊はただちに出動！！アンノウンをすべて撃墜せよ！絶対に本土に触れさせるな！！自衛隊魂をみせてやれーーーー！！」

自衛隊 隊員「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

\*\*\*\*\*

在日アメリカ軍艦隊 航空母艦ヨークタウン

観測士「自衛隊が動きはじめました！」

艦長「なんだと！我々の獲物を横取りするつもりか！自衛隊は本土だけを守っていればいいものを・・・」

副艦長「このままでは、やつらにすべてを取られてしまいます！！」

艦長！至急、我々の航空部隊にも出動を命じてください！」

艦長「言われなくともわかっておる！！全軍に命じる！自衛隊にいいところを取られるな！！アメリカ海軍の力を見せてやれ！！」

アメリカ兵「「「「「「「「「「「「「「「「」

上条が日本に向けて飛ばすことをあらかじめ、告示してあったみたいで・・・完璧に武功を立てるための獲物にされてしまった・・・上条はこのことを知らない。知っているのに大師父と時計塔のごく少数の魔術師なのだ・・・大師父は楽しそうにしているが、魔術師達は上条の冥福を祈っていた・・・

\*\*\*\*\*

日本領海内 海中

トウアハー・デ・ダナン  
潜水艦

中佐「大佐、始まったようです・・・」

大佐「そうですね。予想道理の展開です！これらは、すべて本土に向かっています！」

中佐「そのようです！自衛隊とアメリカ海軍が迎撃に向かいましたが、彼らにすべて落とせるか・・・」

大佐「無理でしょう・・・彼らはあの予告文を読んでいながら、サボタージユですべてを流そうとして、何も準備をしていませんでした。撃墜出来て1〜2機くらいでしょう！」

中佐「しかし、我々は見ているしかありません。こちらにはそもそも装備がありません。」

大佐「いいえ、もう準備はできています。後はそこに目標が到達するまでです。」

中佐「まさか！あの3人を送ったのですか！」

大佐「ええ！今の所、このミッションを完遂できるのは、彼らだけですから・・・」

\*\*\*\*\*

場所をもどして、現在のの上条は・・・

上条「ク・・・なんて、殺人的加速だ！」

メサイア「今の速度・・・時速5000キロ・・・約マッハ4.1です~~~~!!」

上条「学園都市のあの化け物より遅いが、これはこれで、きつい~~~~!!」

上条が言っている化け物とはC文章を破壊するためにアビニョンに向かう時に乗った超音速旅客機のことである。それは時速7000キロオーバーを超える文字通り化け物なのである・・・

ビー！ビー！（警報）

メサイア「上条！自衛隊とアメリカ海軍の航空部隊がこちらに向かっていています!!」

上条「クソ！大師父のやつ、まさか、俺達のことをばらしたんじゃないだろうな！」

メサイア「わかりません！しかし、この速度なら、今の戦闘機F-2、F-15、F-22ならば追いつかれることは無いでしょう・・・大型対空ミサイルが飛んでこないことを祈るばかりです。」

上条「ああ・・・わかった。死ぬ前に言っておく・・・不幸だー！ー！！」

上条は思いつきり叫んでいた・・・そして、自衛隊&アメリカの混合航空部隊が接触し、攻撃を開始したが、4機の内、1機しか落とせなかった・・・

自衛隊A「クソ！こちら、レッド1！目標が攻撃を潜り抜けた！こ

れより追撃する!」

自衛隊 観測士「了解! レッド1! 急いでくれ! このままだと本土に到達する」

アメリカ兵「まずい! こちらも迎撃に入る!」

アメリカ 艦長「急げ! 本土に入られたら、本国に泥を塗ってしま  
う! なんとしても、止めるのだ!」

ドローンに突破され、混乱している航空部隊では追いつくこともま  
まならなかった……

海鳴市 なのは宅

なのは「なんだろう? お空が光ってる……」

海鳴市 とある公園

アルフ「フェイト……なんか、騒がしくない?」

フェイト「そうだね……少し騒がしいね」

海鳴市 はやて宅

はやて「なんや、やけに外が騒がしいな」

海鳴市のヒロイン達は不思議になって海沿の空を見上げていた……

\*\*\*\*\*

とある都市郊外の森

ウルズ1「さあ！野郎ども！獲物がきたわよ！！」  
ウルズ6「了解！」ウルズ7「了解だ！！」

森のなかである組織が極秘に開発した人型兵器ASが機動を始めた。

ウルズ1「私は右やるわ！あんた達は残りの2機をやりなさい！」  
ウルズ6「よっしゃ！真ん中は俺もらい！」  
ウルズ7「問題ない！俺は左だな！」

2機のAS(M9)はヒューズVGM-A2(M)「ヴァーサイルII」多目的ミサイル(ウルズ1)とボフォースASG96-B76mm狙撃砲(ウルズ6)を構えていた！

最後にウルズ7が乗るAS・・・AS(M9)はオットー・メララ「ボクサー」57mm散弾砲を構えたが、このボクサーはショットガンタイプのため、近距離でないと効果を発揮しないため、ウルズ2とウルズ6に遅れを取った。

ウルズ1「いただき！」  
ウルズ6「もらった！！」

2人の攻撃は1撃で2機、撃墜した・・・  
しかし、どれもダミー・・・

残るはウルズ7が狙う1機のみ・・・

上条「降下地点はまだか？」  
メサイア「もう少しです！」

ウルズ7「後、少し・・・」

メサイア「目標地点です！」

上条「よし！降下だ！」ガシャン！

ウルズ7「ファイアー！！」「ドーン！！」

上条「うわわわわああああ！！」

ウルズ7「当たれーーーー！！」

ドカーーーーーーン！！

\*\*\*\*\*

なのは「ふえええ！？何？山で何かが爆発したよ！！」

アルフ「うわ~~~~・・・この世界も物騒だね~~~~」

フェイト「アルフ、いきましょ・・・」

はやて「物騒やな〜、戦争が起きなければいいけどな〜」

ヒロイン達はこれがすべての始まりの開幕の狼煙だということとはき  
ずくわけがなかった・・・

ウルズ1「宗介！ナイスシュート！！」

ウルズ6「まったくだ！！まさか！ボクサーで撃ち落とすとは・・・

┌

ウルズ7「問題ない！マオ！撤退を開始しよう！」

ウルズ1「そうね！野郎ども！撤退するわよ！私に付いてきなさい！！」

ウルズ6&7「了解！！」

3機のASはECS不可視モードを機動し、夜の森から姿を消した。  
・・・

\*\*\*\*\*

降下地点（森林）

上条「はあ・・・はあ・・・まさか、降下開始後、ドローンを落とされ  
るとは・・・」

メサイア「不幸中の幸いでしたね！タイミングが遅れたら死んでい  
ました・・・」

大師父「こちら、マジシャンリーダー！上条よ！応答せよ！」

上条「大師父！危うく死ぬ所だったぞ！！」

大師父「おお！生きていたか！やはり、主人公はそう簡単には死な  
ないことを証明できたな！！」

上条「人をなんだと思っっているだ！！クソ爺！！」

大師父「それより、上条・・・そなたの乗っていたドローンが空中  
で破壊されたため、過激派の連中は送られてくる魔術師が死んだと  
思いこんだようだ！」

上条の目つきがかわった・・・



上条「そうですね．．．なら、目的地までは奴らの攻撃は問題ないと．．．」

大師父「そうなる．．．応援の2人も明日には到着できるはずだ．．．」

上条「了解です．．．主にあの2人が今回の仕事をやり遂げてくれると思いますので自分は2人のサポートをメインにいきます．．．」

大師父「上条よ．．．あの2人を甘やかすと後が怖いぞ．．．それより、2人に与えた特殊な魔術礼装を監視してほしい！今は2人より2つの方が心配だ．．．」

上条「了解しました！あれは色々と危ないですから．．．もう関わりたくはなかったのですが．．．」

大師父「上条よ！最後にミッションの確認をする！」

上条「最初にいった2人のクラスカードの回収作業のサポート．．．次にこの地にある地脈の安定化作業及び邪魔とする勢力の殲滅．．．最後に．．．」

大師父「上条よ．．．わしが頼んだのは2つだけだぞ！」

上条「これはおれがやらなくてはならないミッションです．．．絶対にあいつらを守ってみせる！」

大師父「2つの作業もかなり困難な仕事なのに、もう1つの重荷をせよとすれば、潰れてしまうぞ！」

上条「問題ない！これは絶対にやり遂げる！！ミスは許されない！  
！」

大師父「わかった・・・だが、無茶はするな！」

上条「了解」

大師父「上条よ！準備が出来次第、目的地に向かいミッションを実行せよ！通信終わり」ガツ！！（通信が切れる音）

上条「・・・メサイア！準備は！」

メサイア「私はいつでもできています！」

上条「よし、行くか！・・・あいつらは俺とまだ会っていないからな・・・もし、あいつらが狙われたら、陰から助けないと・・・」

メサイア「上条・・・あなたはやさしいですね・・・」

上条「やさしくないよ・・・俺はただ自分の自己満足で動いているだけだ・・・」

メサイア「それでも、結果的にあなたのやっていることは人を救っています・・・この1ヶ月間で何人の人を救ったことか・・・」

上条「メサイア・・・話はここまでだ！急いで目的地に付き、体勢を立て直し、仕事を始めるぞ！！」

メサイア「了解です！！」

上条は動きだした！この世界を救うためにそして、大切な人を守るために・・・

上条は6ヶ月前に聞かされた話で、この世界に関することで絶望を

覚えていた……

この世界はまだ……上条当麻がなのは達と会う前の世界であることだった……そして、この世界が崩壊するタイムリミットは闇の書事件の数日後であったのだ……

だが、絶望的なことでも、上条にとっては奇跡だと思っていた……それは今までの時間では、崩壊を止めることができなかったが、今なら治せると……

そして、上条は進む……明るい未来をめざして……

上条「メ……メサイア！おまえ……道わかる？」

メサイア「すみません……まったく、わからないです!!」

上条「ふ……不幸だ……!!」

いきなり最初から、迷子になっていた……

続く……

## 解説1 (前書き)

途中ですが、現在の上一条の状態をパラメータ化してみました!!

## 解説1

キャラ（上条当麻とメサイア）のパラメータと解説（Fate風にアレンジしてみました！）

上条当麻（戦闘態勢） イメージカラー：黒

筋力：B 耐久：B 敏捷：A - 魔力：SS（メサイア装備時）  
幸運：E D -（メサイア装備時）

保有スキル 直感A 真眼（偽）A カリスマB 騎乗B

直感：戦闘時に常に自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

A：研ぎ澄まされた第六感はや未来予知に近い。視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

心眼（偽）：直感・第六感による危険回避。視覚妨害による補正への耐性。

A：第六感、虫の報せとも言われる天性の才能による危険予知。

カリスマ：軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において自軍の能力を向上させる。稀有な才能。

B：指揮官としては充分な才能

騎乗：乗り物に乗る技能。

B：大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせる

6ヶ月間の準備期間で、強化された上条当麻です。

ロンドンに飛ばされて6ヶ月・・・戦闘スキルを無理やり向上させ

た結果です。

大師父ゼルレッチに無理やり、イギリス軍の訓練に参加されられ、生き残るため直感や危険回避能力ほかの戦闘技術を向上された！

訓練の中には戦闘機・戦車・バイクなどの運転訓練も入っていたため、騎乗スキルも身につけた。

カリスマのスキルは訓練中に上条属性になってしまった女性軍人が多発し上条との共闘が多かったため、集団戦での指揮を任せられることが多かったためである。訓練期間は3ヶ月間

残りの3ヶ月間の半分は魔術や基礎知識の勉強だったが・・・上条自体、勉強が苦手だったため、実践的な魔術や英語を少し話せるくらいしか、知識面は上がらなかった。

最後のほとんどが、上条のお約束の不幸に巻き込まれて、多くの人々を救うのに時間をつい出してしまいが、イギリス中に上条当麻の名声が伝わり、「幻想殺しの上条」「魔術師殺しの上条」などの異名が全土に響き渡った。もし、上条がこの世界で命を落とすと英霊になれる位置まで来ていると大師父は言っている・・・

幸運度の上昇はメサイアが幻想殺しを抑えているため、上条の幸運が元に戻った状態になっているが、不幸に合う運命からは逃れられなかった・・・

外見は原作より変わり、気だるいそうだった顔が少し大人びており、上条と知っている友人達は一目で判断するのが難しいほど

体型も軍隊にいた為、全身が筋肉が付き、たくましくなっている。

メサイア イメージカラー：白

上条を3代目の主と認めたデバイス

上条もメサイアを無二の相棒と認めているため、二人の友情はとてつもなく硬い。

通常は上条の右手首に二つのリングの間に長方形クリスタル（メサイア本体）が固定されている。

しかし、通常は右手の幻想殺しにより、通常のデバイスは壊れてしまいが、メサイアには上条の能力を無効化できる機能がついているがほかにも何かの関係があるようだが黙っている・・・

デバイスの種類はインテリジェントデバイスに近いタイプだが実際ははっきりしていない・・・

上条の右手の魔術回路を持っており、上条との魔力供給や補給のバypassが繋がっているため、魔力を本人に気付かれずに吸い取っているが・・・ある時、上条の魔力をすべて吸い取って病院送りにしたため、少し規制している・・・

デバイスの割にはよくしゃべる！一見、大人しく礼儀正しい女性のようになしゃべり方だが、自分の間違えを認めず否定し続ける我がままな性格を持っている。まるで年頃の女性がデバイスになったような感じが伝わってくる・・・そして、とてつもなく、燃費が悪い！だが・・・それに似合う、高スペックを持っておる。

現在、明らかになっている機能は学習機能及び自己進化機能が特化した機能である。6ヶ月間で上条の戦闘に向く武装や防具を開発しては発展させ続けており、初期装備がかなり変更されている。戦闘を行うと随時、戦闘データも取っているため、メサイア自身も上条のサポートや援護のタイミングを試行錯誤で調整して、自ら魔法攻撃も可能にしている。

## 解説1（後書き）

ransu521さんの2章（闇の書事件編）完結記念に、第3部  
第6部・解説1を1日で投稿させていただきます！

ある程度の話の流れがわかりましたか？

そして、これからが本当の本編に突入です！

楽しみにしてください！！

後、アンケートも継続で行っているので、よろしく願いします！



## 6 Fate(運命)！？

6 Fate(運命)！？

翌日 とある空港

凜「やれやれ・・・まさか、1年で帰ってくることになるうとは思わなかったわ・・・」

ルビー「ひさびさの帰郷はですね！気分はいかがですか？マスター」

凜「別にどうともないけど・・・」

ルヴィア「湿っぽくて、雑多な国なこと・・・優雅さの欠片もない・・・あなたにはお似合いですわね」

凜「ルビー訂正、気分は最悪よ！こんなやつと一緒に帰郷なんて反吐が出るわ！」

ルヴィア「反吐が出るのはこちらですわ！元といえば、あなたが・・・」  
「ギリギリ！」

凜「何自分のことを棚に上げているのよ！この縦ロール！！」  
「ギリギリ！」

まったく、この2人ときたらいつも仲がいいことで・・・いや、悪かった・・・

サファイア「公衆の場で喧嘩しないでください！マスター」

ルビー「まったく、恥ずかしい人達ですね！」

そして、今回の問題の2つの特殊礼装・・・カレイドステッキの姉のマジカルルビー&妹のマジカルサファイアである。

上条が一番問題にしているのは、自分をこの世界に飛ばしたルビーである。上条的危険度はMAX、あいつは今も何か企んでいると上条は感知しており、妙な動きを見せれば、健全な普通の少女達があいつの毒牙がかかる前に右手で殺せるように準備をしてある・・・妹のサファイアはロンドン出る前に会っており、礼儀正しくどこぞの姉とは大違いだったため、上条的危険度は低い位置にあるため、問題なしと認識している・・・

しかし、上条はこの認識をしてしまったことが災いを起こすことになるうとは、知る余地もない・・・

ルビー「もー！だいたい、お二人とも忘れたんですか？わざわざ、日本まで来たのは・・・」

凜「分かっているわよ」チツ

ルヴィア「まったく、面倒な条件を出されたものですわ・・・」

凜「まさか、あいつと仕事をやらなくちゃいけないとはね・・・正直、やりたくない」

ルヴィア「同感ですわ！あの理屈バカ！あなた並みに始末が負えませんが！」

凜「なんですって！このゴリラ」

ルヴィア「うるさいですわ！このニホンザル」

上条がその場で居たらなんて言うだろう・・・今回のクラスカードの回収作業の応援はまさかのこの2人なのである・・・

そうなった理由は毎度の度重なる喧嘩で大師父の堪忍袋にも限界がきたのか・・・2人の魔術師としての除籍も已む無しと考えていたが、上条の説得で除籍は免れたが、この仕事を出されたのである・・・だが、2人は上条のおかげで魔術師としていられるのに感謝の気持ちがあつたくなかつた・・・まさしく、恩知らず！

サファイア「とにかく！早く上条さんに合流して、仕事を始めましょう」

ルビー「サファイアちゃんの言うとおりです！」

凜「仕方ない・・・行きますか」

ルヴィア「まったく・・・しょうがないですわ・・・」

やっと喧嘩をやめて、目的地に向かった・・・その場所は冬木市！！

\*\*\*\*\*

冬木市 穂群原学園高等部

士郎「一成！生徒会の仕事か！」

一成「ああ！それより衛宮は帰りか？」

士郎「まあ！そんなところだ！」

この二人は穂群原学園高等部 2年の生徒である。

今帰路に就こうとしている学生は衛宮士郎、弓道部に所属するごく普通の少年である。

そして、生徒会の仕事を熱心に行っているメガネを掛けた学生は柳洞一成、士郎の親友である。

衛宮は主人公として相応しい人物だが、今回の主人公から降格されている……そのかわり……

一成「お！お迎えがきたようだな！衛宮」  
??「お兄ちゃーん！ん！！」

士郎「ん？イリア！今帰りか？」  
イリア「そうだよ！一緒に帰る！！」

士郎「そう言うことだ。一成、また明日！」  
一成「おう！お疲れ様！」

士郎を兄を慕っているこの少女……今回の主人公兼ヒロインのイリヤスフィール・フォン・アインツベルン！愛称イリアである。  
穂群原学園小等部 3年（10歳）に在籍している兄同様ごく普通に女の子！そして、これから非現実の世界に叩き落とされる残念な生贄……

そして、義理の兄である士郎が大好きな美少女！！ここに土御門がいたら士郎を無理やりシスコンの道へ突き落していたかもしれない……

イリア「お兄ちゃん！後ろ乗せて！」

士郎「残念だけど、これは1人乗りなんだ」

士郎は自転車で通学・下校をしている。

イリア「いいじゃない！」

士郎「ふふ……乗せてほしくば……全力で乗って見せるがいい！」  
シャーーーーー！！（自転車）

イリア「待~~~~てー！ー！！」ダダダ！！

士郎「うわ！早ッ！！」

イリア「私は50m走で男子に負けたことはないのー！！」ダダダー！！タン！

士郎「うわあああ！イリア！いきなり乗られるとバランスがーッ」

いきなり、2人乗りになった自転車は暴走して、道を突き進む・・・そして、お約束の十字路・・・2人の幸運度は士郎：E・イリア：A・・・さてさて、イリアの幸運でどれだけ士郎の運の悪さを中和出来るだろう・・・

そして、運命の瞬間、いったい横の道が何が出てくるだろう・・・車？バイク？人？

十字路から出て来たのは、まさかの・・・大きいリュックと1m以上ある長いケースを持った・・・ツンツン頭をした男性！それは・・・上条当麻！！

降格した主人公と異世界の主人公の幸運の低い者同士、導かれたのか・・・まっすぐ、上条に吸い込まれていた・・・

イリア「お兄ちゃん！ブレーキ！ブレーキー！！！！」

士郎「くそ！ブレーキが利かない！！」

止まらない・・・自転車は止まらない・・・地図を見るのに気を取られていた上条はやっと、気付いた・・・

上条「ん？あ・・・あれは・・・」

イリア「その人危なーーーーい!!」  
士郎「どいてくれーーーー!!」

上条「ああ! わかってる・・・地図を見て歩くな・・・とはあれほど言われたのに見ていたからその付けだな・・・今日1番目のお約束のセリフだな・・・不幸ーーーーだ!!」

上条が気付いた時には自転車は何メートルもなかった・・・自転車は上条に衝突! ストライク!

良い子のみんなは歩きながら本を見ると事故の元だから、上条と同じにならないためにも、歩きながら、本を読むのはやめようね!!

上条は数メートル、吹き飛んで電柱に激突した・・・残りの二人は自転車のバランスを立て直すことができ、無傷だった・・・イリアが乗っていて助かったのだ・・・

士郎「大丈夫ですか!」

イリア「大丈夫?」

上条「ああ! 大丈夫! 上条さんはこういう不幸には慣れっ子です!」

上条は何にも無かったように立ち上がり、落としたケースと地図を拾い上げた。

士郎「本当に大丈夫ですか? 何かできることがあれば、言ってください」

上条「そうですね・・・すみません・・・ここはどうぞやって行けばいいでしょうか?」

士郎「どれどれ?」

上条は持っていた地図を渡した・・・上条が向かっているのは冬木市のある住宅であった。

士郎「ここですか！それなら、途中まで案内しますよ！」

上条「いえいえ！そこまでしてもらわなくても大丈夫ですよ！」

士郎「大丈夫です！ちょうど、帰り道なので安心してください！」

上条「では、お言葉に甘えさせていただきます。」

士郎「ではいきましょう！え〜〜と、名前は・・・」

上条「ああ！上条当麻です！呼びやすいように呼んでください！後、気を使わなくてもいいですよ！」

士郎「では当麻と呼ばせてもらうよ！俺は衛宮士郎！好きなように呼んでくれ！後、同じように気を使わなくていいから！」

上条「衛宮・・・同じ姓名を知っている人がいるので、士郎さんと呼ばしてださい！」

士郎「ああ、かまわないよ・・・それと敬語はいいから・・・」

上条「はは！いや、すみません。最近敬語を多く使っていたのでいい・・・」

男性2人は盛り上がっているが、今回の主人公が忘れていた・・・

イリア「私を忘れないでよ・・・2人とも・・・」

士郎「悪い悪い、紹介するよ、義理の妹のイリアだ！」

イリア「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです．．．以後よろしく．．．」

イリアは少し機嫌が悪くなっていた．．．

上条「ああ！よろしく、イリアちゃん．．．ん？義理？あれ、養子か何かい？イリアちゃん？」

士郎「はは．．．いや、イリアじゃないよ！実は俺が養子なんだ！」

上条「そうなんだ、いや．．．知り合いに義理の妹を持つ悪友がいたので、つい同じなのかと思って．．．」

士郎「知り合いにそんな人がいるのか．．．どんな人なんだ！」

上条「メイド好き及びシスコン．．．」

士郎「．．．ま．．．まあ、世の中そのような人もいるよな．．．はは．．．」

士郎は内心、少しショックを受けていた．．．上条の思っている義理がつく兄妹などは変人の塊だと思っていることを．．．士郎はイリアのことは妹として好きだが、異性としては見ていない．．．そこだけはどごその救いようのないシスコン（土御門）より救いようがあった。

だが、その話に食いついた者がいた．．．イリアであった。

イリア「上条さん！後でそのシスコンさんの話を聞かせてください

！（小声）

上条「え？なんで？（小声）」

イリア「いいから！じゃないと今さっきの無視したこと．．．許し



ませんよ?」

上条「わ……わかりました……」(怖)心の声

士郎「あれ?もうイリア、当麻となかよくなったのか!兄としてはうれしいな」

イリア「うん!上条さん、とても優しいもの……とても」

上条「……」(最近の子供って、怖いな)心の声

上条達は雑談しながら、帰り道を進んで、分かれ道に辿りついた……

士郎「この坂をまっすぐ上れば、地図の場所につきますよ!」

上条「ここまでありがとうございました!後で、お礼させていただきます!」

士郎「お礼なんていらないよ!」

イリア「お話をちゃんと聞かせてください」

士郎「話?」

上条「ああ……こちらの話なので、お気になさらず」

イリア「そうそう!少し興味ある話を聞かせてもらっただけだから!」

士郎「そうなのか?」

上条「それでは士郎先輩・イリアちゃん、また今度……」

士郎「ああ!また、どこかで!」

イリア「さようなら」(ひらひら)手を振る

上条も手を振った後、歩きだした・・・目的地に向けて・・・

イリア宅

イリア&士郎「「ただいま！」」

セラ「あら、シロウにイリアさん、お帰りなさい！」

イリア「セラ！頼んだ物、届いた？」

セラ「お届物なら・・・リズが開けましたよ？」

イリア「なんですって！！」ダダダ！！

リズ「あら？イリア・・・おかえり」

イリア「リズお姉ちゃん！なに一人で魔法少女マジカル ブシドームサシを見ちゃってるの！」

リズ「イリアが遅いから」

イリア「仕方ないのよ！困っていた人を助けていたんだから！」

士郎「アニメのDVDか・・・」

セラ「ああ・・・イリアさんが俗世に染まっていく・・・奥様達に留守を任せていただいているのに・・・どう顔向けすればいいのかしら・・・」

士郎「個人の趣味の問題だし・・・あまり気にしなくても・・・」

セラ「元はといえば、あなたが兄として、しっかりしないからです！」

士郎「なぜ、俺にまで！！！」

イリア家の日常はとても賑やかだった・・・

\*\*\*\*\*

とある屋敷

上条「ここか・・・」

メサイア「そのようです・・・」

そこは塀に囲まれた大きい武家屋敷に近い屋敷だった・・・（Fateの本編の衛宮邸・道場ほか弓道場付き）

上条「ずいぶん広い所だな！一人で住むにはもつたない場所だな！」

メサイア「同感です！」

上条は屋敷に上がり居間の所で寛いだが・・・もう日が落ちていくため、今日はすぐ休むという選択はあるが、ここからが上条の仕事が始まる時間になるのだ！

上条「もう・・・あの二人もここ（冬木市）に着いた頃かな・・・」

メサイア「時間的にはそうなります・・・」

上条は持っていた荷物の中でも大きい、長いケースに手を掛けた・・・

上条「あいつらが喧嘩しないうちにけりをつけたいから・・・さっさと仕事の準備を始めるか！」

ケースの中は・・・大型ライフルのパーツが詰め込まれていた！

上条「まさか・・・おれもこれ（大型ライフル）を使うときが来ようとはね〜・・・」  
メサイア「私的にはあまり、好ましくはないですが・・・まだ、その装備は実践で戦闘していないため、そのデータを取るため已む無しだと思えます・・・」

上条はライフルを組み立て始めた・・・この1ヶ月でいったい何があつたのか・・・上条の戦闘スタイルがガラリと変わっていた！

上条「メサイア！大師父に通信を！」

メサイア「了解！チャンネル開きます！」

上条の前に画面が現れた・・・

大師父「上条よ・・・どうした？」

上条「なかなかいい屋敷を手配してくれたことのお礼です。」

大師父「おお！そうか、着いたか！屋敷は気に入ったか？」

上条「ええ！こないいとこ、滅多にありませんよ！これなら、あの送りつけ方も許しても、お釣りがくる位ですよ！」

大師父「気に入ってくれてうれしいよ！その屋敷はそなたの物だ！存分に使うがいい！！」

上条「ありがとうございます」

大師父「さて、上条よ！さっそくだが、仕事を頼む！」

上条「そのつもりで、現在、準備をしています・・・」

上条はライフルの組み立てを半分、終わらせていた・・・

大師父「よし！まず、あの二人と合流後、クラスカードの回収に向かって入れ！」

上条「了解！」

大師父「着いたばかりで疲労していると思うが、よろしく頼む！通信終わり！」

上条の前の画面が消えた・・・

上条「メサイア！バリアジャケットを展開！」

メサイア「了解です！」

上条はライフルの組み立てを完了し、バリアジャケットに着替えた。  
・  
・

上条のバリアジャケットは前に装備より行動しやすい軽装状態に変更されていた・・・それは今回の上条の装備が長距離戦闘に向いていたため、射撃用のバリエーションに変更したからだ・・・

上条「さて、仕事だ！メサイア！！」ガシャン（弾リロード）

メサイア「了解です！上条！」

上条が縁側から外を見ると星と月が周りを明るく照らしていた・・・そして始まる・・・上条当麻の新しい戦いが・・・

続く・・・

## 7 義兄妹の契り

### 7 義兄妹の契り

冬木市 上空 PM 8 : 00

凜「だぁー！ー！ー！ッ！なんで攻撃してくんのよ！共闘だということ忘れてるんじゃないの!？」

ルビー「まったく・・・困ったちゃんですね・・・結構、本気でですよ、あれ」

ルヴィア「ホー！ー！ッ！ホッホッホ！こんな任務・・・私ひとりですうにでもなりますわ！貴方さえいなければ全て丸く収まるんですよ!！」

サファイア「マスターは人でなしと評します」

ルヴィア「黙りなさいサファイア!」

上条よ・・・無念だ・・・現に喧嘩を始めていた・・・多分、上条も気付いているだろう・・・なにせ、空で喧嘩をしているのだから・・・

ルヴィア「私の輝く未来のため！ここで散りなさい！遠坂凜!！」

ドオー！ー！ー！（魔法）

凜「ルビー！障壁張って！障壁!！」

ルビー「現に張っています!！」

ガアアアン!！（直撃）

ルビー「ここまでの魔法砲だとは・・・ちょっと、相殺しきれませ

んね〜まあ治癒促進もかけてあるので、しばらく放っておけば傷も治りますよ」

凜「いや・・・治るとかそういうことじゃなくて・・・痛い・・・今、とても痛い」

ルヴィア「まったく害虫のようにしぶとい女ですわね・・・とつとと、消えてもらえませんか?」

凜「・・・」ビキキキ!! (怒り)

凜「そう・・・あなたの気持ちはよーーくわかったわ。そっちがその気なら・・・」  
ルビー「凜さん」

凜「この場で引導を渡してあげるわ!!」シュバ! (カード抜く)  
ルヴィア「クラスカードを抜きましたわね!ならばこちらも・・・手加減しませんわ!クラスカード・・・ランサー!!」シュバ!!

凜「クラスカード・・・アーチャー!!」

二人が持っているクラスカードは協会があらかじめ回収したものである・・・そして、クラスカードの力を今、解放しようとしていた!!

凜&ルヴィア「インクルード限定展開!!」

シーーーーーン・・・

凜&ルヴィア「あれ?」

力が解放されず逆に静かになった・・・

凜「ちょっと・・・ルビー！インクルードよ！！！」

ルヴィア「どうしましたの！サファイア！？」

ルビー「やれやれ・・・二人には付き合いきれません・・・」

凜&ルヴィア「「は！？」」

ルビー「大師父が私達をお二人に貸し与えたのは喧嘩に使わせるためではなく・・・お二人が協力して師が下した任務を果たすためだったはずですよ！！・・・だというのに、この魔法を私闘に使うとは・・・本末転倒もいいとこですね！！」

凜「グツ・・・ぺらぺらと正論を・・・」

サファイア「ルビー姉さんの言うとおりです！」

ルヴィア「サファイア！？」

サファイア「大師父のご命令でルヴィア様が私のマスターとなつてまだ数日ですが・・・任務を無視したその傍若無人な振る舞い・・・恐れながらルヴィア様はマスターに相応しく方ではないと判断します」

ルビー&サファイア「「ですので・・・誠に勝手ながら・・・しばらくの間、お暇をいただきます！！」」シュバババ！！（逃げ出す）

前代見物だった・・・まさか・・・デバイス・・・いや・・・カレイドステッキに見捨てられるマスターがいるとは・・・

凜「待てや！コラー！！ステッキの分際で主人に逆らう気！？」



ルビー「もつと私達に相応しいマスターを探してきますよ！」  
サファイア「失礼します！元マスター」

上条！緊急事態発生！！まさかの恐れていた魔法少女汚染が広がる  
うとしてるぞ！

ルビー「あ！それと凜さん。ルヴィアさん。もう変身を解きました  
ので・・・早くしないとそのまま落下しますよ？」

凜&ルヴィア「へ？」「ガクン

凜「キャー！落ちるーッ！！」

ルヴィア「おのれ！許しませんよ！サファイアー！！」

ルビー「それではごきげんよう！！オホホホ」

ルビー（心）「今の状況では、上条が私を殺そうと狙ってくるはず  
・・・急いで、次の生贄・・・いや！マスターの素質をもつ美少女を  
・・・ん？！！ あんな所に逸材がいるではありませんか！！」

ルビーは急加速を駆けて、とある家の窓に飛びこんでいった・・・  
そこは・・・イリアの家であった！！

時を同じく凜達

凜「くっ・・・重力軽減魔術でなんとか・・・あーッ、加速が止ま  
らない！！」

ルヴィア「こんなところで終わりたくありませんわー！！」

ドン！ドン！（射撃音）バン！バン！（直撃）

凜「これは・・・ネット？」  
ルヴィア「誰ですの！？こんなふざけたことをするのはどこのバカ  
ですの？」

二人に命中したのは空中での戦闘で落下してしまった時に使用する・  
とある人が設計し作った救助弾だった！！これを作ろうと考え使  
用するのは1人しかいない・・・  
二人はパラシュート付きのネットに絡まりながら、ゆっくりと地上  
に降下していた・・・

\*\*\*\*\*

とある高台

大きい銃口から煙が出ていた・・・少し前、上条はガードレールを  
使い砲身を固定し、空に向けて2発の救助弾を撃ち付けていた！バ  
カな2人を助けるために・・・  
屋敷では大型ライフルだったが・・・現在、パーツ変更して、精密  
射撃が可能な手持ち式キャノン砲に変わっていた・・・これもあの  
バカな二人を助けるためにあらかじめ準備をしていた装備だった・・・

上条「はあ〜・・・メサイア・・・最近あの2人が喧嘩すると殺意  
を覚えるのは正常な反応なのかな・・・ほんと、自分を見失いないそ  
うなんだけど・・・」

メサイア「上条！それこそ誠の反応です！！あなたは今までやさし  
すぎたのです！今の反応こそ、正常な反応です！安心して下さい」

上条「メサイア・・・今度、あいつらが喧嘩したら・・・おまえなら  
どうする・・・」

メサイア「周りに被害が出る前に遠慮なく・・・殺します！」

上条「あれ！？メサイア？おまえ、救世主という名前なのにあるまじき、お言葉だと思えますよ！？」

メサイア「何を言っているのですか！あの人達を救うのではありませんか！この人生という牢獄から解き放って上げようと思っただけではありませんか！！」

上条「遠まわしに、ひどいことをしないであげて！せめて、説教で済ませてあげようよ！」

メサイア「甘い！甘過ぎます！そんな事だからバカ共が大人しくならないのです！2度とやらないように恐怖と絶望をバカ共に味あわせて……」

上条「メサイア！自分を見失わないで……！！」

この2人はなんて仲がいいんだろう……暴走気味の二人はボケとつつこみのコント？をして怒りを鎮めていった……

上条「そういえば、あの二人から離れて行った光……！！ま……まさか……」

メサイア「そのまさかだと思います……上条」

上条は気付いてしまった！いや……気付くのが遅れてしまった！！

上条「しまったー！あのステッキ共、あの二人を見限りやがったなー！！」

メサイア「上条！ゆゆしき事態です！急ぎカレイドステッキの捕獲を！特にルビーを優先的に！」

上条「いや……あれはもう殺す！あれは人畜有害なステッキだ！こ

れ以上、悲しい被害者を増やすわけにはいかない!!」

メサイア「ん？ つッ!! 上条！あそこにステッキが！」

上条「なに？あれは姉か？妹か？わかるか、メサイア！」

メサイア「わかりません！あのステッキの魔力はほとんど同じですから。魔力識別は難し・・・上条！ステッキが逃げます！」

上条「くそ！思ったより早い・・・ちよつと無理をするぞ！」

メサイア「了解です！」

上条はキャノン砲を収納モード・・・砲身と銃身が2つに折れ、砲身と銃身の真ん中に接続し、背中に背よつた・・・

上条はそのまま、高台の崖から飛び降りた・・・

上条「両足の筋肉と関節を強化！メサイア！指示した場所に足元の補助を！」

メサイア「了解！」

上条は強化の魔術を使い、強化した足で崖を蹴り、とても大きい跳躍をした！

そして、飛ぶ速度が緩みかかると足元に魔法陣が現れ、そのまま魔法陣を蹴って加速して行つた・・・この芸当は上条とメサイアの狂いもないコンビネーションで行える上条の長距離移動法でもあるのだ・・・

メサイア「あそこの建物に入ってきました！上条・・・」

上条「まだだ！まだ終わらんよ！例え見られても、契約しなければいいんだ！急ぐぞ！」

上条はスピードを速め、ステッキが入つた建物に向かって突き進ん

だ・・・

\*\*\*\*\*

とある孤児園

時間を少し巻き戻って・・・とある孤児園の部屋で寂そうな顔して、  
夜空を見ている少女がいた・・・

少女「今日も星空きれい・・・だけど、なにもない・・・」

この少女には、両親も兄弟もない・・・そして、友達もない・・・  
文字通り、何も恵まれなかった哀しき少女だった・・・

少女「星がきれいなのに・・・どうして、世の中暗いんだろう・・・」

この子・・・いったい何を考えているの？まだ、イリアと同じくらいの  
年なのに・・・周りの本はすべて、大学クラスの教材が本棚にき  
れいに並べられていた！

少女「それは政治家が裏金や賄賂などを使っているからだけど・・・」

「  
キヤー！まだ、夢や希望で満たされているはずの少女が世間の真っ  
暗な話を知ってるの？・・・という感じで現実を見過ぎてしまい、  
人の温かさも知らないのだ・・・」

そして、今日もなにも変わらない・・・つまらない夜で終わると思っ  
ていたが！

少女「あれ？今、何か光った！？ ん？ 何・・・あの光」

そう何も変わらない日常が変わったのだ！

空にチカチカと何かが発光し、そこから、2つの光が分かれたのだ！  
1つはどこかの家に急速に落ちて行き・・・もう1つはその場で停止していた。

少女「変な光ね・・・蛍か何か？それとも・・・最近のテロ部隊がミサイルを撃つたし・・・今度は爆弾でも落とすのかしら・・・」

なに未恐ろしいことを言っているだこの子は・・・もっと夢を見ようよ！今の年しか見れないぞ！・・・と芸人が居たらつつこみそうな展開になっていた・・・

後、テロに見えるけど、あれは上条さんを送り込むためのロケット・・・なんて誰も知るはずもない・・・

少女「あ！こっちに来る！」

いきなり、停止していた光が動き始め、こちらに生き良いよく突っ込んできた！

少女「！！」「サッ！！」

少女は回避するため、身体を伏せた！

光は窓から中へ入ってきた・・・恐る恐る見てみると・・・

サファイア「夜分遅く申し訳ありません」

少女「・・・誰？」

少女は軽くつつこんでしまった・・・自分の前には意味不明な可愛

らしいステッキが空中で停滞しているのだ・・・

サファイア「私はカレイドステッキのマジカルサファイアというものです・・・以後お見知り置きを・・・」

少女「ご丁寧にどうも・・・」

なんでしょう・・・この2人・・・とても礼儀正しく、何気に二人に似ている部分があった・・・

サファイア「いきなりで申し訳ありませんが・・・魔法少女になって頂けないでしょうか？」

少女「魔法少女？なんですか？新手なジョークですか？」

サファイア「ジョークではありません。私と契約すれば、魔法が使えます」

少女「魔法なんて・・・そんな非現実なことできるわけ・・・」

??「いや！できるんだよ・・・そいつに触れると・・・」

少女はびっくりした。いきなり後ろから人の声が聞こえたからだ！少女は恐る恐る後ろを見ると窓に月の光に照らされた・・・ツンツン頭で見たこともない服装をしている男性がいた・・・

少女「誰ですか・・・」

サファイア「と・・・当麻様！！どうしてここに！」

サファイアは動揺し始めた・・・

上条「どうもこうも、お前達が勝手に持ち主を捨てたから回収に来たんだよ！よつと！」

上条は窓から部屋に入ってきた。

上条「いきなり、現れた上に勝手に部屋に入って悪いね！俺は上条当麻！まあ！好きなように呼んでくれ！」

少女「では、不法侵入者さん」

上条「その呼び方はやめて〜！！！」

少女は少し笑った・・・今さっきまで、寂しそうで無表情だった顔が少しだが笑ったのだ・・・

少女「それで何しにきたんですか？不法侵入者さん？」

上条「ごめんなさい・・・勝手に入ったこと謝りますから・・・その呼び方はやめてください・・・」

少女「何しにきたの？」

上条「ああ！こいつを回収にきたんだ・・・」

サファイア「仕方がないので・・・ルヴィア様はマスターとしてはあまりにも不十分だったので・・・その少女が適性があつたため、勧誘していました・・・」

上条「その気持ちはわかるが、ほかの一般人を巻き込む行動はいただけないな〜まあ！ルビーみたいに無理やりつてことはしてないから許すけど、次はないからな！」

サファイア「はい・・・」

サファイアは落ち込んでしまった・・・



少女「あなたは私が魔法少女になることは望まないのですか？」

上条「俺は他人の幸せを壊したくないんだ．．おまえもこんな馬鹿げたことで人生を駄目にしたくないだろ．．．」

少女「私には．．．何もありませんから．．．幸せってなんなんですか？」

上条はこの少女の状況が言わなくてもわかってしまった．．．この少女はずっと1人ぼっちだったということをそして、上条が知っているはやてより重症な我慢する性格だということ．．．

上条「幸せっていうものはな．．人に与えられるものじゃないんだ．．自分が望む願いや希望が叶うとか．．そういう時に幸せを感じるんだ！」

少女「自分の願いや希望ですか．．．」

少女にも、あきらめるしかない願いだが1つだけあった．．．

少女「無理ですね．．．私には到底無理な願いです．．．幸せにはなれません．．．．．」

上条「なに勝手にあきらめてんだ？」

少女「え！？」

上条「願いはあきらめた時点で無理なんだよ！最後まで貫き通さないと願いが叶うはずもないだろ！」

少女「しかし、私には・・・」

上条「いいから、言ってみる！お前の願い！」

少女は迷った目の前の上条とは今さっき会ったばかりなのに、なぜか・・・言葉が出てしまう・・・

少女「か・・・かぞく・・・」

上条「よく聞こえないぞ！もっとちゃんとして！自分の願いだろ？」

少女「か・・・家族です」

上条「なんだ立派な願いじゃないか！なんでそんなにビクビクしてたんだ？」

少女「笑われると思ったから・・・」

上条「上条さんは人の願いを笑いませんよ！むしろ応援したくなる！」

少女「！！！」

少女は心の中で何かを感じた・・・こんなにも温かい気持ちはなんだろうと・・・

少女「だけど・・・そんなのは無理に決まっています・・・私みたいな女には・・・何も叶いま・・・」

パン！！

少女「！！！」

少女は頬を叩かれた！少女もサファイアもびっくりした！

上条「いい加減にしろ！おまえ1人が何にも報われないなんて思っ  
な！！」

少女「！！」

上条「俺はな！お前みたいな奴を見てきたんだ！そいつも身内は誰  
もいなく、五体不満足な生活をしていても、自分が報われないを思  
ってはいなかったぞ！」

少女「だけど・・・だけど」

上条「そいつは最終的に願いが叶ったぞ！」

少女「！！」

上条「そいつもお前と同じように家族がほしかったんだ！ずっと、  
あきらめずに願っていたんだ！！そいつは本当に報われたんだ！そ  
れなのに自分だけは報われないなんて言っただけじゃねー！！！」

少女「私は・・・どうすれば・・・報われるんですか？」

上条「誰かに頼れよ！」

少女「誰かって！いったい誰を頼りにすればいいですか！？」

上条「おまえの目の前に居るじゃないか！」

少女「はッ！！」

上条「1人で抱えきれない重荷なら・・・俺も一緒に持ち上げてやるよ！」

少女の心に今まで考えも付かないほどの嬉しみがこみ上げてきた・・・これが人生で初めてだった・・・孤独だった自分にやっと光が差したのだ・・・

上条「1人で抱え込むな・・・俺が付いてあげるから・・・」ナデナデ

上条は少女の頭をやさしく、撫でた・・・  
そして、少女の心の中の溜まっていた膿のガムが決壊した！

少女「う・・・うわー！ーん！！」ダッ！

上条「うお！？」ガシ！！

少女は上条の胸に飛び込んだ！！

少女「う・・・うわーん！！」

上条「そうだよ・・・好きなだけ泣きな・・・その分幸せになれるから・・・」ナデナデ

上条はやさしく少女を撫でながら、泣き終わるまで少女を抱き上げてあげた・・・

メサイア（念話）『やさしすぎですね！上条！嫉妬したくなるほどに！！』

上条（念話）『嫉妬は困るよ・・・だけど・・・自分がどんなに不幸な人生でも、大切な人が幸せになるのなら・・・』

メサイア『あなたただけに重荷は背負わせません！私もあなたの重荷を持ち上げて見せます！』

上条『ありがとう……』

数分経過……

上条「少し落ち着いたかい？」

少女「うん」

少女は上条から離れていなかった……それより深く上条の胸に張り付いていた……

上条「そういえば、名前聞いていなかったな」

少女「美遊……」

上条「美遊か……いい名前だな！苗字は？」

美遊「苗字はない……親を知らないから……」

上条「……上条……」

美遊「え!？」

上条「苗字を上条って名乗っていいよ！ああ！それは美遊が決めることだ」

美遊「でも……」

上条「上条さんも……ここにいつまでも居られないからね……それにおまえの願いのほんの1部だけど叶えることができるからけど……うーん、駄目かな？全部じゃなきゃ？」

美遊「全部なんて要らない・・・」

上条「へ!?!」

美遊「私、今日から上条美遊になる!」

上条「それでいいのかい?こんな間抜けな男の義妹で・・・」

美遊「間抜けじゃない!私の願いを叶えてくれる!だからそれでいい!」

上条「わかったよ・・・改めて義妹として迎えるよ・・・上条美遊・

・・・」ナデナデ

美遊「うん!ありがとう!当麻お兄ちゃん!!」

続く・・・

8 Let's go!裏主人公コンビ!!

8 Let's go!裏主人公コンビ!!

場所を変えて・・・イリア宅

ルビー「新生カレイドルビー!プリズマイリア!爆誕!!」  
イリア「なあああああああ!!?何これー!!?」

上条がサファイアを回収し、美遊を義妹として迎えた頃...イリアはルビーの生贄になっていた・・・

イリア「ホントに魔法少女なの!?恥ずかしい!なんかすぐくみつともないよ!!」

ルビー「いえいえキマッていますよ!やっぱりロティーンがベストマッチですね!!」

イリアは痛々しい姿になっていた・・・なのはやフェイト、そしてはやてのバリアジャケットと比べてみると・・・全体的にとても恥ずかしい・・・

ルビー「どこぞの年増魔法少女モドキとは大違いです!!」

??「誰が・・・」ガシ!(ルビーを掴む)

??「年増だつてー!ーッ!?!」グイグイ!!!(引っ張られる)

イリア「キヤー!ー!ー!!今度は何!?!」

イリアはルビーと一緒に風呂場から叩き出された!

ちなみにイリアが魔法少女になってしまった理由は風呂場の電気を消して空のバカ二人の喧嘩の光を見ていたのが始まりだった・・・電気を消していたため、太郎が間違えて風呂場に入ってきた瞬間、ルビーが太郎の顔面に衝突し太郎はその場でノックアウト・・・ルビーの魔法少女勧誘に耳を傾けなかったイリアに、大好きな兄の顔などを柄の部分で突っついたりして煽り、それを止めようとして触れたところを魔法少女として、強制契約されたのだった・・・

イリア「痛い〜」

ルビー「あら！誰かと思えば・・・凛さん生きていたんですね！」

凛「えー！おかげ様でね・・・あいつの助けられた上に醜態を晒してしまうなんて・・・」  
「ゴゴゴゴゴ！」

凛は上条の救助弾からいち早く抜け出して、ルビーの居場所に急行したのであった・・・

凛「こつちへ来なさい！ルビー！！誰があんたのマスターなのか、みっちり教えてあげるわ！！」

ルビー「私のマスターですか？そんなの教えられるまでもありませんよ？」

ルビーはイリアの方を向く！

ルビー「ここにおわすイリアさん！私の新しいマスターです！」

凛「はあ！？」

イリア「ちが・・・違います！孔明の罠にかけたんです！！」



凜「・・・まあ・・・いいわ！それ返してくれない？・・・あれ！？  
なんで離さないのよ！」

イリア「私も離そうとしているんだけど！離せない！」

ルビー「無理ですよ！そう簡単には私は離せませんよ！それに私の許可なしでは・・・マスターを解除できません！！残念でしたね！凜さん！おほほほほ！！！」

凜「ダシャーーーーー」ゴン！！

凜はルビーを家の壁に叩きつけた！！

叩きつけた場所はルビーの跡がクツキリ残った・・・

凜「仕方ないわね・・・今日からあなたは私のサーヴァント（奴隷）よ！」

イリア「ええ！？」

凜「否定は却下！恨むんなら、ルビーを恨みなさい！！！」

イリア「ええええええええええ！！！」

こうして、イリアのサーヴァント（奴隷）の生活が始まり・・・その夜が更けていた・・・

\*\*\*\*\*

翌日 上条邸 上条の部屋

上条は部屋に布団を敷いて寝ていた。

上条の部屋は玄関から通路をまっすぐ進み、左右別れた通路の右を通り、その居間を通り過ぎたその奥！（Fate本編の士郎の部屋

の隣奥) 一番奥の部屋・・・) 詳しくはFate/hollow  
ataraxiaの衛宮邸でご確認ください・・・)

昨日の仕事の成果は・・・ほぼ0・・・いや・・・あのバカ2人がステッキに見捨て逃げだされた時点で、むしろマイナス・・・だった。

上条「眩しい・・・もう朝か・・・ん!?」

上条は身体を横にして寝ていた。

目を開けたら・・・目の前に人の顔・・・そして身体にはがっちりと腕で固定され、ほとんど完璧に密着していた・・・そして、唇と唇がギリギリに離れているぐらいだった・・・少し動いただけでキスをしてしまいそうな距離である・・・

上条にくっ付いているものの正体は・・・昨夜、義妹として迎えた美遊だった!!

上条(待て待て・・・クールになれ!なぜだ・・・なぜこんなことになっているになっている・・・ハッ!!・・・あの時か!)

昨日の夜・・・孤児園の職員に経緯を話したら、すぐその場で美遊を引き取るように言われた・・・この孤児園職員は美遊のことや孤児達はどうでもよかったのだ・・・上条は美遊を含めた孤児達の世話をしていた職員を殴った!周りの職員は急いで上条を抑えたが上条は止まらない!

上条は職員全体に美遊のことや今までやってきたことを叱った。職員は全員その言葉に心を打たれた・・・そして、これから少しずつほかの孤児達の接し方や向き合い方を改善していくと上条に誓った・・・そして、上条の隣にくっ付いていた美遊は自分やほかの孤児達のために叱っている上条を見て、感動して涙を流した・・・そして、

上条を改めて義兄妹の兄として確信し・・・自分の中でもっとも大切な人であると心に刻み込んだ・・・  
その後・・・その孤児園は冬木市の中1番で孤児達を幸せにする公共施設になったのはまた別な話・・・

上条と美遊が屋敷に戻った時には12時を過ぎようとしていた・・・  
2人は風呂を入った後、美遊の部屋の選びを始めた・・・上条はここに来た時に部屋を選んでいたので問題なかったが、美遊の場合は大変だった！

美遊の部屋は上条の部屋の間逆の突き当りの洋式を選んだが・・・  
美遊は上条と離れたくなかったため、もう1つの部屋を拠点としてとった！！

そこは上条の部屋の隣（本編の士郎の部屋）であった！  
そして、選び終わったら、上条は自室で就寝しようとしたら、美遊が入ってきて、「一緒に寝ていい？」と言われた・・・上条は、まあ・・・いきなり、なれない部屋で寝るのも大変だろう・・・と思い、美遊と一緒に就寝した。

しかし、上条はよく考えた、あの時は、布団は別々だったが今はなぜかこのような状態になっている！！

上条（ちよつと待て！いくら兄に甘えたい年頃でもこれはないだろ！？フェイトやはやてと寝たことがあるがレベルが違いすぎる！！）

そうである！上条はフェイトやはやて・・・その他諸々と寝たことがあるが、まるでレベルが違う！！いや次元が違いすぎる！！元の世界の悪友の義妹でもこんなことはしない・・・むしろ、やらない！！

美遊「う・・・ん・・・当麻・・・お兄ちゃん・・・おはよう！」

上条「おお・・・おはよう・・・美遊・・・どうしてこうなっているのかな？お兄ちゃんは理由を聞きたいんだけど？」

美遊「気付いたら、お兄ちゃんの布団に入ってた・・・」

上条「どうして、こんなに顔が近いのかな？」

美遊「・・・！！」カーーツ（顔が赤くなる）

言えるはずがない・・・兄の唇を奪おうなんてしようとしたこと言えるはずもない・・・

美遊「と・・・当麻お兄ちゃんが寝ぼけて顔を近づけてたんだと思うよ・・・」アセアセ！！

上条「そんな・・・妹になったばかり女の子に自らキスなんて行動をしようとしたなんて・・・認めたくないー！！」

上条は混乱し始めた！！美遊は少し哀しい顔した・・・出来れば、兄自ら唇を奪ってほしいと思っていたからだ・・・

美遊は昨日の夜、上条の布団に入り、逃げないように腕で身体を固定し、唇を奪おうとしたが、上条が逆に美遊を抱きかかえたため、唇が逸れて、頬にキスされ、そのままの形で気絶してしまった・・・美遊の1日目のキス作戦は失敗に終わった・・・

1時間後・・・

上条「参った・・・食材を買ってなかった・・・」

上条は昨日の夕方にここへ来たため、屋敷の備蓄がないことを忘れていた・・・

上条「悪い・・・美遊・・・これだけの物しかなくて・・・」

美遊「うんうん・・・気にしないで・・・結構、おいしいから！」

上条が美遊に出した朝飯は、軍用の携帯食だった・・・最近の携帯食はお手軽で食べやすく・・・ある程度、おいしいのである・・・

美遊「当麻お兄ちゃんは食べないの？」

上条「ん？・・・ああ！俺は歩きながら食べたから大丈夫！悪いな～行儀が悪い兄で・・・」

上条は嘘をついていた・・・本当は何も食べていない！持っていた携帯食はすべて美遊にあげたからである・・・元から2～3日分しか持っていなかったが、ここに来きた時には1日分しかなかった。

美遊「別に大丈夫だよ・・・」

美遊は気付いていた・・・今、自分が食べている物が最後だということとを、そして・・・兄は何も食べていないことも！兄は自分を心配させないように嘘をついていることに気付いているが、そのことはそのまま流した・・・

それは、今そのことを言うとかえって、兄を困らせてしまうからである！

美遊はこんなことを考えていた・・・兄は私を引き取ったがお金が無く、食べ物も満足買えない・・・しかし、私を心配させないため、あえて嘘を付いていると仮定していた・・・

美遊（私が当麻お兄ちゃんを苦しめているだ！私がちゃんとしないと！やれることをやらないと・・・お金稼げないかな・・・まず、私と当麻お兄ちゃんの食事情を変えないと！！）

この美遊の決意が返って上条を苦しめるようとは・・・本人は知  
りよしもなかった・・・

上条「美遊！これから色々必要な物を買っていくけど・・・お前はど  
うする？」

美遊（多分、何かのバイトなどのわずかなお金で今日の朝飯のこ  
とを誤魔化すつもりね・・・）

美遊「私は家に居ます・・・色々整理したい所がありますから」

上条「そうか・・・なるべく、早く帰ってくるから留守番頼むよ！」

美遊「うん！」

美遊（事態は急を要する！当麻お兄ちゃんが出かけたのち、行動を  
開始しよう！）

上条はなんていい義妹を持ったのでしよう！だけど、いい義妹だか  
らこそ・・・色々と問題が起きることもある・・・

少し経って、上条が屋敷を出て市街地に向かったことを確認すると  
美遊は行動に移った！

美遊「よし！」

サファイア「美遊様！私も連れて行ってください！」

屋敷を出ようとしたところ、後ろから携帯モードになったサファイ  
アがいた。

美遊「サファイア・・・あなたが外に出ると当麻お兄ちゃんに怒られるよ?」

サファイア「美遊様、1人でお外を歩かせるとかえって、当麻様を心配させてしまいますので・・・契約はしませんが、微弱ながらお手伝いできると思います!」

美遊「うん!わかった・・・では、いきましよう!」

サファイア「かしこまりました!」

美遊は玄関を出た・・・屋敷には兄が先に帰って心配しないように書き置きを残していった・・・

屋敷の玄関にカギを閉めて、屋敷の門を開けた瞬間!どこぞの高級車から手が伸び、美遊を引き摺り込んだ!

美遊は抵抗できずにそのまま、拉致されてしまった・・・

\*\*\*\*\*

場所を変えて、商店街・・・

上条「よし!必要な備品はある程度買ったし、テレビや冷蔵庫・電話に洗濯機!現在、求めている物はすべて揃った!後は美遊と出かけた時に美遊の携帯を買わないとな・・・」

上条は色々な物を買っていた15歳が通常の小遣いで買えない代物ばかりを!

実は上条は資金をかなり持っているのである!

上条のいたイギリス軍では訓練するだけでお金を貰えるのだ!それが国の仕事だから仕方ないのだが・・・そして上条は訓練後、上条を気に入っていた上司に士官の少尉の位を与えられ・・・現在は軍には日本に長期的な任務についているという口実で、職務についている

と報告しているため、毎月、高額な給料が出されているのだ！  
ほかに魔術協会からの援助金などが届くので財政難になっているのは事実上、今日の朝だけなのである！！

美遊はそのことを知らない・・・いや、知らせてなかった。

上条はまさか、美遊が勘違いなど起こしているなんて、考えていなかった・・・

上条「お！あそこのスーパー・・・何ーッ！高級和牛肉があんなに安値で売っているではないせうか！これは買わないと損だ！美遊・・・今日の晩御飯は・・・高級すき焼きで決定だー！！」ダダダダダ！！

上条はスーパーに突撃し、お肉コーナーに群がる人の波の中に消えていった・・・

自分の義妹が何者かに拉致られたことも知らずに・・・

時間が過ぎて・・・

上条「ふう、まさか・・・こんなにいい食材を揃えることができるとは・・・上条さんはなんて立派なんでしょう！！・・・そろそろ、お昼だし、美遊の奴、お腹透かしているだろうな」

上条は意気揚々と我が家に戻っていた・・・

上条「あれ？鍵がしまっている・・・美遊の奴、どこかに出かけたのか？」

上条は今に上がると居間のテーブルに書置きが置かれてあった・・・



上条「え〜なになに・・・」『近くを散歩してきます・・・美遊・・・』  
「」

上条「いつ頃出かけたんだ？」

メサイア「もう2時間以上経っています！上条！」

上条「メ・メサイア！？わ・悪い・・・忘れていたよ」

メサイア「上条！私を忘れるなんてひどいです！新しく妹ができたからって浮かれすぎです！」

上条はメサイアの存在を忘れていた・・・美遊のことで頭がいっぱいになっていたため、出かける時に、メサイアを連れていくことを忘れたのであった・・・

上条「浮かれてはいないさ。だけど、今は物がないから急いで仕入れに行つたんだ・・・わかつてくれ・・・」

メサイア「まあ・・・仕方ありませんね・・・それと大師父から連絡がきました。帰ってきたら連絡するように・・・と！」

上条「わかった！繋いでくれ！」

通信画面が開いた

大師父「上条よ！昨夜は御苦労！成果はどうだ？」

上条「すみません・・・昨夜は成果を上げることができませんでした・・・」

大師父「ふむ・・・気にするな・・・始めからそうそう出来ることでもない」

上条「それと昨夜、孤児だった少女を義兄妹として迎えたのですが・

・・・」

大師父『・・・一様、おめでとう・・・だけど、その子をどうするつもりだ？』

上条「どうもしません・・・その子は普通の生活をさせます・・・しかし、ある事情でこちらの世界のことを知ってしまったので、その対処についてお聞きしたいのですが・・・」

大師父『その場合は即、その記憶を消すのが、セオリーだが・・・そなたはそのようなことをしないであろう・・・』

上条「ええ！そんなこと、出来ない上に、する気もないです！記憶はそう簡単に消してはいけない物です・・・」

上条は自分が記憶喪失になっているので・・・そのつらさがよくわかるのである・・・

大師父『ふむ・・・その件は保留にしよう・・・それより、上条よ！仕事を頼みたい！！』

上条「内容は？」

大師父『そなたのいる冬木市の隣の市街地の地脈の安定化させてほしい！』

上条「ここの仕事はどうすれば・・・」

大師父『それはあの2人に任せればよい・・・そなたが付いていないと仕事にならないなんてことでは魔術師して失格だ！それに2人には私が渡したカレイドステッキがあるではないか！』

上条「うツ！そ・・・そうですね・・・たしかに・・・」

現在、ルビーは行方不明・・・サファイアは美遊とお散歩中（拉致

されたことは上条は知らない)・・・そして、問題の二人も音信不通・・・詰んでいた・・・

大師父『そなただけで、地脈を安定化させるのもきついかろう！そこで助っ人を頼んだ！』

上条「助っ人ですか？」

大師父『そうだ！そいつはそなたの屋敷の下の公園で待たせている。共に現地へ向かってくれ！連絡は以上だ！』

通信が切れた・・・

上条「はあ・・・美遊すまん・・・晩飯の件はおわずけのようだ・・・」

上条は急いで昼食の準備を仕上げ・・・自分の分は軽く済ませて、美遊の分のおかずををラップで包み、書置きを書いた・・・上条は自室から武器ケースを持つと急いで公園に向かった・・・

\*\*\*\*\*

### 冬木の公園

上条「ここか？」

メサイア「そのようです」

上条「誰もいないな・・・それにこのサイドカー付き大型バイクはなんだ？」

メサイア「上条！言い忘れていました・・・そのバイク、大師父が提供してもらったものです・・・」

上条「何ーーツ!!」

上条はこの世界限定の大型バイク含めた数多の免許を所有している・  
・  
つまり、大師父がくれたこのバイクは・上条が運転することを想定したものである。

上条「あの爺さん・手回しがいいな」

メサイア「同感です!ん?上条!誰かが向こうから走ってきます!」

上条「ん?」

上条はメサイアが指した道を見た・たしかに走っている・  
それとどこかで見た顔である・

??「はあ!はあ!すみません!魔術協会の方ですか!」

上条「そうですか?」

??「すみません。遅れてしまつて・え?」

上条「土郎さん?」

土郎「当麻・・・」

状況確認中・・・

上条「へえ〜!土郎さんも魔術師だったんですか!」

土郎「ああ!魔術師と言つても見習いだから・あまり、役に立たないと思うが・・・」

上条「いやいや!土郎さんが来てくれただけでも、百万力ですよ!」

土郎「あまり期待されて、困るよ・・・」

上条「それより、土郎さん・・・学校は大丈夫なのですか？」  
土郎「今回のような任務の時は、大師父が根回ししてくれているから問題はないよ！」

上条「ほんとあの爺さん・・・よくやるよ・・・」  
メサイア「まったくです・・・」

土郎「あれ？今どこからか声が・・・」

上条「ああ！紹介を遅れました・・・こいつが俺の相棒のメサイアです！」

メサイア「よろしく！以後お見知り置きを!!」

土郎「ああ！こちらこそ!!」

上条「では、出発しますか！土郎さん！」

土郎「当麻はバイクを運転できるのか!？」

上条「ええ！ここの世界限定ですけど・・・」

土郎「ここの世界？」

上条「その件は後にしましょう！少し急ぎで仕事終わらせましょう！」

土郎「そうだな！早く家に戻らないとイリアに怒られる」

上条「こっちはこっちで、あいつを心配させてしまうので・・・」

土郎「あいつ？」

上条「ではいきます！ちゃんとヘルメット被ってください」

土郎「ああ！」

上条はバイクのエンジンをかけ、エンジンの調子を見るため、アクセルを入れたり、戻したりして、エンジンを唸らせた！！

上条「いきますよー！しっかり掴まってくださいー！」

士郎「おわああああー！！」

上条のスタートは早かった！士郎は反動で少し仰け反った！

こうして、主人公降格した衛宮士郎と異世界の主人公で裏方の仕事をこなす上条当麻の裏主人公コンビは目的地に向けて、バイクを走らせた！！

目的地は冬木市のとなりにある市街地・・・海鳴市であった！！

続く・・・

## 9 美遊の決意・・・そして、語られない戦いの開幕・・・

9 美遊の決意・・・そして、語られない戦いの開幕・・・

\*\*\*\*\*

とある屋敷

上条達が仕事で冬木市を出た頃・・・美遊はとある屋敷に連れ込まれていた・・・

ルヴィア「あなた・・・サファイアを渡さないをおつもり？」

美遊「誰も渡すなと当麻お兄ちゃんに言われています・・・」

サファイア「その前に私はルヴィア様のマスターである契約を解消しているため、ルヴィア様に従う通りはありません！！」

もう・・・何時間も経っているのに・・・話は平行線であった。

ちなみに、ルヴィアはなぜ、美遊を拉致をしたと理由は・・・上条が買い出しに出る前、美遊にサファイアの監視と管理を任せただからだ。

・・・現在の屋敷には、防御魔術や外からの監視を避けるための結果も張っておらず、すべての情報が筒抜けであった・・・

その様子をルヴィアの老執事であるオーギュストがすべて見ていた・・・

上条が出かけた後、車を門の前に止め、さっそく・・・サファイアを回収するため、屋敷に突入しようとしたところ・・・なんとサファイアの方から屋敷から出てきたのだ！美遊というおまけ付きで・・・

・・・そして、門から出た所を拉致・・・現在に至っている。

この行動に出たルヴィアは後々・・・悲劇を起こす前兆になるので

ある・・・

しかし、話は一向に進まない・・・その時！ルヴィアは上条の義妹になったのが、昨日の夜ということをオーギュストの報告で聞いたため・・・あることを思いついた！

ルヴィア「そういえば・・・あなた・・・カミジヨールのことを慕っていますわね」

美遊「当たり前です！あの人は私の兄であり、そして、私のたった1つの家族であり、大切な人なんですから！！」

ルヴィア「へえ〜・・・あなたはカミジヨールのことをどれほど知っているのかしら・・・」

美遊「そっそれは・・・」

美遊は・・・上条と出会い、義兄弟になったのは・・・つい昨日の話・・・

・上条のことはまったく持って知らない・・・

ルヴィアは黒い笑みを浮かべて美遊に話しかけ始めた・・・

ルヴィア「あらあら・・・彼が何者で・・・何をしているかも知らずに・・・カミジヨールの義妹になったんですの？」

美遊「知っています！当麻お兄ちゃんは魔術師です！！」

ルヴィア「人殺しだと知っておりますのですの？」

美遊「え！？」

美遊は凍りついた・・・大好きな兄が人殺しなんて・・・

美遊「嘘です！当麻お兄ちゃんがそんなこと出来るはずありません！！」



ルヴィア「あなたの前ではね〜・・・さすがにカミジヨも一般人を目の前に人を撃ち殺す真似はできませんわ！」

美遊「嘘だ！嘘だ！嘘だ！そんなの嘘だー！ー！！」

ルヴィア「カミジヨも、ただの殺人鬼ではありませんことよ？彼は魔術協会の中の離反した魔術師の後始末を任された殺し屋・・・「幻想殺しの上条」もしくは「魔術師殺しの上条」と呼ばれていますわ！あなたも見たでしょ？彼の部屋に置かれているケースを・・・あの中身は人殺しの道具が詰まっているのですわ！」

美遊「やめて・・・やめてください・・・」

ルヴィア「後、彼には・・・お金が無くて困ってましたわ！それに・・・あなたという重しがまた1つ増えてさぞ、大変でしょうね〜」

美遊「・・・」

美遊は壊れそうだった・・・私を孤独から救ってくれた兄が・・・あんなにやさしく・・・私のためにやさしい嘘を付いてくれる兄が・・・殺し屋なんて・・・

オーギュスト「お嬢様！」

ルヴィア「なにかしら？オーギュスト？」

2人は美遊に聞こえないように話した・・・  
そしたら、ルヴィアの黒い笑みが一段と黒くなった・・・

ルヴィア「美遊！あなたの大好きなお兄様がさっき、ここ（冬木市）から、出たそうよ！」

美遊「！！」

ルヴィア「あなたと言う食扶持が増えたのですから、今の働きでは、到底生活ができないと思い・・・協会の依頼で引き受け、お金を稼ぎにいったではありません！」

美遊「クツ・うつうつ・・・」

美遊は悔しかった・・・自分がどれだけ無力で兄を苦しめる邪魔者なのかを・・・美遊は俯き、目からは涙が流れた・・・

ルヴィア「でしたら・・・私があなたを雇って上げてもいいですよ？」

美遊「え！？」

ルヴィア「あなたがそこまで兄を思う心があるのなら・・・私の仕事を手伝ってもらえるかしら？そうすれば・・・その働き分以上の報酬を差上げますわ！」

美遊「！！」

美遊は考えた！ここまでおいしい話はないと今の年齢で働くことはできない・・・しかし、ここは労働基準法を無視して、雇ってもらえる・・・そうすれば、兄は裏の仕事に就かなくて済む！

美遊は改めて真剣な顔でルヴィアを見た！

美遊「その話・・・嘘ではありませんよね？」

ルヴィア「ええ！嘘ではありませんわ！エーデルフェルトの名に誓って・・・報酬はきっちり出しますわ！！」

美遊「サファイア……」

サファイア「美遊様！いけません！ルヴィア様は何か企んでいます！口車に乗せられてはいけません！！」

サファイアは必至に美遊を止めようとしたが……美遊は止まらな  
い！

美遊「今は耐えるしかないの……当麻お兄ちゃんのためにも、私  
のためにも……やらずにちゃいけないの！」

サファイア「美遊様……」

美遊はサファイアを無理やりステッキに戻らせ、サファイアの口  
ツドを掴んだ！

サファイア「上条美遊をマスターとして、契約！……コンパクト・  
フルオープン！！……鏡面回廊……最大展開！！」

美遊は光に包まれ……私服から魔法少女の礼装に変わっていた……

サファイア「新生マジカルサファイア！プリズマミュー！！ここに誕  
生です！！」

美遊「不本意ながら……あなたに従います……ルヴィアさん……  
」

そこにいるのは……魔法少女になった美遊であった……イリア  
の服はピンクだが美遊場合は青であり、デザインも少し異なってい  
た。

ルヴィア「ええ！了承しますわ！よい働きを期待しますわ！美遊……

「美遊「はい……………」」

美遊（心）「当麻お兄ちゃん…………ごめんなさい…………当麻お兄ちゃんとの約束…………破ります……………」

上条との約束…………それは美遊が魔術や裏世界に関わらず普通の生活が続けて幸せになってほしいという上条の願いでもあった…………

美遊は決意を固めていたが…………ルヴィアは…………

ルヴィア「ふっ！計画通り！！単純な子で助かりましたわ！」

美遊を騙していた！

そう！今までの話は真っ赤な嘘である。

上条は魔術協会の殺し屋ではない…………そして、お金にも困っていない…………

すべて、ルヴィアの嘘！美遊は完璧にはめられてしまったのだ…………

もし、上条がこの場に居たら…………本当に人殺しになっていたかもしれない…………

本当の話では、上条はまだ1人も殺めたことはない…………殺しが付く意味では上条と戦った全員は幻想を殺されたか半殺しされたという意味が正しい…………

そして、お金の件も買い出しで説明した通りである…………

美遊は騙され利用されていることを気付かず、非日常の世界へ、突き進み始めた…………

\*\*\*\*\*

海鳴市のとある森

上条「以外と早く着きいたな・・・」

士郎「それは・・・道ではない道を通つ切つたからだろ・・・」

メサイア「士郎さん・・・大丈夫ですか？」

上条がいるのは目的の地脈がある場所に近い森で地脈を安定させるための準備を始めていた・・・しかし、上条は違う作業をしていた・・・

士郎「当麻・・・なんだその・・・変装は・・・」

上条「ん？ああ！ここに来る前に言つたじゃないですか！ここ（海鳴市）の住人に俺がいるなんて知られるわけにはいかないって！」

そう、上条は運転しながら、自分が置かれている状況を士郎に話した・・・士郎はあり得ないと思つていたが、上条の真剣な顔に負け、上条のことを信じることにした・・・

士郎「だからって・・・それは・・・」

上条「変ですか？」

上条は特徴的なツンツン頭をワックスを使い、オールバックにし、顔にはメガネをかけ、服は迷彩服を着ていた・・・

士郎「逆に怪しまれるだろ・・・」

上条「そうですね？」

メサイア「上条・・・逆の意味で目立ちます・・・」

士郎とメサイアが見れば・・・どこぞのイケメン軍人に見える・・・

大人びた顔に、髪を整えメガネを掛けることにより、シャツキリした顔つきになり、周りの女性を虜にしまいそうな雰囲気が出ているのだ……

上条「そうか？この変装しても、知り合いは誰も気付かなかったが？」

士郎&メサイア「え〜〜〜〜！！その変装したことあるの〜〜〜」

士郎は知らなくても仕方が無いが、メサイアまで驚くとは正直以外だった……

上条「よし！準備ができた！出発しますか！」

士郎&メサイア「なんだか……嫌な予感が（します）するな……」

ここからはバイクが使えないため、徒歩で向かう……1人を除いて、2人は上条の変装から発する雰囲気嫌な予感を感じながら歩きだした……

少し歩くと人の気配を感じた……上条達は気配を消して、近づいて行った。

草陰から様子を伺うと……金髪のツインテール少女とオレンジ色の犬耳の女性が複数の謎の男達に襲われていた……その少女達はフェイトとアルフだった！！

士郎「あいつら！なぜイリアと同じ年ぐらいの少女と俺達と同じくらしい女性を襲っているんだ」

士郎は今にも飛び出しそうだが、上条によって抑えられた……

上条は落ち着いて、状況を確認した・・・襲っているやつらは魔術師であることがわかった。そして、地脈を不安定化を悪化させようとする元凶であると仮定がつく・・・

フェイトはこの地脈の近くにジュエルシールドが眠っており、それを回収しようと来た所、襲われた・・・と想定した。

その頃の自分はたしか、カレーを作る材料と他の買い物をして、もう一つのジュエルシールドの暴走をなのは達と止めている時だったと思いだした・・・

昔のことを思い出しているとアルフが地面に拘束され、行動不能になり、フェイトもほとんど身動きができない状況に追い込まれていた！

士郎「くそ！・・・！！・・・当麻！？」

士郎が飛び出そうとした時、上条が先に飛び出した！

そして、フェイトの前に立ち、飛んでくる攻撃を防ぐ体勢を取った！  
右手防ぐと気付かれてしまう危険性があるため、持ってた武器ケースを目の前に投げた！

そしたら、武器ケースは目の前で停滞し、側面の左右からシールドを展開した！

攻撃はすべて、シールドによってすべて防がれた！

上条が持っている武器ケースはメサイアを封印していた箱を改造したメサイアのサブユニットで武装ウェポン及び補助ユニットに変換できる。現在、展開しているシールドも1つの補助ユニットである！

フェイトは助けしてくれた人が誰かわからなかった・・・

アルフもいきなり飛び出した人が誰なのかまったくわからなかった。  
・・・

魔術師「貴様！何者だ！！」

上条「ふ！通りがけの人助けが好きなただの兵隊さ！」キラーン

魔術師達は意味不明な兵隊を見て混乱した・・・

フェイト「あの・・・」

上条「待ってくれ、すぐの終わらせる！！」

フェイトは何か言おうとしたが、言えなかった・・・

上条は魔術師達の方に向き直し、展開する盾に触れ、補助ユニットを武装ウエポンに変更し始めた！

上条「メサイア！部分限定武装！ストライカーフォーム！」

メサイア「了解です！」

先ほど補助ユニットが分裂し、上条の左右の腕に集結した！

左右の腕には六角形型シールドが手首から肘にかけて装着され、右腕はシールドの先には突出型ニードル（パイルバンカー）に6連装リボルバーが装着されていた。左腕はシールドに機銃と折りたたみ式実体剣が内臓され、両手にはトリガー付きの取っ手を掴んでいた！

この装備はサブユニットとメサイアが揃って成り立つ上条のバランス型武装であり、シールドほかにディフェンスシステムが装備されているため防御力も高い、攻撃力と防御力のバランスの取れた武装で上条がもつとも、使い慣れている装備である。

上条「さあ！今度は俺が相手になってやる！かかってこい！！」



上条は臨戦態勢に入り、魔術師達も負けずと体勢を立て直した・・・いきなりだが、上条のフェイト&アルフ救出戦が始まった！

士郎は上条を見て少し呆れていたが、よく見ると上条はわざと敵の注意を引き付けている素振りを見せている・・・士郎は気付いた！敵はまだ自分に気が付いていない！上条は敵の背後を取りやすくするために陽動を掛けている・・・戦術的に挟撃で制圧しようと考えているのだと！

士郎「当麻・・・やってくれるな・・・おかげで頭に上った血が下りたよ・・・それじゃ・・・こちらは準備するか!!」

士郎は魔術師達に気付かれないように場所を移動し始めた・・・

続く・・・

9 美遊の決意・・・そして、語られない戦いの開幕・・・（後書き）

すみませんでした。

感想の設定を間違えて、ユーザーのみにしてしまいました。

設定を替えて、制限なしにしたので、感想などをお聞かせしてください！

後、アンケートの方もお願いします！

## 10 魔術師殺しの上条

### 10 魔術師殺しの上条

現在の上条の状況は前方に目視で10人の魔術師と拘束されたアルフ・・・後方にフェイト・・・

アルフの横に拘束魔術の制御しているのが1人・・・他9人は陣形がバラバラだった。

上条は士郎が動いたことを確認すると戦闘を開始した！

上条「メサイア！ランニングスキル・・・固有時制御！」  
メサイア「了解！」

上条が動いた瞬間、魔術師は魔術を使おうとしたが、上条はいなかった！

魔術師A「うわーーーー！！！」

一番後ろの魔術師Aの叫び声が後ろから聞こえた。

魔術師達が慌てて後ろを見ると上条が右手を構えた形で魔術師Aの目の前まで接近していた！

魔術師Aは慌てて防御魔術の魔術陣は張ったが・・・

上条「もらったーーーー！！！」

上条は迷うことなく右手を突き出した！右手の武装の突出型ニード

ルが魔法陣に接触した瞬間、防御魔術は簡単に破れ……

魔術師A「がは!!!」

魔術師Aの腹にニードルが当たった!

上条「1つ!」ガン!ガン!ガン!(トリガーを引く)

突出型ニードルを3回叩きこみ魔術師Jはそのままの状態で吹き飛び、近くの樹に激突し戦闘不能になった。

上条は間髪いれず左手の武装機銃をアルフに拘束魔術を掛けている魔術師Bに狙いを定めた!

上条「2つ!!!」ドキューン!(トリガーを引く)

魔術師Bは反応が遅れ、黒い閃光が魔術師Bに腹部に直撃した。魔力の圧力で魔術師Bは吹き飛び、近くの樹に激突し、戦闘不能になった。

カシュン!!! (空薬莢を排出)

左の武装から蒸気と空薬莢が排出された。

上条「そこのおまえ!魔術が解けたら、早くあの子の魔術も解いてやれ!」

アルフ「お・・・おう!、わかった・・・」

アルフは急いでフェイトの魔術の解除に向かった。

魔術師達は一瞬で2人も戦闘不能にされたので、動揺が隠せなかった……

魔術師C「ひ・ひるむな！相手はたった1人だぞ！」

魔術師D「分かっているが・・・ん？・・・あの武装・・・ハッ！！  
・あいつは魔術師殺しの上条だ！！」

フェイト&アルフ「上条！？」

魔術師達はさらに動揺した。

魔術師達が世の中でもっとも恐れる魔術師殺しの異名を持つ魔術師・  
・世界にはその異名を持つ魔術師は多く存在するが・・・近頃、  
イギリスでは人道を無視した魔術などを行った上級魔術師達が消さ  
れているという情報が世界に伝わっていた・  
多くの魔術師達はその行動を評価しているが、ここに居る魔術師達  
のような非道な仕事を行う者たちには逆に恐れ・・・「魔術師殺し  
の上条」という異名が裏の魔術サイドに危険分子の上位のリストに  
載せられていた・・・

魔術師C「バカ言っな！あれはあくまでイギリスでの話だろ！こん  
な辺境の地に奴が来るわけが・・・」

魔術師D「それが・・・最近になってイギリスから姿を消いたとい  
ギリスの連中が言っていた！後・・・あの武装に黒い閃光・・・間違  
いない奴だ！」

上条「なんだ・・・俺のことを知っているのか・・・なら！俺がや  
ることは決まったな！」

上条は再び構え直し1歩前に足を踏む出した！

魔術師達はほとんどが恐怖で脚を竦めるしまった。

魔術師C「何をしている！相手は1人！俺達は8人だぞ！数で圧倒

している！奴に魔術を使わせるな！撃て撃て！！」

魔術師達は魔術師Cに鼓舞され、攻撃魔術を上条に集中した！

フェイト「あぶない！！」

アルフ「何してんだ！避ける！！」

アルフはフェイトを拘束している別の魔術を解除している最中なので身動きが取れない。

しかし、上条は焦りもせず、相手の攻撃を待っていた・・・

上条「まったく・・・メサイア！もう1度・・・ランニングスキル！固有時制御を発動！」

メサイア「了解！」

ドドドドドドド！！

上条に向けて放たれた魔術が全て着弾した。しかし、前は砂埃で何も見えなかった。

フェイト&アルフ「！！！！」

2人の少女達も固唾を呑んで見守った。

魔術師C「はあ！はあ！やったか？」

魔術師D「うわーーーー！！！！」

いきなり、後ろから上条の右手の突出型ニードルが魔術師Dの背後を襲った！

上条「3つ！！」ガーン！ガーン！ガーン！

魔術師D「ギャー！ー！！」

魔術師Dは、上向き二ードル突き3回の最後の1撃で宙に浮き、片足で地面に叩き落とされ、3人目、戦闘不能

魔術師C「何やっている！早く攻撃を続ける！！」

魔術師達は恐怖で震えあがり、魔術師Cの言葉は届かなかった。

ガチャ！！ジャラ！（リボルバーの空薬莖を排出）

ガチン！カシャン！カシャン！・・・（リロード）

上条は右手武装の6連装リボルバーのリロードを行っていた。弾切れになるとリボルバーが横にスライドし自動的に空薬莖を排出後、元に戻りリボルバーが回転しながら弾をリロードをする。リロードタイムはたったの8秒で終了した。

魔術師C「クソ！円陣を組め、奴に背後を取られるな！」

魔術師達は、密集体勢を取ったが、上条はこのタイミングを待っていた！そして、別行動をとっている士郎を待っていたが・・・

士郎（念話）『後ろの子達を守れ！威力の制限が難しい！』

上条は念話を聞き、焦ってフェイト達の所へ向かう！

\*\*\*\*\*

上条達から数キロ離れた崖

士郎は上条達から離れた崖から戦況を見守っていた・・・

士郎「圧倒的だな・・・当麻・・・俺は必要ないだろうか？」

一瞬にして2人倒して、少女を救出・・・その後、攻撃を食らったと見せかけて、背後から攻撃・・・どう見ても士郎出番はないように思えたが・・・

士郎「む！やつら・・・攻勢から防御に変えるか・・・」

そう！上条の神出鬼没な攻撃を恐れて、密集陣形に変わったのだ。

上条は士郎が動くのを待っているのだろうか・・・少しあたりを見渡している！

士郎「残りは俺の獲物・・・とても言いたそうだな・・・俺もあいつらのやったことは腹が立つんだ！だから・・・少し本気で・・・やらせてもらっぞ！！」

士郎は主に投影魔術で使う、特に剣などの刃物系の武器を投影することが得意であり、最近ではとある聖剣を本物に近い状態までの投影を成功している。

士郎「投影・開始！（トレース・オン）」

士郎が投影したのは弓だった！左で弓を持ち・・・右には・・・

士郎「我が骨子は捻じれ狂う」



右手にドリルのような剣を投影した！

剣を弓の弦に掛け、射型を取ると同時に剣が長細くなり、魔力を溜めていった！

士郎（念話）「後ろの子達を守れ！威力の制限が難しい！」

上条に忠告した。

上条は少し慌てて2人の所まで後退し始めて、士郎はあのペースだと間に合うと踏んで・・・

士郎は狙いを魔術師達の中心を目掛けて放とうとしていた！

士郎「偽・螺旋剣」（カラド・ボルク）！！」

バシューーン！

士郎が放った魔術が目標に目掛けて、突き進んだ！

\*\*\*\*\*

上条はなんとか2人の所まで辿り着き・・・

上条「メサイア！サンクチュアリ守護領域、全方位で展開！」

メサイア「了解！」

フェイト「何！？」アルフ「おい！せつめ・・・」

キーン！ドカーン！（着弾）

アルフが何か言おうとしたが、目の前が大爆発が起こり！その場で

フェイトとともに固まってしまった・・・

今の一撃で魔術師達の殲滅を完了したと思いきや・・・

魔術師C「まだだ・・・まだ、終われるか・・・」

ボロボロになりながらも魔術師C含めた4人が立ちあがった・・・

しかし、彼らは立ちあがったことを後悔することになる。

上条「左武装をガンモードからブレードモードに移行！カートリッ

ジロード！」

メサイア「了解！」

左手の武装の实体剣が機銃の銃口と接続、弾倉から弾がリロードされた。

メサイア「あなた達の狂った幻想を！」

上条「ぶち殺す！」

メサイアと上条の言葉がトリガーなのか、实体剣の刀身が黒い光を放つ魔力に包まれた・・・左手を構えた！

上条「ベルセレーモス！！」

メサイア「シユート！！」

振る瞬間にトリガーを引くと刀身の魔力が増大した瞬間、上条は剣を横に振ると強大の魔力が波のように魔術師達に向かって・・・魔術師達は自分達に向かってくる黒い光の波に絶望を覚え動けなかつ

た・・・

魔術師C「こ・・・これが・・・魔術師殺しか・・・」

魔術師達は改めて自分達の過ちに気が付いたがすでに遅い・・・  
彼らは黒い魔力の波に飲み込まれていった・・・

続く・・・

## 11 勝利の代償

### 11 勝利の代償

カシユン！シューー！（空薬莢及び蒸気の排出）

左武装の冷却機能が働き、大量の蒸気が排気口から噴射した。

上条「終わったか？」

メサイア「全敵魔術師、行動不能・・・殲滅は完了です！」

それはそうだ、何せ・・・土郎が放ったカラド・ボルグを直撃し、後詰の上条の大魔法攻撃のベルセレーモスの魔力の波に吞まれたのだ・・・ほとんどがオーバーキルである。

上条は武装を解除した、サブユニットも元のケース状に戻っていた。

フェイト「あの・・・大丈夫ですか？」

後ろからフェイトが声をかけてきた。上条はフェイト達の方に身体を向き直した。

上条「ああ！大丈夫だ！問題ないよ！！」

上条は笑顔で返事を返した。フェイトは少し心がドキツとした。

フェイト「あの～どちら様ですか？」

アルフ「フェイト！襲ってきた連中が、言っていただろ！こいつは当麻だよ！当麻！たく！人騒がせにもほどがあるよ！」

上条「たしかに、私は上条当麻ですが、私はあなたに会ったのは今日始めてですよ?」

アルフ「嘘を吐くな! あんたからあいつと同じ匂いがする!」

上条「あなたは犬ですか!? そして、人を匂いで判断する変わったへんじ・・・体質をお持ちなのですか!?!」

アルフ「わたしはお・お・か・み・だー!ー!ー! 何度も言わせるな!ー!ー!ー! 後わたしは変人でも特殊な体質でもねえよ!ー!ー!」

フェイト「アルフ! 落ち着いて!」

フェイトは暴走気味のアルフを宥めた・・・

フェイト「ごめんなさい・・・ご迷惑を掛けまして・・・」

上条「いえいえ! こういう状況には慣れてるので大丈夫ですよ!」  
ニコツ!

フェイト「!!」ドキッ!

フェイトはまた心の中で何かの高まりを感じた・・・だけど、なんとか気持ちの高まりを抑え話を進めた。

フェイト「あのあなた・・・本当に私が知っているトウマじゃないの?」

アルフ「だから! そいつ、私達が知っている当麻だつて!」

フェイト「アルフ! 黙って!」

アルフはフェイトに叱られ、静かになった・・・

上条「そうですね。私は最近までイギリスに居たので・・・ここで  
お嬢さん達と会ったのは初めてなんですよ！」

フェイト「そうですねか・・・それで一体何をするため、ここへ来たの  
ですか？」

上条「この近くにある地脈に用があつてね」

フェイト「地脈ですか？」

上条「そう、私はある仕事の依頼でここに来たのですが・・・お嬢  
さん達が不振な男たちに襲われていたので助けたわけです。」

フェイト「すみませんでした・・・」

上条「気にしないでください、それが兵隊として仕事ですし人助け  
が好きだからね」ニコッ

フェイトは上条の顔を見るだけで、顔が赤くなりそうだった・・・  
今、別行動をとっている上条もやさしいけど、ここにいる上条はそ  
の1段階上だとフェイトは思った。

上条「さて、私は仕事に戻りますけど・・・お嬢さん達はどうする？」

フェイト「私達は探し物が終わったので、ここで失礼します。」

フェイト達はジュエルシートを回収が終わった後に襲われたようだ。  
・・・上条は少し、ほっとした。

上条「そうですね。道中、気をつけてね」

フェイト「そちらもお仕事を頑張ってください」

アルフ「フェイト〜私の話聞いてよ〜！」  
フェイト「失礼します」ペコ（お辞儀）

上条「ああ！じゃあね〜！」ニコッ  
フェイト「〜！」カー〜

もう上条の笑顔と手を振る仕草・・・これはもう女を墮とす兵器であつた！

フェイトはもう1度お辞儀すると猛スピードで飛んでいった！

アルフ「フェイト！待ってえ〜〜！置いていかないで〜〜！！！」

アルフも猛スピードでフェイトを追った・・・その場に残ったのは上条だけであつた・・・

上条は笑顔で手を振っていた。

そして、2人が見えなくなると糸が切れた人形のように倒れた。

メサイア「上条〜！！！」

\*\*\*\*\*

アルフ「フェイト！あれ絶対に当麻だつて〜信じてよ〜」  
フェイト「アルフ・・・まだそんなことを言うの」

アルフ「だって、匂いがあいつなんだもん！あと、あの雰囲気、まさしくあいつじゃん〜！！！」

フェイト「トウマが魔法や魔術を使えるの？」

アルフ「あ〜！」

アルフは外見で人を判断していたのか。上条が魔法や魔術などの異能な力を打ち消す幻想殺しを持っていることを忘れていた……

フェイト「トウマに幻想殺しがあるから、魔法や魔術が使えるわけではないでしょ！」

アルフ「だけど……以外にあいつ、わたし達に他の力を隠しているじゃないの？」

フェイト「トウマが私達に隠し事しそうだけど……でも、買い物を出たのは1時間ぐらい経っているの……急いで私達の所に来るのにも町からあそこまで空を飛ばないかぎり1時間じゃ到底間に合わない……」

あくまで上条（兵隊）を庇うフェイトであった……

アルフ「フェイト、あいつが使っていた武器、デバイスに近くなかった？」

フェイト「そういえば、たしかに……」

フェイトは上条の魅惑の力（上条本人気付かず）に圧倒され、武器に関して聞くことを忘れていた。

フェイト「アルフ……こうしましょう！トウマが帰ってきたら、トウマの審問会をやりましょう！そこで、あそこに居たのがトウマであるか確かめましょう！」

アルフ「お！いいね……トウマの着ぐるみを剥がしてでも、わたしの話が正しかったこと証明してみせる……！」

フェイト「と……トウマの服を取らなくても……」



アルフ「フェイト、トウマの服を脱がすのは、あくまで確認のためだよ。別にトウマの裸を見たいなんて・・・わたしは思っていないよ。それに、いいじゃん！別に男の服を脱がすくらい！」

フェイト「アルフ！ふざけないで！！」

アルフはフェイトをからかいながら、マンションへ帰っていた・・・そして、上条が戻ってきたら、早速、『第一回上条当麻審問会』を始めた！

アルフとフェイトは上条の服を脱がした。（下着を除く）

しかし、上条にはデバイスも魔法及び魔術に関わる物は見当たらなかった・・・

フェイトとアルフは笑って誤魔化した。上条は何が何だか分からず色々としょっくを受けた・・・

\*\*\*\*\*

時間を戻して・・・森の中

メサイア「上条！」

上条「少し・・・無理・・・し過ぎた・・・かな」

メサイア「少しでも、無理し過ぎでもありません！それ依然の問題です！魔術回路が・・・暴走しているではありませんか！！」

上条はフェイト達が去った後、いきなりうつ伏せに倒れた・・・それは本人が望んだわけではない。身体の魔術回路が暴走し、上条自身を殺してしまいそうになっているのだ・・・

上条の身体の血管がくつきり浮き出て、今さっきまで顔色がよかったが真っ青に青ざめていた・・・上条の魔力量はレベルSSクラス・・・大技を1度か2度では、魔力はあまり減りはしない・・・残った

魔力は半端ではない量である……このままの状態で居れば、間違  
いなく上条の身体が耐え消えず……破裂してしまう……

上条「はは……あの2人を助けるために……おまえの学習機能の応  
用……ランニングスキル……固有時制御……あの人の魔術を……  
使ったからな……」

メサイア「最後に放ったベルセレーモスを使用により、魔力の暴走  
が……症状が悪化しています！このままでは……」

上条「死ぬのか？」

上条は自分が死ぬことを簡単に認めた。

メサイア「いえ！あなたはここで死なせません！私はいます！治癒  
促進を速めています！すぐに回復します！」

上条「おまえは……やさしいな……だが……治癒促進は……外部の  
損傷を回復させるが……内部の……暴走の回復は……効果がな  
かったでは……なかったか？」

メサイア「上条！気をしっかり持ってください！すぐに土郎さんが  
こちらに到着します！もう少しの辛抱です！」

上条「土郎さんが……到着しても……俺を直せるとは限らない……  
まして、運ぶにしても俺という爆弾がいつ弾けてもおかしくは……  
ない」

上条はメサイアの言葉をすべて否定する……決してメサイアに対  
しての言葉が信用性がないわけでもない。上条はそうでもしないと

・意識が消えてしまったため、会話で意識を繋ぎとめているのだ。

上条「はは！固有時制御・・・あの人はこの魔術を使い続けているのか・・・まさか・・・ここまで反動が大きいとは・・・いや・・・俺が同じ術をすぐに・・・2回も・・・行使したからか・・・俺はバカだな・・・1回で・・・あんなに・・・強力のに・・・2回も・・・すぐに・・・術を掛ければ・・・魔術回路が・・・狂うのもおかしくないな・・・はは・・・」

メサイア「上条！あなたは間違っています！すべて！私の責任です！私が術に関する判断を誤ったのです！あなたの責任ではありません！だから、しっかりしてください！前マスターが突然消えたように・・・あなたを失いたくありません！！」

メサイアはまるでデバイスではなく少女のような泣きそくなしゃべり方をしながら、上条の治癒を進めた・・・しかし、魔術回路の暴走は思った以上に激しく・・・なかなか進まない・・・

上条「そうだな・・・こんなところで・・・終われない・・・よな・・・家で・・・美遊が・・・待・・・って・・・」

上条の意識が途絶えていく・・・

メサイア「上条！駄目です！起きてください！まだ、あなたの物語は始まったばかりです！美遊さん・義妹はどうするんですか！あなたは大切な人を皆幸せにするとおっしゃったではありませんか！こんな所で・・・こんな所で終わらないでください！起きてください！上条当麻ーーーー！！マスターーーーー！！」

メサイアの声が戦場の跡の森の中で木霊した・・・

しかし、上条の意識は深い・・・深い闇の中に堕ちていった・・・

続く・・・

## 解説2

上条の魔術&魔法及びフォーム武装・メサイアの機能・衛宮士郎についての解説を入れたいと思います。

### 魔術&魔法

異能力消滅（魔術及び魔法でも可能）

#### 上条当麻の我流魔術

主に相手の魔術や異能力などを消滅させる力、幻想殺しと変わっている所は上条自身の魔力には反応せず、それ以外の異能力を消滅させることである。

魔術の場合、魔法障壁を張り、相手のどんな異能力の力でも受け付けない防御魔術、ほかに攻撃魔術として左手や両足（右手は幻想殺しで不可）に強化魔術という形で掛け、近接戦闘で相手に接触するだけで、相手の魔力及び魔術などの強化も消滅させることができる。

ほかに、色々と使い方がありますが、使い方を正しいとなのはの全力全開スターライトブレイカーを簡単に消すことができる。

後、上条が使う魔術と魔法が黒い光の訳はこの力自体が黒いわけで、上条の魔力自体は黒くはない。

蛇足・・・主にリリカルのキャラ相手に使い方を間違えると男女差別のない脱がし魔の称号が上条に与えられ、表に出ることが出来なくなる・・・かも

## 強化魔術

初歩にして極めるのは至難とされる魔術

上条の場合、身体の関節や筋肉を強化し、機動性を重視にした使い方をしている。部分的に魔術を掛けているため、魔力の消費を抑えている。

魔法に関しては武装の方が詳しいのでどうぞ！

## フォーム武装

ストライカーフォーム（部分限定武装）

### 解説

メサイアがサブユニットと融合して成り立つ、バランス型武装であり、特徴では両腕に装着された異なる武装と6角形型シールドで今回はあまり使われなかったが、部分的に守護領域を張れ、防御力が高い！バランスの取れたオールラウンダータイプであり、フォーム武装の中で火力が強クラスに入っている。

しかし、今回のフェイト&アルフ救出では魔導師であることをできるだけ隠すため、バリアジャケットを着用していなかったため、防御力が下がり、バリアジャケットの追加効果で身体能力を向上させることが出来なかったため、今回はその補助をするためメサイアのランニングスキルの固有時制御を使い機動力を補った・・・今回の魔術回路の暴走は左武装のベレセレーモスの真名解放技使用の原因もあるが・・・ほとんどがランニングスキルによるものが大きい・・・

ストライカーフォーム自体には問題がほとんどない……

メサイア  
右武装

真名 バスターインパクト

(6連装リボルバー式パイルバンカー 射突型ニードル)

主に近接攻撃を目的とした強力な武装である。

右手の幻想殺しにより、右武装の魔力補給が乏しいため、上条の魔力を圧縮した弾丸(魔力圧縮弾)を使用した。リボルバー型の疑似カートリッジシステムを使い、パイルバンカーを採用している。弾数はリボルバーに6発、予備弾倉に24発、計30発を装備している。

この攻撃方法は上条の得意な突進攻撃に向いており、上条がストライカーフォームでもっとも多く使用する武装で敵を確実に戦闘不能にさせることができる。1回、ニードルを撃ちこむ事に1発の魔力圧縮弾を消費する。そして、相手に何回ニードルを撃ちこむことによって、威力が変わる。その理由はニードルを撃ちこむ事に上条の異能力消滅及び魔力を身体内部に送りこんで、内部破壊を与えている。

- 1回……相手が復活しても、一定期間、魔術・魔法などが使えない。
- 2回……下級魔術師・魔導師で魔力が低い者は2度と魔術・魔法が使えなくなる。
- 3回……上級魔術師・魔導師で魔力が高い者は2度と魔術が使えなくなる。 使い魔などの存在は消滅

例外で、右武装の真名を呼ぶことにより、1回で3回分の攻撃をすることができ。しかし、その時、3発の魔力圧縮弾を消費する。

魔術師達は上条がこの武装を使用するのをまったくも恐れ、魔術師殺しの上条という異名に相応しい武装である。

サブユニット  
左武装

真名 ベルセレーモス

(魔法機銃砲・折りたたみ式魔力放出型実体剣)

主に中距離～遠距離の攻撃を可能にした武装で、魔術協会の技術部門が開発したカートリッジシステムを採用している。マガジン式で弾丸は6発、予備弾倉に12発、計18発の魔力圧縮弾を装備している。初期モードはガンモードに設定されている。

ガンモードは魔法機銃砲を使用する。弾は主に魔力を使うため、弾は無制限で撃つことができ、今回では使われていないが、連射型及び拡散型の撃ち方があり、敵を牽制することができる。そして、異能力消滅を魔法で応用し、命中した物の魔力及び異能力を消滅させることができる。

そして、今回の戦闘で使用された。バスターショットはカートリッジシステムを使い、1発の魔力圧縮弾を使用し、ガンモードで最強の1撃を撃つことが出来る。諸に直撃すると並みの魔術師は魔術回路、魔導師はリンカーコアを破壊され、二度と魔術と魔法を使えなくなる。

ブレードモードは全距離の攻撃に適性があり、近距離の場合、刀身に常時、魔力及び異能力消滅が取り巻いているため、敵の魔法などの防御はほとんど無効にし、敵本体を切り裂くことができる。

中距離の場合、刀身の魔力及び異能力消滅を飛ばすことで少し離れた場所の目標を切り裂くことができる。

遠距離は今回の使用した真名解放技で刀身から放出される魔力を倍に増やし、魔力圧縮弾を1発使用することによりさらに魔力を増大



され、相手に向けて放つ広範囲魔法の1つに入る。そして、ガンモードと同様、異能力消滅が入っているため、魔術・魔法の防御を無効にする。 物理的防御は可能

例えるなら、Fateのセイバーのエクスカリバーに似た技である。

威力は・・・なのはの全力全開スターライトブレーカーと同じくらいの魔力がそれ以上・・・もし、なのはがこの攻撃に対抗するために全力全開を放つても、この攻撃の中にも異能力消滅も含まれているため、まず、全力全開が消滅され、強大な魔力がなのはを襲い・・・あられもない姿にさせられ、二度と魔法少女やっていけないだろう・・・色々な意味で・・・

しかし、ブレードモードはメリットが多いがデメリットもその分多い。

まず、燃費が高いこと、次に使用後は常時メンテをしないと動作不良になりやすいこと、最後に真名解放技を放った後、体内の魔術回路が不安定になり、魔力の循環に悪影響を及ぼす危険性がある・・・今回の魔力暴走の10%が原因になっている。

メサイア

ランニングスキル

メサイアが独自で開発した機能の1つで、相手が使用する魔術や魔法を解析して、自らの技として使えるスキルである。あえて言えば、FFシリーズで敵の技を使えるようにする能力と似たもの・・・しかし、ランニングスキルでコピーした魔術などは使用するのに、倍の魔力を必要とする。そして、反動が出る魔術を使用後、本来の

反動よりが大きくなる。

今回の使用した魔術、固有時制御はとある魔術師殺しの異名を持つ魔術師の固有結界であり大魔術に分類される時間操作、そのうち過去化の停滞、未来化の加速といった『時間の調整』を極めて小規模かつ効果的に、つまり自己の肉体に限定したもので、大魔術で相当の魔力を使用する上に、使用後の反動がとても大きい。

メサイアはこの魔術を行使する術者のこの固有結界・大魔術を戦いの中で分析し、最近まで、上条に使用できるように大魔術の改良を進めていた……。そして、日本に向かう前日に完成させ、近い内にテストを試してみたいと思い、上条に術の行使を進める。……。そして、今回の魔術師殲滅で2度、この大魔術を行使した。

メサイアは戦い後、フェイト達いる間、大魔術の実戦データをまとめた。結果は予想以上の戦闘能力の向上、改良で上条独自の1つの固有結界の一部にすることが成功したので、魔力の消費量が激減した……。が、1度目の行使は問題はなかったが、2度目で魔術回路内の魔力の循環が身体の限界より激しくなりすぎて、重度の魔力暴走を引き起こすことになる。

オリジナル  
衛宮士郎

筋力：B  
耐久：B  
敏捷：A  
魔力：B  
幸運：E

千里眼：C・・・かなりの距離の目標を捕らえることができる。

魔術：C - ∴ オースドックスな魔術を習得。

心眼（真）：B ∴ 逆転の可能性が1パーセントでもあるならその作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

魔術

強化魔術

投影魔術

カラドボルグ（偽・螺旋剣）

士郎が使用した投影魔術で投影した宝具、壊れた幻想膨大な魔力が詰まった宝具を自ら破壊し、相手にぶつける技能を応用し、敵魔術師達に向けて放ち、その領域を爆撃し、3人の魔術師を撃破した。

プロクン・ファンタズム

この話の設定では士郎はアーチャーに近い技術かそれ以上の技術を備えており、実際にカラドボルグを投影するほどの魔術を習得している。士郎は本編と違い、イリアと一緒に暮らしており、そして士郎の養父母が・・・士郎を裏で鍛え上げたため、サーヴァント（英霊）並みの力を発揮できる。しかし、義妹のイリアには士郎が魔術師であることを隠ぺいしている・・・それはある事情により教えることができない。そして現在、養父母が海外に出かけているためか、士郎は夜になると何かを警戒し、ときどき、屋根の上で冬木市を見渡している・・・その姿はまるで小城を守る騎士の姿を物語っているらしい・・・

## 12 クラスカード回収中!

12 クラスカード回収中!

場所を替えて、穂群原学園・高等部の校庭 夜AM0:00

凜「さて!仕事を始めましょうか!」

イリア「はあ~~~~」

凜「あら?何か言いたそうね?」

イリア「こんな夜中に・・・それにこの格好・・・あの脅迫文・・・  
言いたいことありすぎだよー!ー!」

裏で主人公達が動いている頃、イリアは凜の脅迫文に脅され、迷っていたが・・・最終的に凜に拉致られ現在に至っている・・・

イリア「まあ~~~~いや~~~~で、ここにクラスカードが眠っているですか?」

凜「そうよ!カードの位置はこの校庭の中心に存在しているの!」

イリア「それらしきものは見当たりませんが・・・」

凜「ここにはないわ!カードがあるのはこっちの世界じゃない・・・

ルビー「お願い!」

ルビー「はい!はい!」

イリア「え!?何!?」

ルビー「鏡界回廊一部反転します!」

イリア「なにをするの!？」

凜「カードのある世界に飛ぶのよ・・・それは鏡面そのものの世界・・・鏡面界・・・そう呼ばれるこの世界にカードはあるの!」

イリア達は今いる所は穂群原学園・高等部の校庭の鏡面世界・・・場所は変わらないが違う次元にある場所に飛んでいた

イリア「なに・・・この空・・・」

イリアは今さつきいた世界と違う空に驚いていた・・・空だけではない、周りが区切られたキューブ状の空間になっているのだ・・・

凜「説明している暇はないわ!来るわよ!」

イリア「え!?!な・・・なにが来るの!?!」

イリアは前を見ると校庭の中心から歪みが生まれ・・・何かが出てきた・・・

出てきたのは女性で両目を隠す眼帯に長い紫色の髪・・・Fateファンはよく知っているライダーであるが・・・雰囲気がるで違う・・・黒化していた!

イリア「キヤー!何か出てきた!?!」

凜「報告通り!実体化したわね・・・くるわよ!」

ドーン!!!

イリアと凜の間に黒化ライダーが突っ込んで、地面を破碎した!

凜「Anfang...!」(セツト!)爆炎弾3連!!

凜は黒化ライダーに向けて3つの宝石魔法を撃ちこんだが・・・黒化ライダーは無傷・・・それはそうである！ライダーは対魔力B・・・弱い魔術はほとんど無効にするスキルが今回も健在なのである！

凜「チツ！やつぱり・・・魔術はきかないか・・・じゃ！後は任せた！私は物陰に隠れてるから」シュバ！

イリア「ちよつと！なんで人任せ！？」

ルビー「次きますよ？」

ビューーツ！チリーー！

イリア「キャー！ー！」

黒化ライダーがイリアに向けて杭を投げつけてきたが、ギリギリ回避したが、背中ほぼ露出している所をかすめた。

凜「イリア！距離を取るのよ！距離！」

イリア「距離！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」ドドドドドド！ー！

イリアは全力で距離を取る・・・いや、逃げた！

凜「あいつ・・・逃げただけは得意のようね・・・」

凜は物陰で感想を述べていた・・・

ルビー「逃げているだけじゃ・・・らちがあきませんよ？」

イリア「じゃあ、どうすればいいの！？」

ルビー「敵をふっ飛ばすように心で念じて私を振ってください!」  
イリア「ク!吹き飛ばーーーー!!」

イリアは思いっきりルビーを振った!

ドツドツドツドーーーーン!!

凜「ちょ!なんて馬鹿力なの!？」

イリアの魔法は黒化ライダーに直撃したが・・・その周りの物も薙ぎ払った!

イリア「うあ・・・なにこれ？」

ルビー「さすが、イリアさん!敵を一撃で倒しちゃうなんて・・・さすが、私が見込んだマスターです!!」

凜「何!じっとしているの!早く回避しなさい!」

イリア&ルビー「え!？」

砂埃が晴れると・・・黒化ライダーが何かの魔術を使おうとしていた!

イリア達は何を使うかわからないが・・・あの召喚陣・・・ベルレフォン(騎英の手綱)だ!

凜「何、呆けているのよ!早く避けるか!防御するか!しなさい!」

イリア「え・・・ちょっと!?!どうすればいいの!」  
ルビー「急いで障壁を!」

黒化ライダー「ベルレ……」

黒化ライダーは宝具を使用する直前だった！イリアは急いで障壁を張ろうとしているが間に合うか！

??「クラスカード……ランサー……インクルード限定展開！！」

黒化ライダーの後ろから声が聞こえ……

??「刺し穿つ死棘の槍ゲイボルグ！！」

黒化ライダーが気付いた時はすでに手遅れだった……振り向いた時には赤い槍が心臓に向かって伸びていた！

黒化ライダー「がは！！」

黒化ライダーの胸に槍が突き刺さり、そのままの状態でライダーは消えていた……後に残ったのは、ライダーのクラスカードだけだった……

??「クラスカード……回収……」

イリア「あなた……誰？」

イリアの前に魔法少女の格好した少女がクラスカードを片手で持つてイリア達を見ていた。

??「ホホホホ！！」

凜「何……この嫌な声……」



ルヴィア「あら！ミス・トオサカ！クラスカードは私が回収させていただきますわ！ホッホホホ！！」

次に現われたのは、ルヴィアだった。そう！黒化ライダーを倒したのは美遊だった！しかし、イリアや凜は誰だかわからない・・・

凜「チエスト！」バコ！

ルヴィア「げふ！」

凜はルヴィアに顔に向けて廻し蹴りを食らわせた！

凜「何が『私が回収させていただきましたわ！』よ！後から来て不意打ちをしただけじゃない！！」ドカ！バキ！ドカ！ドカ！

ルヴィア「何を言ってますの！奇襲は1つの戦略ですわ！！」ドカ！バキ！ドカ！ドカ！

この馬鹿2人が出会うとなぜ、喧嘩をするのでしょうか・・・2人の喧嘩はしばらく続いた・・・

イリア「あの～あなた・・・どうして、魔法少女しているの？」

美遊「・・・・・・・・」

イリアの質問に美遊は答えなかった。

サファイア「あの、それは・・・」

美遊「サファイア・・・言わなくていい・・・」

美遊はサファイアの話を通り、ルヴァアの所へ向かった・・・

美遊「ルヴィアさん・・・私はここで失礼します」

ルヴィア「あ！待ちなさい！クラスカードは私に預けて行きなさい！！！」

美遊「あなたに預けると争いの元なので、私が持っています・・・では、失礼します」

ルヴィア「ちよつと！まち・・・」

美遊は単独で魔法陣を展開し、元の世界に戻っていた。

\*\*\*\*\*

美遊「帰らないと・・・当麻お兄ちゃんが心配する・・・」

現在、夜中の1時になるうとしていた・・・さすがに、市外に出かけている上条も戻ってきているだろう。

美遊「サファイア・・・この件は当麻お兄ちゃんには黙ってて・・・」

「  
サファイア「構いせんが・・・最終的に、ばれてしまいますよ？」

美遊「大丈夫・・・ばれない・・・当麻お兄ちゃんはやさしいから・・・」

「  
美遊はたった1日で上条がどのような人なのか、把握していたのだ・・・孤児園の件やルヴィアが話した美遊には秘密にしている仕事・・・そして、兄と義妹との約束・・・これだけのことをしてくれる兄がやさしくないはずがない。

「  
サファイア「たしかに当麻様はやさしいですが、凜様やルヴィア様がしゃべったらおしまいですよ！！！」

美遊「凜と言う人はわからないけど・・・ルヴィアさんは当麻お兄ちゃんを避けてるみたい・・・だから、カード回収が終わるまでにはなんとかできる」

美遊は上条に知られる前にすべてを終わらす覚悟でいた・・・1人ですべてを終わらすつもりでいる・・・ほかの助力を借りる気はほとんどなかった・・・

美遊「さあ・・・話をやめて・・・家に帰りましょ・・・当麻お兄ちゃんが残っている」

サファイア「はい！」

美遊とサファイアは夜の冬木市の道に消えていた・・・

美遊が去った後、出遅れた面子が鏡面界からもどってきた。

ルヴィア「美遊！クツ！遅かった！」

凜「あら？さっき言った言葉は嘘だったのかしら？」

ルヴィア「クツ！なんですって！！」

二人はまた喧嘩を始めた・・・

イリア「あの子・・・1人で رفتちゃんだ・・・少し話したかったな・・・」

ルビー「まあ！すぐにまた、会えますよ！！」

イリア「そうだね・・・また、会えるよね！」

イリアと美遊の初仕事は無事に終わり夜が更けていった・・・

続  
く  
・  
・  
・  
・

### 13 追憶の断片

追憶の断片

\*\*\*\*\*

1981年 25年前・・・ドイツ とある森

ジーク「ここであのバカ出た争いがあつたのか・・・」  
メサイア「マスター・・・ここに何があつたのですか？」

ブレスレット型メサイアを携えて森の中を突き進んでいるこの少年・  
・メサイアの2代目マスター ジーク・カミジヨウ 当時15歳・  
・上条当麻と瓜二つの顔立ちをしていた。

ジーク「ここは、仕事には関係ないよ・・・しかし。関係するのは、  
魔術師達が殺し合った。1つの願望機を望んで・・・」  
メサイア「この前話した55年前の聖杯戦争の話ですか？7人の魔  
術師が7人の英霊を召喚し、そして競い合い、殺し合い、最後に聖  
杯が望んだ魔術師が聖杯を手に入れると言う人道を無視した行いの  
ことですか？昔の話ですよ？」

ジーク「そうだ・・・しかし、第三次聖杯戦争は失敗に終わった・  
・現在のナチスなどが介入したため、聖杯は完成されず、最悪な過  
ちを残して終わった・・・」  
メサイア「過ちとはなんですか？」

ジーク「調べた所・・・サーヴァントの種類はセイバー・アーチャ  
ー・ランサー・ライダー・キャスター・アサシン・バーサーカーの  
7種類のはず・・・だが、とある魔術師がそれ以外のサーヴァント

を召喚した……」  
メサイア「そのサーヴァントはいつたい？」

ジーク「それは……」

ザーイー……ザーイー……（ノイズ）

\*\*\*\*\*

1991年 11年前……真夜中 日本 とある家

ジーク「じゃあ……行ってくる……」

女性「ちよつと待って！なんで行っちゃうのよ！」ガシ！（腕を掴む）

ジーク「これだけはやらなくちゃいけないんだ。察してくれ……」  
女性「ふぎけないで！せつかく……せつかく手に入れた幸せをな  
んで捨てることをするの！？あなたはなんで、自分を傷付きること  
しかできないの！」

女性は声を荒立てて、ジークが家を出ていくのを抑えた。

ジーク「それしかできないんだよ……俺は自分の力を不幸の塊  
で人の不幸とめぐり合うためしかない物だと思っていた……だが、  
これから行われる馬鹿げた争いを止めるために使えるかもしれない。  
そうすれば、そこで行われる場所の人達を救うことができる。」

女性「もういい……もういいよ……あなたはもう十分に多くの人  
を救っているから……だから、あなたが助けた私含めた……人  
達のことを……思つてよ……」

女性は泣きながら訴えた。このままジークを行かせてしまったら、二度と戻ってこない・・・と女性は感じていたからだ。

ジーク「・・・おまえの気持はよくわかるよ・・・」

女性「分かってない！分かっていたら、あなたは行かないわよ！」

ジーク「これが最後なんだ・・・行かせてほしい・・・」

女性「あなた・・・自分がどのような状況なのかわかって言っているの？」

ジーク「怪我のことか？それなら心配ないよ。メサイアが修復してくれた。」

女性「それだけじゃないでしょ！ザーーー！私達の・・・ザーーー！！どうするつもりなの！！」

ザーーー！ザーーー！！

ジーク「大丈夫だよ！俺はちゃんと戻ってくる！ザーーー！！だから、待っててくれ！」

ザーーー！！ザーーー！！

\*\*\*\*\*

ドイツ とある森の中の城

ジーク「あなた達ならわかるでしょう！これ以上、不毛な戦いをしてほしい物は手に入らないと！！」

切嗣「たしかに、聖杯戦争をしても望む物を手に入れることができるとはかぎらない。君の言う通りかもしれない・・・」

アイリス「そうね・・・私もあなたの言葉に賛成するわ！」

ジーク「分かってくれますか！アインツベルンの小聖杯・・・それがどれだけ魔力を持つ物でも俺の右手で破壊すれば争いが起きなくてすむ！」

切嗣「それは無理だよ・・・」

ジーク「どうして！？小聖杯は魔術で作り上げられた物ではないのですか！？」

アイリス「変わったのよ・・・次の戦いで出される・・・小聖杯の形が・・・」

ジーク「なんだって・・・それは一体！？」

切嗣「小聖杯は・・・ザーーーーー！！ザーーーーー！！」

ジーク「！！！」

ザーーーーー！！ザーーーーー！！

\*\*\*\*\*

とある森の中

ジーク「クライド・ハラOWN！お前いい加減にしろ！！」

クライド「きさまがそのデバイスに関わったのが、いけないのだよ！！」

ドーーーーーン！！ドドドドドドド！！



ジーク「お前の空気ブレイカーにはほんと呆れるぞ！今こっちは急いでいるだ！お前の相手なんて・・・やってられるか！！！」

ジークは魔法攻撃を回避しながら、グライドから離れようとする。

クライド「きさま！待ちあがれ！」

ジーク「待つバカがどこにいる！」

ザーーーーー！ザーーーーー！

クライド「クソツどこ行つた！」

ジーク「そこだ！！！」

クライド「グハッ!？」

クライドは後ろに向いた瞬間、メサイア・ランスモード槍が腹部に突き刺さつた。

ジーク「おりゃーーーーー！！！」

ジークは槍を振り上げ、クライドを宙に上げた。瞬間、槍が剣に変わっていた。

ジーク「終わりだ・・・この一撃・・・受け取れ！ベルセレーー  
ーモス！！！」

クライド「うあああああ！！！」

ザーーーーー！ザーーーーー！ザーーーーー！

ジーク「生きてるか・・・意識があるなら、助けを呼び。そして、傷を癒せ・・・」

クライド「きさま・・・なぜ、とどめを刺さない・・・」

ジーク「どうして？俺はお前を殺す通りはないぞ？」

クライド「何！？きさまは俺を毎度半殺しにして、それでまた終わらせるつもりか！？いい加減、とどめをさせ！そうされないときりしないだよ！！」

ジーク「俺はそこまでして人殺しはしたくない・・・それに今回もお前だけで攻めてきたわけでもあるまいし・・・」

ジークとクライドの周りには管理局の局員が瀕死状態で転がっていた。

ジーク「まあ・・・おまえだけが意識あるようだし、早く救助してもらえ」

ジークは倒れているクライドに背をむけ、歩き始めた。

クライド「きさま・・・傷が治ったらまたすぐにきさまを倒しに戻ってくるぞ！覚悟してけ！！」

クライドはどこぞの負け犬の遠吠えのようなセリフを吐いた。

ジーク「ああ！またいつでも、相手になってやる・・・だが、次が会うことがあればの話だ・・・」

ジークは最後の言葉だけ独り言のような小声でしゃべり、森の中に消えていった……

ザーーー！ザーーー！

\*\*\*\*\*

洞窟内

ジーク「はあ……はあ……これで仕事……完了だ……」  
メサイア「マスター！しっかりしてください！早く治療を！」

ジークは最後の仕事を完遂し、その場の壁に寄りかかっていた……

ジーク「なんとか……おの二人の約束は……守れた……  
あの人達は普通の……生活を送れる……」

メサイア「マスター！今、約束事は後です！早く治療し、ここから出しましょう！」

ジーク「……」ガチャ！（外す音）

メサイア「マ……マスター！？何をするつもりですか！」

ジークはメサイアを外すと仕事の道具を収納していたケースを開いた。

ジーク「おれはここを出ても……命が持つか……わからない……」

メサイア「ふざけないでください！あなたは待っている人達がいる

のです！こんな所で死ぬわけじゃないでしょ！？」

ジーク「俺はやり残したことがある・・・だが、それは無理そうだ・・・メサイア・・・頼みがある・・・」

メサイア「私の話を聞いてください！」

ジークはメサイアの話の流れし、話を進める。

ジーク「・・・このケースは俺にしか・・・扱えない・・・だが・・・俺を同じ力を持つ者なら・・・扱える」

メサイア「やめてください！マスター！私を入れると契約が解除されてしまいます！あなたは魔術も魔法も扱えなくなります！」

そう・・・このケースは中は異次元になっており、鍵を掛けてしまうと契約者との繋がりがきれ、メサイアからの力の抑制が出来なくなる。

ジーク「メサイア・・・どの道・・・もう魔力は尽きている・・・今、契約を切っても・・・さほど・・・変わらない・・・」

ジークはメサイアをケースの中に入れた・・・

メサイア「マスター！考え直してください！」

ジーク「次のお前の主に・・・なる奴が・・・現れるのは・・・結構先かも・・・しれない・・・だけど・・・次の主も俺と同じだと思う・・・だから・・・そいつと一緒に・・・俺の・・・やり残したことを・・・やり遂げて・・・ほしい。」

メサイア「マ・・・マスター」

ジーク「詳しいことは・・・俺の家に・・・保管してある・・・メサイア・・・長い間・・・迷惑かけて・・・すまなかった・・・次の主は・・・お前を大切に・・・してくれる奴になることを・・・願っている・・・」

メサイア「マスターーーー！」

ジーク「さようなら・・・古き相棒・・・メサイア・・・もし、あいつらと会ったら・・・よろしく・・・伝えといてくれ」

ジークはやさしく微笑んだ顔でケースの閉めていった。

ガシャン！（閉まる音）

普通のケースとは違う嚴重な鍵を閉める音が響いた。

メサイア「マスターーーー！開けてください！」

メサイアはブレスレットから杖の形に変わった。ケース自体が広いため、幅は問題ではなかった。

メサイア「うわーーー！開けてください！開けてください！マスターーーー！」

メサイアは自身に残っているジークのごくわずかの魔力を使い、魔法を撃ち続けた・・・そして、魔力が尽きた。

メサイア「なんで・・・なんでこんなことに・・・マスター・・・  
どうか・・・生きていてください・・・」

メサイアは抵抗をやめ、時が過ぎるのを待つことにした・・・新  
たなマスターとめぐり会うために・・・

ザーーーーー！ザーーーーー！！

ブツ（切れる音）

ここで断片は終わった・・・

続く・・・

### 解説3

ジーク・カミジヨウ

享年29歳

日系ドイツ人でメサイアの2代目マスターもしくは前マスターである。そして、平行世界の上条当麻と同じ存在で・・・現在の世界に上条と同じ力を者は存在しない。外見が少し違い、後ろ髪を少し伸ばしており、髪を後ろに束ねている。例にランサー（クーフリーン）と同じくらい

能力は上条と同じ幻想殺しと同じ力を持った右手を持っており、メサイアと契約後は現在のの上条と同じくらいの技術を持つ・・・しかし、上条より若干魔力が低いA＋Sくらいのレベルだった。

魔術は異能力消滅を使えるが、あまり使用せず、5大元素の魔術を使うことが多い。

攻撃方法も異なり、上条みたいに右手を駆使して戦法をとらず、剣や槍、ほかに銃火器など武器を使用した戦法を好んだ（格闘戦も可能だがあまり使用しない）。その理由はジークが誰かの幸せを壊してしまうと思ひ、敵味方関係せず・・・右手を使ったことはあまりない。

上条とジークの考え方は似ているが違い、上条は幻想を壊して、1からやり直させる考え方で、ジークは幻想を壊さないが新しいやり方を模索させる考え方をしている。

どの道二人の考えていることは偽善に近く、クライドやクロノに善の考えと持つ者達には目障りな人間関係になる根源になってしまう。

メサイアとは14歳頃にとある廃墟を搜索していた所を見つけ、いきなりマスターにされた。その後・・・魔術などを行使できるようになったが、その分の不幸がジークを襲う・・・しかし、不幸のほとんどが他人の問題などで、上条当麻と同じで自ら進んで突っ込んでいく。

14歳前から聖杯戦争の存在を知り、近いうちに再び行われると察知し、次の戦争を何としても阻止しようと準備を進める。

理由はジークの一族が聖杯戦争の被害に遭い、多くの人が亡くなったことを親に聞かされ、そのような悲劇が起きないようにするとジークは昔からの願いだった。

準備を行うため故郷を離れ、各地を転々と移動し、最終的に日本に流れ着き・・・上条当麻と同じような生活を送ることになる。

24歳に結婚し、4年間、日本で幸せな生活を妻と幼い娘と過ごす。結婚前は色々と修羅場があり、1つの聖杯戦争が勃発したらしいが、とあるジークの想い人の提案で戦争は終結した。ジークはその後の記憶が曖昧になっており、実際どうなっているのか、わからない始末だったらしい。

妻は最初にジークに告白（抜け駆け）したため、ジークはそれに承諾し正式な結婚をすることができたが・・・ほかの想い人たちから今まで以上の険悪な関係になってしまったらしい。

28歳の秋・・・妻などの制止を振り切り、第4次聖杯戦争を阻止すべく、故郷へ飛ぶ、その時ジークはとある事件で怪我をしてしまい、コンディションは最悪な状態で行動を開始することになった。

とある戦争参加者・・・聖杯の触媒（小聖杯）を提供する魔術師と交渉し、聖杯戦争をやめるように訴えた。そして、交渉は成功したが、魔術師の願いを聞き、約束を必ず守ると誓い、ジークは聖杯降臨の予定地へ向かう。



目的地の近くで、ジークを追いかけ続ける。クライド・ハラオウン（クロノの父親）が管理局の戦闘部隊をつれ、襲撃するも、返り撃ちにする・・・クライドはジークにとどめを刺すように懇願するが、ジークはそれを拒否し、約束の仕事に戻る・・・この戦闘がジークとクライドの最後の戦いになる。

ジークは聖杯降臨の予定地の洞窟の中でトラブルが起きるが約束を見事完遂する。しかし、その場で力尽きてしまう・・・自分が長くないと悟るとメサイアを魔術道具を収納していたケースに入れ、メサイアに願い事を頼み、メサイアを封印する。

ジークは残っていた力を使い、洞窟から脱出するが、命は尽きかけていた・・・その所にちょうど日本に来ていたゼルレッチにメサイアが入った箱を託し、その場で息を引き取った・・・その日はジークの誕生日で29歳になった・・・誕生日は12月上旬と設定・・・上条も同じく

生涯を人のために尽くした1人の魔術師は短い人生を終える。

その遺体はゼルレッチとその場にいた魔術師達により、丁寧にその土地を管理する教会の外国人墓地に葬られた。しかし、名前がわからなかったため、墓標には名前を書かれておらず、ゼルレッチはジークが命を掛けてまで、仕事を果たしたと悟り、「正義を貫く勇敢な魔術師・・・ここで眠る」と墓標に書き標した。

このことはゼルレッチと上条とメサイアぎぐらいしか知らない。メサイアはジークの死を悲しみ・・・近いうちに墓参りに行きたいと上条に願い出る・・・上条は当たり前かのように了承している。

クライド・ハラオウン

享年25歳

リンディ・ハラオウンの夫・クロノ・ハラオウンの息子。

ジークの持つデバイス（メサイア）をロストギアとして見て、何度も回収しようとするが最終的に話し合いより、殺し合いの方向に進んでしまう。クロノと血が繋がっているのか・・・途轍もなく、KYでタイミング悪くジークに接触するため、会った時のほとんどが戦闘になってしまう。

約10年間、ジークを追い続けるうちに、グライドは1つの目標を立てた。

それは、ジークを超え、そして彼以上の人を救ってみせるという目標

クライドはジークの行いのほとんどが偽善だと見ているが、それに救われた人は計り知れないほど多い。

クライドが善の行動をとっても、救われる人は多いが、ジークには劣る。そのため、ジークはクライドにとって1つの理想でもあった。裏ではジークの行動を評価しており、管理局の報告には乗せず、自らの戦いと称して暇があればジークに向かっていく。

妻のリンディにはジークのことを褒めることや争い事などの面白おかしい話をするだけで、ジークに関することは夫が興味を示している人物という認識しかなかった。クロノも父親を圧倒した人物とだということしか知らない。

戦闘では、引き分けもしくは敗北がほとんどで負けており、1度もジークを倒したことがない。

最終的に管理局にジークのことがバレ、最後の戦いの付近で、戦闘部隊と行動するようにと命令で戦うが、すべて返り撃ちに会う。

そして、最後の戦いでジークの攻撃で負傷するが、数週間で回復し、ジークを探すも再びめぐり会うことはなかった。

そして、数日後・・・元の管理局の任務「闇の書」の輸送中に、その闇の書にクライドが指揮していた艦の制御を奪われ、自分の艦の破壊をクライド自らグレナムに提案した。

若き時空管理局提督は25歳の短い生涯で幕を閉じたが、死後の世界でジークと争っているかもしれない。

### 解説3（後書き）

ここでアンケートと意見を取りたいと思います。

アンケート

『上条がもし、結婚した場合、どのヒロインと結ばれると思いますか？』

ヒロインとはある魔法の魔法少女パラルワールドの女性キャラと限らず、とある系やリリカル系からの出ていないキャラでも構いません！簡単に言うとなし制限です。

意見

『そして、2人から生まれた娘の名前はどのような名前になるか？』  
複数の名前でも大歓迎です。

ご返答は感想の方をお願いします。

多くの意見を期待してますので、よろしくお願いいたします。

## 14 帰還

### 14 帰還

時間がまた戻し・・・

上条「う・・・うう・・・ん！？・・・ここどこだ！？」

メサイア「上条！よかった・・・二度と目覚めないと思ってしまいました・・・」

上条の意識が戻り、そして目覚めた・・・メサイアはあまりにもうれしさに泣きながら話している。

上条「メサイア・・・あれ？俺・・・魔力暴走で死にかけて、森の中で倒れていたんじゃないかなかったけ？」

オーギュスト「私が救出し、治療を行いました。」

上条の横に立っていたのはエーデルフェルト家の老執事オーギュストだった。

士郎「当麻！大丈夫か？」

オーギュストの後ろから士郎が心配して近寄ってきた。

上条「あれ？士郎さん・・・」

上条（念話）『地脈の安定化・・・仕事はどうなった。』

士郎（念話）『それは俺がやっといた。後、倒した魔術師達も魔術

協会の連中に引き渡しておいたぞ。』

上条（念話）『そうですか・・・すみません。迷惑をかけました。』

上条は士郎に念話で礼を言うとオーギュストの方に顔を向けた。

上条「それで、なぜ・・・オーギュストがここに居るんだ？・・・ん？・・・つうか、ここ車の中か！？」

上条はようやく、自分がどこにいるか把握した。

オーギュスト「いかにも・・・ここは車の中です。あなたをここへ運び、ここで治療させていただきました・・・あの時は後1歩遅ければ・・・間違いなく死んでいたでしょう。」

上条「なに、サラリと恐ろしいことを言っただよ・・・」

士郎「当麻・・・それほど、危険な状態だったんだ・・・見ていた俺もヒヤヒヤしたよ。」

オーギュスト「所で・・・衛宮様・・・あなたはなぜ森の中に？」

士郎「え・・・ああ！少し買物で隣の町までの送り迎えを頼んだんですよ。そして、戻ってくるとこんな状態で・・・」

オーギュスト「わかりました・・・上条様がこの様子だとバイクの運転は無理でしょう・・・私めがお送りしましょう。」

士郎「助かります。」

士郎は自分が魔術師ということを隠した・・・それは家の事情により情報をあまり漏洩しないためだった。

上条「ああ・・・できれば・・・バイクのこともお願い出来ませうか？」

オーギュスト「かしこまりました。後で家の者に送り届けましょう。」

上条「助かります・・・で、改めて聞くがなぜここにいる？」

上条の目つきがいきなり変わった。そしたら、オーギュストも姿勢を直した。

オーギュスト「お嬢様からの伝言で追いかけて参りました。」

上条「ステッキに見捨てられ、手詰まりのあいつが俺に伝言か？」

オーギュスト「左様です。お嬢様はカード回収の作業は予定通り行うと言っています。」

上条「サファイアがないあいつがどうやってカードを回収するつもりだ？サファイアはこちらで預かっているぞ？」

オーギュスト「そのところは問題ないです。ルビーを使い、遠坂様と共同で作業なされると申しております。」

上条「あいつらが？大丈夫なのか？逆に心配・・・ちょっと待て、今、ルビーと言ったな！？あいつは遠坂の所に居るのか？」

オーギュスト「左様でございます。」

上条「そうか．．．それなら、一安心．．．じゃない！あいつも見限られただろ！ルビーが遠坂とまた契約すると思うか！？」

オーギュスト「そのことは問題ないかと．．．」

上条「それにルヴィアがそう簡単にサファイアなしで行動すると思えない．．．オーギュスト．．．ルヴィアが何か企んでいるだろ．．．」  
「ゴゴゴゴ．．．！！」

オーギュスト「いえ、そのことは決して．．．」

上条「！！．．．そういえば．．．美遊がお昼に居なかった．．．まさか．．．サファイアと一緒に拉致して、無理やり回収作業に使うとしているのではあるまいな！？」  
「ゴゴゴゴゴゴ！！」

上条は知らないが予想は的中！！、本編で決して出ることがない威圧がオーギュストを襲い震え上がらせた。

士郎「あれ？美遊って誰だい？」

上条「ああ！士郎さんには、言っませんでした。」

士郎が話かけたため、先ほど放っていた威圧は消えた．．．オーギュストは少しホッとした。

士郎「へ〜．．．孤児園の女の子が．．．」

上条「そうなんだよ。それで．．．」



上条は美遊のことを詳しく話した。一緒に働く仲間だから、包み隠さず話した……

上条「まあ……ルヴィアのことは後にしますか……メサイア、俺が寝ている間、何か変わったことは？」

メサイア「はい！大師父から伝言が1つ『根回しはしておいた』だそうです。」

上条「さすが！大師父！そう言う所は憎めないいな」

メサイア「まったくです！」

士郎とオーギュストは上条に伝えられた意味を把握できなかった。

上条「オーギュスト！1つ頼みがある。」

オーギュスト「なんでしょう」

上条「1つ寄り道を頼む！」

オーギュスト「かしこまりました。」

オーギュストは素直に了承し、上条が指示した場所に向かった。

\*\*\*\*\*

時が過ぎて……上条邸 11:30PM

上条「はあ……美遊の奴まだ帰ってない……」

メサイア「そうですね……何かあったのでしょうか？」

上条は我が家に帰還したが、屋敷は昼と変わらない形だった。しかし、変わっていた部分は、上条が買い出しで商店街で買って郵送で頼んだ。3種の神器（家具）などが玄関の目の前に山積みになっていることだった。

上条「仕方がない・・・メサイア、美遊が返ってくる前にこの山を整理するぞ！」

メサイア「了解です！」

上条は強化魔術を使い、重い家具を屋敷内に運びこんでいった！

1:00AM

上条「ふっふっふと終わった。」

メサイア「お疲れ様です。」

メサイアは労いの言葉を上条に言った。

上条「すっかり遅くなったな・・・美遊・・・ハッ！！・・・まさか・・・マジでルヴィアに拉致られたんじゃ・・・」

メサイア「それは・・・考えられますね・・・」

上条「ル~~~~ヴィ~~~~ア~~~~!!等~~~~人道を外れたか~~~~ふっふっふ~~~~」  
「ゴゴゴゴゴ~~~~!!」

メサイア「か・・・上条・・・」

上条の周りの温度が氷点下まで下がり・・・メサイアは怯えながら、

上条に話しかけた。

上条「処刑……決定ーーーーッ!!!」ギラーーン!!!（目が光る!）

メサイア「え~~~~~!!」

上条が6ヶ月で習得したのは……戦闘技術や魔術などの知識だけではない……

そう……あの……馬鹿二人……凜とルヴィアを制裁するため……上条のもう1つの裏スキル……処刑モード!!!

上条はいつもはやさしい性格だが……上条リミット（怒り）ゲージがMAXになるか。バカ2人が喧嘩するか条件が揃うと……処刑モードとなり……問題を起こした原因を殲滅するまで暴れる・バーサーカー（狂戦士）となる!ちなみにパラメーターも1段階上昇する。

そして、今!我が愛しき義妹がたった1日で地の淵に墮とそうとしているお嬢様を断罪をする狂戦士が今ここに降臨しようとしていた……ほぼ、降臨していた。

メサイア「上条~~~~!落ち着いてください!」

上条「今の俺は怒りが有頂天だーーーーあ!!!」

上条は爆発寸前だった!!!今の上条を止められる者はいない!!!

美遊「ただいま」

サファイア「ただいま戻りました。」

上条「!!」「ビクッ!

美遊の声が聞こえた瞬間、上条のリミット(怒り)ゲージが収まった。居間いる上条は猛スピードで美遊に突っ込んでいた。

ドドドドドドドド!!キーーーー!!(曲がり角)

美遊「!!!」

ドドドドドドドド!!キーーーー!!(ブレーキー)

上条「美遊!今までどこに行ってたんだ!?!」ガシ!

美遊「え・・・ええ!?!」

美遊はいきなりのことにはびっくりして、言葉が出てこなかった。

上条「どうした?ハッ!やはり、あのお嬢様に拉致られて、こちらの世界の仕事をやらされたんじゃない・・・」

美遊「!!!」「ドキ!

上条(ブチリ!)切れる音

上条「やはり、そうだったか!よし!今すぐ、あいつの所に行って、今までの罪を1つ、1つ、身体に刻みつけて、二度と表の世界に出られないようにしてやるーーーー!!」「ゴゴゴゴゴゴ!!」

今さっき、収まったゲージがMAXに近い状態に戻った。

今の上条はたった1日でシスコンの街道まっしぐら！このままだと1ヶ月もたたない内に土御門を超えるシスコンになってしまう勢いだった。

美遊「当麻お兄ちゃん！落ち着いて！！」ガシ！

上条が生き良いよく玄関から飛び出そうとした時、美遊は上条を必死に掴んで落ち着かせた。

美遊「当麻お兄ちゃん！違います！私はただお兄ちゃんの役に立つと思ひ、お仕事を捜してただけです！！」

上条「仕事？」

上条は落ち着きを取り戻した。

美遊「お兄ちゃんがお金に困っていると思つて……それで1日中・捜して……こんなに遅く……」

上条「そうだったのか……ん！？……お金？俺……金には困つてないぞ？」

美遊「え……」

美遊は驚いていた……ルヴィアと言つていることと間逆だった。

上条「朝のあれはたしかにそう見えてもおかしくはない……だが、あの時はここに来たばかりで手持ちがなかったからな……今は銀行からお金を下ろしたから……さほど心配するほど金には困つてないぞ？」

美遊「!!」

美遊はやっと気付いた!騙された!

上条「どうした・・美遊?まるで何かに騙された顔してるぞ?」

美遊「え!べ・・別にそんな顔してないよ!」

上条「そうか・・それに美遊、お前の年で働くことは普通できないぞ?」

美遊「それはそうですけど・・」

上条「美遊・・朝から仕事捜ししなくていいから・・」

美遊「え?でも・・」

上条「でもも、くそもない!」

メサイア「そうですよ!普通は学校に行く年ですよ!」

サファイア「私も同感です!」

美遊「メサイア・・サファイア」

メサイアとサファイアも上条の話に賛同した。

上条「とにかく・・美遊、朝から仕事捜しをする必要はないから」

美遊「そしたら・・明日から何をすればいいのですか?」

上条は笑いながら、居間に置いてあった紙袋を持ってきた。

上条「ふっふっふ・美遊・お前は明日から・・・これを着て！  
新たな新天地に向かうのだ！！」バツ！！（紙袋から服を取り出す）

美遊「！！！」

上条が取り出したのは、とある学園の制服！しかも、美遊にぴったりの・・・

上条「美遊！冬木市 私立穂群原学園小等部、入学おめでとう！！！」

美遊「え！？」

メサイア「入学おめでとうございます。美遊！」

サファイア「美遊様、おめでとうございます！」

美遊「え・・・え~~~~~！！！」

いきなりすることに美遊はびっくりして屋敷中に美遊の音が響き渡った・・・

続く・・・

#### 14 帰還（後書き）

アンケートはまだやっていきますので、色々と意見なども聞かせてください。



## 15 登校初日（上条サイド）波乱な学園生活開始！！

15 登校初日（上条サイド）波乱な学園生活開始！！

穂群原学園高等部 AM8:15

上条「まさか・・・俺まで、学校に行くことになるとは・・・」

上条は現在・・・穂群原学園高等部の校門の前に立っていた・・・

上条はまだ学生であつてもおかしくない年である。そのため、少しでも周りと溶け込むため大師父の考えで近場の学園に転校という形で入学することになった。

しかし・・・上条は15歳で1年になることになるのが普通だが・・・時間のズレで先に誕生日が過ぎてしまい、この世界では16歳ということになってしまい、上条は2年生という形で入学することになるのだ。

上条「しかし、高等部が小等部のすぐ真横だったとは・・・そういうえば・・・メサイア・・・美遊の様子が昨日からおかしくなかったか？お前は何か知っているか？」

メサイア「いえ、とくに私は知りません」

上条とメサイアは知るはずもなかった・・・美遊が上条の仕事のことを知っていることは2人が知っているはずがない。

上条「まあ！それは後にしようぜ！今は自分の足元を固めないと・・・またあいつが心配するな。」

メサイア「そうですね。今はやるべきことをしましょう！上条！」

上条は学園内に入って行った。

一成「おや？見かけない顔だな。」

上条の前に生徒会の仕事をしている柳洞一成が立っていた。

上条「あ！俺、今日転校していた。上条当麻とです。」

一成「おお！連絡は受けているよ！」

上条「いきなりですが、これからよろしくお願いします。」

一成「うむ！こちらこそよろしく頼む。」

士郎「お！一成に当麻！おはよう！」

上条と一成が話している部活の朝練が終えた士郎が2人の所に近寄ってきた。

上条「士郎さん！おはよう！」

士郎「おう！おはよう！」

一成「ん？なんだ衛宮、知り合いなのか？」

一成は士郎が上条のことに疑問を思った。

士郎「ああ！ちょっとした知り合いなんだ。」

一成「ふむ．．おまえに近寄ってくる奴は、うちのクラスのバカだけでは．．．」

??「よう！衛宮に一成、ずいぶん早い登校だな〜」

3人が後ろ向くと．．ワカメのような髪に噛ませ犬のような性格をした男子が立っていた。

一成「なにが早いだ。お前は遅すぎるだけだ。」

士郎「慎二！朝練も参加せずに何を言ってくるだ。」

慎二「衛宮、僕みたいなブリリアントな男が朝練なんて参加すると思っただかい？」

上条（念話）『なんだこいつ．．それに何？この胸の高まりは．．』

メサイア（念話）『上条、あなたも感じますか？私もなんだか．．無性に殴くなるほどの感情の高まりを感じます．．それに』

上条（念話）『ああ．．ホントに．．』

上条&メサイア『こいつ途轍もなくキモい！！』

上条達に話しかけてきた男子．．間桐慎二！士郎と同じ弓道部の部員で一成と士郎と同じ2年C組の学生である。性格はとにかく自己中でやりたくないことは士郎に押しついたり．．異性には躊躇いもなく近寄ってくる。人畜有害な人物！上条とメサイアは見ただけで予想をついた．．．

慎二「あ~~~~？それより、こいつは誰だ？」

一成「今日、転校してきた上条当麻君だ！」

上条「始めまして、今後ともよろしく。」

慎二「あ~~~~！こちらこそよろしく頼むよ・・・だけど、僕のやることにいちやもは付けないでよ？」スタスタスタ・・・

慎二はそのまま校内に消えていった。

上条「なんですか？あの人？」

士郎「あまり気にしないでくれ・・・」

一成「俺からもあいつのことは何も気にしないでくれ」

上条「あ~~~~・・・そうですか。」

上条は慎二という存在が今後の学園生活で色々と問題を起す1人だと予測するのであった・・・

キーン・・・コーン・・・カーーン（チャイム）

一成「おっと！こうしてはおられん！士郎、先に教室に行つてくれ！俺は上条当麻君を職員室に送ってくる。」

士郎「ああ！わかった。当麻！また後でな！」

上条「おう！-」

士郎が駆け足で教室へ向かって行った。

一成「さて、上条当麻君、行くところか。」

上条「あの〜フルネームだと気が狂うので、呼びやすい呼び方で呼んでくれませうか？」

一成「そうか、たしかにフルネームだと舌を噛んでしまいそうだな。・上条と呼びたいところだが、もう1人・同じ呼び方をしているのがいるから、衛宮と同じく当麻と呼ばせてもらおう！」

上条「はい、構いませんよ。ではこちらも一成でよろしいでせうか？同じ2年ですし・・・」

一成「ああ！構わないとも、これからよろしく。当麻！」

上条「はい、こちらこそ！」

2人は呼び名を決めた後、目的の職員室に向かって歩き始めた。

上条「しかし・・・上条という苗字も居るものだな〜」

一成「いや、上条という苗字が居るわけではない。1年の後輩に横文字でカミジヨウというのがあるんだ。」

上条&メサイア（！！）

上条『メサイア・・・』

メサイア『上条・・・考えすぎです・・・』

上条『しかし・・・もしそうだとすると・・・後々面倒なことに・・・』  
メサイア『たしかにそうですが・・・前マスターの家からここまで離れ過ぎています。彼女がここにくるのは・・・可能性は低いです。』

上条『そうか・・・俺の考え過ぎか・・・』

上条とメサイアは念話でカミジヨウという人物に対する口論になったが、最終的に上条が押し負けてメサイアの意見が通ることになる。しかし、この判断がこの後の不幸の前触れだとは誰も気付くことはなかった。

\*\*\*\*\*

とある教室

上条達が校庭で話し合っている所を1人の女学生がじっとその様子を見ていた。

女学生「なんで・・・あの人・・・パパのメサイアを持っているのです!?!」

??「かなで様・・・落ち着いて・・・」

女学生「落ち着いていられるわけないでしょ!?!パパを探すためにこの土地の学園に入学したけど、1つも手掛かりもなくこの3ヶ月無駄な時間を過ごして、今になって手掛かりであるメサイアがあるのを見ず知らずの人が持っているです!」

??「・・・そのようなことを申されても・・・私はわかりません」

女学生「まあ・・・いいです!真実をすぐに明らかにしてやります!」

??」・・・・」

女学生「それに・・・あの男・・・パパと同じ顔してるですか・・・  
クツ」

女学生は上条をもう1度見た後、誰もいない教室を出て自分のクラスに向かった・・・

\*\*\*\*\*

## 2年B組の教室

神楽坂「今日転校してきた。上条当麻君です！みんな仲良くしてね  
！」

上条「上条です！これからよろしくお願いいたします！」

上条のクラスは土郎達の隣のB組に入ることになった。

そして、隣にいる担任は神楽坂恵理・・・英語教師で生徒会の顧問も行っている二十代の女教師である。

オノD「なんだ・・・女の子じゃないのか・・・風間、お前の情報間違っているじゃないか！」

風間「え〜〜〜僕がその情報流したわけじゃないよ。」

常盤「あ！それ流したの私」

オノD「恭子！おまえか!？」

神楽坂「はいそこ！失礼なこと言わない！」

上条「それはそうですね・転校生というと美少女やイケメン男子かのどちらかを期待しますよね・みなさんの幻想ブチ壊してしまい本当にすみません・」

神楽坂「まあ、まあ、上条君も落ちこまないで！」

上条「いえ、落ちこんでいるわけでは・！・！・クツ」サツ！

バン！バン！（銃声）

上条「今度はなんだ!？」

上条は教壇を盾して銃撃を回避した。しかし！

相良「・・・」バツ!!

上条「クツ」

横から1人の学生が突っ込んできた。片手には軍事用のサバイバルナイフ!!

上条は軍隊の訓練で身に付けた近接戦闘の構え、学生の攻撃をすべて受け流す。

相良（ばかな！今の動きですべて避けただど!？）

上条『今の技・・・海軍で使うCQBか!？』

メサイア『いえ、それを独自に改良した技です!』

相良&上条（間違いない・・・こいつ）



相良&上条（「こいつ、戦闘慣れしている!？」）

バチーーン!!（鉄ハリセン!!）

二人が掴み合っていると学生の頭にハリセンの一閃が飛んできた。

相良「あ・・・ああ・・・」ボタン！（倒れる）

上条は一体何が起きたかわからなかった。鉄板の塊が落ちてきたような音が

響くと学生はそのまま倒れこんだのだ。

かなめ「たく!この戦争ポケ男!!転校してきた学生を初日に襲いかかるなんて、いったいどんな神経してるの!」

相良「落ち着け、千鳥・・・俺はただ、みんなの安全を考えて・・・」

かなめ「何が安全よ!白昼堂々と銃を乱射して何を言っているのよ!」

相良「あれはゴム弾だ!当たっても別状は・・・」

かなめ「このボンクラ!一回死んでこい!!」バシ!バシ!バシ!

上条の目の前はカオスな世界が広がっていた・・・今さっきまで互角の力を持つ学生が鉄ハリセンを持った女学生にギタギタに伸され、周りは誰も驚くなどの顔つきはせず、ただ、目の前の

肅清を眺めているだけだった。

上条『メサイア・・・なんかこのクラス・・・怖い・・・』

メサイア『私もです。上条・・・いくらなんでも非日常すぎます。』

上条はこのクラス・・・本当に大丈夫なのか・・・心配になっていた。そして、肅清が終えた女学生が上条の方へ向いた。

かなめ「ごめんね！こいつが迷惑かけちゃって」

上条「いえ、大丈夫です。このようなことは慣れっ子ですので」

相良「千鳥！そいつは危険だ！いますぐ・・・」

バチーーーーー

学園中に鉄ハリセンの音が響き渡った。学生は完全に行動不能になった。

上条「あの・・・いくらなんでもやりすぎでは・・・」

かなめ「え！？・・・ああ！大丈夫！こいつすぐに復活するから」

オノD「そうだぞ。そいつすぐ復活するだよ」

風間「それより君は復活した後のことを考えた方がいいよ？」

上条「ああ・・・わかった」

上条『何なんだ？このクラス』

メサイア『色々と終わっていますね・・・』

上条とメサイアはこのクラスでやっていけるか、心配になっていた。かなめ「まあ！困った時は私かみんなに頼ってね！上条君！」

上条「はい・・・そうさせていただきます。え〜とお名前は・・・」

かなめ「私？私は千鳥かなめ！このクラスの学級委員をやっているの！後、ここで伸びているのが、うちのクラスの厄介事を持ち込むバカの相良宗助、まあ、仲良くしてね。」

上条「できるだけ努力します！」

かなめ「改めて、ようこそ！我が2年B組へ！！」

こうして、上条はB組クラスの全員（相良以外）に歓迎され、華やかな学園生活が始まり授業が始まると思いきや・・・午前中は神楽坂先生の授業だったが、相良が撃ったゴム弾の直撃を食らい、そのまま気絶し保健室に運ばれたため、午前は自習となり、B組クラスでは簡単な上条歓迎会が開かれた。

上条はクラスの全員から質問攻めを受けたり、そして、復活の相良が再び上条を襲おうとしたりなど、賑やかな時間を過ごすのであった・・・

時間が過ぎてお昼 12:00AM

上条「ふう〜お昼か・・・さて、弁当でも食べるか・・・ん!？」

上条はイスに座ると机の中から魔力の気配を感じた・・・

上条『メサイア……誰か俺の机をいじったか？』

メサイア『いえ、誰に机には触っては……1人だけ触っていました！』

上条『相良だろ……』

メサイア『その通りです……』

相良は歓迎会の中、上条の持ち物などをチェックを行っていた。しかし、持ち物に不審物が見つからなかったため、上条にボディチェックを試み、上条を押し倒すような形になり、クラス的女子達はB.Lのシーンを想像したのか……キヤーキヤー騒いで、シャメを取られまくられるという屈辱を味わったのだ。上条にとっては黒歴史に近いものであった。

上条『しかし、相良からは魔力は感じなかったぞ？』

メサイア『たしかに……一度、魔力をスキャンしてみましたが、反応ありません。』

上条『さすが、俺の相棒だ！しかし、こうなったら直接確かめるしかないな！』

メサイア『上条！』

上条は机の中に手を入れた……そして、手を出すと1通の手紙が握られていた。

上条『いきなり、初日からラブレター……なんて物じゃなさそうだ』

メサイア『上条……手紙に転移魔術の痕跡があります。』

上条『そんな上級魔術を使う奴がここにいるのか?』

メサイア『士郎さん……ではありませんね……一体誰が……』

上条は手紙を開き、内容を確認めた。

「今日のお昼にあなた1人で屋上にきてください!さもないとあなたの教室の全員を殺します。」

上条は驚いた。書かれていたのは脅迫文……そして、無視すればクラスメートを皆殺しにすると……

メサイア『上条……これは……』

上条『ああ……メサイア……こいつは……俺目当てらしい』

メサイア『どうします?』

上条『畏くさいが……行くしかないだろう!』

上条は椅子から立つと……

オノD『お!上条!一緒に飯食わないか?』

風間『上条くん!イギリスにいた話の続き聞かせてくれないかな!』  
相良『……』

上条『わり!少し急用ができた。また後でな!』

上条は仲良くなったオノDと風間の誘いを断ると急いで屋上に向かった。

上条『まさかだと思うけど・・・メサイア』

メサイア『すみません・・・上条・・・私の判断ミスです。』

上条『お前は悪くない・・・誰でもミスはある。』

メサイア『上条！もしものための武装をいつでも出来るようにしておきます！』

上条『いや・・・いらないよ』

メサイア『なぜです？』

上条『話し合いに武器は必要ない。』

メサイア『上条・・・わかりました・・・』

上条『話がわかる奴で助かるよ！相棒！』

メサイア『しかし、気をつけてください！相手が何をしてくるか、わかりません！私は武装は控えますが、防御に関しては備えだけはやらせてもらいます！』

上条『ああ！それで頼む！さて・・・目的地だ！』

上条は生き良いよく屋上に出て行った！

上条「いや〜思ったより広いなこの屋上・・・」

上条は全体を見渡す・・・空は晴天、周りには事故を防ぐためのフェンスが囲んでいる広い空間だった・・・しかし、ここには誰もいなかった。

上条「ここで、のんびり昼飯を食べるのも悪くないな〜」

メサイア「上条・・・今そんな悠長なこと言っている場合は・・・」

??「あら？ホントに1人できたんですか・・・」

上条は当たりをもう一度見渡すと・・・始めは誰もいなかった目の前のフェンス前に1人の女学生が立っていた！

??「あんな手紙で来るなんて・・・正直びっくりしました・・・つて！ちよつと！なんですか！そのあり得ないやら信じられないとか言いそうな顔はなんですか！」

上条「あ・・・ああ・・・」

上条は絶句していた・・・してもおかしくない！

なにせ、彼の前にいる女学生は・・・自分の世界でいつも追いかけて回ってくる・・・御坂美琴にそっくりな女の子だったのだ！！

上条「いや、普通・・・あり得ないって思っても、おかしくはないよな？」

メサイア「それは、いきなり現れたからですか？」

上条「誰も・・・俺の気持ちは分からないよ・・・」

そうである。メサイアは上条の記憶を覗くことはあつたが、ほとんどが、戦闘の記憶で、美琴に関する記憶はあまり触れていないため、上条の気持ちはわからなかった。

女学生「そこ！何盛り上がったいるですか！こつちを見なさい！こつちを！」

上条「ああ・・・すまない・・・ところで、ここで何をしてるんだ？ビリビリ？」

女学生「誰がビリビリですか！私は、かなで・カミジヨウという名前があります！」

上条&メサイア「カミジヨウ!?」

上条の目の前に立つ女学生・・・かなで・カミジヨウは美琴より髪を伸ばし、手入れが行き届いているのか。髪は美しく風になびいていた。そして、美琴とは決定的に違う点が複数見られた・・・

それは・・・口調は美琴より礼儀正しいこと！そして決定的に違う所・・・胸が少し大きくバランスの取れた身体をしていることだった。なりより美人！！

上条「何というか・・・美琴も大きくなったら・・・こうなるのかな・・・（小声）」



メサイア「上条・・・今違う女のことを考えましたね」

上条「いや、考えていない！ただ俺は、知り合いに似ていて、そいつが将来こうなるのかを想像しただけで・・・」

メサイア「この変態マスター！大人しく土にでも還ってください！」

上条「ひどい！なんで、そいつの将来を応援しているだけで、消されなきゃいけないの!？」

上条とメサイアは話から脱線して痴話喧嘩を始めてしまった。

かなではポーカンと痴話喧嘩を見て、啞然としていた・・・しかし、すぐに正気に戻ると・・・

かなで「ちょっと！いい加減してくださいーい!!」

上条&メサイア（ビクッ!!）

かなでの大声で上条達はびっくりしてカナデの方に向き直した。

上条「ふむ・・・いつもならここで電撃が飛んでくるところだが・・・大声で対応するとは・・・あいつもこれくらい成長してほしいものだ・・・」

メサイア「上条・・・何、涙目になっっているのですか？」

上条「メサイア・・・おまえにもわかる時がくる・・・」

上条はかなでの反応に感動した。目の前にいるのは、上条が望む理想的な女性となった美琴そのものだった。上条はその姿に涙を流し

ていた。

かなで「ちょっ・ちょっと、どうして泣くんですか？私何かひどいこといいました。」

上条「すみません・・・つい貴方様の反応に感動してしまい・・・取り乱してしまいました・・・」

かなで「それはどういう意味ですか？」

上条「こちらのことです・・・気にしないでください・・・さて、そろそろ・・あのラブレター（脅迫文）のお誘いを聞かせてくれないか？」

上条はいきなり真面目な顔になり、カナデは少し動揺した。

かなで「今、名乗った通り、私はかなで・カミジヨウ・・・ジーク・カミジヨウの娘です。父ことは当然知っていますね？」

上条「直接は知らないけど・・・メサイアの前マスターということを知っているよ」

メサイア「かなで・・11年ぶりです。ずいぶん立派になりましたね！」

かなで「メサイア・・再会はうれしいけど・・なぜ、あなたはその人といえるの？」

メサイア「この方は新しい私のマスターです！」

上条「俺は上条当麻だ！メサイアが言っていた通り、こいつのマスクだ！」

かなで「そうですか・・・ところで、メサイア・・・父はどうしたのですか？なぜ、父と一緒にいないのですか？」

メサイア「それは・・・」

上条「そのことは俺が話すよ。メサイア」

メサイア「しかし・・・」

上条「かなで・・・おまえはジークを探しにここにいるのかい？」

かなで「そうですが、それがなにか？」

上条「このことを聞いて・・・おまえはどんなに悪い話でも正気ではないのか？」

かなで「なんです？はっきり言ってください！」

上条「・・・ジークは・・・亡くなっているよ・・・」

かなで「！！」

上条「このことは・・・おまえの家族全員にすぐに言うつもりだった・・・しかし、このことを話してもまじめに聞いてくれるか・・・」

かなで「嘘・・・だ・・・」



メサイア「上条！いますぐ武装を！」

上条「いや・・・必要ない」

メサイア「！！」

上条「今のあいつは現実を受け止めきれず、暴走しているだけ・・・だから、必要ないよ。」

メサイア「しかし！彼女が持っているのは、前マスターが作り上げた・・・」

上条「持っているのが、どんなに強力な武器でも・・・我を忘れて攻撃するだけでは・・・俺は倒せないよ」

メサイア「上条！自分の力に過信しすぎです！武装しないと魔法は使えませんよ！」

上条「メサイア・・・俺の右手は何だ？」

メサイア「あ・・・」

メサイアはやつと気付いた。上条がなぜ、幻想殺しと呼ばれているのかを・・・！

上条「俺がやることは1つ、あいつの壊れてしまった幻想を壊すことだ！」

メサイア「しかし、上条、今の彼女は今まで助けてきた人達より、

説得は難しいですよ？」

上条「大丈夫！あのような奴の扱いは慣れてるから！」

メサイア「本当に大丈夫ですか？」

上条「ああ！……さすがに……これだけは無理だったか……メサイア！行くぞ！」

メサイア「はい！」

かなで「うあああああ！！！」

上条「かなで！悪いがお前の幻想……壊させてもらっぜ！」

上条は武装もせず、かなでに向かって突っ込んでいた……もし、かなでが自我を保って戦いに挑んでいたら……上条と美琴の決闘の再現になっていただろう……こうして、上条vsかなでのバトルが開始された。

カン！カン！カン！……（ボウガン）

バキーン！バキーン！……

かなでは接近してくる上条に向かって、魔力で作られた雷の矢を間髪入れず打ち込むが上条の右手によりすべて回避され、どんどん接近されていく……

かなで「集いなさい！ファランクス！！！」

上条「!!！」

かなでの周りから12の召喚陣が現れ、出てきたのは・・・  
かなで「行きなさい!!！」

シュン！シュン！シュン！・・・（ファランクス）

バチ！バチ！バチーン！・・・（電撃）

上条「うわ！・・・自律兵器!?!」

上条を襲ったのは12機の短剣型自律兵器・・・ファランクス！

標的（上条）を囲み、全方向から電撃と突進のオールレンジ攻撃を開始した。

しかし、上条はこの攻撃もすべてをかわす・・・直感と心眼（偽）のスキルと上条が元から持っている技能「前兆の感知」・・・能力から派生する余波を察知・判断して防御や回避を合わせたり相手の隙を見い出すスキルにより、すべてを見切ることができる。

上条「うお!?!なんだこれ！近づけない・・・」

メサイア「だから、言ったのです！正面からは無理だと!！」

上条「そんなのいつ言った?」

メサイア「今です!！」

上条「遅いわ!！」

上条は全ての攻撃を回避もしくは打ち消しすることができるが・・・  
なかなか、かなでには近づけなかった。

かなで「フアランクス！イカツチ雷槍モード！！」

上条&メサイア「え！？」

かなでの言葉に反応し、フアランクスの短剣状の刀身部分が縦2つに分かれ・・・

チュドーン！チュドーン！！・・・

上条「レールガン！？」

電撃の次はレールガンが上条を襲う、さすがの上条も実弾だけは打ち消せない・・・避けきれないため、距離を取り、物陰に隠れた・・・

上条「はあ、はあ、はあ・・・なんだよ。あのビックリドッキリ兵器数々は！」

メサイア「あれは前マスターが私を参考に作ったデバイス・・・ピロテース！かなでが持っているあのボウガンが本体で、12機の自律兵器・・・フアランクスの援護攻撃により、全距離攻撃に耐性を兼ね備えた長距離攻撃型のデバイスです！」

上条「なんだと！？あの人はこんなものも作れたのかよ！？」  
メサイア「人の話を最後まで聞かなかったのは上条！あなたでしよ  
う！」



ドカーン!!

上条「!!」

上条が隠れている物陰のすぐ横の壁がレールガンが貫通した。

上条「一応聞くが・・・今使ってくる技のほかに違う技を持っているのか？」

メサイア「私が知っているかぎりだと、あれだけです！」

上条「それならOKだ！」

メサイア「待つて下さい！レールガンは別です。あれはデータにありません！ほかに新しい機能があります！」

上条「ここに居ても、レールガンでやられる！一か八かだ！」ダッ！

上条は生き良く物陰から飛び出て、かなでに向かって突っ込もうとしましたが・・・

かなで「バスターモード・・・ランキュラス・・・」

上条&メサイア「う・・・ウソ~~~~!!」

かなでが持っていたのはボウガンではなく巨大な砲台型の大型ボウガン（モウハンのヘビィボウガンと似た）を変わっており、ファラックスがその目の前で円状の何かの魔術陣を形成していた！

かなで「魔力チャージ・・・120%・・・消し飛べ!!」

ドドドドドドド！！

上条「つてか早！うわああああ！！」

かなではラナンキュラス（大型ボウガン）のトリガーを引くを砲身から圧縮された魔力放出され、目の前の魔術陣に魔力が集中し、一気に放出した！

上条は避けられず大規模攻撃の魔力の本流に直撃した。

かなで「・・・！！！」

かなでは気付いた！普通、これを食らったら、ほとんどが吹き飛ばすのに依然、目の前のフェンスは愚か上条も吹き飛ばさない！

上条「うおおおおお！！！」

かなで「えっ！？」

かなでは驚いた！前方に放出している魔力が途中ですべて消されていくのである！

魔力の消滅地点には、上条が右手を突き出して、かなでの攻撃をすべて受け止めているのだ！

上条「これは・・・なのは並みだ・・・すごいぜ！」

メサイア「上条！なに無茶しているのですか！？」

上条「無茶も何もない！このままいくぞ！うおおおおお！！！」

上条はそのまま、魔力の流れを逆らいながらも突き進んだ！！

そして・・・

バキーン！！

かなでの前の魔術陣が上条の幻想殺しにより破壊された！！

かなで「う・・・そ・・・クッ！！」

かなでは焦って、ランキュラス（大型ボウガン）から最初のボウガンに代え、上条に狙いと定めようとしたが、上条の左手で銃身を抑えられ、身動きが取れなくなった！

上条は右手を構えた！

かなで「ウッ」

かなではもう攻撃することもかわすこともできない・・・目をつぶったり、上条の反撃の1撃を待った・・・

上条「コラ！！」「ピシ！（デコピン）」

かなで「痛！！」

パンチが飛んでくると思いきや、まさかのデコピンを食らい、尻もちをついた。

その瞬間、空中で停滞していたフランクスがすべて落ちて行った、

かなで「痛い・・・なんで殴らなかったですか？」

かなでは不思議に思った。上条は私を抑えたのにどうして殴らなかつたのかを……

上条「ふう〜やっと正気にもどったか……もう気が済んだか？」

かなで「え!？」

上条はかなでが自我を取り戻したのを確認する。

上条「もういいだろ?ここで暴れても何も得はないぞ?」

かなで「……………」

かなでは無言で武装を解除し、そこでうずくまってしまった。

かなで「見苦しいですよね……私……結局、現実から目を背けていただけですよね……わかっていたのですよ……このような結果になると……父はもうこの世界には居ないということが……」

上条「ゴメン……こんなことは伝えたくなかった……だけど、現実を伝えないと誤った幻想で苦しめてしまうから……」

かなで「幻想でもよかった!今さっきまで唯一の希望である父との再会がこんな簡単に崩れるなんて……もう……生きている意味がありません……」

上条「……………」

ピシ!

かなで「痛！」

ピシーピシ！・・・

かなで「痛い！いたたた！何するんですか！？」

上条は沈んでいるかなでにデコピンを数回ぶつけた。

上条「まったく・・・そんなことで死のうと思うなよ。お前が死んであの人が喜ぶとも思うのかよ？」

かなで「う・・・」

上条「喜ぶわけねーだろ。もしここで死んであの人に会ったら、間違いなく怒られるぞ？」

かなで「・・・」

上条「はあ・・・俺の知っている美琴ならここらで反発するんだが、ここまで大人しいと逆にこっちが・・・」

かなで「美琴？なんで、あなたが母の名を知っているのですか！？」

美琴という言葉に食いついてきて、上条は驚いた！

上条「先に俺のことを話すよ・・・」

かなで「？」

上条「俺はこの世界の人間じゃないんだ。」

かなで「え・・・ええええ!?!」

上条の言葉にかなでは驚き、上条は話を続けた・・・

数分後

上条「何となくわかったか?」

かなで「そ・・・そういうとあなたは違う世界の父と変わらない存在ということですか!?!」

メサイア「実際はわかりませんが・・・仮定上、そうなります!」

かなで「それで・・・あなたの世界では・・・私の母にあたる人がいると!?!」

上条「そうなんだよ。あつちの世界では毎回、追いかけてまわされるは、電撃を飛ばしてくるは、色々と騒がしい奴でさ・・・はあ」

かなで「まさか・・・母も昔は父を追いかけて回してと・・・」

メサイア「あ!実際、追いかけて回してしていました!」

かなで「!?!」

上条「マジで?」

話は完全に脱線し、雑談に変わっていた・・・

上条「まあ・・・どこの世界でも美琴は俺と同じ存在の男を追いまわしているのだな・・・」

かなで「・・・」

この話で上条は呆れてしまい、かなでは絶句してしまった。

上条「・・・はあ、この話を終わりにしよう・・・これ以上語ると隣のかなでの親の人物像が崩壊してしまいそうだ・・・」

かなで「そんな・・・ママが・・・そんなことを・・・ブツブツ」

かなでは知らないうちに独り言を言い始めていた。

上条「とにかく、お前は現実を見ろ！まだ人生はながいんだから！」

ナデナデ

かなで「!?!」

上条は立ちあがるとかなでの頭を撫でた。かなでは立ちあがった上条を見上げると・・・昔、父にこうやって撫でられた記憶がフィートバックしてきた。

上条の姿はかなでビジョンから見るとジークの姿と合致したのだった。

かなで「パ……」

キーンコーン……

タイミングよくお昼休み終了のチャイムがなった！

上条「しまった！時間を忘れていた！！」

メサイア「上条！急いで校庭に向かわないと次の体育に間に合いませんよ！」

上条「ちくしょう！飯も食えずに体育に出るなんて……どんな拷問だー！ー！！」ダッ！

かなで「あ……」

上条「お前も急いで行かないと授業遅れるぞ！」  
メサイア「上条！急いで！！」

上条「クソー！ー！！」

ダダダダダダ！！

かなでは上条になにか言おうとしたが……上条は猛スピードで階段を駆け下りていったためその場にはいなかった。

かなでは1人屋上に取り残され……

かなで「パパ……」



かなでは一言、**眩くと教室に向かって階段を下りていった**……

続く……

16 登校初日（美遊サイド）完璧少女！

16 登校初日（美遊サイド）完璧少女！

穂群原学園 小等部 9：00AM

藤村「はい！今日から一緒に勉強することになった！」

美遊「上条美遊です」

藤村「みんな仲良くしてあげてね〜」

美遊を紹介しているこの教師・・・藤村大河！

Fate本編で士郎の担任かつ英語教師の冬木市の虎！

しかし今回は・・・小等部の5年1組・・・イリアの担任である。

クラス全員「「「キヤーーーーーー！！」「」」

クラス全体から歓声があがった！

那奈亀「お〜〜なんか美人が転校してきたな〜」

雀花「外見がな・・・www」

美々「あはははは・・・」

クラス全体が盛り上がっている中・・・問題のイリヤさんは・・・

イリヤ（うん・・・やっぱりそういう展開になるよね・・・転校

生展開ですか・・・なんともベタベタな展開ですね〜）

イリヤは少し呆れていた・・・深夜に出会ってたったの数時間・・・そして現在に至っている。

イリヤ（しかし、話がしたい・・・また会えるよね〜・・・なんていったけど、まあ・・・こうなるよね〜）

イリヤは苦笑しながらホームルームが終わるの待つ・・・

藤村「美遊ちゃんの席は・・・窓は窓際の1番後ろね！イリアちゃんの後ろのそこ！」

イリヤ「えっ!?!」

美遊はイリヤの席の後ろの席に座ると・・・

美遊『ジーーーーー』

イリヤ（な・・・なんか・・・見られている!?!・・・このプレッシャーはなに!?!）ドキドキドキ

ルビー（メンチで負けてはいけませんよ・・・イリヤさん!）

イリヤは美遊のプレッシャーに押されるがルビーの応援によりなんとか冷静になることができた・・・

数分後

イリヤ「うわ・・・早速囲まれてるよ・・・」

ルビー「囲まれていますね〜WWW」

イリヤは美遊と話をしようと試みようとしたが、一足遅く・・・他の生徒に先を越されていたのだった。

イリヤ「いろいろ聞きたいことはあるけど・・・これじゃ無理だね」

サファイア「では私が代わりにお話を伺いましょう！」

イリヤ「わっ!?!」

ルビー「あらあら・・・サファイアちゃん!来ていたのですね!」

イリヤ後ろからサファイアが現れた!

イリヤ(ちょ・・・ちょっと見つかったちゃうよ・・・とりあえず、窓際に行こうか・・・)

イリヤは人がいない窓際に移動した。

ルビー「紹介してませんでしたね!こちら わたしの新しいマスターのイリアさんです!」

サファイア「サファイアと申します。姉がお世話になっております。」

イリヤ「はあくどうも」(なに・・・このシュールな絵面!)

今のイリヤの状況は現在非日常的な光景であった・・・でも、クラスの全員は気付かない

イリヤ「まさか・・・ステッキって2本あったんだね・・・知らなかった」

ルビー「ええ・・・私とサファイアちゃんは同時に作られたしまいですのなんですよ！私達は魔力を無制限に供給し、マスターの空想を元に奇跡を具現化させる・・・それが、私たちカレイドステッキの機能です！」

ルビーは説明を続ける・・・

サファイア「先日まではルヴィア様にお仕えしていたのですが・・・」

イリヤ「乗り換えたのがあの子わけね・・・」

サファイア「・・・ええそうですね・・・」

ルビー「それにしても、美遊さんは大したものですね！始めてなのに、いきなり宝具を使うなんて」

イリヤ「宝具？」

サファイア「説明してないのですか？姉さん」

ルビー「そういえば、カード周りの詳しいことはまだでしたね・・・では改めて説明します」

ルビーは説明をする・・・

ルビー「・・・そうゆうことなので・・・って・・・イリアさん分かり

ましたか？」

イリヤ「ええ・・・7割ぐらいは理解してるよ・・・多分・・・」

イリヤはルビーの多く情報に耐えきれなくなり、ダウンしかけていた・・・

サファイア「ではつづけましょうか」

イリヤ（クール・・・）

次はサファイアの説明が始まる・・・

サファイア「それなので・・・大丈夫ですか？」

イリヤ「た・・・タイム・・・アップ！」

イリヤは完全にダウンした・・・

サファイア「協会が感知しているのはカード反応は7つです・・・そして、協会が回収したのが2つ、そして昨日1つ回収しましたので後4つです・・・」

サファイアはイリヤの願いを聞かず・・・話を進める

イリヤ「ようするに・・・後4枚の回収を手伝ってこと？」

ルビー「そついつことですよ！」

イリヤ「・・・はあ・・・それより・・・ほかに聞きたいことがある

「ただけど？」

サファイア「はい、なんでしょうか？」

イリヤ「美遊さんのあの苗字って・・・」

サファイア「それは・・・」

美遊「サファイア・・・あまり外に出ないで」

イリヤ「!?!」

いきなり、美遊が現れたのでイリヤはびっくりした。

サファイア「申し訳ありません・・・美遊様・・・イリア様にご挨拶を  
と思ひまして」

美遊「誰かに見られたら面倒・・・学校では鞆の中にいて」

イリヤ「あ・・・あの・・・」

美遊「・・・」

美遊は何も言わず・・・そのまま・・・去っていった・・・

イリヤ「ああ・・・また、チャンスを逃した・・・」

ルビー「またチャンスがありますよ！」サツ！

ルビーはイリヤの制服の中に隠れた・・・

イリヤ「なんか・・・声がかげづらい雰囲気になっちゃったな・・・」

美々「なんか・・・気難しい人みたい」

イリヤ「なにやっているの・・・みんな？」

美々「やく美遊ちゃんにフラちゃって」

雀花「観察よ！観察！」

4人の悪友がいきなり現れて美遊を観察し始めた。

龍子「ああいうクールキャラは今までクラスにいなかったな！ちよつと新鮮！」

雀花「苗字は普通だけど・・・」

那奈亀「とりあえず、美人だし！」

キヤア！キヤア！キヤア！

イリヤを放っておいて3人の悪友は盛り上がる

イリヤ「うちのクラスは平和でいいね・・・」

美々「ホントだね・・・あははは・・・」

残りの2人は苦笑していた・・・



イリヤ（まあ・・・みんなに倣って・・・美遊さんを観察しよう・・・）

\*\*\*\*\*

上条『ああ・・・美遊・・・ちゃんとあつちのクラスの子と仲良くしているかな？』

メサイア『そんなことを心配している余裕があるなら、目の前の問題に集中してください！』

上条は2限間目の授業は自習・・・歓迎会の最中！そして、なぜか相良と対峙している・・・

上条『クソ！美遊のことも、ろくに心配もできないのかよ！』

相良「・・・」バツ！

上条「クッ！」ザッ！

上条は相良が動いた瞬間、防戦の構えを取る！

相良（間違いない！さっきと同じ・・・こちらの攻撃をかわす！）

バシ！バシ！バシ！

上条『こいつなんで、俺を狙うんだ！？』

メサイア『わかりませんが、何か勘違いでもされているのでは？』

上条『なんの!?!』

上条「うわ!?!」バタ!

相良「不本意だが、ボディチェックをさせてもらおう!」

上条「ちょ・・ちょっと!そこは!?!」

相良は上条の服を脱がせられ始めた!

クラスメイト女子「きゃーーーーーーーー!!!」

上条「や・・・やめてーーーーーーーー!!!」

上条は悲惨なことになっていた・・・

\*\*\*\*\*

イリヤ「な・・なにこれ!?!」

美遊「外接半径と線分OBの比は $\cos(\quad)/n(\quad)$ ・・・」

藤村「いや・・美遊ちゃん?・・そのやり方・・小学校ではやらないんだけど・・」

美遊「?」

藤村「いやいや!そんな不思議な顔されても!」

イリヤ「なに?あの学力!?!」

美々「え・・・英語!？」

ざわ・・・ざわ・・・ざわー・・・

イリヤ（大丈夫!誰でも1つは得意教科はある!）

この後も・・・図工!家庭科!そして・・・

イリヤ（短距離は私の得意分野!誰にも私を抜くことは・・・」

藤村「美遊ちゃん・・・6秒9!?!?・・・」

クラスメイトA「イリアが負けた!」

クラスメイトB「無敵キャラだー!」

イリヤ（あ・・・ありえない・・・ありえないー!!!!）

体育!

すべて・・・完璧!

小等部に美遊に勝るものは・・・居なかった・・・

続く・・・

## 17 部活行こうぜ！

17 部活行こうぜ！

穂群原学園高等部 4：00PM

2年B組教室

現在、上条はお昼すぎの授業・体育と思えないほどの運動をしたため（中食なし）、自分の机にダウンして、放課後のことを考えていた。

上条「さて、どうするか・・・」

メサイア「そうですね・・・このまま帰ると、あの軍人に襲われま  
すよ？」

上条「相良のことか？たしかに・・・このまま帰って美遊に合流する  
のは返って危険だな・・・」

メサイア「その判断に賛成です。このままの状況だと多分、弱みを  
握られる恐れがあります。」

上条「そうなる・・・美遊には先に帰ってもらおうか・・・」

メサイア「たしかに正しい判断ですが・・・1人では逆に危険では  
？それにまだ、携帯電話を持たせないため、連絡ができませんよ？」

上条「それなら大丈夫！ちよんと考えがある！」

メサイア「どのような？」

上条「神殺しを呼んだ」

メサイア「あの人を呼んだのですか!？」

上条「ああ・・・さて、行くか!」

上条は机から立ち上がると隣のクラスC組に移動した

\*\*\*\*\*

2年C組

上条「すみません! もりやまなない森山那奈蛇さん、いますか？」

那奈蛇「はい? あ! 上条さん!」

上条「こんにちは! ちょっと頼みごとを頼みたいのですが」

那奈蛇「はい! 何でしょうか？」

上条が話しているこの美人・・・森山那奈蛇、残在の穂群原学園中でもっとも彼女にしたい女子高生で上位に輝くモテカワっぱいふんわり美人!そして、下級生からはお姉様と呼ばれていると呼ばれるほどの女の子!

上条とは昨日の穂群原学園の用事で遅くなり暗い帰り道でトラブル巻き込まれところ、入学手続きの帰りの上条と出会い、お互い顔見知りになったのだ。

上条「実は昨日話した義妹に先に帰るように伝えてもらえませんか？」

那奈蛇「はい！いいですよ！ちょうど私は妹の迎えに行こうかと思っていたので！」

那奈蛇の妹・・・美遊と同じクラスの森山那奈亀のこと、まさか、同じクラスにはなっていると・・・この2人は知らない。

上条「すみません・・・よろしくお願いいたします。」

那奈蛇「いえいえ、構いませんよ！え〜と、上条美遊ちゃんでしたっけ？」

上条「はい、このお礼は後ほど」

那奈蛇「いえ、要りませんよ！私と上条さんの中ではありませんか！」

上条よ・・・おまえは知らないのだ・・・那奈蛇は・・・学園の多くの男子が憧れる美少女・・・仲良く会話したら、多くの男どもを敵にまわすことになることを・・・

今、2人の様子を見ているクラスメイト主に男子達は嫉妬し、いつ上条を襲ってもいいような殺意を上条に向ける。しかし、上条は話に夢中で気付いていない・・・しかし、そこに割り込む者が現れた！

慎「いよ〜那奈蛇！どうだい？一緒にデートに行かないかい？」

那奈蛇「え！？い・・・いえ、これから妹の迎えがあるので・・・」

慎二「え~~~~いいじゃん！そんなの放っておいて~~~~遊びに行こうぜ~~~~！」

那奈蛇「困ります！」

乱入者は間桐慎二・・・こいつは女子の中でもっとも嫌われているキモ男・・・男子の中でも付き合っている彼女に手を出す見境のない男なので男達の中でも忌み嫌われている人物である・・・

那奈蛇はこれが初めてではないが、慎二の誘いにはいつも悩まされている・・・そして、現在も・・・だが、嫌がる女性を放っておかないお人良しが行動に移る！

上条「そこまでにしてあげろよ。慎二！嫌がっているだろ！」

上条是那奈蛇の前に立ち、那奈蛇を庇った！

慎二「なんだ~~~~おまえ・・・ん？・・・上条じゃないか。おまえ邪魔すんなよ！これから俺と那奈蛇、2人のスウィートな時間を過ごそうと思っているのに！」

上条「なにが2人のだ！自分勝手すぎるぞ！おまえ！」

慎二「貴様・・・邪魔すんな！」バツ！（パンチ）

那奈蛇「きゃ！」

上条「・・・」

バシ！（受け止める）

慎二「へ！？」

上条「慎二・・・お前がそこまで腐っている奴だとは思わなかったよ・  
・」ゴゴゴ・・・

上条の雰囲気が一変した。今さっきまでとは違うシリアスな雰囲気に変わった。

慎二「な・・・なんなんだ！？お前・・・」

上条「そのお前の・・・」ダン！（踏み込む）

慎二「ヒッ！？」

上条「ふざけた幻想を・・・」ドカ！ドカ！ドカ！・・・（パンチ連打）

慎二「ウガガガガッ！？」

上条「ぶち殺ー！ーすー！ドカーンー！！（右アッパー！）

慎二「ゲフッ！？」

久しぶりに決まった。上条の決め台詞&必殺技！

今回はレベルアップし、約20コンボの連続攻撃の後、トドメは特



大の美右アッパーを決めた！

結果、慎二はオーバーキルのコンボ攻撃で倒れそうになるが、トドメのアッパーにより、きれいな弧を描いて壁に激突した。

上条「ふう〜〜〜」

那奈蛇「あの・・・上条さん」

上条「ん？・・・あ！すみません。見苦しいところ見せちゃって」

那奈蛇「いえ、おかげで助かりました。これで2回目ですね」

上条「昨日のこともカウントしなくとも・・・」

昨日のことは那奈蛇がチンピラに絡まれているところを上条が現れ、チンピラを追い払ったことが始まりだった。

那奈蛇「昨日の方もすごかったですけど、今さっきのもかっこよかったですよ！」

上条「そうですか・・・ありがとうございます。」

周りのクラスメイト達は自分達のクラスの問題児からクラスのアイドルを汚されなかったことに、ほっとしていた。そして、今さっきまで上条に殺意を向けていた男子達は那奈蛇を助けた上条を今回だけは見逃すつもりなのか・・・さっさと撤収していった。

男達が出て行った瞬間、士郎が組に戻ってきた。

士郎「なんだか、賑やかだな？」

上条「士郎さん」

那奈蛇「え・衛宮くん!？」

士郎「ん!森山どうした？」

那奈蛇「い・いえ!なんでもありません!」

那奈蛇は士郎の言葉に慌てて、顔を背けた。

士郎「そういえば、上条!B組にいなかったが・うお!どうして慎二が壁のオブジェになっているんだ!？」

那奈蛇&上条「それは・」

C組 A子「ああ!それは慎二がまた、那奈蛇を無理やり、デートに誘おうとしたところを上条君が慎二を撃退したのよ!」

C組 B子「そうなんですわ!ああ・かつこよかったですわ。私のはあのような嫌な男から守ってくれる彼氏が欲しいですわ」

C組 C子「ええ、あなた、そういうタイプが好みなの!？」

C組 B子「そうですか!なにか文句でも?」

C組 C子「実は・私もなの!」

C組 B子「えー!?!」

C組 A子「あ！それ、私も私も！！」

C組 B子&C子「ええー！ー！？」

C組 A子「上条くくくん！私とつき・モガ！？」ボタン！

上条「え！？なんだって！？」

A子の言葉を2人の悪友が全力で阻止した！

C組 B子「あなた、なに抜け駆けしようとしてるのか！卑怯ですわ！」

C組 C子「そうよ！反則よ！」

C組 A子「フ！、恋愛に卑怯も反則もありませんのよ！」

C組 B子&C子「KILL！！」

ドカ！バキ！ガタ！ドカン！……

上条「あれ・・・止めなくていいのか？」

士郎「ああ！いつものようにじゃれ合っているだけだから・・・心配ない！」

上条「そうですか・・・」

那奈蛇「じゃれ合うレベルを超えているんだけど・・・」

上条と士郎は女心及び気持ちについてはまったくもって皆無、この3人が恋愛における聖戦を軽くじゃれ合っていることで流すほど鈍感なのだ・・・  
それを見ている那奈蛇は・・・士郎の言葉を批判しようかと思ったがやめておいた。

士郎「あ！そうだった。当麻！昨日言ったことを覚えているか？」

上条「昨日の・・・たしか、車にいた時の・・・」

士郎「ああ、そうだ！部活見学の話だ！今日暇なら俺のこの部活にこないか？」

上条「そうですね・・・どうせなら行きますか！」

士郎「そうこなくちゃ・・・那奈蛇はこれからどうする？」

那奈蛇「あ！私は小等部の方へ・・・妹と上条さんの頼み事がありますので・・・」

上条「ほんと、すみません。勝手な私情でお願いして・・・」

那奈蛇「いえ！大丈夫です！気にしないでください！」

士郎「道中、気をつけろよ！あそこの慎二以上の奴がうろろろしているから！」

那奈蛇「その時は、衛宮君と上条さんに助けてもらいますね！」

士郎「ははは、その時いればな！」  
上条「また、起きそつで怖い・・・」

士郎は冗談で流せるが、上条は昨日、そのようなことがあったので逆に冗談で流せられる話ではなかった。

那奈蛇「それでは、衛宮君、上条さん、また明日！」

士郎「おう！」

上条「ああ！」

那奈蛇は2人に見送られ教室を出た後、顔を赤く染めていた！

那奈蛇「ああ・・・2人を見るとどうして胸が熱くなるのかしら・・・  
衛宮君はやさしいし、上条さんはかっこいいし・・・やだ、私・・・  
二人を好きになっちゃったの!？」

那奈蛇は自覚してしまった！自分は2人も好きな男子を作ってしまったことを！

士郎は1年の頃から気になっていたが・・・いきなり現れた上条の勇敢さとやさしさにも惚れてしまった！

年頃の女の子が好きな男子を1人や2人作ることは珍しくはないが・・・  
まさかのあの二人を好きになってしまうとは・・・今後の過激な  
争奪戦で那奈蛇は生きていけるか・・・

那奈蛇は少し足を速めて小等部へ向かった・・・

\*\*\*\*\*

弓道場

士郎「ここが俺の部活だ！」

上条「広い・・・よく学校にこんな大きい弓道場、建てられたな・・・」

士郎「それは、理事長が弓道に関心があるみたいで、予算をつぎ込んだらしいんだ」

上条「やりますね・・・俺のいた所は何もなかったからな・・・」

士郎「そうだったか・・・まあ！世界は広い、いや・・・次元は広いから・・・気にしては負けだ！」

上条「広すぎますよ・・・色々と・・・」

士郎「ここで見ているのは難だ。中に入ろう」

上条「おじゃまします！」

上条は学園都市の母校とここ（穂群原学園）を比べると・・・色々  
と力の入れ方がまるで違うので色々違和感があった・・・自分の母  
校はどれだけ待遇されていなかったのか・・・  
そのことを考えながら2人は道場内に入っていく・・・

士郎「おーす！」

美綴「お！上条、いつもより遅いな！」

士郎「まあな・・・それより、朝話した当麻を連れてきたぞ！」

美綴「お！」

上条「はじめまして、上条当麻です」

美綴「お！元気いいね〜・私は部長の美綴綾子だ！ああ、そう硬くならず！ただでさえ、重苦しい雰囲気になりやすい所だから」

上条「そうですか」

美綴「そうゆうことだ！おーい！みんな、手を休め集合！客がきたぞ！」

上条「え！？」

美綴の号令で部員一同が集結した！上条はまさか、全員集まってくるとは予想外で動揺した。

士郎「みんな、紹介する！朝話した上条当麻だ！」

上条「はあ・・・ど・・・どうも」

かなで「あー！ー！ー！ー！ー！」

上条「ぶづつづつ！ビリビリジュニア！！」

かなで「だれがビリビリジュニアですか！私にはかなで・カミジヨウという名前があります！」

まさかのかなでが部員の中に混ざっていたことに上条は吹いて、美琴と同じようなあだ名で呼んでしまった。

美綴「お！なんだ？知り合いなのか？」

上条「え！？・・・ちよつとした・・・」

かなで「あはは・・・ホントにちよつとしたことです。美綴先輩！」

二人は苦笑しながら誤魔化す・・・昼にあんなことが起きれば、嫌でも忘れられない・・・

士郎『いったい、何をしたんだ？当麻』

上条『いや〜お昼の時、屋上で襲われた・・・』

士郎『襲ったの間違いじゃないのか？正直に話せ！』

上条『なに人をどこの慎二と一緒にしているだよ！？俺が襲ったとしても責任取れないぞ！？』

士郎『冗談！冗談！』

上条『冗談にしてはひどすぎる』

士郎と上条は念話で盛り上がっていると・・・かなでの方も女性陣の話の中盛り上がっていた！

北子「かなで！またあなた！未来のモテる男性をまた誘惑したの！？ちよつとひどいわよ！」

井垣「そうよ！なんであなたばかり、運命の出会いがたくさんあるの！」



かなで「仕方ないのよ！これだけは親譲りの体質なんだから・・・」

北子&井垣「そんな体質！あつたら苦労しないわよ！」

桜「みんな！落ち着いて！」

かなでは女子部員全員からブーイングを受けていた！間桐桜を除いて・・・さすがはジーク（別世界の上条）の娘！フラグマスターの遺伝子はちゃんと受け継がれている。親子揃って異性を引き寄せる力は変わらない・・・そして、同姓に憎まれる。哀れな人生ですな  
くく

美綴「まあ、みんな落ち着いて！後で私がたっぷり2人から事情、その他諸々聞き出すから・・・」

上条「ちよつと！」

かなで「美綴先輩！」

士郎「腹を決める！2人とも・・・それとも、ここの面子を全員、敵に回すか？」

上条&かなで「う！？」

上条達が見ている先には敵を放つ異性達が上条達を睨んでいた。

士郎「後で一杯奢るぞ・・・」

上条「救いになってない！」

桜「かなでちゃん・・・後でパフェ、奢って上げる・・・」

かなで「桜くっく同情するなら、金をくれ！いや、助けて！」

上条と桜の言葉に救いは無かった・・・上条コンビは嘆きの言葉を漏らしていた・・・

美綴「所で上条！あんた、弓道経験あるか？」

上条「弓道はありませんけど、アーチエリーなどのスポーツはイギリスなので無理やられた経験はありますけど」

美綴「つまり、未経験者ということになるのか・・・弓道はアーチエリーと違って、得点を競う物ではない！己の心と競う競技だ！」

上条「そうですね・・・日本の競技はほとんどそうですね」

美綴「わかればよろしい！衛宮、指導頼んでいいか？」

士郎「もちろんそのつもりだ！俺が連れてきたから責任は取るよ！」

美綴は士郎に近づくと上条に聞こえないように耳元で囁いた。

美綴「今年の団体・・・男子は人が少ない・・・なんとか、上条を仕立て上げられるか？」

士郎「そんなつもりで連れてきたわけじゃないのだが・・・どうしてだ？」

美綴「今の2年の男子はあのバカのせいでやめてしまったから、ど

うしても頭数が揃わない・・・」

現在の弓道部は男子が3割、女子7割というアンバランスな構成になっている。そして、慎二のせいでも多くの男性部員がやめてしまったため、完全にハーレム状態になってしまっている！

士郎「それもそうだけど・・・まだ、どこまで才能があるか、わからない・・・だけど、当麻みたいなタイプは意外と・・・」

美綴「ああ！そうだな。上条はあんたと似たタイプだ！意外と・・・アタリかもしないな！」

上条「??？」

士郎と美綴は上条にある期待をしていた・・・もしかしたら・・・と

士郎「当麻！さっそく、着替えようか！」

上条「え！？何に?」

士郎「弓道着に決まっているじゃないか！予備があるから、それを使ってくれ！」

上条は士郎に連れられ、男子更衣室に入ってしまった。そして数分後・

士郎「お待ちどう!」

美綴「お！上条！なかなか似合うじゃないか！」

かなで「あ……ポツ」（顔赤くする）

女性陣「「「おー！ー！ー！かっこいいー！ー！ー！」」」

男性陣「「「やっ！と！男の数が増えたー！ー！ー！」」」

上条「なんか……リアクションに困るんだけど……」

色々なアクションを起こす部員達に上条はどのように判断すればいいか……わからなかった……

士郎「まず、ゴム弓で様子を見せてくれ！」

士郎が渡したのは棒に頑丈なゴムが付いた道具だった。

上条「これでどうすればいいんだ？」

士郎「そうだな……まず、俺が手本見せるから……この射法八節を覚えてくれ！」

士郎がみせる射法八節……それは弓道においてもっとも大切な基本とされているものである。

士郎「一応、これをマスターしてくれ！」

上条「わかった！だけど、士郎さん、今日に限ってなんで、焦っているんですか？」

士郎「別に焦ってないぞ！あはははは！ー！ー！ー！」

上条「??？」

士郎は笑って誤魔化し、上条の射形を見始めた・・・

士郎（む！・・・なんだ？・・・当麻、なかなか筋がいいぞ）

上条「士郎さん！数度やりましたが、何か指導はしないのですか？」

士郎「ん？・・・ああ！悪い、つい忘れていた・・・しかし、なかなか筋がいいな！当麻！ホントに弓道未経験者か？」

上条「何度も言うが、アーチェリーかその他の例外を除けば・・・弓は持ったことも扱ったこともありませんよ！」

上条は話ながら、ゴム弓を引く・・・

桜「あ！上条先輩！そこもう少し引いてください！」

上条「ん？こつか？」

桜「違います！ここを・・・」

上条「ちよつと！？桜さん！？」

かなで「!!！」

桜が指導するため、上条に接触するのかなでを含めた数人が反応した！

桜「ここを・・・」

上条「さ・・桜さん・・ちょっと近すぎ過ぎでは・・・」

桜「何言っているですか！これくらいは指導する時は当たり前です！」

士郎「そうだぞ！当麻、指導の時はそうやって型を整えてもらえてもらうんだぞ」

上条「そうなんですか!？」

上条は桜の胸が無差別に上条の背中に接触するため、集中が逆にしづらくなっていた。

上条（平常心！平常心！なんとか理性を！）

上条はパニックになっていた！

かなで「ちよつと！握りが弱いですよ！」

上条「か・・かなでー！？」

今度は前からの指導・・かなでが乱入してきた！

かなで「ほら！集中してください！また、弱くなっていますよ！」

今度は、上条の手にかなでの手が重なった！

上条（なんだ!??これは1つの拷問か!??よくこの男子は平常でいられるな!??」

普通、指導する時は1人に対し1人が見るのが普通だが・・・なぜか、上条の場合は複数の指導者に囲まれている・・・

桜「ほらほら！しっかりと引いてください！」  
かなで「ほら！ちゃんと、握ってください！」

士郎「なんか・・・すごい状態になったな・・・当麻」

上条「なんで、当事者のあんたが指導しないの!？」

上条から見ては拷問・・・ほかの男子にしては至福の時・・・上条は指導される・・・多大の精神を使って・・・

数分後・・・

士郎「よし！一通り終わったな！さつそく、弓を引いてみるか！」

上条「はあ、はあ、はあ・・・死ぬかと思った・・・」

上条はぼろぼろの状態だったが、士郎はあえて無視した。

美綴「お！さつそく本番くるか！」

美綴を含め、ほかの部員達は手を休め始めた・・・

士郎「さつきやったことを思い出しながら、やるんだ！まず、俺がまた手本をみせるから、その次にやってくれ！」

士郎は射場に出る・・・そして、射法八節・・・きれいに決まる・・・

そして、引分け・・・弓を引き、そして会！！・・・そこで、動きが止まる・・・時間が止まる・・・そして、弓道場の空気が変わる・・・

士郎「・・・！！！」

そして、離れ！！矢から手が離れる・・・矢がまっすぐ的に向かっていく・・・そして・・・

パン！！（命中！）

上条「！！！」

きれいに矢は中白・・・的の真ん中に命中した！

士郎は残心のあと、礼をしてもどってきた。

美綴「さすが！衛宮！いつもながら決まっていた射だったぞ！」

北子「まったくです！衛宮先輩！」

井垣「きれいです！」

桜「私も同じです！先輩！」

上条「すごいな！士郎さん！的にど真ん中じゃないか！」

士郎「ありがとう！けどな、当麻・・・当てるのが一番じゃない・・・どれだけ、自分を表現できるかが問題だ。」

上条「そうなる・・・自分自身との戦いですか？」

士郎「そういうことになる・・・射る前に一言、伝えとく」



上条「なんででしょうか？」

士郎「……目の前にあるのは的じゃない……己自身だ……自分を射ぬく覚悟を決める！」

上条「！！！」

士郎はそれを言うと奥へ戻っていた……

美綴「伝えたか？」

士郎「ああ……だけど、いいのか？まだ初日だぞ？」

美綴「私は、上条がそこまで待つ必要がないと踏んだ！」

士郎「その根拠は？」

美綴「あいつの目……あなたと同じまっすぐした目をしている。だからだ！」

士郎「ろくな根拠はないわけか……」

美綴「言ってる！私はあなたより人を見る目はあるところを！」

美綴は上条が才能があると踏み……士郎は美綴の様子から見て、上条がどこまで初日で才能を發揮するか。見定めようと思っていた……

かなで（たった1時間たらずで射場に立たせるつもり！？さすがに私でも、一ヶ月はかかったのに・・・）

桜（まさか・・・美綴先輩・・・本気で・・・）

女性陣の方でも上条が初日で弓を引かせると思っていなかったため動揺が走る！

ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・

上条「・・・」

上条は目を閉じて、瞑想をしていた。今の状態の精神を整え・・・  
士郎が伝えた助言のことを整理していた・・・

上条「よし！」

そして、上条は1礼をし、射場に立った！！  
その瞬間、道場内は静まりかえったり、上条の射を見定める空気になった。

上条（今の俺は・・・）

足踏み・・・足のある程度の大きさに開く・・・

上条（昔のような俺と違う・・・）

胴作り・・・下半身の上において上半身の姿勢を整える・・・

上条（少しのミスは・・・時間の流れやこの世界を崩してしまう・・・

・)

弓構え・・・弓を構え、矢を番える。

上条（そう・・・今まで通りの俺ではいられない・・・）

打起し・・・弓を持った両手を頭上に上げる。

上条（今のおれは・・・違う俺・・・）

引分け・・・弓を引く・・・

上条（敵は武器を持つ者が1番の敵ではない・・・敵は・・・）

会・・・弓を引き、狙いを定める。

上条（目の前の俺（敵！）！）

そして、時間が止まる。全員息を呑む・・・上条に注目する！

かなで（どういうこと・・・）

これはすく...  
桜

きれいな...  
士郎

美綴（射形だ！）

指導した当事者たちは上条の射形があまりにも美しさに見惚れてしまっ  
まいそうだった。

上条（俺（敵）という幻想は・・・）

目を瞑る……上条の目の前には自分のイメージしたもう一人の自分が的の目の前に立っているように見えていた！

士郎&美綴&かなで&桜（（ゴクッ！）（））

上条（自分の手で……ぶち抜く！！）クワ！目を開く！

バシューー！！

離れ……上条の右手から矢が放たれた……矢はまっすぐ……自分（幻想）に進んでいく……そして……

パン！！

かなで「う……うそでしょ!？」

桜「まさか……本当に……」

士郎「矢が……的に……」

美綴「命中した!？」

矢は見事命中した!しかも、中白!ど真ん中!

上条から見て矢は自分（幻想）を貫いていた!

上条（ここにきてよかった……やっと自分の進む道を見つけることができた……俺はどんなに苦しい時や迷う時があっても、今の俺を貫き通す!決して自分には負けない!）

上条は決心した!昨日のフェイト救出の時、正体を明かしてしまうような迷いがあったのだ……そして、上条が射ぬいた自分は迷っている自分!負の感情!今の自分に有ってはいけないもの!……上条はその自分（幻想）を殺した……後戻りが出来ないように!

そして、上条は2射目も・・・きれいに中白に命中！そして・・・  
残心・・・上条は矢の末路を見届ける・・・そして、ゆっくり体勢  
を戻し、最後に1礼して奥へ下がっていった・・・

士郎「当麻！すごいぞ！あんなに迷いのない射を見たのは初めてだぞ！？」

かなで「そうです！あなたは聖人か何かですか！？あんなにきれいな射は早々できないですよ！」

桜「あんな短時間で・・・すごいです！上条先輩！」

上条「ん！？俺はただ士郎さんの言葉に従っただけなんだが？」

士郎「む！そうすると・・・自分を越えたのか？」

上条「ああ！おかげで迷いが晴れました！感謝します！・・・それとみんな、ありがとう！」

かなで&桜「ふふ、どういたしまして！！！」

かなでと桜は上条に感謝され、顔を赤くしながら笑っていた・・・  
しかし、この和む時間が・・・

美綴「確保ーーーー！！北子！井垣！退路を塞げーーーー！！残りは上条を確保ーーーー！！！」

北子&井垣ほか部員一同「サー！イエッサー！！！！」

上条「え！？な・・・なに！？」

上条の周りに部員が集結し、北子と井垣が玄関と裏口を閉ざし、完全に退路を失った！

上条「これはいつたい・・・何の冗談だ!？」

上条はいつたい何が起きているか、分からなかった・・・そして、美綴が前に出た。

美綴「おめでとう!上条!君は今日から弓道部員の一員で・・・期待の新星だ!」

上条「な・・・なにー!ー!ー!これは部活見学じゃなかったのか!？」

美綴「現に弓道着、着ているだろ?これは一応、仮入部扱いだぞ？」

上条「は!しまった・・・騙された!!し・・・土郎さん、凶つたな!」

上条は生き良いよく土郎に顔を向けた!土郎は頭を抱えていた・・・

土郎「すまん!どうしても美綴が男性部員がほしいというから・・・あえて、部活見学という形で声を掛けたんだ・・・まさか・・・ここまで才能があるとは・・・」

上条「な!？」

土郎「当麻・・・あきらめる・・・お前は実力を見せすぎた・・・もう・・・後戻りはできない・・・」

士郎は上条に背を向け、後ろに下がって行った・・・

上条「人でなしー！ー！！」

美綴「ふふふ！さて・・・上条、潔く、この書類にサインしなさい！」

上条に渡されたのは・・・入部願い、その他諸々の書類・・・

上条「も・・・もし、サインしなかったら？」

美綴「・・・」「ニコ！」

美綴は笑顔になり、そして

美綴「書くようになるまで、道場の倉庫監禁し、拷問する！」

上条「完全に犯罪！？そして、人権無視！？」

美綴「さあ〜どうする！？」

上条「クツ・・・うつうつ・・・」

上条は歯を噛み締めて、選択を考えた。

かなで「あきらめた方がいいと思いますよ？」

桜「私は無理とは言いませんが・・・上条先輩が入ってもらえるところ  
れしいです！」

上条「・・・ふう〜」

上条は決めた！

上条「美綴さん・・・俺は決めたぞ・・・」

美綴「で？答えは？」

上条「・・・」

美綴「・・・」

二人は静止した・・・そして、上条が動いた！

上条「自由への逃走！！」バツ！

美綴「かなで！」

かなで「はい！」

上条「うお！？動けね・・・何！？いつの間鎖が！？」

かなで「ごめんなさい・・・部長の命令は絶対ですので・・・」

まさかの上条の足に鎖が巻きついてた！そして、それを操るのは、かなで！

美綴「さあ～さらっっちゃおっ～」

上条「自由を！さもなくば、死を！ーーーー！！きゃーーーー！！」

上条は鎖でぐるぐるに縛りあげられ、部員達に持ち上げられた・・・



士郎は道場の端で・・・自分の行ったことを反省していた。

士郎「当麻・・・許せ！」

美綴「さあ！みんな！上条を部室にご案内しなさい！」

部員達「「「「サー・イエッサー！！」「」「」

美綴の命令に従い上条は部室に入れられていく・・・

上条「ギャーーーー！！この際だから、言ってやる！不幸ーーーー  
だーーーー・・・」

ボタン！（扉が閉まる！）

上条のお決まりのセリフがいう終わる前に扉がしまった・・・

残ったのは、反省中の士郎、ただ1人・・・

続く・・・

## 17 部活行こうぜ！（後書き）

また、ちよつと意見を聞かせて下さい！  
今から告げる女キャラが子供を創るとしたら・・・どんな名前になるか・・・意見を聞かせて下さい！

- 1・・・オルソラ
- 2・・・神裂香織
- 3・・・吹寄制理
- 4・・・佐天涙子
- 5・・・初春飾利

この5人の中からお願ひします！

回答は複数でも、大歓迎！

多くの意見を期待してますので、よろしくお願ひします！！

## 18 帰り道の地獄の番犬（ケルベロス）

18 帰り道の地獄の番犬 ケルベロス

冬木市上空 輸送機内

九朗「おい・・・アル・・・まさかだと思うが・・・俺達ここで下ろされるのか？」

アル「そのようだな・・・」

輸送機の中でパラシュートも装着せず、開いた降下用のハッチの前に立たされている二人の男女がいた・・・

男の方は大十字九朗・・・上条により年上の青年である。

女（幼女）の方はアル・アジフ・・・九朗の掛け替えもないパートナーである。

この二人は上条の要請でイギリス（時計塔）から飛んできたが・・・まさかの遅刻により、旅客機ではなく、上条よりやさしい・・・隠密性の高い輸送機で現地まで送られて、ここ冬木市の上空まで到達したのだった・・・

九朗「アル！これは何かの冗談か！？なぜ、俺達がこんなところぞの罰ゲームをうけるようなことをしなければ、ならないんだ！？」

アル「それは・・・汝が昨日の夜・・・妾にあんなことをしたり・・・こんなことをしたりして・・・寝坊した揚句、空港で・・・」

アルは顔を赤くして、こうなった理由を細かく説明した。

九朗「泣いて謝るから、それ以上18禁に引つかかる話はやめて〜  
〜!」

さて、この二人は昨日・・・どれだけ盛んだっただろう・・・その前に、幼女に手を出した九朗・・・犯罪だ!

パイロットA「お〜い、そのカップル!目的地に到着した!降下準備しろ〜!」

九朗「あ・・・はい・・・それで俺達のパラシュートとかは?」

パイロットA「そんなもんあるか!とつとと、落ちろ!」

九朗「ひどい!?ただ1分遅れただけで、こんな仕打ち!?ひどすぎる〜!」

アル「九朗・・・あ奴は・・・なにか違う意味で怒っているようだぞ?」

パイロットAが怒っている理由・・・それは、彼には彼女がない・・・そして・・・この二人がいちゃいちゃしていることに、腹を立てていたのだ・・・ただの八つ当たり・・・

パイロットA「お前達は魔術師だろ!空くらい飛んで見せろ!」

九朗「無茶言つな!そんな簡単にできたら・・・」

パイロットA「おい!こいつらを突き落とせ!」

九朗&アル「はい!?」

女性「はいはい それでは、失礼します」

ゲシ！ゲシ！

九朗「ぬおおおおお!!」

アル「ぎゃあああああ!!」

女性「二人ともグツトラック」

二人を突き落とした女性は二人に敬礼し、二人が小さくなっていくのを見届けた……

P r r r r r r ! P r r r r r r r ! (携帯の呼び出し!)

?? 『絵美理!間に合った!?』

絵美理「ええ〜 あの<sup>ペトフィリア</sup>下衆野郎を今さっき叩き落としたよ」

?? 『間に合わなかったか……』

絵美理は上機嫌で電話の相手に返答した。そして、その相手は九朗達の冥福を祈るよう合掌した……

?? 『それで……父さんから連絡は?』

絵美理「いや、特に連絡はないけど」

?? 『そうですね・・・』

絵美理 「なに？そんなに父ちゃんと話したいの!？」

?? 『そ・・・それは・・・』

絵美理 「うふふふ それなら・・・私はこのまま・・・」

?? 『早く戻ってきてください!こちらのジャミングも遠距離だと限界があるんですから!』

絵美理 「わかってる。わかってる。冗談よ!」

?? 『絵美理が言うと冗談に聞こえない・・・』

絵美理 「あははは!そんじゃ、今からそっちに戻るね!」

?? 『ええ!わかった・・・寄り道が厳禁だよ!??』

絵美理 「あは!空にコンビニでもあればね」

通信が切れて、絵美理は操縦室に向かう。

パイロットA 「まったく・・・どうして貧乏くじを引くのかな・・・」

パイロットA は自分の仕事が面倒なのか。1人で愚痴っていた・・・

絵美理 「まあ!まあ!いいじゃない 私みたいな美人が隣にいるんだ・か・ら」

パイロットA「ケツ……小娘……そんなことはもうちっと年食  
つてから出直しな……」

バキ！

パイロットA「す……すみません……」

パイロットA……年頃の女の子にその1言は禁句だぞ……それ  
により、絵美理の鉄拳が顔面に炸裂し、顔に青あざを作りながら、  
操縦した。

絵美理「まったく……最近の男って、どうしてこうなんだろ」

絵美理は頬を含ませて、気分を悪くしていた……

絵美理（だけど……下りておくべきだったかな……。そうすれば、父  
ちゃんに合えたのに……）

少し残念そうな顔で窓から遠ざかる冬木市を少しの間、眺めていた。  
・  
・

\*\*\*\*\*

穂群原学園小等部 5年1組 4：30PM

士郎と上条が弓道部に到着した頃、美遊は教室でこれからのことを  
考えていた……

美遊「さて、これからどうしよう」

サファイア「そうですね。ここは当麻様と合流するべきでは？」

美遊「そうだね。高等部校門で待ってよ」

美遊は教室を出て、校門に向かった・・・

\*\*\*\*\*

校門前

那奈亀「あれ？ミュッチ？どうした？」

美遊「ん？」

美遊が来る前に先客が居た・・・それは同じクラスの森山那奈亀だった！

美遊「私はお兄ちゃんが高等部いるから」

那奈亀「お！そうなるとその人、2年だったりする！？」

美遊「え・・・ええ」

那奈亀「おお！そうなるとウチのねーちゃんも2年だからもしかすると同じくらすだったりして！」

美遊は那奈亀のテンションについていけない美遊は軽く引いていた・・・

那奈亀「しかし、ミュッチに兄ちゃんがいたとはね〜正直、驚き！」



美遊「……………」

那奈亀「あれ？どうして黙るの！？そこは盛り上げなきゃ！！」

美遊「そこまで、盛り上げる意味はない」

ガガーン！

那奈亀「ミュツチひど！」

那奈亀は美遊に質問攻めを繰り返すがほとんどが素っ気ない返事で流された・・・そして、話に終止符を打つ者が現れた！

那奈蛇「那奈亀！ごめん。遅れちゃった！」

那奈亀「あ！ねーちゃん！」

高等部の校門から出てきたのは那奈亀の姉の那奈蛇だった！

那奈蛇「ごめんね、少しトラブルに巻き込まれちゃって・・・」

那奈亀「また、あの慎二という男に絡まれたの？大丈夫だった!？」

那奈蛇「ええ！でも、上条さんに助けてもらったから！」

美遊「上条!？」

那奈蛇「あら!?!ごめんなさい。え〜と、あなたは・・・」

那奈蛇は美遊に初めて会ったため、名前が出てこなかった・・・

美遊「上条美遊です。はじめまして」

那奈蛇「あーこちらこそはじめまして、那奈亀の姉の那奈蛇です！  
これからよろしくね！」

美遊「え．．ええ、こちらこそ」

礼儀正しい二人は自己紹介をした．．．そして、それを見ている那奈亀は完璧に浮いていた．．．

美遊「それで、上条って、まさか、上条当麻と言っ名前じゃ．．．」

那奈蛇「ええ！そうです！上条さんはB組で私は隣のクラスのC組  
ですので、あまり関わりがないですけど、昨日知り合ったのでそれ  
で．．．」

美遊「．．．そうですか」

美遊は違和感を覚えた．．．兄はどうして．．．こう続けて、女性と  
知り合うのか不思議に思えてきた。

那奈蛇「ああ！それでなんですけど、上条さんから伝言を頼まれた  
のです！」

美遊「え！？」

那奈蛇「上条さんは用事で遅くなるらしいので先に帰って．．．と伝  
えてくださいと言われました」

美遊「そうですか・・・」

美遊は伝言を聞くとシヨンボリと俯いてしまった・・・

那奈蛇「よければ、私達と一緒に帰りませんか？途中までは同じ道だったので・・・」

美遊「・・・」

美遊は考えた・・・兄からは一人で帰るのは危険だから友達か俺の知り合いと帰るようにと言われている・・・そして、現在・・・友達と言える人が居なく（那奈亀も友達とも言えない）、そのため、誰かと帰るには・・・目の前の兄の知り合いと帰るしかない・・・美遊は決断した！

美遊「では、お言葉に甘えさせていただきます」

那奈亀「お！いきなり素直になった！どうして、私の場合は素っ気ない返事でねーちゃんの場合は素直になれるの〜〜〜!？」

美遊  
.....

美遊は隣で騒いでいる那奈亀を那奈蛇と落ち着かせて、ようやく、帰路についた。

数分後 十字路

那奈蛇「本当にここがいいの?」

美遊「ええ、ここまでくれば、後は坂道だけなので」

那奈亀「そんな、やせ我慢しないで！私達が送ってあげるって！」

ここの十字路は美遊と森山姉妹の帰り道が分かれる所なのである。

そして、森山姉妹は美遊をそのまま1人で帰らせるのが心配になり・  
・家まで送ると提案したのだ。

美遊「いえ、これ以上、気を使うと兄を困らせてしまうので」

那奈蛇「いえ、心配しなくても、私は今日含めて2回、上条さんに助けてもらっていますから、私も少しはお役に立たないと気分が悪くて」

那奈蛇は苦笑しながら話す。美遊は少し表情が柔らかくなった。それは兄が短期間でもう人を助けていて、それを感謝している人がいることにつれしくなったからだ。

美遊「そうですか・・・でも、遠慮します。これから兄の知り合いが家に来るそうなので・・・」

那奈蛇「そうなんですか・・・わかりました。また次に同じことが会った時にしましょう！」

美遊「感謝します」

最終的に美遊は残りの帰り道を1人で帰ることになった。しかし、まだ、日は明るく、途中に人気のない場所があるが、後は見晴らしがいい坂なので、ほとんど問題はなかった。

美遊「それでは、さようなら」

那奈蛇「ええ！また明日ね！」

那奈亀「おう！また明日！」

2人と分かれた美遊は少し足を速めて、我が家に向かった・・・

人気のない道

美遊「・・・・・・・・」

美遊は何かに気付いた・・・誰かが自分を付けていると・・・

美遊「クツ！」バツ！

しかし、後ろには誰もいない・・・たしかに誰かが後ろにいた・・・  
そして、今もなお、自分を見ている・・・美遊に恐怖が襲う

サファイア「美遊様」

美遊「わかってる・・・・・・・・いつでも変身できるようにして・・・・・・・・」

??「ほうっ見事な警戒心だな。さすがはあの上条の義妹だ」

美遊「ハッ！」

美遊は前に振り向くと・・・

相良「ふむ・・・こんな状況なのに落ち着いていられるとは・・・驚きだ」

美遊「クツ・・・」

出てきたのは・・・相良宗助！上条と同じクラスメート！そして、上条の正体を暴こうと周囲を嗅ぎまわるケルベロスだった！

美遊「私になにかご用ですか？制服を見て・・・兄と同じですが」

相良「そうだ！今日転校してきた上条当麻と同じ学び舎とクラスに所属している者だ」

美遊「すみませんが、兄は学校なので、用があるなら学校に・・・」

相良「いや、上条当麻には用はない」

美遊「では、なんのご用で？」

相良「お前に用がある」

美遊「すみませんが、私も用事がありますので」

美遊は歩きだそうとしたが・・・

パン！（銃声）

美遊「ひっ！」

相良「そこを動けば射殺する」

相良が後ろから出したのは・・・45口径拳銃だった！

美遊はさっきまでの恐怖以上の恐怖と死の恐怖が襲ってきた！

相良「さて、無駄な抵抗は無意味だ！一緒に来てもらおう」

美遊「クッ・・・」

サファイア「美遊様！ここは魔法で・・・」

美遊「だめ、ここで使うとお兄ちゃんに面倒を・・・」

サファイアは魔法を使って、相良から逃げるように言うが、美遊はどうしても兄のことが邪魔して魔法を使うことが出来なかった。

相良「いったい、誰と話している？仲間を呼んだか？なら、とつとと、終わらせてよう」

相良は空いているワイヤーなどの拘束道具を取り出し、美遊に近づく・・・

美遊は動こうとするが、自分に銃口が向けられ、恐怖で身体を震わせてしまい、心で動けと叫ぶが身体が動かない！

美遊（助け・・・助けて！当麻お兄ちゃん！！）

美遊は泣きながら、兄に助けを心中で叫んだ・・・相良はどんどん近付いてくる・・・美遊はもう諦めかけたが・・・

??「うわーーーーー！！」

ドーン！

美遊「え？」

相良「何？」

美遊と相良の間に何か落ちてきた！悲鳴に近い声と共に・・・

??「いててて・・・アル！無事か！？」

??「なんとか・・・」

砂煙の中から男女の声がした。

そして、砂煙が晴れると・・・

九朗「そこのおまえ！幼い子に銃を向けるなんて言語道断だー！  
！」

アル「まあ、どんな事情があっても、武器を持たない者に手を上げるなんて、感心せんな」

出てきたのは、輸送機から落とされたバカカップルだった！しかし、なぜか無傷で着陸していた！

相良「貴様ら、上条当麻の増援か？」

九朗「え！？まあ、そうなるが・・・」

相良は目が見開いた！



相良「全員！武器を捨て、手を頭の後ろで組め！さもなければ、無差別に射殺する！」

相良は見境がなくなっていた！

九朗「・・・どうする？」

アル「決まっているだろ」

九朗「ああ、そうだな・・・」

美遊「あの・・・」

ガシ！

美遊「きゃあ！？」

九朗＆アル「全力で逃げる！」

九朗は美遊を抱えるとアルと共に全力でダッシュした！

相良「逃がすと思うか！」ダダダダ！バン！バン！

九朗「うわわわわ！あいつ、全力で追っかけてきてるー！ーう！？  
そして、撃ってきてるー！ーう！？」

アル「全力で逃げろ！」

美遊「きゃああああ！」

そして、男女3人と1人のケルペロス軍曹との命を掛けた鬼ごっこが始まった。

続く……

## 19 赤き薔薇の少女

19 赤き薔薇の少女

帰り道 6:00PM

上条「はあ・・・地獄を見た・・・」

士郎「う・・・すまん・・・」

上条は最終的に弓道部に強制的に正式な部員として迎えられたが・  
・本人が白状しない間、部員一同に責め続けられ、30分間・耐  
えきれず、書類にサインした・・・

その後、士郎はボロボロな上条を家まで送り届ける口実で部活を切  
り上げ・・・現在に至っている。

上条「それにしても・・・元気がいい部活だな〜」

士郎「それは、久しぶりに客が来て、それが才能がある奴だったか  
ら、全員の態度も変わるよ」

上条「それは・・・士郎さん、あなたが図ったからでは？」

士郎「ウツ・・・申し訳ありません」

士郎は上条のチクチク刺さる言葉に押されて、テンションが下がり・  
・・・お通夜モードになっていた・・・

数分経過・・・

上条「まあ、過ぎたことは水に流して、この後のこと考えようぜ！」

士郎「そうだな・・・そうしよう！」

上条は士郎を励まし、話の話題を代えた。

士郎「そういえば、当麻・・・昨日助けた子はいつたい誰だい？何か知っているようだが？」

士郎はズバリと昨日ことを追求していた！上条はまさか、昨日のことを聞かれると思わなかったのか。少し驚いていた。

士郎「あの子、変わった魔術と武器を使用していたな。それに・・・空を飛びまわっていたぞ。あれは普通の魔術師とは比べ物にならないレベルだぞ？そこを教えてくれ！」

上条は士郎の質問に正直に答える・・・これから、協力し合う仲間なのだ。裏表なしにいききたいと考えているのだ。

上条「そのことですか・・・まず、昨日話した通り、あれが俺が守らなきゃいけない奴ら、あの金髪の子はフェイトといい、その隣にいたのが、アルフというフェイトの使い魔で・・・一応、オオカミ・・・あの二人は現在、ジュエルシードという物を回収していて、この前は運悪く近くの魔術師に襲われたようだ」

士郎「ふむふむ・・・使い魔・・・使い魔！？あんな小さい子がそ

んな高等魔術と魔力を持っているのか！？いつたい、今の世界はどうなっているんだ！？」

上条「ちなみに言うと、フェイトも違う世界の住人で、あれは魔術ではなく魔法になる。」

士郎「ま・・・魔法!？」

士郎は上条の説明にびつくりした！あの2人の少女達といい、魔術ではなく魔法・・・この世界で魔法は魔術より上のレベルを指している！例えるなら、魔術では人を蘇られるなんて芸当はほぼ無理だが、魔法の領域に達すると人を蘇らせることが夢ではなくなるくらいに匹敵する位なのだ・・・

士郎「き・・・聞くが当麻・・・お前が使っていた武器・・・あれは魔術か？それとも魔法か？」

上条「一応、両方」

士郎「当麻・・・おまえ・・・何者だ？」

士郎は上条が魔術師なのか・・・それとも・・・あの少女達と同じ類なのかわからなくなっていた。

上条は苦笑しながら答えに応じる

上条「魔術師でもあり・・・魔導師でもある・・・中途半端な人間ですよ。この半年間、あいつらや世界を救うために自分を無理やり変えてきて、今の自分が本当に俺なのか分からなくなってきたんですよ・・・」

士郎「当麻、お前はお前じゃないのか？」

士郎は上条がどのような人間だったのか。分からないけど、知っておきたい！上条がこれからどうしていくのかを知るために・・・

上条「士郎さん・・・昨日、俺があの人を襲っている奴らにどのような目で見ていたか、わかりますか？」

士郎「・・・・・・・・」

士郎は昨日、フェイトが危機に瀕している所を飛びだそうとしたが、上条に止められた・・・そして、その時の上条の顔は・・・殺しの目に等しかった。

上条「俺・・・最近、手加減ができなくなってきましたよ。協会での模擬戦でも、相手を完膚無きほどに叩き潰した位に・・・あんなことが最近になって続けているんですよ」

上条は・・・この半年間、戦い続けてきたのだ・・・そのためか、力を持ち過ぎ・・・そして暴走・・・相手を傷つけることで不屈の心が弱まり・・・精神を犯す。

士郎「当麻、それは試合であり、昨日のことは人助けでは当たり前な力の行使だ！そこまで、心配することはない・・・それに、今日の射もあれほど、まっすぐなモノはほとんどないぞ。それは、お前の心が1つに向いていることだ！心配することは何も無い」

士郎は上条が鬱状態になりかかっているため、励まし始めた。

上条「そうですか・・・あの時、昔の自分を的として・・・敵として

見た・・・あの時、射ぬいた自分は誰だ？そして、射ぬく自分が誰だ？そして、その決意をしたのは誰だ？土郎さん！教えてくれ！」

上条は完全に鬱状態になってしまった。土郎はただの質問がまさか、上条の心まで抉るとは思ってもいなかったのだ・・・

土郎は言葉に迷った・・・自分がまた、誤ったことを言つとさらに悪化する・・・そして、決める

土郎「当麻、落ち着け！それは今のお前だ！今必要なお前だ！俺のはただの慰めにしかないが、俺が見ている当麻は行動は！それは正義でもなく悪でもない・・・俺と同じ偽善という形に添っている！」

上条「」

土郎の言葉に上条は鬱状態から理性が戻り始め、思考し始めた。

土郎「上条当麻！お前はそこらの理想家やそこらの堅苦しい軍隊みたいな全を救うために1を犠牲にすることはしないだろ！そうだから、俺は、全も救い、1も救う！二つを見捨てず必ず守る！お前はどうだ！」

土郎の言葉に上条はやつと目が覚めた！そして、自分がやることは取りもどし、迷いという迷宮から脱出した！

上条「そうだ・・・そうだったな！土郎さん、俺もあんたと同じ偽善で動いていることを思い出したよ！ありがとう！」

上条は復活した！今さっきまでの鬱状態とは違い、力に満ち溢れていた！

上条「ところで、士郎さん。俺が魔術にかかったことに良く気付きましたね！さすが、同じ理想を抱く同士はわかり合うのが早い！」

士郎「え．．．俺はただ単に、当麻が病んでいたから．．．励ましたただけだ」

上条「え？」

話がかみ合わない．．．上条は人の心の闇を抉られる魔術に掛けられていた（メサイア装備時は魔術などがかりやすくなる）と．．．士郎は病んでいたからと．．．

上条「まさか．．．士郎さん．．．あなた．．．気付いていなかった？」

士郎「何の事だか、さっぱり」

上条は恐る恐る聞いてみると現実的な気付いていないコールが返ってきた！

上条「士郎さん！あなたはなんで効いてないんだ！？なぜ俺だけ！？」

メサイア「あ！すみません。私も気付きませんでした」

上条「メサイアアアアアアツ！！」

まさかの上条のみに精神攻撃魔術が掛けられたらしく、メサイアも気付くことがなかった．．．もしくはデバイスのくせに気を抜いていたか．．．



士郎「と・・・当麻!？」

上条「クソツ・・・よりもよって・・・こんな醜態を晒すとは・・・そこにいる奴!とつとと、出てこい!」

上条の左手から魔力が収束し、高密度の魔力弾が放たれた!魔力弾は2階建の屋根の何も無い所に向かっていった・・・

バキーン!(割れる音)

何も無い所に結界のような物が展開したが、いとも簡単に割れ、貫通・・・爆裂!

士郎「う・・・すごい・・・」

士郎は上条の魔術の強さを改めて驚いた・・・上条の魔術・・・異能消滅という術式をまじかで見るのは初めてだったから、なおさら・・・どんな結界もどんなに強力な魔術もすべて消滅させるチート魔術であると・・・それは、魔術師やその他の能力者を倒すために特化した魔術だと士郎は理解した。

??「そんなに激しくしないでくださいまし、私・・・興奮してしまいますう!」

屋根の上に誰かがいた・・・

上条&士郎「お・・・女の子!？」

男2人は驚いた。屋根の上にいるのは・・・赤いドレス・・・赤い髪・

・赤い瞳・・・白い肌以外すべて赤で統一され、胸元には赤い薔薇の刺青の美少女が立っていた。

少女「あら？そんなに私が魅力的？私・・・嬉しいわ！！」

少女は恥ずかしがる素振りを見せていたが、消えた！

上条&士郎「！！」

少女「こんないい男性2人の視線をずっと見られていると・・・私、困りますわ！」

上条「な！？」

士郎「いつの間に！？」

少女がいつの間にか2人の後ろに転移していた！

少女「この程度で驚かないで、このくらいどうってことないでしょ？」

士郎「いや、普通驚くだろ・・・」

上条「・・・・・・・・」

士郎は臨戦態勢を取った。しかし、上条は動じない・・・

少女「あら？その黒髪の方は構えないの？」

上条「・・・・・・・・はあく・・・まさか、さっきの魔術・・・おまえが？」

少女「そうよ？」

少女は何も迷いなく認めた。上条は頭を抱え、何か塞ぎこんでしまった……

士郎「どうした。上条、まさか……こんな少女に魔術を掛けられたことに悔んでいるのか？」

上条「ほっておいてくれー！ーッ！」

凶星だった……

少女「うふふふ……そんなに私の魔術がお気に召さなかったのです？それは申し訳なかったですわ！」

少女は謝ったが、心はこもっていない。

上条「その心がこもっていない謝り方されても許せるかー！ーッ！  
！それに見たな？」

上条は怒っていた！それになにかを見られて余計に怒りが増していた。

少女「ええ！あなたの記憶を見せてもらいましたよ！そして……消されてしまった記憶もすべて……！」

上条「                   「ダッ！」

士郎「と……当麻！」

少女「え！？」

上条は一瞬にして少女の前まで移動した！それに士郎は気付くことが出来なかった。そして、少女もいきなり、接近されたことに動揺した。

上条「おまえ……」

少女「なに……」

上条は手が動いた！少女はそれに反応し、構えようとしたが……

上条「すみません！消された記憶みせてください！！」

少女&士郎「はいイイイイ！？」

まさかの上条の土下座により、少女と士郎はずっこけてしまった。

上条「いや〜まさか、魔術で心の中をいじられていたら、知らない記憶の断片が見えたから、まさかだと思って……頼むよ。許してあげるから、記憶を見せてくれない？」

士郎&少女「（何か痛々しい物を見た表情）」

上条「あれ？なにその残念に俺を見るんだ？」

士郎と少女は上条の行動に反応に困り、そして、攻撃してきた相手に向かって、土下座して物をねだる主人公がどこにいるだろうか！？そして、余計に2人の視線は痛々しくなっていく……

士郎「当麻……みじめだ」

上条「あれ〜〜〜〜!?なんで余計痛々しい目で見えるんだ!?!」

士郎の追撃に上条はなぜこうなるか。説明を求めるシユールな光景だった。

少女「・・・そうね。いいわよ?見せてあげても構わないわよ!」

上条「お!話が分かるね!」

少女「ただし」

上条「ただし?」

少女「あなたが私のご主人様マスターになってくれれば!!!」

上条&士郎「・・・・・・・・」

・・・・・・・・

士郎「はあアアアア!?!」

上条「な・・・なんだってエエエエ!?!」

メサイア「なんですってエエエエ!?!」

まさかの爆弾発言に男二人とメサイアは大声を上げてしまった!!

少女「あなたを半年前からずっと見てましたわ。私と適性が合う人!あなたがそうですわ!」

上条「ううう・・・・・・・・」バタ!

士郎「当麻！？大丈夫か！？しつかりしろー！ーッ！」

上条はいきなり頭痛が走り倒れてしまった・・・それはそうだ！いきなり美少女がご主人様になってくれ！なんて言われれば、誰でもそうなる・・・その前に上条は違う意味で倒れた・・・

メサイア「おのれ・・・上条には私がいいます！あなたみたいな小娘に私の座は渡せません！！」

そして、現在の上条のパートナーであるメサイアは早くも臨戦態勢に入り、自ら少女に対して、魔法を行使しようとしていた！

少女「あら？私はあなたの座を欲しいわけじゃないわよ？私はあなたより、さらに上の座を欲しいだけよ！？」

メサイア「この小娘エエエエ」

なぜか、知らないうちにマスター争奪戦が始まっていた。

士郎「落ち着け！その前に君はなんだ！？理由を聞かせる！上条が・・・このままだとイカてる！」

士郎は横やりをいれた！そして、理由を求めた！

少女「そうだったわ！この世界では、私みたいなモノを見るのは珍しいからね！」

少女の身体の一部が紙になり舞った。

士郎「な・・・」

少女「私は魔導書なのよ」

上条「ま・・・魔導書!？」

士郎が反応するのは当たり前だが気絶していた上条も食いついた!

少女「あら?もうご復活?それにあなたが考えていることは違いますわよ?」

上条「なに・・・」

上条が考えたこと・・・それは、はやてが持つ闇の書だった。しかし、否定された。

少女「私をそんな玩具と一緒にしないでくれる?私は魔導書アル・アジフ・・・もしくは・・・ネクロノミコンの血液言語版」

士郎「アル・アジフだと!？」

上条「士郎さん、知っているんですか?」

士郎「名前だけは・・・中身はあまり知らないが・・・複雑多岐にわたる魔道の奥義が記されているという・・・魔導書」

少女「そう・・・当たりに近い答えありがとう・・・」

士郎「だが、おかしいぞ!魔導書が人の形を得るなんて・・・」

上条「いや、有り得るんだ・・・士郎さん」

士郎「!?!」

少女「さすが！オリジナルを見ているから、話が簡単にすみませうわ！」

上条は知っている。魔導書で人の形を得られたものを・・・

少女「だけど・・・私はオリジナルより、安定した存在じゃないの・・・」

少女は少し顔を曇らせた。

上条「魔道書は主がいないと、安定しない・・・か」

士郎「・・・」

士郎は少しずつ少女が現れた理由が少しずつ理解してきた。少女は自分が存在することが不安定な存在なため、適性のある者を見つけて一時的な安息を求めていると仮定がついた。

少女「それだけじゃない・・・私は人間と魔導書の二つの属性を持つ、半人半書という存在、そして私は生まれることを望まれてなかった存在」

上条「中途半端な存在で、安定しない存在というわけか・・・それで・・・」

少女「ええ！あなたが考えている通り、私とあなたは中途半端！そして、この世界に必要なとされない存在！」



上条「……………」

上条はこの世界では、時間を逆らう愚者……そして、過去を変えてしまうイレギュラー……どのような問題に巻き込まれても、今の上条という存在は世界にとって邪魔な存在になる位置にいる。

少女「だから！あなたと私が組めば、時や時空の邪魔はすべて薙ぎ払える！どうかしら、悪い条件でもないでしょ？こんなかわいい美少女が増えるだけなんだから！？」

士郎「……………当麻」

上条「……………」

上条は目を瞑り、考え始めた。上条の地盤は安定していない。最近、美遊という問題が増えて対応に苦労しているのだ。しかし、目の前にいる困っている少女を放っておくのは上条の良心が許さない……そして、考えた続け、やっと答えが出た！

上条「……………それは、いまずぐ出さなきゃいけない答えか？」

メサイア「上条！？」

上条の選択肢はまさかのYESとNOではなく、3つ目の選択肢で受け流すこと選んだ。

少女「そうね……いまずぐは難しいわね……いいわ！少し考える時間を与えるわ」

少女は背を向け歩き始めた。

上条「あれ？どこ行く！？」

少女「あなたの考えがまとまるまで、少し散歩でもしますわ！また、お会いしましょう！」

上条「ちよつと待て！名前ぐらい聞かれるよ！！」

少女の足が止まった。そして、なぜか笑顔で振り向いた！

少女「私は九朔よ・・・このことはオリジナルには黙っておいてね・・・さもないとあなたの恥ずかしい記憶を世間にバラまくわよ？」

上条「絶対言わないからばらまかないで！！」

九朔「ふふふ・・・では、良い返事を期待してますわ！」

九朔は微笑みながら、歩き始めた。

上条「行くと来なけりゃ、家に来い！部屋や飯は提供してやるから！！」

九朔は笑みを浮かばせながら、消えていった・・・

士郎「当麻、本当にどうする気だ？」

メサイア「上条！あなたはあんな小娘と契約するつもりですか！？」

上条「と・・・とにかく、家に帰ろう！！」ダッ！

上条は士郎から逃げるように走り始めた。そして、メサイアの言葉を無視する。

士郎「こら待て、当麻ーーーーッ!」

上条「ぎゃーーーー!忘れてた!士郎さんはチャリ通だった!」

上条は士郎の自転車に追いかけられながら、走る、走る、そして、逃げる!力の限り!!

\*\*\*\*\*

九朔「あらあら、元気なこと」

九朔は少し離れた場所から上条達を見ていた・・・

九朔「さて、どうしましょうか・・・」

??「アナザーブラッド!貴様、ここで何をしている!?!」

九朔「クッ」

九朔の後ろにフード被った男が立っていた。男はこの世界のバランスを調整する役割を果たしている。

??「おまえは過激派の魔術師を殲滅を命じたはずだぞ!ここで何、油売っている。」

九朔「あらすみません。導師様、それは昨日、とある魔術師が勝手に過激派の連中を潰したから私は暇で、暇で」

九朔はこの男の前だけではおどける・・・今のところ、世界で一番嫌いな奴だから

??「ふん・・・存在自体がイレギュラーで消えても問題のないアナザーブラッドは・・・契約は破棄しても問題はないわけだ」

九朔「クウウウー!!」

九朔は悔しかった自分の存在の命綱を握っているのが、この意地汚い男に委ねなれていることが悔しすぎて仕方がなかった・・・

??「そんなに悔しいか？それなら働け！世界の奴隷よ！おまえは奉仕するためにここに呼ばれたのだ！俺の顔に泥を塗ることは許さんぞ！」

九朔「・・・わかりました。」

??「わかればよろしい・・・ならば、とつとと持ち場に戻れ！」

いつまでも変わらないセリフを吐き、男は消えた。その後、九朔は怒りを隠せなかった。

九朔「どんな顔でそんなことを言えるのかしら・・・そして、わざと私が嫌う名で呼びますわね」

九朔が上条に接触した目的の中には口うるさく意地汚い男と契約を切りたかったのも入っていた。

そして、アナザーブラッド・・・彼女がもっとも呼ばれたくない呼び名である。

九朔「まあいいわ。あいつとの関係はもうすぐ・崩れるウ！私は幻影シャドウではなく現実リアルと入れ変わる！そして、私の物語が始まるウ！」

九朔は誰もいない場所で自分の願望を口にする。彼女は不安定な存在・・だから、完全な存在なることが彼女の目的・・そして、彼女の物語とは不明である。

九朔「欲しいものを手に入れる！そう・まずは上条当麻・まず、あなたが欲しい！誰にも差別なきやさしさ、何より、あなたの記憶は美味！どんな幻想も壊せる力・・そして、消されてしまった心の闇！」

彼女は上条を欲していた！半年間にも渡って観察し続けていたためか・・間接的な上条属性になってしまったらしい・・天草式の五和も見ていたら惚れてしまった位だ。何と哀れな少女・・そして、上条の記憶を覗き、上条が知らない心の闇などをすべて見たのだ。しかし、彼女は上条に同情ではなく、ある嬉しみをこみ上げていた。

九朔「私は欲しいモノは手にいれる主義なの・・必ず手に入れて見せる！」

上条は完全に標的ロックオンにされた・・しかも、彼女はかなり行動的！これは嵐が来るぞー！ウー！！主に夜が！

\*\*\*\*\*

上条邸

上条「はあ〜つ・疲れた」

メサイア「いい加減、私の・・・」

上条「さて、家に入るか！」

メサイア「また、無視ですか」

上条はメサイアの話すべて、無視していた・・・そのため、メサイアはご立腹！

ガラガラガラ！！（扉を開く）

上条「ただいま！美遊！」

九朔「お帰りなさいまし、マイ・ご主人様マスター！！」

上条「・・・・・・・・」

メサイア「・・・・・・・・」

ガラガラ、ピシャン！（扉を閉める）

まさかの美遊ではなく九朔だった！しかも、家に入り込んでいた！  
1人と1つはいきなりすることに頭（回路）の中を整理するのが間に  
合わなかった。

九朔「あれ？どうして、閉めちゃうの？かわいい九朔ちゃんのお  
出迎えなのに、ひどいわ！」

扉越しから九朔が悲しそうな声で煽る！煽る！

上条はやっとな動き出し、再び扉を開く！

上条「どこに自分の家に見知らぬ奴が入り込んで、正常でいられる奴がいるか！しかも玄関で『お帰りなさいまし、マイ・ご主人様！<sup>マスター</sup>！』なんて、言われれば誰でも混乱するわ！そして、驚くわ！途轍もなく心臓に悪いわー！」

九朔「あら？行き場所がなければ、家に来い・・・と言ったのはあなたじゃないですか？」

上条「ハッ！」

上条はあの時、つい良心で、そんなことを言ったと思いだした！

九朔「これからよろしくお願いまし、マイ・ご主人様<sup>マスター</sup>！！」

メサイア「上条ー！ーッ！ー！」

上条「ぎゃあああああー！」

メサイアの堪忍袋の緒が蜂切れた。そして、上条に電撃が走り感電した！上条は悩む暇も与えられなかった。

九朔「今日の夜はどうします？私、どんなプレイでも耐えられますわ！縛ります？恥かせます？そ・れ・と・も、王道でそのまま犯し・・・」

メサイア「上条ー！ーッ！ー！」

上条「わあああああ！不幸だー！ーッ！ー！」

上条はどんどん混乱の渦に巻き込まれる！美遊の次は淫乱な半人半

書！上条邸がどんどんカオスに染まっていく・・・

続く・・・



## 20 忙しい半日

20 忙しい半日

廃墟 6:00PM

九朗「クソオオオオ！こっちは駄目だ」

アル「九朗！こっちは行けそうだ！」

美遊「あ！そっちは・・・」

上条が九朗と出会った頃、美遊達は相良から逃げ回っていた！  
今のところ、逃げるのをやめて近くの廃墟になった建物の中に逃げ込んでいた。

ガガガガガガ！（銃声）

九朗「うわ！あいつ、どこにあんな武器を隠しているんだよ!?!」

始めは拳銃・・・次にショットガン・・・現在・・・マシンガン！！  
相良の制服の中はドラ もんのポケットみたいに手をつ突っ込むだけで武器が出てくる。出てくる・・・  
九朗達は呆れさせるほど、しつこく銃を九朗達に向けて撃ってくる。  
・・・そして、こちらにも反撃を開始した！

アル「ここはクトウグアとイタクアで応戦するしかないぞ！」

九朗「ああ！」

九朗は自動拳銃クトウグアとリボルバー式拳銃イタクアが取りだされた！

九朗「喰らえ！」

ガン！ガン！

九朗から両手の拳銃から火が噴いた！そして、この発射された弾はただの弾でない！

相良「む！」

相良が危険を察知し、すぐにその場から離れた！

ドオオオオン（爆裂）

弾丸が爆裂し、その場が炎に包まれた！その時、相良は物陰に隠れ難を逃れた。

相良「なんだあの銃弾は！？・・・う！」

さらに追撃！もう1発の弾丸が相良に向かって追尾してきたのだ！

相良「ありえない！なんだ、あの兵器は！？」

相良は一時、撤退した！

九朗「よし！今のうちだ！逃げるぞ！」

アル「うむ！」  
美遊「はい」

三人は急いで廃墟から脱出した！

\*\*\*\*\*

かなで「はあゝ、私・・嫌われちゃったかな・・・」

現在、かなでは上条の強制的な勧誘に手を貸してしまったため、  
だいま反省しながら下校中！

かなで「なんで・・印象悪くすることしかできないのかなゝ私・・  
」

ピロテース「それは気にしない方が・・・」

かなで「それができないから困っているんですよ」

かなではテンションはどんどん下がっていく・・・そして、歩むス  
ピードも遅くなっていく・・・

かなで「どうにかして、印象を良くしたいなゝ・・なにかないかな  
・ん!？」

かなでの前を3人の男女が通り過ぎた

かなで「んゝゝ!?!何あれ?・・うわ!」

今度は後ろから1人の男が銃器を両手に持って、3人を追いかけて

いた。

ピロテース「かなで様・・・やりますか？」

かなで「やるに・・・決まっています！！！」

かなでは元気よく鞆を放り投げると全速力でどこかに走り出した！  
ものすごいスピードで！！

\*\*\*\*\*

九朗「ウオオオオオ！！まだ、追っかけてくる~~~~！！！」

アル「あきらめず、走り続ける！！！」  
美遊「疲れた」

逃亡者三人の体力は限界に近かった・・・約1時間以上のリアル鬼ごっこ・・・三人が捕まるか・殺されるか、もしくは相良が行動不能になるか・・・  
しかし、現在の状況では相良が行動不能になるのはまずあり得なかった・・・

相良（あの男が持つ武器は危険だ・・・なんとしてもあの娘と一緒に抑えなければ！！）

相良は制服の中から・・・手持ち式迫撃砲を取り出した！！

バシューーン・・・ドオオオオン！！（砲撃）

九朗「ウゲエエエ！！今度はなんて物を持ち出すんだあいつはー  
ーッ！！！」

アル「九朗！待て、そっちは！！」

九朗「え！？」

ドカン！（衝突）

アル「行き止まりだぞ」

美遊「はわわわわわ・・・」

まさかの行き止まりに3人は絶望を覚えた。前には壁・後ろには凶器を持った鬼・・・袋の鼠である。

相良「ここまでだ！投降しろ！」ジャキ！

相良は迫撃砲を構えていた！もし撃たれたら、いくら避けても爆風でやられてしまう・・・そして三人はある禁忌を犯すしかないと思っていた・・・

美遊「サファイア！変身を！」

サファイア「了解です」

九朗「アル！マジウススタイルを！」

アル「仕方が無い」

相良の前で魔法少女（美遊）・超人形態（九朗）になろうとした・・・その時！

相良「む!?!」

相良の目の前に何かの缶が降ってきた・・・いや、違うこれは!!

バ　　ン（爆裂）

缶が爆発した!それは缶ではない。正体はスモークグレネードだった!

相良は混乱したが、3人も何が起きたかわからなかった。

?? 『今のうちです!まっすぐ走ってください!』

3人「「「!!」「」「」

どこからか声が聞こえてきた。

美遊「どうします?」

アル「行くしか無かろう」

九朗「そうだな!」

三人は一斉に前に走り出した。そして、煙の先は・・・

九朗「あれ?」

美遊「ここ」

アル「どこだ?」

三人が出た場所はなぜか港・・・今さっきのまで住宅地の裏小路にいたとは全く関係ない場所であった。

??「危なかつたですね！大丈夫ですか？」

三人「！！！！」

三人の後ろにいたのは・・・

かなで「どうしました？驚いた顔して？」

かなでであった！あの時、移動したのは転移魔法と魔術を使用するための場所を捜していたのだ！そして、見つけた後、転移魔法と魔術の重ね合わせで相良が落としたスモークグレネードと3人を転移させる荒技を披露したのだ！例に上げると学校で手紙を転移させたことを応用したもの！

九朗「いや、驚くよ・・・色々」と

九朗達が驚くのも無理はない・・・転移魔法・魔術はそつとやちよつとの技術で扱うことができない魔術である。それを簡単にやってのける者が目の前にいるのだから・・・

アル「お主は何者だ？さっきの術はかなりのものだぞ！」

かなで「ただの人助けが好きなの下校途中の女子学生ですよ！」

かなでは笑顔で返事をする。

美遊「あなた、なんであそこで魔術を行使したのですか？私達が一般人だったらどうするつもりだったのですか？」

美遊から重い言葉が返ってきた！しかし、かなでは迷わずに返答す

る！

かなで「そのときは、外部的麻酔で記憶を混乱させておしまいです！」

なぜか、手刀を構える・・・3人はこう思った。（何も考えていない）と・・・

九朗「でも、結果助かったから、ありがとう！」

かなで「いえ、どういたしまして」

九朗は重苦しい話をやめて、結果は助けてもらったから、それでいいと言う結論が導き出され、かなでに感謝した。

アル「まったく、お主という奴じゃ」

美遊「・・・・・・・・」

残りの二人は納得がいかないのか・・・少しむすくれていた。

美遊「ところで・・・あなた達はだれですか？」

九朗&アル「え！？」

そういえば、九朗とアルはいきなり現れて、そして、リアル鬼ごっこが始まり、お互い名乗る暇はなかったのだ。

九朗「ああ！そうだったな！俺は大十字九朗！そして、こいつが俺の相棒のアルだ！」



アル「妾は、魔導書ネクロノミコンの精霊　アル・アジフだ！よろしくな！小娘！」

美遊「大十字・・・あ！もしかして！今日、イギリスからこちらに来られた・・・」

九朗「ん？そうだが、なんで知っているんだ？」

美遊「申し遅れました。私は上条美遊です。兄、上条当麻の義理の妹です。」

九朗&アル「な・・・なに~~~~~!?」「かなで（え！？あの人の義理の妹！？）」

3人は驚いていた！九朗とアルは上条がイギリスから旅立って、まだ、数日しか立っていないのに、まさか、もう家族を作っていたとは思わなかったのだ！

そして、かなではまさかの上条の身内だったことに驚いた！これは運命か？それとも、神のいたずらか？

九朗「ま・・・まさか、当麻が言っていたのが、この子だとは・・・」  
アル「正直驚きだ」

九朗（当麻・・・いったい何に目覚めてしまった!?）  
アル（最近流行りのシスコンか？それともロリコンか？）

美遊「？」

九朗とアルは悪い意味で考えてしまう、上条がまた新たな属性が加

わったことと思っっているようだ。その様子を見て、何を考えているかは想像できなかった・・・

かなで（これはチャンス・・・チャンスだよね！これはいくしかないね！）

かなでの方は何かを計画していた！

そして、美遊が知らない内に物事が進んでいく・・・

美遊「では、いきましよう」

かなで「ちょっと待って！私も一緒に行っていかな？」

美遊が上条邸に向かっておうとした時、かなでが動いた！

美遊「助けてもらったことには感謝しますが、家には何もありませんよ」

かなで「違います！私はあなたの兄に用があつて・・・」

美遊「どんな？」

美遊の目つきが変わった！それは上条がたった1日で複数の女性と知り合いすぎているため、そろそろ・・・積極的な者が現れてもおかしくはないと思っっていたからだ！

かなで「お昼にちょっと迷惑かけたから・・・謝りたくて・・・」

美遊「それは明日にでも間に合うのでは」

かなで「いえ！私は引きずるのは好きじゃないんです！ここはスツパリと終わらせたいんです！」

美遊も必死だが、かなでも必死であった！双方譲らない！

九朗「まあ、いいじゃねか？謝りにいくくらい」

アル「妾も同感じゃ！」

美遊「ウっ！！」

まさかの九朗達がかなでに助言したのだ。美遊は完全に押し負けてしまった。

美遊「わかりました。名前は……」

かなで「かなで・カミジヨウです。よろしく、美遊ちゃん！」

互いの自己紹介が終わると4人は上条邸へ向かった……

\*\*\*\*\*

一方、相良は……

相良「どういうことだ……人が消えた？そんな馬鹿げたことがあるはずが……」

P r r r r r r ! P r r r r r r r r ! (通信)

カリーニン「相良、何をしている？千鳥かなめの護衛はどうした？」

相良「カリーニン少佐！」

通信してきたのは相良の上司のカリーニンだった！

相良「それに関しては安全に護衛しました。現在、報告に送った上条当麻についての情報捜索を行っています。」

カリーニン「上条当麻・・・いきなり転校してきた男子学生か？」

相良「肯定です！」

相良は現在の状況などを細かく説明した。

相良「そのため、増援を送り、上条当麻を捕縛するべきです！」

カリーニン「いや、それはする必要がない」

相良「なぜです」

カリーニンは相良の要請を了承しなかった。そのことに相良は不思議に思った。

カリーニン「調査した所、彼はイギリス軍に所属している士官で、階級は少尉だ。これ以上の行為を続けるとこちらが危うくなる。これ以上の行動は禁ずる。」

相良「クツ・・・了解です」

相良は悔しいが認めた。これ以上の挑発行動は部隊にとっても、自分にとってもよくないのだ。

カリーニン「それと、彼の技術は素晴らしいの一言だ。部隊の指揮能力、戦闘能力の高さ、それにASを含めた戦闘車両などの免許を習得している。」

相良「それがどうかしましたか？」

カリーニン「ぜひとも、ミスリルに迎えたいものだ！」

相良「!!！」

カリーニンの言葉に相良は……

相良「少佐！見ず知らずの男を勧誘するつもりですか！私は反対です！たしかに奴は高い技術を持った兵士かもしれませんが危険すぎます！」

全力で否定した。それもそうだ。全てが謎に包まれた上条を相良の部隊に入れたらどうなるか分からない。まして、今までの行動を上条が見過ごすとは思わなかったのだ。

カリーニン「できればの話だ。イギリス軍とは今掛けあっているところだが、なかなか承諾してもらえないのだ。気持ちはわかる。優秀で若い士官だ。そう簡単に譲れないのだろ」

相良「ふう〜」

カリーニンは残念そうに……相良はイギリス軍の対応に安堵して

いた。

カリニン「そんなことより軍曹！おまえの任務は千鳥かなめの護衛だ！ほかのことはこちらが対処する。任務に戻れ！」

相良「了解です」

相良は通信を切ると自分の任務に戻っていた……

\*\*\*\*\*

同時刻・・・トウアハー・デ・ダナン

カリニン「大佐殿、これでよかったですか？」

テッサ「ええ、相良さんが無理させてしまったら申し訳ありません」

マデューカス「しかし、大佐殿・・・本当に上条当麻の件は保留でよろしいのですか？」

カリニンを含め、発令所で会話しているのは、戦隊長のテレサ・テストロツサ大佐とリチャード・ヘンリー・マデューカス中佐である。

テッサは戦隊長であり、このトウアハー・デ・ダナン（TDD-1）の艦長であり、隣のマデューカスはその副艦長を務めている。

現在、相良の報告に上げた上条についての会議を始めていた。

テッサ「仕方ありません。彼についてイギリス軍がどうしても譲れないと言っているので……」

カリーニン「しかし、あの平和ボケをしている国にあのような者を置いておくのは宝の持ち腐れです。この際は本人に勧誘を進めてみては？」

マデューカス「少佐、やけにこの男にご執心だな」

カリーニン「私は才能がある戦士をただの飾りにするのはもったいなく思うだけです」

カリーニンとマデューカスは勧誘を進めるか否かと、上条を巡るを口論に発展した。

テッサ「2人ともそこまです。別にすぐにこちらに勧誘するのではなく、少し様子を見ましよう」

テッサの言葉に2人は口論を止めて、テッサの方に向いた！

マデューカス「わかりました。艦長」

テッサ「少佐、何か不服ですか？」

カリーニン「いえ、しかし、大佐殿・先ほどから調査書を見て何か、お気づきになられたのですか？」

テッサ「ええ、彼がここまでの武功をあげたのは、彼の不運だと思つて」

マデューカス「それはどういうことですか。艦長」  
カリーニン「私も説明を求めます」

二人の士官はテッサに説明を求めた。そして、簡単にまとめて説明を始めた。

テッサ「ようするに彼は運がないのです。彼が立つ戦場はほとんどが不利な条件ばかり、その指揮官が逃げたり、敵の罠の中だったり、弾薬がなかったり、この環境からをすべて、彼がまとめて勝利に導いていることがこの結果です。」

カリーニン「大佐殿の言う通りです。私がこの男を進めた理由はどのような条件下でも、正しい判断をし、作戦に成功をもたらす者だと思ったからです。」

テッサ「でも、この・・・負傷回数はどのように説明しますか？」

テッサはいたずら好きな悪魔のような顔して説明を求めたが、カリーニンは答えられなかった。

テッサ「作戦に勝利するのに隊員1名と高価な機材を破損させるつもりですか？」

カリーニン「そこまでは考えておりませんでした」

マデューカス「艦長、1名の負傷で作戦が成功するのなら、安いモノだと思いませんか？」

テッサ「マデューカスさん、その言葉は慎みなさい。私達は隊員をそんなに安い駒だと思っ

ていません」



マデューカス「申し訳ありません」

テッサの言葉でマデューカスは謝罪した。そして、話は終わりに近づいた。

テッサ「このことは、まだ話すのは早いけど・・・最近、イギリスのある組織が私設部隊を創るそうです。」

カーリーニン「まさか!？」

テッサ「そのまさかです」

\*\*\*\*\*

上条邸・・・6時30分頃

九朗「ここが上条の新しい住居か」

アル「広いな」

かなで「うわゝ武家屋敷か・・・」

美遊含めて4人は目的地の上条邸に到着した。

そして、初めてきた九朗達は屋敷の門をくぐっただけで啞然としてしまった。

美遊「みんな、中に入りましょ」

美遊はみんなに話しかけると、玄関を開けた!

美遊「ただいま」

上条『お！美遊、遅かったな。いったいどこに……うわー！』

??『どこ行くのよ。マスター？』

上条『クソ、放せ！今おまえに構って……コラ！乗りかかるなー！』

??『え~~~~~？いいじゃない、こんな美少女がこんなにサービ  
スしているのに！』

上条『クツ……上条さんにはそんな趣味ありません！いますぐ……  
うわー！』

??『ふふ……捕まえた。さ~~~~て、いただきます！』

上条『うわああああー！！誰か助けて~~~~！！グハツ！』

居間から上条と女性の声が聞こえた。美遊は急いで居間に向かった！

ガラ！（戸）

美遊「当麻お兄ちゃん！」

九朔「あら？」

そこにいたのは、仰向けになって気絶している上条に馬乗りしてい  
る九朔がいた。

九朔「ふ~~~~ん、マスターはこんな子（幼女）と暮らしているの

？それじゃ満足に欲望を満たすことはできないわけね〜」

美遊「あ．．あなたは誰ですか！？それに、お兄ちゃんから離れてください！」

九朔「それなら、力づくでやってもなさい．．それとも、一緒にマスターの欲望を満たしてあげる？」

美遊「ク！」

美遊は一瞬にして魔法少女になり、サファイアを九朔に向けた！

美遊「いますぐにお兄ちゃんから離れる！さもないと消しカスにする！」

美遊は完全にキレた！言葉には手加減するような雰囲気ではなかった。

九朔「あら．．少しは楽しましてよね。お嬢さん」

美遊「楽しむのなら．．地獄で楽しめ！！」

上条を巡って争いが起きる事態に発展した！

兄を押し倒れ冷静さを失った美遊と無理やり契約させようとする九朔との争いがいまここに．．

九朔「こんち．．わ！？どうした上条オオオオ！！誰にやられた！？」

かなで「え！？なに！？この状況！？」

アル「悲惨だな」

九朗達が家の中に入ってきて、居間に辿り着くとそこには、気絶している上条とお互い睨み合い今にも殺し合いそうな美遊と九朗いた。3人はこの空間を見て何が起きたかわからなかった。

上条「う．．．うう．九朗．．か．．．」

九朗「大丈夫か？　いつたい何があった！？」

上条「おまえの．．身内に．．．ガクツ」

九朗「上条オオオオオ！！」

上条は何かを言いかけて力尽きた（気絶）．．．

かなで「二人とも落ち着いて！」

美遊「離れて、この淫乱女を今すぐ抹殺するんだから」

九朔「あなたにできるなら、やってみなさいな．．ドンキーホーテ（道化）！！」

2人は互いに煽り続け、ストレスを溜めていく。いつ弾けてもおかしくないくらいに．．．

こうして時間が過ぎていき．．．問題も時が過ぎると同時に解決していった．．．

8：00PM

上条「いや〜こんなことがいつまでも続くとさすがに身体がもたないね！あはははは」

九朗「当麻・断言するが、笑ってられるほど、呑気な状況はではなかったぞ」

上条はこのような状況に慣れてしまったのか。もう笑って誤魔化する。

美遊「当麻お兄ちゃん、聞きますけど、この淫乱女はいつたい誰ですか？」

九朔「あら、まだやりたりないの？正直、私は同姓でやる時はMよりSなんだけどな〜」

美遊「クウウウー！！」バツ！

九朔「フツ！！」サツ！

二人はまた、構え始めた・・・どれだけ仲が悪いんだよ・・・

上条「コラ！喧嘩すんな！説明するから落ち着け！」

2人はしぶしぶ、武装と魔術を解除し、席についた。

上条「こいつは、九朔・・・九朗とアルはよく知っているだろ？」

九朗「九朔・・・え！まさか・・・」

アル「私達の・・・」

九朗とアルは名前を聞くと身体を震わせ始めた。

九朔「はじめまして、お父様、お母様。私は大十字九朔ですわ！」  
満面の笑みで九朔は挨拶をする。

九朗「あれ？だけど、九朔って・・・」

アル「男の子だったはず、だけど、汝は女の姿をしておる。ふざけておるのか？」

九朗とアルは何かが違うことに気付いた。それは、二人の子供は男の子のはずだったが、ここにいるのは女の子である。不審に思い始めた。

九朔「ええ、あなた達が生んだ九朔はたしかに男ですわ。だけど、現に私という九朔が存在しているんだから、認めてくださいな？お父様、お母様？」

九朔の紹介で、大十字家の家庭内問題に発展したため、残った者達は部屋の奥に行き、こっちはこっちで事情を聴くことにした。

上条「それで、なんでここにかなでがいるんだ？」

こっちではかなでがここにいるか。言い始めていた。

かなで「今日のことと謝りたくて」

上条「別に気にしてないのに、わざわざ謝りに来なくても」

上条は昼のことや部活のことは気にしていない。そうしないと次に襲いかかってくる不幸を耐えきれないから！

美遊「だから、言ったんです。当麻お兄ちゃんはそのうことは気にしないと」

かなで「これは私の問題です！謝らないと気が済まないです！」

美遊とかなでも女の関係上で仲が悪いようだ・・・

上条「いい心がけだよ！ウチの世界の美琴は、謝るところか。電流を倍にして返ってくるからな。」

かなでの心がけに上条は感心してした・・・元の世界の知り合いでも素直に謝る奴が少ないから・・・

かなで「あのく、こつちの母とあつちの母を一緒にするのはやめてもらえませんか？一応、こつちは色々・・・違つので・・・」

上条「ん！？ああ、悪い、悪い。つい、お前が礼儀正しいから比べたくなつてな。いい意味で！」

そして、話し合いが終わると全員で晩飯を食べ終わると時間は夜の9時を過ぎていたため、かなでを送ろうとしたが、隣町の交通手段がないため、部屋を貸すことになった・・・

## 上条の部屋

上条「はあ〜今日も疲れたな〜。早めに休むか・・・」

最近・・・いや、冬木に来てから休む暇がなかった。そのためか、上条の体力はかなり限界に近づいていた。

そのため、布団に寝っ転がると、一瞬にして意識が消えていた・・・

数分後・・・

上条（う〜ん・・・身体が重い・・・ん!?・・・重い!?)

上条は夢の中で身体に異変を感じ、嫌な予感が横切る

上条（おい・・・冗談だろ・・・まさか・・・）

上条が恐る恐る・・・目を開けると・・・

九朔「あら？もう起きたの？」

上条「九朔!?何やってるんだ。お前・・・」

上条の上に乗っていたのは、九朔だった!

九朔「やだ〜、正式な契約はまだでしょう!?だから、寝込みを・・・」

上条「おまえエエエ・・・人の唯一の安らぎを・・・」

上条は人の眠りを邪魔されたことに少し怒っていた。



九朔「それなら、安らぎの続きをどうぞ！その間に契約しちゃいますから！」

上条「ふ．．ぎ．．けん．．なアアアア！！」

上条は勢いよく起き上がるつもりだったが、お馴染みの拘束魔術で身動きがとれなかった。

九朔「では、改めて．．．いっただきま〜〜す！！」

上条「クソオオオオ！こんなところでー！ーッ」

九朔の唇が上条の唇に向かっていく．．．上条は急いで右手で魔術を触れようと必死になるがなかなか触れない。

後少して唇が接触する．．．九朔は勝利を確信した．．．．．と思いきや！

美遊「コラアアアア！！当麻お兄ちゃんから離れるオオオオ！！」

美遊が鬼の形相で上条の部屋に突っ込んできた！

九朔「チイツ！」

上条「美遊ウウウ！助か．．．ウガッ！？」

九朔が避けた瞬間、上条の腹に飛び蹴りが直撃し、上条は昇天してしまった。その後、後ろから．．．

かなで「どうしたの……って、大丈夫ですか!？」

かなでは異変に気づき、美遊の後を付けていたのだった！  
そして、上条の介抱に向かった。

九朔「やってくれますね……人払いの結界を張ったのに、それを破るなんて」

美遊「あなたがお兄ちゃんに危害を与えるのは読んでいたので、予め、サファイアに解呪を頼んでおいた。さあ……抹殺の時間です」  
サファイア「kill youです!」

そして、この二人は居間で行えなかった戦闘をここで行おうとしていた。現在、かなでは上条の介抱をしているため手が回らない……  
そして、九朗とアルは……部屋で爆睡しており、その場にはいない……  
また、誰も争いを止めることができる者がいない……と思いきや!

メサイア「ん!? 通信だ!」

メサイアはなぜか、寝むそうな声（デバイスなのに）を出して、通信を開いた。

大師父「こんにちは! いや、時差でそっちはこんばんわだったの。  
上条よ! 元気にやって……む!? なんだこの殺伐とした空間は!」

大師父が驚くのも無理はない。画面の前には、気絶している上条を介抱しているかなでと殺気だった2人が今にも戦いが始まりそうな

空間が広がっていたのだ！

かなで「あ．．あの．．あなたは誰ですか？」

大師父「む！？わしか？キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグじゃ！みなから大師父シユバインオーグと呼ばれておる。ところで、お嬢ちゃんは何者じゃ？」

かなで「私は、かなで・カミジヨウです。この当麻さんの同じ学校に通っているものです。」

大師父は現在の状況をかなでから確認すると対峙している2人に喝を入れ、大人しくさせた。

そして、大師父のお目当ての上条が目を覚ました。

上条「いてええ．．．一体何が．．．」

大師父「ようやく、起きたか。上条よ！」

上条「ん？．．．うわ！？．．．なんで大師父と通信してんだ！？．．．あ．．．．．」

かなで「ん？」

上条はいきなり大師父の声が聞こえたので、びっくりしてしまい、かなでの胸に手が触れてしまった．．．

上条「いや、あのですね．．．これは不可抗力と言う．．．」

かなで「いっつっやーいっつーッ！！」

バチバチ!! (電撃)

上条「ギャアーーーーッ!!不幸だあああ!!」

まさかのかなでの身体から高圧電流が流れ、上条は再び気を失った。  
・ちなみに触れた手は左手でした。

数分経過・・・

上条「それで今回の要件はなんですか？」

大師父「ふむ!上条よ!いますぐ、イギリスに戻ってこい!」

上条「はあ!？」

いきなり、イギリスに帰って来い宣言を言われ、その部屋にいる面子は啞然としてしまった。

上条「は・・・ははは!面白い冗談ですね。どこでそんな洒落を覚え  
たんですか?大師父」

大師父「今、迎えを向かわせた。いますぐ、時計塔に戻ってこい!」

上条「今すぐ!?!地球の裏に戻れというのか。あんたは!?!」

大師父「伝えたぞ!では待っているぞ!」

上条「こら待て!クソ爺!!」

一方的に通信が切られ、部屋に静かになった……

美遊「当麻お兄ちゃん」

かなで「あの……今の話は本当ですか？」

九朔「やけに、ハツチャけたご老体だねwww」

今さっきの通信で上条は……

メサイア「冗談……では、ないですね」

上条「はは……そうだな。その前に向かえというのが、気に……うわ!?!」

いきなり、部屋が魔術の光に包まれ、誰かが現れた!

絵美理「はいはい お迎えに上がりましたよ!お父ちゃん!」

上条「え……絵美理!?!どうして、ここに……って、うわ!?!」

現れたのは九朗達を突き落とした絵美理だった!現在、私服で、黒く長い髪をなびかせて、上条に飛びついた!その姿はまるで佐天の姿に似ていた。

絵美理「ひさしぶり!会いたかったよ……」

いきなりの登場に上条含め全員、反応にできなかった。

しかし、そんなことを関係なくことを進めるのが絵美理である!

上条「絵美理!どういうことか、説明してくれ!」

絵美理「愛果！長距離転移魔法！いいわよ！！」

上条「な！？」

絵美理は通信をすると上条と絵美理の下から魔法陣が現れ、2人をどンドン上条達が吸い込まれていった！

美遊「おに・・・キヤ！」

かなで「当麻さん！」

九朔「クツ！マスター！」

3人は急いで上条を救出しようとしたが、美遊は2人に阻まれ、出遅れてしまった！

絵美理「うわ！あなた達！？」

かなで「なに、人を拉致ろうとしてるんですか！」

九朔「勝手に現れて、私のマスターを奪わないでくれる！」

上条「お前ら、暴れるな！痛！こら！引っ張る・・・」

女性三人は上条を引っ張りあう。しかし、魔法陣は別の術師が行っているため、転移は止まらない！

上条「うわあああああ！！」

絵美理&かなで&九朔「「きゃああああ！！」「」

美遊「ウツ！！」

魔法の閃光が収まるとそこには・・・美遊だけ残り、上条含め4人の姿はなかった。

美遊「当麻お兄ちゃん・・・」

あくまで兄だけを心配する義妹・・・しかし、心配している暇は彼女にはなかった！

ピンポーン！

家のチャイムがなり、急いで、玄関を開けると・・・

ルヴィア「ごきげんよう！さあ！今日もカード回収に行きますわよ！」

美遊「・・・」

美遊は玄関を閉めようとしたが無理やり、ルヴィアに掴まれ車に放り込まれた！そして、そのまま拉致された・・・

運のない義兄妹は拉致られ、お互いの強制的に戦場に突き進められていくのであった・・・

続く・・・

## 2 1 結成！私設特殊部隊「FW」

2 1 結成！私設特殊部隊「FW」

3ヶ月前・・・夜中のある教会

神聖なる教会に偽善者達が・・・1人の見捨てられた女性を助けるために強大な敵と向き合った・・・しかし・・・

メサイア「もう限界です！逃げましょう！」

上条「はあ・・・はあ・・・はあ・・・クツ！」

力の差は圧倒的だった・・・だが、あきらめない。どんなに深手の傷を受けても、どんなに骨子が折れても、立ちあがる。それが上条当麻という人間だから・・・

シュン！シュン！シュン！・・・

グサ！グサ！グサ！・・・

上条「があああああー！」

無数の黒鍵が突き刺さり、吹き飛ぶ！上条は壁に叩きつけられ、再び地面に倒れる・・・

上条に向かって・・・足跡が近づく・・・それは死神が近づいてくる



のと同じだった。

黒鍵を投げた者は笑っていた！喜んでいた！人殺しを楽しんでいた！上条のなぶり、苦しめることに楽しむ。まるで、お気に入りの玩具で壊して遊ぶ子供のように……

??「どうしたの？それぽっち？それだけじゃないでしょ！？ね、もっと私を楽しませてよ！喜ばしてよ！これからまた、狭い部屋に戻らなきゃいけないんだから、最後までいちゃん踊りなさいよ？」

血に飢えた修道女は欲望に満足できず、上条の頭を掴み持ち上げた。

上条「うおおおおおー！」

力を振り絞って左手の剣・ベンセレ　モスを振るが、簡単に黒鍵で受け止められる。

??「あら〜！まだ元気があったの！じゃあ、もっと、もっと踊っていよー！」

上条「ウアアアアアー！」

上条は簡単に投げ飛ばされ、逆の壁に激突する。そして、地面に倒れる

??「な〜に〜？もうおしまいなの〜？私は、埋葬機関のN.O.1なのよ〜！？だから、あんたが強くないと、私が教会に怒られちゃうじゃん！ね〜え〜もつと、私と遊びましょうよ〜？幻想殺しさん？」

上条が相手にしているのは、聖堂教会の最高位異端審問機関……

埋葬機関のNo.1・・・トップにたつ女性・・・ナルバレック！最強で最凶の代行者！そして、上条が決して勝てるわけもない怪物！異端をすべて壊す殺人狂。

そして、今回は特例で、執務室という牢獄から出され、襲撃者を殲滅する任務に着いていた・・・

ナルバレック「ちょっと聞いてるう？相手が私だけなのよ！ほかの代行者はいないのよ？ちょっと本気出してよ？」

現在、ナルバレックが任務に就いている時点で教会は代行者の出すことはしなかった・・・それはナルバレックが凶暴な殺人狂に近い人物だから味方の被害を最小限にするためだった。

上条「クウ・・・ウウウウウ」

上条は立ちあがった。戦うための剣は折れ、左肩が脱臼し、足の筋肉も蜂切れ、身体全体に骨折と黒鍵が刺さっていながらも立ちあがる。

ナルバレック「あは 最高・・・最高よ！幻想殺し！今まで戦ってきた奴らの中では弱いけど、そこまで私を楽しませてくれる奴なんて初めてよ！！」

狂った狂信者は感激し喜びの声を上げる。戦いの相手に最高の獲物として再び黒鍵を構える・・・次は確実に仕留める勢いで・・・

上条「・・・」

メサイア「上条！もう無理です。やめてください！」

メサイアの言葉は伝わらない・・・身体全体の出血を無視し、折れた剣、破壊された盾と武器を外した。

上条「はああああ!!」

メサイア「上条!」

上条に残っているのは1/3の魔力、後、1度動けるくらいの体力、そして、決してあきらめない不屈の闘争心のみ・・・そして、ナルバレックに一矢報いるべく、身体に魔力を注ぎ込み、一気に飛び出し、相手の懐に入り・・・

バキ!

殴り吹き飛ばした。

上条の右手の拳が顔にクリーンヒットした。

上条「があは」

メサイア「上条ー!!」

これが上条の全身全霊の攻撃・・・届いた、しかし上条に残っている力はほとんどなかった・・・  
そして、その場で跪いてしまった。だが、目には闘争の炎は消えてはいなかった。

ナルバレック「あゝあ、せつかくの顔が台無し・・・どうしてくれるのよ?」

再び動き出す殺しに飢えた怪物が・・・狂った代行者が・・・

ナルバレック「もういい!今ので興がそがれた・・・もう消える!

「ゴミ虫イイイイイイ!!」

ナルバレックは両手に持つている黒鍵を投擲した!

約6本の剣が上条に向かって突き進む!

メサイア「上条!!」

上条「まだだ!」

迫ってくる脅威(黒鍵)にメサイアの魔法障壁が展開し防ぐ。しかし・・・魔力はほとんどない状態で展開しているため、障壁自体が脆かった。至る所にヒビが入り、数本の黒鍵が貫通したが、上条に直撃はなかった・・・

なんとか、障壁は持ち・・・すべての黒鍵を回避できたが・・・

ナルバレック「まだ終わりじゃ、ねえーよ!」

ナルバレックの手には黒鍵の柄が握られていたが・・・刀身がなかった・・・しかし、聖書のページが・・・刀身に変わり、完璧な黒鍵に生まれ変わる!

その黒鍵に何かの刻印を刻んで行った・・・

ナルバレック「もう・・・いい加減・・・逝っちまえ!」

投擲した黒鍵は3本だけだが・・・さつきより精密に・・・いきおいが増して、標的に突き進む!

そして、また障壁に阻まれるが、しかし・・・

バキン！

メサイア「うそ……」

上条「クツ」

メサイアが驚くのも無理もない……障壁が簡単に破れたのだ。

上条を守る物は何もなかった……

上条（クソツ、ここで終わりかよ……まだ……まだ、俺はあのイカレ野郎を……あの人殺しを……止めることが出来ていないのに！）

今の上条には、絶望も恐怖もない……ただ、あの人畜有害の怪物を倒すしか頭になかった……だが、身体が動かない……魔法も障壁を展開したため使えない……唯一できることは自分の最後受け入れるか……最後まであきらめないかの心の選択しか残されていない……

上条は当たり前だが、あきらめない！最後まで！

上条（まだまだ！まだ、終われるわけないだろ！）

上条は根性で身体を動かそうとするが、動かない……黒鍵はどんどん近付いてくる……

上条（間に合えエエエエエ！）

奇跡が起きた！身体がごくわずかだが動いた！

黒鍵の1本を回避できたが、後の2本が……

上条「ガハア・・・」  
メサイア「上条ーーーーー!!!」

上条の腹部に2本突き刺さるが、まだ終わらない。埋葬機関秘伝の黒鍵投擲方法・・・鉄甲作用により、当たると吹き飛ばされる!

そして、壁に激突し、身体を貫通した刀身が壁に刺さり、上条を磔にした・・・

ナルバレック「これで、トドメだ!受け取れええええ!!!」

そして、再び全力で黒鍵を投擲しようとする!

上条は回避できない・・・身体が固定されたためだ

クソオオオオ・・・まだ・・・まだ  
上条

上条「まだ・・・終われるかあああああ!!!」

上条は右手に先ほど外した右武装・・・バスターインパクトを装着し・・・ニードル部の固定を外した。

上条「バスター・・・」

上条は魔力の全てをメサイアを通じて武器に送られ、武器の真名と共にトリガーを引こうとした。

??「もっいいいよ」

上条「!！」

??「もういいよ!とうま・あなたは十分頑張ったから、もう戦わなくていいよ・・・」

その時、時が静止した!ナルバレックは投擲の構えを取りながら、その場で止まっていた・・・

上条「な・・・」

上条は気付いた。すぐ横に白い修道着に銀髪、エメラルドのような緑色の瞳を持った女神みたいな女性が立っていた。

女性「とうまは私を助けてくれた。そして戦ってくれた。もうそれだけで十分だよ・・・もうそれ以上自分を傷つけることをしないで」

上条「あ・・・ああ・・・」

上条は戦いで負った負傷の痛みが今になって押し寄せてきたため、激痛により言葉が出せない

女性「ジークもそうやって自分を傷つけることしかできなかつた・・・とうまも同じ存在なんだよね・・・他人の痛みを自分に押しつける癖は」

女性はにこやかに笑っていた、そして自分を傷つけることしかできない上条に怒っていた。同じ存在のジークにあれほど、言ったのに治らない・・・多分この上条も何度言って治らないだろう

女性「ホントはジークの不幸を消すため作った術式だけど、あの人

はいないから・・・とうま、あなたが代わりになって！」

上条「が・・・あ・・・」

上条は喋れない・・・女性の言葉に返事ができない・・・

女性は上条の胸に手を当て・・・詠唱を言い始めた

女性「  
」

上条は女性が何を言っているのか、まったくわからなかった・・・

女性「これを終わり、うまくいってよかった」

女性が手を離すと・・・上条の右手に何かの浮かびあがった！

上条「！？」

幻想殺しの右手には魔術が通用しないはずなのに、手のひらに術式の刻印が刻まれていたのだ！

女性「それは私の中の知識を色々と応用して作った。幻想殺し封じの刻印・・・完成させるのに時間を掛け過ぎちゃったよ！目的の人が居なくなっても意味が無いもの・・・」

悲しそうな顔をしていたが、それでも満足をしていた。

女性「だけど、とうまに会えてよかった！それにせっかく作った術式をそのまま持っていて意味はないし、あなたが代わりに使いこ



なしてくれれば、作った意味もあるしね」

女性は身体の向きを変え、ナルバレックの向いた！

上条「な・・・に・・・お」

上条は女性が何しに戻ってきたのか、分かってしまった！

女性「元はと言えば、あの人の目的は私だし、だから相手をしてあげなきゃ！」

女性はにこやかな微笑みを見せ、上条から離れていく・・・

上条「や・・・め・・・!?」

上条が止めようと声を出そうとしたら、背中から移転魔術の陣が現れ上条を呑みこみ始めた！

上条「あ・・・やめ・・・ろ」

上条は抗おうをするがそんな力は残されていない・・・徐々にその場から移転されていく

そして、時間が動きだし、ナルバレックは黒鍵を投擲した！

グサ！グサ！グサ！

女性に抗うことなく、黒鍵が突き刺さり吹き飛ばされた！そして、そのまま後ろの上条にぶつかり、一緒に移転した！

\*\*\*\*\*

教会から数キロ離れた森

九郎「おい！当麻大丈夫か！しつかりしろ！」

アル「これは重傷だ！動かさないでくれ！」

上条を助けたのは九郎とアルだった！

九郎達は違うところで埋葬機関のメンバーと戦っていたが、戦況が不利になり撤退、退路の確保をしていたのだ！

アル「あれ？」

九郎「どうした？」

アル「おかしい、いつもなら治癒魔術は右手の傷が癒えることはなかったのに・・・回復し始めている！」

九郎達は幻想殺しの力はよく知っている。そのため、治癒魔術を使ったとしても右手の傷だけは治癒されないに現在どうしてなのか魔術が効いているのである

上条「く・・・うっうっ」

九郎「目が覚めたか！一体何があった。当麻！」

上条「九郎・・・あの人は・・・？」

上条は目を覚ましたが、まず始めに女性のことを気にした

九朗「それは・・・」

九朗は後ろの草むらで寝かされている女性を見た

九朗「それが、心臓や色々とやられて・・・もう・・・長くない・・・」

上条「!!」

上条は今の傷のことも関係なく勢いよく起き上がり、女性に駆け寄った!

上条「おい!しっかりしろよ!」

女性「あ・・・無事に転移・・・出来たようね・・・」

女性は血まみれで白い修道着が真っ赤になるほど出血しており、口からは吐血をしたのか・・・赤く染まっていた。息もほとんど虫の息だった

上条「なんで、俺の治癒をしているんだ!先にこっちが先だろ!」

上条は怒鳴る!自分より重傷者がいるのに、それを助からないからあきらめていたからだ。

女性「それは・・・私が・・・頼んだの・・・」

上条は驚き、再び女性の方に向いた

女性「私は・・・ホント・・・なら・・・あの・・・教会で・・・殺されて

いたのに・・・」

上条「もう、いいからしゃべるな！」

女性は話をやめない

女性「だけど・・・ここで・・・私を・・・看取ってくれる人が・・・いるんだから、私は幸せだよ・・・」

上条「そんなことを言うな！」

上条は否定するように声を荒上げる、その後ろの九朗達も悔し涙を流していた。

女性「ありがとう・・・私を心配してくれて・・・それにゴメンね・・・こんな苦しい思いさせちゃって・・・」

女性はやさしく微笑みながら片手を持ちあげ上条の頬を撫でた。その時から上条の目から大粒の涙が零れていた。

女性「だけど・・・そんなに悲しまないで・・・とうまには・・・まだやることが・・・あるんだから・・・ここで立ち止まらないで・・・」

上条「くうっくうっ」

女性は上条を慰める・・・泣いている子供を落ち着かせるように・・・

女性「そして・・・幸せになってね！・・・とうまが幸せに・・・

なることが・・・みんな・・・願っているから！」

そして、女性は上条が幸せになることを願った・・・上条の幸せを願う人は多くいるが口にするには無い・・・だけど、彼女が最後だからあえて言う・・・幸せになれと・・・

上条「！！、おい！」

上条を触っていた手が力なく落ちていく・・・それを上条は受け止め、手を握る・・・その手は氷のように冷たくなっていた

女性「会えてよかった・・・上条当麻・・・また・・・どこかで・・・会いましょうね・・・」

上条「だめだ！逝くな！」

女性の意識は消えていく・・・まるで蠟燭の灯火が消えかかるように

女性「あの人・・・待って・・・いる・・・じい・・・く・・・

上条「インデックスウウウウウウ！」

上条は叫んだ！元世界のとても身近でお騒がせな居候の名前を！  
そして、上条の手から彼女の手が滑り落ちた・・・

インデックス「

息を引き取った・・・その顔には苦しむような表情は無く、むしろ

気持ちよく天に召された顔をしていた・・・

上条「う・・・うああああああああああああああ！！！」

上条はインデックスの前でうずくまり、泣き叫んだ！体験もしたことない悲しみと苦しみをすべてを涙と叫びに変えた・・・

この世界に来て、上条は初めて人の死を見た。自分の無力差が改めて思い知った。

それ以降、上条は変わった・・・もうあのようない悲劇を起さないため、身につけられる技術を身体に刻み込み、自我流の魔術・・・異能消滅を編み上げ・・・イギリス中の魔術師達を震え上げさせたもう1つの異名「魔術師殺し」が広がったのはその事件後の2ヶ月後のことだった・・・

自分を徹底的に変えた・・・ただの学生から戦士に・・・無能力者から魔術師に・・・甘すぎた考えを改め・・・そして自覚した。昔の自分では守れるモノも守れないと・・・

もう2度と大切なものを壊させたりしない・・・

\*\*\*\*\*

上条「ハッ！」

メサイア「大丈夫ですか？上条」

上条が目を覚ますをそこはどこかの部屋のベットだった。

上条「メサイア、ここはどこだ？それから俺はいつまで寝ていた？」

メサイア「ここは時計塔の元あなたの部屋です。そして、ここに到着して約2時間ほど立っています。」

上条「そうか・・・」

メサイア「どうかしました？」

上条「悪い夢を見た・・・3ヶ月前の悪夢・・・」

メサイア「あのことですか・・・」

上条は2時間の間、三ヶ月前の悲劇を夢の中で見ていたのだ。それは上条の心を今だに蝕む起きてしまった過去・・・人生の中の自分を変えた出来ごと・・・そして、大切なモノを壊された悪夢

メサイア「上条！？どこか痛むのですか？」

上条「ああ！古傷が・・・右手の刻印が痛む」

3ヶ月前の傷はほとんど治ったが腹部に黒鍵で刺さっていた跡は消えていない。そして、あのことを思い出す度に古傷が疼く・・・

メサイア「古傷は分かりますけど・・・右手は？」

上条「多分、刻印が幻想殺しと反応したんだろう・・・時々痛むん

だよ」

こちらのインデックスが作った幻想殺し封じの刻印・・・現在その効果はメサイアがあるため意味がない・・・そして、まだ完全に馴染んでいないのか意識しないと効果は発揮されないのだ・・・そして、刻印自体が幻想殺しを封じるため力を常時開放し、力が打ち消し合い右手に激痛が走る時があるのだ

メサイア「それは・・・ご愁傷様です」

上条「だあゝクソ、それで・・・ほかの連中はどうした？」

メサイア「それは・・・」

ガチャ！（扉が開く！）

絵美理「おはよ～～～ お父様」

上条「」

上条「これは・・・何の冗談だ？」

部屋に入ってきたのは絵美理だった！しかし、服装が違っていた・・・  
・拉致られる時の私服ではなく・・・メイド服！！

絵美理「あれ～～まさか似合わない？」

少し上目使いの涙目で上条を見る

上条「いや！よく似合っているぜ！」



親指を立て思いきり褒め立てる上条であった……

絵美理「そお！！やったー！！」

上条「ははは……で？なんで俺を連れ戻したか。そろそろ教えろ！」

上条はその場の空気に流されず、絵美理に真実を問いたです！

絵美理「あははは……さすがに、そのことは私では話せないから……」

上条「なら誰に、聞けばいいんだ？」

絵美理「今から説明する人の所にいくから話はそこで！」

上条「それは誰だ？なぜ名前を言わない？」

絵美理「あははは……」

絵美理は笑って誤魔化す……しかし、上条は言わなくても誰なのかはつきりしていた。

上条「まあいい、あのクソ爺がだろ……どんな言い訳を聞かせてくれるか楽しみだ……ふふふ……」

絵美理「そうだね……あはははは……（言えない……あの  
人なんて言えない）」

絵美理は上条が大師父だと思っているが実際は違うのである・・・  
上条は知るよしもなかった・・・

上条は起き上がると、絵美理と共に移動をした。見慣れは時計塔の回廊を歩いていると顔見知りの魔術師達で出会っては、雑談したりしたので、実際、目的地にたどり着いたのに、1時間以上も掛かってしまった。

時計塔・・・とある部屋前

上条「さて、着いたな」

絵美理「ええ・・・」

上条「あのクソ爺・・・どんな顔して待っているだろうな」

絵美理「あはは・・・」

絵美理はこの扉の向こうに誰が居るか知っているが、話さない・・・それは・・・喋ったらただでは済まされないから！

上条「あれ？絵美理は入らないのか？」

絵美理「私は迎えに行くように言われたただだから、ここで別れま  
す」

上条「そうか、でもどうした？顔が青ざめれいるぞ？」

絵美理「大丈夫！そう見えるだけだから・・・では、お気を付けて  
！」

絵美理は走り去った・・・疾風の如く

上条「なんなんだ？絵美理の奴」

メサイア「いずれわかりますよ」

メサイアは上条に聞こえないように呟いた・・・

上条「よし！入るか！」

ガチャ！

上条「おい！大師父！人をなんだと・・・うおおおおお！！」

部屋に入った瞬間、こめかみに女の子モノのヒールのつま先が刺さり、上条はその場でのたうち回った！

??「遅い！何をもたもたしていたのですか！」

上条「ハッ！この声は・・・まさか・・・」

部屋の奥から女性の声が聞こえてきた。上条は聞き覚えがある声に身体全体から冷や汗をかき始めた・・・

??「ここが軍隊なら、即処分されていますわよ！」

上条「うそでしょう・・・どうして、あなたがここにいるんですか

「？」

上条は立ち上がり声の主を見たら驚愕した。

??「私がここにいるのがそんなに不思議？それでも魔術には関わりがありませんわよ」

上条「そうじゃなくて、どうしてここにいるのですか！イギリス軍指揮官にして国防相のシャルロツテ・マジステイア様！」

上条は軍隊の直立姿勢になり、敬語で質問をした。

現在、部屋で上条が来るのを待っていたのは・・・上条が会いたくない人物でNo.1に近い人物・・・そう、このイギリスで最年小でイギリス軍指揮官と国防相に上り詰めた「白薔薇姫」と言う異名を持ったイギリス中のアイドルにされている絶世の美女・・・シャルロツテ・マジステイア！現在年齢25歳！その美貌は世界中の男たちを魅了する美しさ・・・しかし、上条にしては恐怖に過ぎない人物なのだ！

シャルロツテ「私がどこ居ても構いませんではないですか！ここはイギリスですよ？私の国ですよ？私の庭ですよ！？」

上条「うわ・・・さりとイギリスを自分のモノにした言い方だ・・・ぐおおおおおおおおお！！」

かなで&九朔「ヒツ・・・」

再び、ヒールが飛んできて、こめかみにスラッシュヒット！上条はまた床の上でのたうち回る・・・

そして、その隣で椅子に座っているかなでと九朔は上条がやられている所を見て震え上がっていた。

ちなみにシャルロットは人前だと猫を被るが、上条などの関係者達には腹黒い一面を見せる。

上条「はあくはあく・・・それで、大師父はどうしたのでありますか！指揮官シャルロット様！」

シャルロット「ここでは、お姉様と呼びなさい！」

上条「え？なんでここで・・・だあああああああ！！！」

今度はペンがこめかみに刺さる・・・途轍もない命中精度！そして、上条は軍隊の指揮官であるシャルロットの前では動くことも避けることができない。そのため、絶対に命中するといっても過言ではない・・・上条の反応は以下略

上条「それでお姉様！大師父はどうなったのでありますか！」

シャルロット「敬語はもういいわ。大師父は異世界に旅をしに行きましたわ！」

上条「え？」

まさかの事態に上条は驚き静止した・・・

シャルロット「そこで代わりに貴方の面倒をみることになったから、そのための挨拶にきたわけ、わかった？」

上条（最悪だーーーーーッ！！）

上条は今まで味わったことのない絶望に身体を震わせ、思考がフリーズしてしまった。

シャルロツテ「返事をなさい！」

シュン！グサ！

上条「ぎゃあああああああ！！不幸だーーーーーッ！！！」

かなで&九朔ガタガタガタブルブル……

今度は、コンパスが……上条の反応……以下略

かなでと九朔は二人で身を寄せ合い震えていた……

上条「そうですか……では、失礼します……帰るぞ。二人とも」

かなで&九朔コクコク

上条達が部屋の扉に向かおうとしたら……

シャルロツテ「まだ、話は終わっていないわ。どこ行くつもり？」

まるで逃がさないと言わんばかりの言葉に上条は震えながらシャルロツテの方に戻っていた。

上条「は……話というのは？」

シャルロツテ「あなたに私設部隊の隊長をしてほしいの！」

上条「はい？」

かなで&九朔「え！？」「」

シャルロツテ「私の直属の特殊部隊のね！」

シャルロツテは笑顔で上条に話しかける・・・これはただ事ではない  
・・・

上条「ふ・・・ふざけんな！お姉様！今の俺は日本でクラスカードの回収やその他の・・・」

シャルロツテ「それはすべて後廻し、こちらの方が優先、これは決定事項です！」

とても美しい笑みが上条に取っては悪魔の微笑みに近かった。

上条「辞退します！辞退させてください！俺には荷が重い！いや、重すぎて潰れてします！」

シャルロツテ「大丈夫！編成するメンバーはみんな顔見知りだし、まして貴方にとっては扱いやすい部隊ですわ！」

上条「いやです！絶対いやです！この際、魔術協会から抜けます！」

上条は2人を連れ、そのまま部屋を出ようとすると

シャルロツテ「承諾しない場合、上条当麻を封印指定にし、即ホル

マリン漬けの標本にします！」

ピタ！

上条の動きが止まった・・・封印指定・・・それは学術的に到達不可能な領域に至った魔術師に送る称号であり通達。ホルマリン漬けの標本として一生涯幽閉されることになるので、これを受けた魔術師は大半が協会から離反するのである・・・現在、上条も異能力消滅というバカげたチート魔術を編み出し行使するため、封印指定の候補者に上げられているのだ・・・

シャルロツテ「それに美遊ちゃんだっけ？あなたの義妹？あの子、魔術を知っちゃったのよね～～～それにその2人も色々珍しいわよね～～～どうなってもおかしくはないわよね～～～」

上条「あなたという・・・人はあああ」

上条はドアノブを握りしめる・・・ここを出ていけば、間違いなく封印指定に受け、美遊達もこの女に・・・上条はこの要求を拒否することは出来るはずもない。

上条「わ・・・わかりました・・・引き受けます」

シャルロツテ「うん！いい返事ね！さすが、私とルナスが見込んだ男ね！」

上条は渋々承諾し、シャルロツテは笑顔で書類に名前を書き込んでいく・・・上条の命運は全てこの女（悪魔）に握られてしまったのだ・・・



上条「はあ〜〜それにしても、よくウチの大佐が許したな」

シャルロツテ「いいえ、私の独断よ？ルナスには伝えていないわ」

上条「なッ！いいのか！？それって・・・俺が大佐に会ったら・・・殺されるじゃないですかああああ！！」

大佐もしくはルナスとは・・・上条を士官の少尉の階級を与え、現在、陸軍の一個師団をまとめる戦隊長！上条はその人の直属の士官だが、魔術協会・大師父から頼まれた任務が優先度が高いため、軍隊から離れたが・・・もし、知らない内に違う部隊に配属されたとすれば、間違いなく上条は殺される。

シャルロツテ「大丈夫よ！ルナスには私から言つとくから、別に殺すまではしないわよ！だってルナスはあなたを・・・」

上条「わあああああ！殺される！殺される！大佐があのでカイエモノを構えて襲ってくるううううう！！」

上条は混乱して騒ぎ出す、ルナスに会ったら殺される想像したのか。意味不明はことを言い始めた。

シャルロツテ「・・・まあいいわ！さあ、移動しますよ！」

シャルロツテは別の意味で言おうをしたが上条がこの状態なので言うのをやめ、椅子から立ち上がった。

上条「ん？一体どこにいくですか？」

シャルロツテ「秘密基地よ！」

シャルロツテは部屋全体に移転魔術を展開した！

上条「またかよ!？」

かなで&九朔「私達も巻き沿い!？」

そして、部屋には誰も居なくなつた……

\*\*\*\*\*

上条「またかよ」

かなで&九朔「ムキユ〜〜〜」

上条はこれで何度めになるか分からない転移魔術に呆れてしまい、女2人は完全に伸びていた。

上条「ここはどこだ？」

匠「久しぶりだな、上条」

玲二「なんてざまだ・・・シャツキリしろよ」  
士郎「大丈夫か？当麻？」

上条「あれ？匠！玲二！それに士郎さん！どうしてここに？」

上条に話しかけてきたのは、左から熱田匠・・・上条がこの世界でもっとも信頼できる親友であり、高い戦闘能力をもつ妖怪の血を引く男性！彼専用の武器・布都御霊（通称フツノ）という大剣を使い回す！

そして、クールに上条に手を差し伸べるのは・・・吾妻玲二・・・上条との仲は至って普通であるが、事件などに巻き込まれるとお互い助け合う仲である。元はヒットマンをやっていたため、暗殺術や銃器による狙撃などは得意分野である。

最後に上条を心配しているのは衛宮士郎・・・説明以下略

士郎「俺は・・・知らないうちにここに拉致られてた・・・」

士郎は家に帰り、早めに休んでいた所を・・・拉致られ現在に至っている。なんと哀れな人なんでしょう。

匠「俺たちは・・・」

玲二「なんて説明すればいいか」

2人は頭を抱えてどう説明すればいいか迷っていた・・・考えていると上条の後ろからおしぼりが出てきた。

愛果「お父様・・・使います？」

上条「あ！ありがとう・・・いや〜いつもすまないね〜って！何やってんの！？愛果！？」

愛果（ビクッ！）

上条におしぼりを渡し、突っ込みにビクリしている女の子は、愛果・・・紫色の髪に二重まぶたが印象的な女の子・・・五和とそっくり！そして、絵美理と同じなぜかメイド服

沙織「父上！あまり愛果をいじめないでくれ・・・」

上条「沙織！？どうしてお前もここにいるんだ！？どうしてメイド服！？」

沙織「そ・・・そんなにジロジロ見ないでください・・・父上・・・恥ずかしい」

次に出てきて恥ずかしがっているのは沙織・・・ポニーテールの長い髪が特徴のクールな女の子・・・これも神裂火織にそっくりなぜか同じメイド服

シャルア「あらあら、沙織ちゃんに目がくぎ付けなつて私達のことを忘れないでくれないかしら？」

麻理「そつよ！ひどいですよ！親父！」

上条「ああ・・・いちいち反応するのが嫌になってくるよ・・・シャルア・・・麻理」

その次に出てきたのは嫉妬の声を上げるのはシャルア・・・金髪のお婆ちゃん的思考回路を持つ美少女・・・完璧なほどにオルソラに似ている！格好以下略

そして、そのその横でツンツンしている麻理・・・ここにいる女性の中で1番胸が大きいのはこいつであり、いつもツンケンしている性格が特徴・・・その姿がまさに同級生の吹寄整理に瓜二つだった。格好以下略

絵美理「あははは・・・大変なことになったね。お父ちゃん！」

清花「ごめんなさい。お父さん・・・ホントは強引にするつもりは・・・」

上条「笑って済ますな！絵美理！・・・後、清花、あまり気にしていないから謝らなくてもいい」

絵美理は以前から出てきたため説明は中略、とにかく佐天に似ている。服装はそのまま・・・

最後に話しかけてきたのは清花・・・花の髪飾り（親譲り）が特徴の少し天然系の女の子・・・これも初春に似ている・・・絵美理と並ぶと完璧なほど、いつも絡んでいる2人である・・・ちなみに上条は佐天達のことには知らない。

上条「はあくどうして・・・どうして、こんなに知り合いばかりなんだあああああ！！」

シャルロツテ「だから、言ったじゃない。全員知り合いだって」

後ろから上条は突っ込まれ、呆れを通り越してしまい突っ込み返す気力がなかった。

上条「1つ聞いてもいいせうか？」

シャルロツテ「ええ、どうぞ」

上条「どうして、みんな、女はメイド服？それに匠達はなぜに黒服？」

上条は一番疑問に思ったこと、なぜか、ここにいる面子・・・シャルロツテと上条含めた3人を除くをすべてがどこぞの屋敷の使用人姿・・・それも一番見覚えがあるデザインで・・・

シャルロツテ「あら？私の家の使用人達だからですわよ？」

上条「うそだろー！ー！？おいお前ら、俺が時計塔を離れて何があった！それに土郎さん、なんであんたも！！」

男性陣はそれを聞かれるのは嫌だったらしく、顔を逸らす・・・女性陣は苦笑していた。

土郎「ここに連れてこられたら、着替えさせられた・・・」

匠「ここに呼ばれたら・・・無理やり」

玲二「俺は元からだか？」

土郎と匠は無理やり着せられ・・・玲二自体は元から使用人として働いてため普通に答える。

上条「で？お前らは？」

上条は次に女性陣の方に聞くと・・・

愛理「私は・・・」

沙織「愛理と私は簡単に言つと、金銭的問題で」

上条「なんでだ？おまえら親からの仕送りがあるだろ！？」

上条が問いただすと・・・

シャルロツテ「ああ！その子達、家の屋敷の花瓶割っちゃったから、弁償のお金が足りなくてウチで働いてもらっているのよ」

シャルロツテの発言に上条は驚いた！

上条「一応、聞くがいくらだったんだ？花瓶・・・」

シャルロツテ「そんなに大したものではないわ。たったの（バキーン）よ！」

上条「そんなに！？あんたは鬼か！？悪魔か！？子供になんて金額を押し付けてるんだ！」

上条は驚き金額に怒る。普通そんな金額、働いても一生返しきれぬわけがないお値段だったのだ・・・

シャルロツテ「だから、ここにいるんじゃない！」

上条「・・・」

ああ・・・なんて哀れな子達だ・・・こんな悪魔にいいように使われるなんて・・・と心の中で叫ぶ上条であった。

上条「それでシャルアと麻理は？」

次に矛先を向けたのは……この天然お婆ちゃん娘とツンツン娘だった。

シャルア「私は愛理ちゃんと沙織ちゃんが働いていた所を見ていたら、知らない内に働いてたの」

麻理「わ・・・私は、シャルア達を捜していたら、知らない内に働いてた・・・」

上条「ああ・・・なるほど・・・」

この二人も悪魔に被害者か・・・シャルアは2人の姿を目撃した所を麻理は拉致に近い状態だったのだな・・・と納得した。

上条「そんで、最後のお二人はどんなことがあったのかな!？」

そして、最後のお約束の二人・・・

清花「私はお嬢様にスカウトで雇われて・・・」

上条「まあ・・・清花が目を付けられても仕方ないからな・・・ご愁傷様」

精華「いえ、みんながいるから大丈夫ですよ!」

精華は現在の世界の情勢で途轍もなく戦力なるスキルがあるため、この悪魔が目を付けスカウトするのは時間の問題だったことはイギリスに居た頃から分かっていた・・・これも一応、被害者・・・

上条「んで?最後のお前は?」



絵美理「え！？私？楽しそうだから！！」

パシーーン！！

広い空間にどこから出したのか分からないハリセンのいい音が鳴り響いた・・・

絵美理「いた~~~~い、どうして、叩くのよ！！」

上条「それは自分の胸に聞いてみる！！」

絵美理「え~~~~と、私のバストは・・・」

上条「胸の大きさは聞いてないわ~~~~！どうして、お涙頂戴の悲しいきっかけが続いているのにどうしてそこでオチ的なセリフがサラリと言えるんだよ！！」

絵美理「仕方ないのよ・・・私には・・・何もないんだもん・・・」

絵美理は泣きそうになっていた・・・周りは理由があるが、絵美理には何もなかった。ほかの人達より主だった取り柄が無いと思いいんでいるのだ・・・

上条「たく、何を言ってるんだ。現にここに居るんだから、何もなわけじゃないだろ！何を思いこんでいるか知らないが、あまり自分を責めんな！お前はいつもみたいに笑っているよ！それにお前が暗くなるとみんなにも感染するだろ！いつも通りにしてるよ」

上条は何気に励し絵美理の機嫌を元に戻し、新たなフラグを立てる。  
・  
・

絵美理「そうだね！ありがとう！お父ちゃん！」

上条「わかったから、飛びつくな。張り付くな……って！みんな  
落ち着け、デバイスをしまえ！怖い！怖すぎるぞ！お前ら！」

絵美理が上条に張り付いた瞬間、女性陣が動き出す……  
この5人……かなでと同じデバイスを持っている……しかし、  
全員形が異なる。

愛果……槍

沙織……刀

シャルア……十字架

麻理……スパイクグローブ

清花……盾

特に愛果、沙織、麻理は攻撃系で戦闘力は高い、残りのシャルア、  
清花は援護系のため、戦闘力は低いがその分の補助能力が高い。

だが、そんなことは関係なく全員工モノを構え、勢いよく……

上条「ちよつと……やめて……」

5人「……はあ……！！」「……」

5人は一斉に襲いかかってきた！

上条「ふ・・・不幸だーーーー！！！」

お決まりのセリフの後、袋叩きに合うと思いきや・・・

ガキーン！！キーン！！バシン！！

絵美理「だめだよ！みんな～～～そんなんで嫉妬しちゃ！」

かなで「大丈夫ですか！？当麻さん！」

九朔「モテモテだね！マスター」

上条を庇ったのは、絵美理、かなで、九朔だった。

絵美理の手には棍棒型デバイス「アーター」を握りしめて沙織の刀型デバイス「エリス」を抑えていた！

そして、今さっきまで気絶していたかなでは麻理のグローブ型デバイス「ヘーテラー」・清花の盾型デバイス「アパター」をかなでのデバイス「ピロテス」の自律兵器「フランクス」が障壁を展開し二人を抑えた。

最後に九朔は血の拘束魔術で愛果と槍型デバイス「ネメシス」・シヤルアと十字架型デバイス「ニユクス」ごと血の紐で絡みつけ行動不能に追いやった。

これにより、上条を襲う驚異はすべて防いだ・・・それにより上条の制裁タイムがまさかの乱闘戦になり、魔術と魔法の撃ち合いになった・・・

上条はその戦いから逃れ、安全圏まで撤退した。



性の比率が大きいのになんでそこに、30名近くのメイドさんが加わるだ！？それにこれも軍隊だよな！？特殊部隊だよな！？国防相の隠密親衛部隊だよな！？」

シャルロツテ「ええ、だから私の直属部隊だから私直属の部下メイドを加えたのよ？」

上条「おかしい・・・絶対におかしいよ。この部隊・・・」

上条はひどく残酷な現実を苦しめられるのである・・・この先ずつと・・・

数分後・・・

シャルロツテ「では、ここに新たな部隊の設立を宣言します！」

女達の乱闘が落ち着くと、全員、軍服に着替えた。

デザインカラーは主に黒で統一されている。それは隠密の行動を想定して誰かに目撃されても、どの国かわからなくするための作られた軍服。正体不明の軍隊と思わせるデザインである。

シャルロツテ「部隊の構成を改めて説明する！部隊長を上条当麻、副長を熱田匠とする。そして、部門担当で諜報部の担当責任者を吾妻玲二と衛宮士郎が担当する。・・・」

その後、ズラズラと説明が続く・・・

シャルロツテ「以上です。何か質問がある者は？」

上条「はい」

シャルロット「なんででしょう?」

上条は説明の中に1つ大事なことを忘れていると気付いた。だが、それは上条だけではない・・・ほかのメンバーも気付いていることだった。

上条「部隊名はなんと呼称すれば?」

シャルロット「それは貴方が決めることです。私は関係ないことです」

まさかの部隊名は考えていなかったというオチ、全員呆れてうなだれてしまった・・・

シャルロット「できるだけ分かりやすいのをお願いね!」

上条「何かないか。みんな」

上条は全員に聞くさすがに自分1人で考えるのは大変だから・・・

愛果「え〜〜と、黒で統一された服装で特殊部隊ですから・・・  
バーゲストってというのはどうですか?」

上条「以外にいいかも!」

沙織「いえ、ここは黒騎士とはどうでしょう」

上条「候補その2だな」

シャルア「使用人さん部隊〜〜〜!!」

上条「現実から離れてくれ!」

絵美理「愉快なご奉仕部隊」

上条「ふざけんのも大概にしろ!!」

だんだん主旨が離れていき・・・無駄の時間が過ぎていた・・・

上条「じゃあ最終的にどうするか・・・」

九朔「みんな仕方ないわね〜じゃあ、私がひとつ過ぎて案を出してあげるわ」

最後に九朔が提案を出した。彼女は部隊の正式のメンバーには入らなかったが、一応オブザーバーとして入ることになった・・・色々脅されて・・・

九朔「フォックスワードって、どう?」

上条「狐の言葉という意味か?」

九朔「ええ、狐は人を化かす・・・違う意味で「偽善使い」と言う意味よ」

それは上条が記憶が無くなる前に言っていた言葉・・・上条は覚えているわけではない。

上条「偽善使いか・・・いいんじゃないか？」

上条はOK・・・、全員も異議ないらしい・・・それにほとんどがお人良し&偽善者の集まりと自覚していたので全員納得してしまっ  
た。

そんな意味で・・・部隊名を「フォックスワード」通称「FW」と  
決定した。

シャルロツテ「それじゃ！特殊部隊FWはこれより組織殲滅任務作  
戦に参加せよ！いっぺん、私と国のために死んでこい！野郎ども」  
~~~~~  
「

全員「~~~~~はあ!？」「~~~~~」

まさかの即行で戦地へ送られることになることになり、正確な反応  
ができない、いやむしろ、いきなりすぎて突っ込めない!!

上条「コラー~~~~!!設立してたったの数分で行動なんてどこ  
のインスタントな部隊だ！それと縁起でもなく、死んでこいなんて  
言うな~~~~!!」

シャルロツテ「いいから逝きなさい！さもないと貴方の恥ずかしい  
失敗談をネットに流すわよ！」

上条の反論は脅しでかき消された・・・他の面子も反論したかった  
がやめた。どんな弱みを言われるか、怖くて黙っているしかないの  
だ。





21 結成！私設特殊部隊「FW」（後書き）

最近、オリジナル展開が激しくなったため、読んでくれているみなさんはどう思っているか。感想を待っておりますが、少ないので少し困っています。

どんなことでもいいので、ご感想を聞かせてもらえると光栄です。  
ご協力お願いしま

## 解説4 (前書き)

今回は新たな登場人物の紹介です！

## 解説4

### 解説4

#### キャラ紹介

#### 「カミジヨウ・チルドレン」

ジーク・カミジヨウの子供で全員、血が繋がった娘達のこと。  
ジーク争奪戦で最終的にこのままでは死人が出ると予測したジーク本人が止めに入り、どうすれば争いが止まるか話し合い、あるヒロインが子供を作ったら身を引くと答えた為、ジークはやむえなく承諾をする。そこである知り合い機関に依頼し、遺伝子を提供する形の人口授精を6人の女性が行う・・・例外として、美琴は正式な妻のため、子供のかなでだけは、×××××をして生まれた。全員、血が繋がっているため、腹違いの姉妹となる。  
6人が持っているデバイスはジークが誕生祝いと護身用に作ったメサイアを似せて作った第二世代型機ですべてとある女神の名前で統一される。性能は各デバイスによって異なり、戦闘型と援護型に分かれる。どれも元になったメサイアには劣る。

かなで・カミジヨウ 15歳

デバイス：ピローテス 長距離射撃攻撃型

ジークと美琴の正式な子供。

母親と顔は似ている。髪は少し黒い栗色の髪で父親の血も引いていると確信できる。性格は基本的に父親譲りのやさしく、時に母親の

わがままがポロリと出るときがある。現在上条と同じ穂群原学園高等部1年A組に入学しており、かなりの優等生で男女問わず人気がある。そして、父親譲りのフラグマスタースキルがあるためか。異性との出会いが多くプロポーズされる時があり同姓から反感を買う……上条と同じくらいに……

しかし、そんなものに興味がないかなでだが、上条と出会い今まで我慢していた父親に対する感情が爆発したため、少しでも長い間一緒にいる時間を作り甘えたいため色々奇策を練る……裏では上条のことを「パパ」と呼んでいる。

ほかの6人の姉妹とは親の待遇が違ったため、妬まれる時があるが基本的に良好な関係にある。

固有能力では、主に母親譲りの電気使いだが、少し弱いレベル4くらい、それと高度な移転魔術、それはこの世界の黒子が彼女に技術を教えた為であり、少し離れた場所でも正確に転移が出来る。だが、その師である黒子は変態に近いたため彼女はあまり好きではない……そして、かなで特技は長距離射撃で美琴みたいにコインを弾くレーザーガンではなく、デバイスの大型ボウガン「ランキュラス」で精密射撃をする。姉妹達の中では射撃に関する事で右にですものはいない……後、機械いじりが好きなのでデバイスを自分好みに改良するほどの腕がある。

愛果 15歳

デバイス：ネメシス 槍型中距離攻撃型

この世界の五和が生んだ娘。

父親の血は引いているが外見ではほとんどわからない。ほとんどが母親に似ており、性格も純粹だが、怒るととても怖い……いつもは沙織と共に行動している。その理由、父親の体質を引き継ぎ、異

性とはあまり関わらないようにしている。

上条とは時計塔に来て2ヶ月くらいに沙織と一緒に出会う。その後上条のことを「お父様」と呼ぶようになる。所属しているのは魔術協会で学生として勉学に励んでいたが・・・最近ではマジスティア家のお屋敷のメイドとして働いている・・・親に秘密で・・・固有能力では主だったモノは無く、親と同じで料理などの家庭的スキルが高い。そして、潜入などの変装や魔力遮断などの隠密行動も得意としている。そして・・・キレると誰にも止められない殺戮マシンとなり、殲滅するまで止まらない。

神裂沙織 15歳

デバイス：エリス 刀型近距離攻撃型

この世界の神裂が生んだ娘。

愛果と同じでほとんどが母親似である。しかし、まだ15歳なのか18歳の神裂と違い結婚適齢期の女性という存在なのか・・・多くの異性が寄ってくるため、愛果と共に逃がっている。

上条を「父上」と呼んでおり、スキンシップを取ろうとするが奥手のため、なかなか上手くない・・・愛果も同様

所属は魔術協会の学生だが、マジスティア家で家宝を壊してしまい、現在、愛果と共にメイドをやっている。残念ながら墮天使エロメイドではなく普通のメイド服なので色々とガードが高い。

固有能力は母親が聖人と同じ存在だったためか。ものすごく力を持つており、6人の姉妹達の中で一番の力持ちである。そして、魔術は得意だが母親同様、機械音痴で満足に洗濯機も使えない。デバイスのエリスは母親の七天七刀並みに長い。そして、その切れ味は途轍もなくよく切れ、ビルの1つや2つは軽く切れる技術を持っている。近接戦闘で姉妹達の中で右に出る者はいない

佐天絵美理 15歳

デバイス：アーテール 棍棒型粉碎攻撃系

この世界の佐天涙子が生んだ娘。

原作では会ったくないがこの世界では美琴の知り合いという形で知り合い惚れてしまう、美琴とは恋敵となる。最終的に子供は授かったが結婚の形までは行けなかった負け組いやいや・・・

ほとんどが母親の部分を受け継ぎ、性格も似ている。スペックが高く、魔術師や魔導師としても腕がある。主な固有能力は無能力者の母親だが原作で一時的に力を手に入れた。レベル3くらいの空力使い（エアロハンド）で自ら空を自由に飛ぶことができる力を持つ、だが、その分の力の消費は大きい。デバイスのアーテールは6機の中でも破壊をメインに考えた構造になっており、物理や魔術・魔法などの物を簡単に破砕できる。しかし、あまりにも威力が高すぎ扱いが難しいため制限を掛けている。その気になれば、簡単に星を破壊してしまう威力があるが、その分の魔力はバカにならない・・・その前にできない。

そして、最後にASの運転が出来る技術を持っている。例に上げると上条の訓練に忍びこみ、勝手に動かすなどの問題を起こし、取り押さえようとしたASを返り撃ちにするくらい・・・。その事件は上条が頭を下げた何とか大きい問題にはならなかった。

初春清花 15歳

デバイス：アパター 情報処理支援型

この世界の初春飾利が生んだ娘。

この世界の佐天と同じでジークの子供を創る。ほとんどが親譲りで絵美理と比べて変わった所が少ない。いつも絵美理と行動をしており、機を抜けば、スカートめくりをされる。親子はよく似る・・・魔術はあまり高くないが、母親と同じのハッキングなどの情報処理に関わることはとても高い。そのため、多くの企業などが目と付けていたが、シャルロットが独占で雇ってしまったため、誰も手が出せなくなった。

固有能力は母親と変わらないレベル1の定温保存の能力者で、魔法や、魔法に関してはあまり得意ではない。だが、デバイスのアプリを使用することでかなりの情報処理や相手側にウイルスなどのハッキングなどの荒業をたったの数秒で行うことができる腕前を持つ。

吹寄麻理 15歳

デバイス：ヘーテラー 援護攻撃支援型

この世界の吹寄整理が生んだ娘。

あの対カミジヨウ属性完全ガードの女だった吹寄が最終的に自分の気持ちに気付いてしまい、ジークを追い裏世界に入ってしまう。魔術などを知ってしまったがそれでも自分の気持ちを信じてジークに追いついた結果が、麻理である。

性格は完全に母親と同じで男勝り、上条に対してツンツンしているが、ホントはかまってほしい甘えん坊な所を持った女の子である。主に姉妹たちの統一を彼女がやっており、現在の上条並の指揮能力をもっている。固有能力はほとんどないが・・・主に目立つ力は父親の固有能力だった幻想殺しに似た力が目立ち、デバイスのヘーテラーが彼女の魔術回路と直結しデバイス自体に魔力を溜めて魔術を行使する。だが、すぐ魔力切れになることが多い。ほかの姉妹達も



幻想殺しの力らしいモノがあるにはあるが微弱であるため母親譲りの能力が使えるのである。

そして、絵美理同様にASも扱える。部隊の中の貴重なASオペレーターでもある。

シャルアII アクイナス

デバイス：ニユクス 回復支援型

この世界のオルソラII アクイナスが生んだ娘。

多分7人の姉妹の中ですべても大人しい天然系女の子であろう。母親と同じお婆ちゃん思考は健在、筋力が無くても、知識やひらめきでどんな暴漢でも言葉で潰すことができることで上条も恐れる未恐ろしい女の子・・・本性は少し腹黒い所があり、上条の世界のオルソラがもし、この世界に来たら何かをやらかそうと計画している・・・固有能力は魔術や魔法の知識を応用した解読能力（親譲り）でほとんどの暗号を解読を可能としている。そのほかに治癒魔術に特化しており、デバイスのニユクスの魔法と連動することで、そのエリア中の味方を治癒させることができる。支援系でずば抜けた技術を持っている。

「特殊部隊FWメンバー」

熱田匠

部隊の中ではもっとも信頼が厚い真面目な男性、上条の理解者。だが、その正体は人間ではなく数百年生きている妖怪（外見は二十代男性）で、始めは周りからは引かれて人を信用できない性格だった

が上条と出会い、人と妖怪は分かりあえる希望を持つことができ、上条を通じて多くの人と知り合うことができた。上条のゴタゴタや軍隊の訓練で上条とコンビを組むことがあり、コンビネーションは最高である。上条が日本に向かった時、シャルロットにスカウトされ部隊の副長を務めることとなる。現在、知り合いの妖怪である望月陽菜と望月菜月の面倒を見ている。そして、副長である素質と技能があり、戦闘では大剣フツ力を持ち敵になるモノを一刀両断にするパワータイプであり、フツカ能力である程度の魔力を無効化する対魔力を持った攻守共に最高な力を持つ部隊のナンバー2である。

## 吾妻玲二

知っている人は知っている・・・phantomで出てくる主人公のツヴァイ！隠密戦闘などに長けた完璧なるヒットマン・・・この話の設定では日本での出来事が過ぎて、行き場所が無い所とあるゴタゴタに巻き込まれている上条に出会い、魔術を知ってしまう・・・その後、知り合いの・・・いや、上条が苦手のマジステイア家の使用人として働けるように取り次ぎ、現在、シャルロットに腕を買われ、パートナーの江連・・・後に合流したキヤルと共に裏の仕事を任されたりしている・・・主に隠密スキルを生かしての悪徳軍人・官僚などの政治の内部のゴミ虫を徹底的に排除してたりする・・・部隊では諜報部の責任者として活動を開始しているが、実際はデスクワークより現場に立つことが多い・・・始めの通り、戦闘において異論がない強いそして、部隊の中で一番非情になることが出来る人物なため、玲二だけは怒らせないように隊員達はしている部隊のナンバー3である。

## メイドさん達（全体）

マジスティア家でいつも頑張つて奉仕しているメイドさん達！しかし、裏の顔は戦闘・諜報・開発など・・・色々個性があり、どれもチートレベルの技術を持っている。例に上げると・・・カミジヨウチルドレン達・望月陽菜・望月菜月・江連・キヤルなど・・・含めた36名が馬鹿げた能力の持ち主・魔術師・妖怪などだったりするチートメイド達である。ちなみにマジスティア家に1年間で集めた人材で長年仕えているおり、ベテラン達は入っておらず、新参者全員が部隊に組み込まれている。ベテラン達は1人で数人の新参者メイドさんの何十倍の仕事をこなし、色々な部門で神クラス・・・ちなみに上条がメイド達を知っているのは、マジスティア家の使用人として働いたことがあるからである。

### 「マジスティア家」

話の中で関わりがあるが深い魔術・軍隊・政治で裏世界のほとんどを占めている言われる名門貴族。元ネタは小説あるいは漫画のミスマルカ興国物語に出てくる帝国の三姫を元になっている。この話の上条は大師父ゼルレッチより関わりが大きく、特に未っ子のルナスとは上司と下士官という間柄で色々と問題を起したり、その姉のユリカとは魔術の研究での手伝いなどをほぼ無理やり付き合わされたり、最後のシャルロットは上を駒のように扱い、危険な事件などに向かわせたりして、上条がもつとも会いたくない人物ベスト10に入りそうな危険人物の集まりだと思っっている・・・

### シャルロット＝マジスティア

マジスティア家の長女でイギリスの内政や軍隊の調整などを行う国防相大臣で、イギリスのアイドル「白薔薇姫」と呼ばれる。絶世の

美女。しかし、美しい花には棘ある……いや、猛毒があり、才能がある者を見つけると自分の配下に置いてしまい、誰も逃げられないようにしてしまう、ちなみに上条も被害者の1人……裏世界では魔術でかなりの功績を立てており、魔術協会では名を知らぬ者はいないほど……現在、大師父がどこかに旅立ってしまったため、上条に関することはすべて任されたため、好き放題に上条を使おうとしておる。

その手始めに自分直属の部隊を創り、反抗する組織などを殲滅や裏のお仕事をやらせようとしている……だが、本当の目的は、これから行うとても恐ろしい争いに勝ち残るための下準備であるがそれはシャルロッテとそれに関わる数人しか知らない……上条はまったく持って知らない。

ユリカ「マジスティア

マジスティア家の次女で主に時計塔で魔術の研究に没頭している天才魔術師、話にはまだ出てきていないがこれから起きることに関わる人物、上条とは研究中の魔術が暴走した時、幻想殺しで魔術を消滅させてから、上条に興味を持ち、上条が暇ならば研究室に拉致り、研究の手伝い・暴走時の備えとして使われている。だが、上条が損するだけではなく、メサイアの改良やその他の魔術礼装の開発も平行的に行っており、一応話を聞いてくれるので、長女と三女よりは普通に接することはできる貴重な人物である。

ちなみに研究している魔術は……「願望機」について……

ルナス「マジスティア

マジスティア家の三女で末っ子である。上条とは3歳年上の女性で、

姉達とは違い、武を極める体育会系で力でねじ伏せようとする傾向な考えを持っている。しかし、意外と常識人でただ突っ込むだけではなく、戦略などを立てて戦う指揮官として才能がある。上条とは軍隊の訓練時に出会っているがその時は興味はなかった。しかし、数ヶ月というモノは意外と長く・・・上条との関わりが多くあり、2人である時が多かったり・・・そこで起きるフラグイベント・・・が会うごとに起り、上条に特別な感情を抱きながら訓練期間を過ごす。その後、訓練が終わると無理やりルナスが率いる部隊一個師団の士官として無理やり入れるなどの大胆な行動を取る。色々と積極的に行動するが、失敗をするが多い・・・

そして、上条が日本に向かう当日、最後の悪あがきでイギリスに残るように勧めるが拒否される・・・しかし、ここで女としての意地を見せる。それは、上条にキスした後・・・××××をする。上条は冗談と流しているが本人は本気である・・・もし、再会する時が来れば・・・上条の人生がガラリと変わるだろう・・・

「その他」

大十字九朗

上条と同じ別世界の住人で魔導書アル・アジフの使い手である。マスター・オウ・ネクロノミコン

デモンベインの主人公！

現在、宿敵との最終決戦が終わり、異次元をさまよっていた所・・・この世界に落ちてきて、上条同様に苦労する生活を送っている。いつも隣にいるアルとは、相棒であり妻・・・である。それは異次元でさまよっている内にプロポーズし、お互い良き関係を築いている・・・そのためか、周りからロリコン・ペドなどを言われる。それはアルがどんなに時間が経とうが幼女体型は変わらないので死ぬまで言われ続ける称号だろう・・・しかし、裏ではとある男・希望を持

てなかつた幼女体型の女性の夢の形を再現されたため、神・勇者・救世主など言われているらしい……

今回、部隊には入らず、上条の代わりにクラスカードの回収などの作業を代行するようにシャルロットに言われ、日本に来たが……初日からハプニングが起きた為、上条邸でダウンしている。戦闘能力はとても高く、上条の代行に相応しい人物である……

アル・アジフ

九朗の無二のパートナー&妻……どこから見ても変わらない幼女体型は健在、そのため九朗を苦しめる根源でもある。魔導書の精霊だが、九朗との子供を出産したらしい……科学上・生物上で可能なのか不明だが生んだらしい……

アナザーブラット  
大十字九朔

大十字九朗とアル・アジフの子供と名乗る謎の少女。外見は瞳・髪・服装共に赤で統一され、胸の赤い薔薇の刺青がある可愛らしい美少女。性格は純粹な女の子だが、少し腹黒く、淫乱である。なぜか上条に興味を持ち、観察していたら上条病に感染してしまったのか。最近になって積極的に上条にアタックして上条を苦しめる。本人曰く、完全な半人半書の存在じゃないため、誰かと契約しないと安定した存在になれないため、上条をマスター（使い手）にしようとしているがメサイア（デバイス）と美遊に邪魔される。彼女を召喚した者とは一時的に契約した感じたが、簡単なモノなのでどっちかが拒否すれば、契約が切れるそうだ……

九朗とアルは産んだ子供を元の世界に飛ばしたため、子供がどうなったか分からないが、子供は男の子のはずだが、九朔は女の子なので……九朗達は混乱したが簡単に別次元の俺たちの子と……決めつけたため、仲良い家族風景のような時間が数時間過ぎ、現在

イギリスに飛んで上条のゴタゴタに付き合っている・・・

22 一難去ってまた一難・・・

22 一難去ってまた一難・・・

美遊サイド 0:05AM

イリア「あれ・・・あり？」

凜「ふざけたことしてくれじゃないの・・・」

ルヴィア「この屈辱・・・忘れないわ・・・」

美遊「・・・痛い・・・」

現在、クラスカード回収で意気揚々と鏡面世界に転移したが・・・黒化したキャスタークラスのサーヴァントに返り撃ちにあい、4人は急いで元の世界に戻ってきた・・・全員黒こげ・・・

凜「なんで、相手は空飛んで、あんな広範囲魔術をバカスカ撃つてくるのよ！？こっちは4人で相手は1人でもハンデあり過ぎるでしょ！！」

ルヴィア「そうですね！さすがにあれは無いですわ！私でもあそこまで卑怯なこととはできませんわ！」

凜「そんなこと、どの口が言えるの！！」

ルヴィア「あなたに言われたくありませんわ！」

イリア&美遊（（いい加減にしる・・・バカ共・・・））



イリア達は呆れてかける言葉もなかった・・・

??「あゝあゝあ・・・悲惨な状態だな・・・」

??「うむ！まさにぼろ負けした感じじやの」

美遊「ん？あれ？九朗さん・アルさん」

九朗「よ！」アル「遅くなったの！」

現れたのは上条邸で寝ているはずの2人だった。

凜「誰？ここは関係者以外立ち入り禁止だけど？」

ルヴィア「そう！ここは一般人が立ち入る場所ではなくてよ！」

バカ二人は九朗に遠まわしで帰るように告げる。

九朗「ん？あんた達がクラスカード回収に来た魔術師かい？」

凜「そうだけど？」

ルヴィア「なんで、あなたがそれを？」

アル「状況も知らずに好き勝手言う。小娘たちだな・・・」

九朗「俺たちは上条の代わりにあんた達の監視を任された大十字九朗と隣にいるのがアルです！短い間だけどよろしく。お嬢さん達！」

.....

凜&ルヴィア「はいいいいいいいい!?!」

イリア（監視役きたー！ー！ー！）  
美遊（あの人達、監視役代行だったんだ）

バカ二人はまさかの監視が現場に来たことに絶叫を上げ、イリアも同じように心の中で叫び、美遊はクールに受け流す。

凜「あ・・・あいつは？」

ルヴィア「か・・・上条はどうなったの!?!」

九朗「当麻なら、時計塔の呼び出しでイギリスに戻ったぞ？」

アル「ついでにお主らのことも伝えるらしいことを言っておったの」

凜&ルヴィア「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

イリア&美遊（終わったな・・・この人達）

イリア達はバカ二人の様子を見るだけで、二人が絶望的は状況に追い込まれた瞬間が訪れたと悟ったのだ・・・赤の他人に魔術の事を見られた上に・・・その目撃者たる幼い子供を強制労働されると知られれば・・・絶望的だ・・・

凜「うそおおおおお!!」

ルヴィア「いきなりすぎますわああああああ!!」

イリア&美遊（いい気味・・・）

被害者2人は加害者の絶望を心の中で笑っていた・・・それもそうだ。無理やり命がけの肉体労働をさせられれば、どんなに幼い子で

もそのような黒い心が芽生えてもおかしくない・・・

九朗「冗談だよ・・・半分冗談！」

アル「そうだ！そんなに絶望的なことにはなっておらぬ。安心せい！」

凜「あ・・・そう・・・って、どこまでは冗談なの！」

九朗「上条がイギリスに帰った所まで」

凜「そう・・・」

ルヴィア「そういうことは・・・」

凜&ルヴィア（返ってやり放題！？もし、そのまま戻ってこなかったら私達のことは気付かれない！？だが・・・もうルビー達との契約が切れてるし・・・もし・・・このことがバレたら・・・）

九朗「あ！今さっきのことは上へ伝えとくから！」

アル「ついでお主ら以外の者がステッキを使っていることもお・・・」

凜&ルヴィア「ちよつと待った！！！」

九朗「うお！？」

凜とルヴィアは勢いよく九朗を掴み、その場で固め技を決め逃げられないようにした。

凜「まだ仕事の最中なんだから、報告はまだ先でしょ！？」

ルヴィア「その前にあの子達は前から仕事を手伝うよう。こちら

が用意した助っ人ですわ！」

イリア&美遊「はい!？」

凜「だから」

ルヴィア「仕事が終わるまで黙っててくださいな」

九朗「わかった。わかったから・・・離して・・・ぎゃあ!!・・・腕が！腕が逝うううう!!！」

凜たちも必死だが、九朗も必死だった!

イリア「勝手すぎるよ・・・」

美遊「・・・」

イリア達は目の前で必死になっている年上達のやり取りを呆れながら見ていた・・・

数分後

凜「とにかく!あのキャスタークラスのサーヴァントをどうにかしないと先には進めないわ!」

ルヴィア「そうですね!ですが、ああ、空を飛ばれてわ・・・」

凜「そうね・・・この子たちが空を飛べればね・・・だけで練習もせずに・・・」

イリア「へ〜、意外と簡単だね」

凜&ルヴィア「え!?!」

凜たちは後ろを向くとなんと、イリアが宙に浮いていたのだ!この出来ごとに元魔法少女・・・いや、魔術師たちはビックリ!

凜「なんで、飛べるのよ!」

ルヴィア「私達だってあんなに練習してやっとだったのに!」

イリア「え?魔法少女って、空飛ぶものじゃないの?」

凜&ルヴィア(なっ・・・なんて、頼もしい思いこみ!)( )

ルヴィア「クッ、こちらにも負けてはいけませんわ。美遊!あなたも!」

ルヴィアは負けずと美遊に命令するが・・・

美遊「人は・・・飛べません」

ルヴィア(なっ・・・なんて、夢のない子!)( )

イリアと違って美遊は現実主義であり、知識がありすぎて哲学的に無理だと思ひ込んでいるため、イリアと違い飛べない。

ルヴィア「くうううう、こうなったら特訓よ!幸い上条がいないわ。私の屋敷でみっちり練習よ!」

美遊「あう!？」

ルヴィアは美遊を掴むとそのまま走り去っていた・・・

凜「あゝこれは、回収は明日に引き延ばしね。幸い明日は休みだから、練習する時間はあるし」

イリア「明日ですか・・・勝てるのかな・・・」

凜「絶対勝つのよ!」

凜達も撤退を始めると・・・忘れられた2人は・・・

アル「九朗、妾達は どうする?」

九朗「そうだな・・・俺たちは部屋に戻って寝ますか」

アル「違う明日のことだ!」

九朗「わかつているだろ?俺たちの仕事はあいつらの監視だ。だから、影から見てるさ」

アル「回収の時は?」

九朗「苦戦しているようなら助けるさ・・・だけどなく、あの嬢さんから積極的に手伝うなと言われてるし・・・」

アル「あ奴か・・・いつたい何を考えている・・・」

九朗「わからね〜。だが、あのイリアという子をよく監視しろって、言われたがあの子に何かあるのか？」

アル「わからん・・・だが、あの娘には何か途轍もないモノが眠っているような気がする・・・どんな因果でも捻じ曲げるくらいの」

九朗「こ・・・こえ〜こと言うなよ。アル・・・もし、あの子が何かあれば大変な事態を招くんじゃないのか!？」

アル「だから、監視しろと言われたのだろうが、あ奴のことだ。わざとあの娘の不利の状況を作つて、無理やり力を出させる魂胆かもしれんぬな・・・あの腹黒小娘」

九朗「その前に動くさ・・・アル」

アル「ああ・・・そうだな。」

監視役の二人はシャルロツテの言いつけと仕事を守りながら、行動すると決め、暗い夜道に消えていった・・・

\*\*\*\*\*

上条サイド 太平洋 ベトナム北西部 日本時間 8:00AM

匠「こちら、チーム、配置についた」

玲二「同じく、チームも目的地についた」

士郎「まだ、こっちは準備が出来ていない・・・あと2分くれ!」

上条「了解」

メサイア「なかなかの布陣ですね。上条」

上条「まあな・・・あれだけ、ゲリラ戦やらサバイバル戦の訓練ややられば、身体がどこに行けばいいか。教えてくれるからな・・・  
・それより、メサイア、シャドウの微調整は済んだか？」

現在、上条はシャルロッテの言われた通りの目的地に着き、とある  
テロリスト  
魔術組織の殲滅任務についていた・・・イギリスからベトナムまで  
高速輸送機に輸送され、太平洋で待機していた空母から機材などを  
回収後、輸送用のヘリで現場まで運ばれた。その移動時間たったの  
6時間足らず・・・ちなみに上条は仮眠しか取っていないため体力  
的には限界が来ていた・・・

メサイア「機体の全システムの掌握に上条ならではの微調整もとっ  
くに終わっています。後は動かすだけです。」

現在、上条が搭乗しているのはZy-98 シャドウ。ロシア製の  
第3世代AS。現在において最新型のASであり、その性能は第2  
世代型のASを凌駕する。このASはシャルロッテが用意した機体  
でイギリスが関与したことを隠すため、他国の最新型を裏から取り  
寄せた。

そして、隠密性を高めるため、機体カラーは迷彩色で統一している。  
そして、機体をサポートするOSはメサイアが掌握し、機体性能を  
一段と上回っている・・・いや、この機体自体がデバイスだと言  
っても過言ではない。メサイアの高度の学習機能及び自己進化機能  
を応用すれば、どんな機材も取りこんで自らのパーツとして扱える  
のである。そして、このシャドウ(AS)はメサイアの一部となり、



上条が望めばどこでも召喚して扱えるとか何とか……

絵美理『父ちゃん！新しい服（AS）は気に入った？』

上条「ん？絵美理か。ああ……いい機体だが……なんで俺が乗せられているんだ？普通俺は発令所とかの部隊の指揮が出来る場所に居なきゃいけないはずだよな？」

絵美理『それは……』

麻理『それは、お嬢様に言われたからだ！』

上条『うお！？麻理！？』

突然の割り込みに驚いたが、その後、真面目に話を聞く

上条「なるほど……ASを扱えるのが部隊の中で俺と絵美理と麻理だけと言っわけか……」

麻理『そう言うこと……だけど私と絵美理はデバイスのサポートがあっても、このスペックが高い機体を動かすだけで、正直精一杯……だから、あなたが事実上、部隊の中で動かせるのは1人というわけ』

ちなみに麻理と絵美理ほかのデバイスはメサイアを元に作られ、2世代型デバイスとメサイアはリンクしている。

メサイア・2世代型デバイスが全て揃うとその機能が発動することができ、意思の疎通や情報交換が可能になる。

そして、メサイアの機能をほかのデバイスに移植することができ、

そのためASをデバイス化することができる。

しかし、2世代型は学習機能はあるが、自己進化機能が付いていないため、自ら新たな機能などの発現は不可である・・・普通は当たり前だが・・・

上条「うそだ！匠も玲二も動かせるぞ！ほかの面子も・・・」

清花「あの・・・陸戦部隊を裂くことは出来ないの・・・それに隠密はお父さんには向きませんし・・・」

次に割り込みで正論を述べるのは通信オペレーターとして、輸送への通信席で現場の状況に対応している清花だった。

上条「う・・・それを言われると反論ができない・・・」

かなで「そういうことです。だから、頑張ってくださいね！」

その次の割り込みは、かなでであった。彼女は戦闘には参加せず今回は清花のサポートに回っていたのだ・・・本人は戦闘に参加したがっていたが上条が止めた為、大人しく言うことを聞き現在に至っている

上条「かなで・・・おまえは興奮して電気をばら撒くなよ」

かなで「失礼ね！私は母と違って、感情で電気を流すことなんか・・・」

清花「きゃあああああ！！かなでちゃん！電気が！電気が漏れてる！・・・」

言わんこつちやない・・・かなでをサポートに廻させてよかったのか逆に後悔している上条であった・・・

士郎『悪い！遅れた。こちら チーム、配置についた！いつでも突入は可能だ！』

上条「ん？了解・・・少し待ってくれ」

士郎の通信の途中にこの部隊のオーナーたる人物から通信が入った。

シャルロツテ『ごきげんよう。そちらの様子はどお？上条？』

上条「眠いし、疲れたし、腹減ったし、最悪だよ！！」

シャルロツテ『あらあら、貴方のことではなく、部隊の方ですよ？』

上条「あんたが言うとおり、よく動いてくれる奴らだから・・・現在短時間でターゲットの建物を包囲し、全員配置についた・・・後は・・・」

シャルロツテ『攻めるだけね・・・間に合ってよかった・・・追加で頼みたいことがあるのよ』

上条「なんですか？」

シャルロツテ『できれば、基地の中の物資は破壊せず回収してほしいのよ』

上条「できればですけど・・・その物資の中身はなんでせうか？」

シャルロツテ『それは・・・開けてからのお・た・の・し・み』

上条「はあ・・・分かりました・・・努力します・・・」

シャルロツテ『後、この作戦が成功しても気を抜かないことね・・・もしものイレギュラーはあるから・・・じゃあ・・・がんばってね！』

一方的に通信は切られ、上条は自分の周りにはどうしてあのような悪女みたいな女性が寄ってくるのか悩み始めたが、現在作戦中のため、その考えは切り捨てる・・・そして、これから始まる命を賭ける戦い・・・今まで戦ってきた戦闘とはまるで違う・・・相手は鋼鉄の弾を撃ってくる・・・それは幻想殺しは通用しない・・・現実と言つ名の戦場・・・少しのミスが隊員達の・・・自分の命が奪われるかもしれない・・・

上条の部隊の方針は出来るだけ殺生をしない・・・だが、1人の敵兵を助けることは1人の味方を殺すことになる。訓練で聞かされ続けた・・・部下を殺すか・・・敵を殺すか・・・だが、上条は考えを変えない！助けられる者は助ける！そのことは決して変えない！

上条「全隊員に告ぐ！俺は部隊の隊長として、途轍もなく劣っている・・・そのため、全員を危険に晒してしまうことがあるかもしれない・・・だが、頑張って部隊をまとめるように努力する。だからみんな、俺に力を貸してくれ！この部隊は俺1人の部隊じゃない！俺達の部隊だ！そして、みんな死ぬな！全員が一人も欠けることなくこの仕事を終わらせ、あのお嬢様の鼻をくじいてやるうじやないか！...」

回線を全員に繋げて士気を鼓舞する……そして、自分に喝を入れる。そして、反応は……

匠『初陣の演説してはいい話だ』

玲二『右に同じだ……俺はここで死ぬ気はない』

士郎『当麻、お前は劣ってなんかいないぞ。ちゃんと部隊をまとめているいい隊長だよ』

キヤル『はん！青臭い演説だね……もっと盛り上げる話をしないのかよ』

江連『キヤル、そんな場を冷めることを言わない』

愛果『かつこいいですよ！お父様！（きゃあああ！！かつこいい！！おとう……さま……！！）』

沙織『いい演説です。（かつこいい……とても……ぽお……）』

陸戦部隊からは良い返事が返ってきた……中には暴走しそうな子が多数……

絵美理『OK……OK……完璧だよ！お父ちゃん……！』

麻理『まあ……始めなのに、私以上の仕切りだった……（なんて、かつこいいの……お父ちゃん……ぽお……）』

かなで『前線に立てないのが……悔しいいいいい』

清花『私は前線には立てませんが、全力でみんなをサポートします！お父さん……！』

シャルア『あらあら、清花……前線に出ないのはあなただけじゃないわよ？私もみんなが怪我したときまで出番が無いのよ？ねえ！お父様？』

上条『いい加減……お前らその呼び方変えろよ……それにシャルア……縁起でもない言葉を俺に向けるな』

シャルア『あらあら、お父様以外に怪我することは少ないからつい』

上条「そんなことを言うな！それを言われるとこの作戦終了後が恐ろしいだろうが！」

匠『当麻、口論はいいが作戦は始めないのか？』

匠の言葉に我に返った上条は意識を作戦に向けるため、深呼吸をする・・・

上条「ふう〜・・・これより作戦目的を確認する！作戦目的は敵勢力の戦闘能力を無効化。そして追加に敵拠点の物資の奪取を目的とする。」

匠『物資の奪取？それは中身はなんだ？』

上条「俺もわからない・・・早く確認したいから、土郎さんのチームが確保に向かってくれ。マップデータは清花を経由してくれ」

土郎『分かった・・・一応聞くが、魔術の使用は？』

上条「周りが見て派手な魔術は使用禁止、そのほかはOK」

土郎『了解した』

上条「最後に作戦行動について説明する。ここは見ての通り、密林地帯だ。そのため、視界は悪いが奇襲を仕掛けるのに最適な場所だ。まず、俺のASチームが敵に強襲をかけ、敵ASをいぶり出し、基

地の外に誘導・・・その間に・・・チームは目的の拠点と敵兵を制圧する。話すのは簡単だが、実際にやると難しい・・・全員、気を付けてくれ・・・」

隊員達『『『了解!!』『』『』』』

隊員達の迷いなき言葉に・・・上条は作戦を開始する決心を付け・・・

上条「よし!これより、敵殲滅作戦を開始する!!」

作戦が開始された!上条のASが動き出した!

上条「まず、俺が囮になって、ASをいぶり出す。絵美理と麻理は各ポイントで待機!獲物が飛び出すのを待て!」

絵美理&麻理『『了解!!』『』』

上条のASの装備は近接戦闘を想定した形で日本刀型の単分子カタールと格闘用のAS専用スパイクを装備、そして現在目立つ装備は対AS用ガトリングキャノン・AK-48・・・大型の大口径機関銃である・・・本人曰く・・・ガトリングは男のロマン・・・らしい・・・

上条「さて、出てきてもらっぜ!!」





上条はガトリングを敵の目の前に向けて連射する。そして、その周りに砂煙が舞い上がる！それによりサベージの視界を奪い混乱させる。

上条「1つ！」

サベージの前方から上条のシャドウが横切った、すれ違いに日本刀型の単分子カッターで敵の駆動系を破壊する。そして、1機目を行動不能にする。

残りの2機は味方も関係なく銃弾をばら撒くが・・・シャドウの機動力はサベージを上回る。そして呆気なく後ろを取られ、単分子カッターで駆動系を破壊される。

たったの数秒で3機のASを行動不能に追い込んだ。残りの5機は動揺する動きを見せる

敵パイロットA「化け物か・・・あのAS」

敵パイロットB「落ち着け、動揺しては敵の思いつぼだ！困んで叩けば勝機はある！全機、全力で奴の動きを止めろ！決して逃がすな！」

敵パイロット達「・・・了解」「・・・」

残りのサベージは上条に向けて突進を始めた！！

ここまででは予想通りの展開に上条は笑みを見せる・・・

上条「ここまででは予想通り・・・敵が増えていても、指揮系統はバラバラだな・・・こちら、デルタリーダより陸戦部隊チームリー

ダーへ、これより敵の誘導を始める。各部隊は突入最終チェックにかかれ！」

匠「オメガ1、了解」

玲二「ファントム1、了解」

士郎「え．．．と、タンゴ1、了解」

匠と玲二は各個人のコールサインと了承の返事が返ってくるが、士郎だけが少し戸惑って返事をする．．．それもそうだ。上条達は軍隊に居たので違和感がなく言えるが、士郎は一般人だったのでそんな簡単に慣れられるものではない

上条「士郎さん、油断は禁物だぞ。敵は魔術師がほとんどだが、中に機銃とか使う奴がいるかもしれないから、気をつけてくれよ？」

士郎「む．．．言われずともわかっている。」

上条「では頼みます。そちらにいる。愛果と沙織をよろしく！」

士郎「ああ．．．了解」

\*\*\*\*\*

士郎「はあ．．．みんな、準備は．．．あれ？．．．愛果と沙織はどこにいった？」

隊員A「あれ？今さっきまで居たのに．．．」

現在、チームのメンバーは士郎とメイドさん隊員2人．．．それとここにいるはずの愛果と沙織の5人で構成されたチームだが．．．

いきなりトラブルが発生した！

士郎「！！・・・上条！こちら、タンゴー！応答してくれ！」

・・・

通信が繋がらない・・・どうしたものか・・・

隊員B「あの～～～たぶん、先行してあの施設に行ったのでは？」

士郎「え？」

\*\*\*\*\*

目標の施設の中・・・

敵兵「ぎゃああああ」

敵兵「がああああああ」

施設の中では悲痛な叫び声・・・苦しみがく敵兵・・・壁に飛び散る鮮血・・・その場所はそう・・・地獄絵そのものだった・・・そしてその地獄で罪人をいたぶる鬼・・・2人の少女達だった。

愛果「はあ！」

沙織「いやあああああ！」

施設中に二人の槍と長刀が敵を薙ぎ払われる！まるで舞踏会で観客を魅了しそう存在感を引き立てるお姫様ごとく・・・

敵兵「あがあああか・・・あ」

最後の1人はワイヤーを首に絡みつけられ・・・そのまま、吊るされた・・・そして・・・

ピーーーーーン!!

敵兵「ガク・・・」

どこぞの仕事人のような手さばきで敵を倒した・・・

沙織「愛果、それで最後か？」

愛果「はい、だけど・・・いいんですか？他の人たちを置いてきて？」

沙織「あれは放っておいても問題ないでしょ・・・それに愛果、あなたもそう思ってたんじゃない？」

この二人、確信犯だ！始めから集団行動を拒否して独断行動をしていた。

愛果「そうですけど・・・お父様の作戦には支障は？」

沙織「特にないでしょ・・・あくまで支障が出るのは、置いてきた人達だけ・・・それに私はあまり自分の戦い方を見せたくありませんし・・・」

愛果「そうですね・・・私達の戦い方は他人に見せる物ではないですわ・・・特にお父様には見せられませんね」

沙織「う・・・」

この二人は戦闘能力はズバ向けているが・・・デメリットで敵には情けを掛けない・・・いや、本当はメリットであるがこの部隊だと逆になってしまう・・・

二人の思考・・・今の自分達を上条に見られたら・・・嫌われる・・・アウト！

沙織「あ・・・愛果、そのことは後にしよう・・・目的の物を確保したけど、まだ敵は残っている。」

愛果「はい、1人残らず、殲滅しましょう！」

二人が施設の奥に消えていくと士郎達が入ってきた。

士郎「うお！？なんだこれは!？」

士郎が驚くのも無理もない・・・倉庫には20人以上の魔術師と兵士が居るが、血まみれになって横たわっていた！そして、意識がある者は傷に手を当てて蹲りガタガタと身体を震わせ、独り言を言っていた。

敵兵「悪魔がくる・・・悪魔がくる・・・槍と剣を持った悪魔が殺しに来る・・・」

その兵士は精神的ダメージが大きかったのか。士郎達が来ても反応しないほど、恐怖に震え上がっていた

士郎「これ・・・あの人達がやったのか？」

隊員A「そうでしょうね・・・まさかここまでやるとは」  
隊員B「でも、ちゃんとやることをやってくれたからいいんじゃないですか？」

士郎「良くない！俺は当麻に人の命を任されているんだぞ？身勝手な行動はやめてほしい！」

士郎が怒るのも無理はない・・・どんなに未経験な仕事でも責任を持ってやり遂げることは士郎にとって大切のことだ。それにこの仕事は命に関わる仕事・・・余計、責任が重くなる・・・そして、誰かが身勝手な行動を取るとミスして命を落としかねない・・・

士郎「俺はあの二人を捜してくるから二人は目的の物を確認したのち、無線で回収へりに連絡を入れといてくれ！」

士郎は言い終わると施設の奥に消えていった・・・

\*\*\*\*\*

上条「きたきた・・・もうそろそろかな」

上条はガトリングで応戦しつつ後退していた。そして、敵ASは残り4機！1機は途中で撃破した。

上条「よし！ここまでくれば・・・麻理！絵美理！やれ！」

上条の合図と主に2機のシャドウが敵陣形の脇を襲った！

一瞬にして4機のサベージはその場で動かない鉄人形になり横たわ

った・・・

絵美理『呆気ないわね』

麻理『簡単に後ろを取られるなんて訓練が足りないんじゃないの？』

二人は思っている感想を漏らす・・・

上条「あんな・・・新型がいきなり襲ってきたらさすがに相手はこ  
んら・・・ッ!!」

ドーン!

上条はギリギリ攻撃を回避した。おかしいさつき倒したサベージが  
最後だったのにまだASが残っていたというのか? いや、違う・・・  
攻撃は後ろからきた! 敵の援軍じゃない。別の敵だ!

上条「二人とも、散開しろ! 固まると狙われる! そしてなるべく動  
け!」

3機のASは素早く散った!

上条「どこにいる・・・メサイア、相手はどこにいるかわかるか?」

メサイア「現在、索敵中です。少し待って下さい。」

上条「早くしてくれ。うわ!」

上条の機体を目掛けて、攻撃が飛んでくる・・・敵は1機のようにだ  
・  
・





目の前に立つAS・・・謎のAS・・・アメリカが最近、実験段階まで完成させている新型機体に酷似するが・・・違う・・・その機体はとある組織が開発した機体、アバレストだった！

ウルズ11「へえ、たかが、シャドウでここまで腕が立つ奴がいるとはな」

アバレストに乗っているのはどこぞの傭兵だった。

カーニン『ウルズ11、何をしている。その機体は機密なんだぞ』

ウルズ11「すみません。テスト中に未確認のASに気付かれたため、証拠隠滅にかかりました。」

カーニン『我々はどこぞのマフィアではない。すぐに引き返せ！』

ウルズ11「残念ながら姿を1機のシャドウに見られました。こいつだけでも破壊します！」

カーニン『ウルズ11、いまずぐに引き返せ！これ以上の行動は厳罰に処する。聞いているのか』

その時、回線は切断されていた・・・

\*\*\*\*\*

TDD-1 発令所

マデューカス「躡がなっていない駄犬だな」

カーリーニン「弁明もございません」

テッサ「カーリーニンさんが謝ることはありません。私のミスです。」

現在、極秘にアバレストの試験運用をしていたが、まさかの上条達と接触してしまい、どうするか話し合っていた

サチ「大佐、秘匿回線から通信が入っていますが」

テッサ「分かりました。私の所に繋いでください。」

テッサは艦長席の横の受話器を取り、通信を始めた。

シャルロツテ「お久しぶりです。テストアロツサ戦隊長」

テッサ「こちらこそ、お久しぶりです。イギリス国防相大臣」

二人は知り合いだった・・・あまり会わないが連絡をしあう仲である・・・

テッサ「どうなさいました？貴方から連絡をくれるとは珍しいです。しかも、こんな時間に」

シャルロツテ「そうかしら？あなたはそう感じますか？」

テッサ「ええ、タイミングが良すぎて不思議に思いました」

シャルロツテ「タイミング？」

テッサ「ええ、現在、未確認のASと我が隊の最新鋭機が戦闘にな

りました・・・しかも、それをわかったようなタイミングで・・・シャル、貴方が企んでいませんか？」

テッサの鋭い言葉にシャルロツテは驚いた。さすが、傭兵部隊の長である。情報分析の早さはシャルロツテ以上かそれ並みか

シャルロツテ『相変わらず、いい回答してくれるわね。貴方が考えている通り、今戦っているASは私が創った部隊に所属しているモノですわ』

認めた。簡単に認めた。さすがに頭が切れるテッサにはお手上げなのか。正直に白状した。

テッサ「分かりました。いますぐ、こちらは攻撃をやめさせますので、そちらも戦闘の停止を・・・」

シャルロツテ『いや、それは待ってもらえないかしら』

テッサの言葉を遮り、話を続ける。

シャルロツテ『今戦っているのは、6時間前くらいにできた出来たてホヤホヤの部隊なのよ・・・今どれだけの実力があるか試しているのよ。だから、今戦っているAS戦闘ももう少しだけやらせておいてほしいのよ』

テッサ「貴方のためにこちらの最新鋭の機材を壊されることは避けたいのですが、それにあの機体の情報を・・・」

シャルロツテ『それは大丈夫、そこところはちゃんと対応するか』

テッサ「信用できません」

二人の会話は平行線のまま進む・・・

シャルロツテ『そうね・・・今戦っているASオペレーターの情報  
をあげるわ。それと引き換えで』

テッサ「はあ～～～～・・・わかりました。こちらはまだ、あれの戦  
闘データを取っていないので後、数分様子を見ましよう」

シャルロツテ『さすが、テッサ！話が分かる子は大好きよ！じゃあ、  
今データを送るからよろしくね。こちらも数分立ったら、こちらも  
退かせるから・・・では』

通信が切れた・・・

マデューカス「艦長、どうして、そんなデータと我が隊の機密を交  
換することをしたのですか？」

テッサ「そうですね。だけど、あの人が創った部隊には興味があり  
ますし、それがごく一部のメンバーだったとしてもその情報は貴重  
です。」

テッサが数日前に耳に入れた私設部隊の噂・・・もしかしたら・・・  
・その噂はこの部隊の話ではないかと考えていた。

サチ「大佐、正体不明のデータファイルが転送されました。」

テッサ「分かりました。スクリーンにそのデータを映してください。」

サチ「了解」

通信士のサチは見事のタイピングでデータを解析し、スクリーンにデータを公開した。

テッサ「うそ……」

カリニン「む……」

マデューカス「……」

映し出された情報には……

トウマ・カミジヨウ

イギリス軍特務大尉 特殊部隊FW 部隊長

……

……

……

\*\*\*\*\*

上条「くそ、あっちの方が機体ポテンシャルが高いのかよ!？」

メサイア「泣きごとを言っている場合ではありませんよ」

火力と射程では上条が有利だが当たらない……思った以上の機動力で弾幕をいとも簡単にかえ潜る。

ウルズ１１「くそ、あれじゃ、簡単に近寄れねえな」

ウルズ１１も必死だった。武装は射程が短いショットガンと複数のナイフのみ。近づいて攻撃しなければ効果は発揮しない。

上条「これじゃあ、弾の無駄使いだ……それなら！」

ドドドド！ドドドド！ドドドド！

ウルズ１１「何!?!」

上条はフルオートで連続で撃つのはやめ、反動が少ないスリーショットに代えた。ガトリングにはそんな機能はないが、トリガーのタイミングを合わせて撃つことで追いつけなかった速度に合わせるこ  
とができる！

ガン！カーン！……

ウルズ１１「ちい！」

ア バレストに数発の弾丸が命中し、そのまま体勢を崩してしまっ









メサイアは余裕そうに見えるが、上条本人は余裕なんかない！避けることに精神を使うため、心の中はヒヤヒヤしている

ウルズ１１「チツ！ちょこまかと・・・さつさと吹き飛びよ！！」

上条「うわ！クソ・・・なぶり殺しかよ」

メサイア「ガトリングキャノン破損！使用不可。パージします！」

回避していたが力場が機銃に引っかけり大破したため、ガトリングを破棄し、機体を身軽にした。

メサイア「・・・機体にデータ送信・・・上条！もしかしたら、あの技に対抗できるかもしれません！！」

上条「なに！？」

上条はメサイアの話に耳を傾ける。

メサイア「先ほどこの機体に新たな機能を付け加えました！」

上条「メサイア、どうしてそんなことができるんだ！？」

メサイア「お忘れですか？私が取りこんだ機材は私の身体の一部になるのですよ？」

上条「忘れてたー！ー！ー！だから、あんなに多くの魔力を吸い取っていたんだっ！ー！」

メサイアの燃費の悪さの一つの原因・・・デバイスを自己進化させるのに多くの魔力がある・・・それは取りこむ機材が大きいほど、それを改良するほど大量に魔力を消費する・・・このシャドウの場合は溜めていた魔力を利用したため、上条からの魔力供給は軽減した・・・

メサイア「さきほど付けた機能は右手だけです。」

上条「右手？」

メサイア「そうです！あなたの右手の幻想殺しを右手だけ扱えるようにしました。」

上条「・・・今は突っ込む暇はない。いきなり使って問題ないな？」

メサイア「もちろんです」

上条「少し信用できないが・・・いくぞ！」

上条は逃げるのをやめ、相手に突進し始めた！！

ウルズ１１「ふん！逃げるのをやめたか・・・じゃあ、大人しく吹き飛び！！」

ウルズ１１の叫びと共に見えない力場が上条のシャドウに向けて放たれた。

上条「うおおおお！！消えろおおおお！！」

バキーーーーーン！！

ウルズ１１「な！？」

上条「ちゃんと、効いた！」

ぶつつけ本番・・・ASの幻想殺しの発動が成功し、力場を打ち消すことに成功した！

ウルズ１１「なんだって・・・あいつも同じ力があるとしても言うのか！？」

上条「さっきのお返しにいくぞ！そこ動くな！！」

上条のシャドウは再び突進を始める。

ウルズ１１「ヒッ！来るな！来るなー！！」

何度も力場を飛ばすが全てASの右手で防がれる。

上条「貴様の幻想を・・・」

ウルズ１１「うわああああ！！」

シャドウの右手に近接格闘用のスパイクがASの手に展開した。そして、相手の懐に入ると・・・

上条「ぶち殺す！！」

バキン！！

ウルズ１１「うあああああ！！」

シャドウの右手の拳がア バレストの頭部に直撃し、吹き飛んだ！

AI「機体の損傷度が危険域に達したため、強制帰還します。」

ア バレストは自動的に撤退行動を取り始め、森の中に消えていた・

上条「勝ったのか？」

メサイア「なんとか」

上条「やったな！機体は傷付いたが俺には怪我がない！今日の俺、運がいい・・・」

ビ ービ ！（警報）

上条「・・・おい、メサイア・・・これってまさか」

メサイア「はい、あの機能（幻想殺し）は即席で作ったため、機体にどのような負荷を掛かるか計算せず、作りました・・・」

上条「まさか・・・」

メサイア「はい、機体が限界です。すぐに降りて下さい！！」

上条「ふ・・・不幸だーーーーー!!!」

上条は機体に接続状態のメサイアを手に取るとすぐに機体から飛び出したが・・・

ドカーーーーーーン!!!

コックピットを出た瞬間、機体が爆発した!上条はその爆発に巻き込まれたが・・・上条のことだから生きているに違いないが・・・

\*\*\*\*\*

施設内部

士郎「たく、あの二人はどこに行ったんだ?」

その頃、士郎は愛果と沙織を捜していた・・・

匠「む!士郎!」

士郎「ん!?匠か」

後ろから呼びかけたのは主力のチームを務める匠であった。

匠「何しているんだ?ここは俺の管轄だぞ?」

士郎「すまない。ここに愛果と沙織は来ていないか?」

匠「あの二人ならお前が呼んだ回収のへりに乗って撤退したぞ?」

士郎「へ!?!?」

\*\*\*\*\*

回収へリ

隊員A「一体どこにいったんですか。2人とも」

隊員B「土郎さんが探していましたよ」

愛果「すみません」

沙織「申し訳ない。今後は気をつける」

隊員A & B「それは本人に言ってください!!!」

愛果 & 沙織「ごめんなさい」

二人はチームメイトに怒られながら、へりの中で延々と説教を問いつづけられたのだった……

\*\*\*\*\*

T D D - 1

ウルズ11「クソオ……なんでこんな……」

カリーニン「ウルズ11、お前は長官の命令を背き、あまつさえ大切な最新鋭機を中破させた。この罪は重いぞ」

ウルズ11「し……しかし、俺が戦った奴は……」

カリーニン「連れて行け!」

ウルズ11「うわ……離せ! 離しやがれ!!!」

ウルズ１１は武装した兵士に連れて行かれていった・・・

カリーニン「ふう〜」

テッサ「カリーニンさん、そんなに落ちこまないで」

カリーニン「大佐殿、いえ・・・そうですね・・・今回はさすがに残念です。」

テッサ「そんなに上条さんを気に入っていたのですか？」

カリーニン「はい、今回の戦闘の結果に確信しました。彼は世界で指折りの中の兵士だと・・・それがあのマジスティア家のご令嬢の部隊に引き込まれていたのが残念極まりないです」

テッサ「そうですね・・・あのシャルが目をつけていた時点でこうなると思っていましたけど、まさか、ここまでされるとは思ってもいませんでした」

テッサも肩をすくめる・・・まさか、欲しがっていた兵士が取られ、その実力を目の前で見せびらかす行為をさせられれば、無償に腹が立つ・・・

カリーニン「それより、大佐殿・・・アバレストについてなのですか」

テッサ「ええ、予定通り修理と改良を加えます・・・破壊された頭部パーツも予備がありますし・・・早くて1ヶ月で完了するでしょう」



二人は惨めに頭をもがれ、傷だらけになったア バレストを見つめながら、次のオペレーターを決めるためのリストを見始めるのであった……

\*\*\*\*\*

大型輸送船内 11:00AM

匠「おす、みんな無事のようだな」

玲二「まあ、1人を除いてね」

現在、部隊を回収した輸送船の倉庫一角では、作戦で疲れ切った隊員たちが横たわっていた。

匠「……またか」

玲二「ああ……まただ」

二人は呆れていた……現在ここに居ないのはたったの1人、上条だけだ！

\*\*\*\*\*

医務室

上条「あゝ全身がいたい……」

シャルア「あらあら、だから言ったじゃないですか。ここにくるのはあなただけだって」

上条は機体の爆発を直撃したがメサイアの障壁により、軽い火傷ですんだが・・・それがほぼ全身に火傷があるので身体を動かすだけでつらい。

上条「シャルア〜早く治癒魔法で傷を直してくれないか？」

シャルア「それはだめですよ。いくら傷の治りを早めても後で身体に響くんですから、じっとしててください。」

シャルアはどんな薬でも副作用があるかのような言い草で治癒魔法の使用を拒否して医務室から出て行った・・・

士郎「大丈夫か？当麻」

上条「無理、死ぬ、苦しい、モルヒネくれ！」

士郎が心配して様子を見て、話しかけるとまるでロボットのような片言で話す上条であった

士郎「ワリ、俺、薬はよく知らないんだ。」

上条「・・・使えない」

士郎「あははは・・・それより当麻、これからどうする？」

上条「どうするって？」

士郎「ここに居ても、またあの人に使われるだろ・・・だから」

上条「逃げるってか？」



シャルロット『別にいいじゃない。現在、わ・た・しのなんだから？』

上条「嗚呼・・・裏で悪口を言っていたことを謝りますから、戻ってきて、大師父ウウウウ！！」

まるで神に許しをことう子羊のように泣きごとを漏らす上条であった・・・

シャルロット『別に違う戦場に行けと言っているわけじゃないんだから、話を聞きなさい』

上条&士郎「何にも聞こえない。聞こえるのは船に当たる波の音だけ・・・」

あくまで話を聞かない二人の正直呆れるシャルロットは仕方なく本題を話す。

シャルロット『ほら二人とも、今から日本に戻るように言おうとしているのに話を・・・』

上条「はい、なんでしょうか」  
士郎「聞きましょう」

シャルロット『・・・』

本題を話すと食いつくと思っていたがまさかここまでとは・・・本当に呆れる

シャルロツテ『はあ〜・・・だから、日本に戻りなさい・・・』

上条&士郎「うんうん」「」

シャルロツテ『そして、アリサ・バニングスとスズカ・ツキムラの帰路の護衛をしなさい』

上条「んう!?!?」

士郎「誰ですか?」

上条は聞き覚えがある名前に途轍もない違和感が横切る・・・それに比べて士郎は冷静に誰なのかを聞く

シャルロツテ『二人は小学3年生の少女よ。今日の朝に拉致られたけど、とある少年が救出したらしいのよ・・・ね、上条?』

上条（こいつ・・・知っていて言っているな・・・）

上条はシャルロツテがあゝの時の事件を把握しており、それをわざと本人の前で煽る行動に苛立ちを覚える。

シャルロツテ『まあ、私の知り合いのお嬢さん達だから恩を売っておこうと思つて・・・それに事件の後、学校に行つたから帰りが危ないのよね〜』

士郎「なんでだ?別に事件後は逆に安全じゃないのか?」

シャルロツテ『普通はね・・・だけど、上条は裏では有名人だから、少しの弱みが露呈するとそこを狙う意地汚い連中もいるのよ』

上条「あんた、まさか・・・」

シャルロツテ『ええ、複数の魔術師が海鳴市で見かけたらしいと連絡があつたわ』

上条「なら、ほかの奴を行かせる！俺はその頃、病院のベッドの上だぞー！！」

シャルロツテ『それを助けに行くのが勇者と言うモノでしょ。ねー・  
・傷ついた王子様？』

上条「あんたと言う、人はあああああ」

上条は怒りが爆発しそうになる。目の前で危険が迫っている人がいるのにそれを平気で見世物にしているのだ・・・そんなこと偽善者たる上条には許せない。

シャルロツテ『なら、自分の身体に鞭を入れなさい・・・そうすれば、貴方の望みと正義を貫き通すことができるわよ。幻想殺しの上条当麻？』

そして、一方的に通信が切れる

士郎「上条、急いで準備しないと海鳴市には間に合わないぞー！」

上条「クソオ、今のあの時の時間の俺は病院の中・・・どうすればいい・・・」

士郎「当麻、あの時みたいな変装していけばいいじゃないか」

上条「あの恰好をしたら、逆にアリサ達に不審に思われる。まして、相手は俺のことを知っている魔術師のようだし・・・ちよっとやそつとの変装じゃ見破られる危険性がある」

士郎「う・・・ん・・・じゃあ、駄目の元で普通に助けにいけば・・・」

上条「それができれば苦労しない・・・ん？」

上条はシャルロットの言葉に何か引つかかった。それは何かのヒントが混ざっていたような・・・上条は考え始めた・・・

士郎「どうした。上条」

上条「さっきの話・・・何か引つかかる・・・まるでクイズのような・・・」

士郎「？」

士郎はシャルロットとはあまり関わりがないため、上条が感じていることを感じる事ができなかった。

上条「傷付いた・・・鞭を入れる・・・そうだ！」

上条は閃いた！

士郎「どうした上条!？」

上条は治療キットに入っていた。メスを取り出し、身体を傷つけ始めた。

上条「ぐうぐうぐうぐう」

痛みに耐えながら新しい傷を増やし・・・そこから鮮血が流れ始めた。

士郎「なにやってんだ！上条！！」

上条「こんなもんか・・・士郎さん、そこにある包帯を取って巻くを手伝ってくれ！」

士郎は言われた通り包帯を巻くのを手伝った・・・

士郎「今度は何打とうしてんだ！？」

上条「痛み止めだよ。さすがに俺でもこのままでは痛みで倒れる」

上条は自ら痛み止めのモルヒネを打つと預けていた白のシャツと学生ズボンに着替えた。

上条「いくぞ、士郎さん。ふざけた幻想を抱いているバカ共を殲滅しにいくぞ！！」

士郎「あ・・・ああ」（今の当麻・・・めっちゃくちゃ怖い・・・）

上条「後、その衣装ケースも頼む」

士郎「何が入っているだ？」



上条「最後の後始末用の小道具」

士郎「？」

士郎は不思議に思いながら、ケースを持ち上げ上条と共に医務室から出て行った……

かなで（へえ、パパの知り合いのピンチか……だけど、ついていくって言うと拒否られそうだし……）

かなでは上条のお見舞いに行こうと医務室の前までにきたら、只事ではない状況だったのでうっかり盗み聞きする形になってしまった。

かなで「こうなれば、あの方法でパパの手助けしなきゃ！ちよつど、あれの調整が終わったし……ふふふ……昨日の失態を制裁できるチャンスね……頑張らなきゃ！！」

ガッツポーズをして気合いを入れた一人の暴走娘は上条を援護するため独自の移転魔法で先に現場に急行するのであった……

続く……

## 22 一難去ってまた一難・・・（後書き）

最近忙しくなり、更新が遅くなります。申し訳ありません。

最後にこちらの都合で「5 開幕の狼煙」で登場したASでウルズ7が乗っていた機体をM9に変更されて頂きました。大変話し話ありませんでした。

また、話のご感想をお待ちしています。

では次回を楽しみしてください。今回はここで失礼します！

### 23・好感度アップ！ダウン！

23・好感度アップ！ダウン！

冬木市 とある森林・・・8:00AM

美遊サイド・・・上空

ルヴィア「美遊、貴方ならできる」

美遊「無理です」

ルヴィア「貴方なら飛べる！」

美遊「不可能です」

ルヴィア「さあ！飛びなさい！私のために！！」

美遊「横暴です」

現在、クラスカード回収のための美遊の飛行訓練実行中？エーデルフェルト専用ヘリで命綱なしのスカイダイビングを敢行しようとしていた。

ルヴィア「さあ！勇気を持って一歩踏み出さない！あなたなら必ず飛べます！できると信じれば不可能など無いのですわ！」



イリアは期待に胸を膨らませながらクラスカードの魔力を解放した。

イリア「えーと・・・限定展開！」

ルビーが弓へと変化した！！

イリア「ホントに出た！これがあれば勝てちゃうんじゃない！？よし、さっそく試し打ちを・・・ん？」

イリアは気付いた。弓が出たが肝心の矢がない！

イリア「矢は？」

ルビー「ありませんよ」

イリア「えええ、矢だけ！？全然意味ないよコレ！」

ルビー「そういえば、こんなんでした。凜さんが試した時は手近にあった黒鍵を矢の代わりにして使っていました」

イリア「え？なに、その現地調達しないと使えない弓・・・」

イリアは使い方が分からないため、アーチャーのカードは使えないと判断する・・・しかし、このカード・・・使い方が正しいととても強力な力を発揮する。

イリア「あ！？」

ルビー「残念、時間切れです」

ルビーは元のステッキに戻った。

ルビー「先は長そうですね。イリアさん」

イリア「そうだね」

イリアは地道に魔法の練習を始めた。その時！

イリア「うわ！？何！？」

いきなり、空から何かが高速で降ってきた！そして、半径五メートルくらいのクレーターが空いた・・・

サファイア「美遊様、物理保護全開にしましたが大丈夫ですか？」

美遊「な・・・なんとか」

落ちてきたのは先ほどルヴィアに落とされた美遊だった。落とされた時、飛ぼうと考えようとしたが落下の恐怖に耐えきれず、そのまま強化魔法で一難を回避できたのだったが・・・何百メートルの高さから落とされたのだから今だ立ちあがることができない。

イリア「大丈夫？さっきのは新しい大技？」

イリアは心配して話しかける。美遊はそれに反応してイリアを見る。

美遊「飛んでる」

サファイア「飛んでいますね」

美遊達は地上にいるのにイリアは宙に浮いていた。

美遊「どうして飛べるの？」

イリア「え？」

美遊「飛び方がわからない・・・教えてほしい」

美遊は苦渋の決断でイリアに飛び方を習うことにした。

イリア「教えるといっても・・・あれは」

美遊「？」

イリアの家・・・1：00PM

美遊「な・・・なにこれ・・・」

場所を変えてイリアの家でイメージトレーニングを始めた・・・いや、テレビ観賞中・・・魔法少女アニメ・マジカルブレードムサシを・・・

イリア「あ・・・あまり、深く考えないで・・・」

美遊「航空力学はおろか重力も慣性も作用反作用すらも無視したでたらめな動き・・・ありえない」

さてさて、この小学生の頭脳にどんな知識が詰まっているのやら・・・  
・学園都市に行けば・・・大変なことになるだろう・・・

ルビー「美遊さん、そんな堅苦しい理論は取っ払って、イメージです。イメージです!!」

美遊「イメージ・・・」

サファイア「このアニメを全部見れば美遊様も飛べるようになるのでしょうか。」

美遊「うーん、たぶん、無理です」

少し考えたが美遊には2次元でのイメージは無理・・・だそうだ・・・

ルビー「そうですね・・・美遊さんにはこの言葉を贈りましょう」

美遊「ん？」

ルビー「『人が空想できること全ては起こり得る魔法事象』わたしたちの創造者たる魔法使いの言葉です。」

美遊「・・・物理事象じゃなくて？」

ルビー「同じことです。現代では実現できないような空想も遠い未来では常識なのかもしれません。それを魔法と呼ぶか物理と呼ぶかの違いです。」

イリア「まあ・・・つまり、あれでしょ？」

美遊「？」



イリア「考えるな！（Don't think!）空想しろ！（Imagine!）とかいう……ってうわ……すごく納得いかないって顔ですね……」

美遊「……………」

美遊はものすごく聞いたことを後悔した顔をしていた……だが、それしか方法はないため

美遊「そう……少し考え方がわかった気がする。」

イリア「帰るの?」

美遊「うん……後」

イリア「なに?」

美遊「なぜ、戦うの?」

イリア「え……それは成り行きで……」

美遊「……………」

イリア「それにちょっとだけこういうことに憧れてたし……それにカード回収ゲームみたいじゃない!」

美遊「ゲーム?」

イリア「だから、今この時を楽しもうかなと思っ……」  
美遊「もういい」

イリア「え？」

美遊「そんな覚悟でカード回収するのなら、来なくていい・・・残り私は私が回収するから」

美遊は少し怒り口調で返答するとそのまま家を出てしまった。内心は切れていた。軽い気持ちで回収作業をやっているのが気に入らなかったのだ・・・

イリア「私・・・なんか、悪いこと言っちゃった？」

ルビー「やっちゃいましたね！イリアさん。ゲームでは今さっきの様子だと好感度が地の底に堕ちてバットかデットのエンドに直行ルート決定ですよ？」

イリア「えーーーーー！私、何のルート間違えたのーーーーー！！」

イリアは今さっきのやり取りを後悔して今夜のリベンジに備えるのであった・・・

そして、その様子を遠くから見守る2人のコンビが眺めていた・・・

九朗「あららら・・・美遊ちゃんご立腹だな」

アル「そうだの・・・あの娘の言葉はさすがにいただけなのお」

九朗とアルは遠くからイリア達を観察していた

アル「九朗、あの様子だと今晚のうちに昨日の続きを再開する様子だぞ？」

九朗「そのようだな」

アル「上条に一応報告するべきじゃないのか？」

九朗「ああ・・・そうだな・・・」

九朗は無線機を取り出し通信を開始した。

九朗「もしもし、こちら大十字九朗、応答どうぞ」

清花「はい、こちらFW、どうかなさいました？大十字さん？」

応答に答えたのは通信担当の清花だった。

九朗「そちらにいる当麻と話がしたいんだが、代わってもらえないかい？」

清花「すみません。こちらにお父さんはおりません」

九朗「どこにいったんだ？」

清花「日本に戻ると言っていました」

九朗「こつちに戻る？」

清花「はい」

九朗（たった24時間以内に戻ってくるのか？）

清花『あの・・・なにか、お父さんに用があるのですか？』

九朗「ああ、今晚にお嬢さん達が冬木市のとある場所で例の回収作業をやるらしいからその詳細を伝えてほしいだが」

清花『わかりました。では、こちらから伝えておきます』

九朗は詳細を伝えると通信を切り、再び監視に戻った。

\*\*\*\*\*

海鳴市・・・とある道 2:00AM

すずか「今日は大変だったね」

アリサ「そうだね・・・」

すずか「上条さん・・・かつこよかったね」

アリサ「そうだね・・・」

すずか「後でお見舞い行かないとね」

アリサ「そうだね・・・」

二人の頭の中には上条のことについて学校から現在にかけて、思考回路が単純になっており、途中まで一緒にいたのはが心配して話かけても片言しか返答しないくらい・・・

すずか「ハッ！」

アリサ「どうしたの？」

すずか「誰かが私たちを見ている」

アリサ「気のせいじゃないの？」

すずかは朝に起きたような違和感を覚えた。誰かが私たちを狙っている……

すずか「アリサ、しっかりして！」

アリサ「すずか、大丈夫だって！上条さんが助けに来てくれるって！」

すずか「その上条さんは今、病院よ！」

アリサ「あ……」

アリサはやっと正気に戻った。そう……今の上条は負傷して病院送りになっている。今の上条は……

すずか「アリサ、もうすぐ私の家が近いからそこに避難を……」

男「どこへ行くこうとするんだい？お嬢さん達？」

すずか&アリサ「！！！！」

2人の後ろに深くフードを被ったなその男達が複数いた

男「どこか行くなら、おじさん達が連れってやるつか？」

すずか「かまいません・・・私たちはこのまま家に帰りますので・・・」

アリサ「そういうことよ。だから、気にしないで・・・」

男「それは困る。悪いがまた掴まってもらうぞ」

すずか&アリサ（朝の時と同じ・・・どうしよう・・・今度こそ、助けはこない・・・）

すずか達には打つ手がなかった。この際は迎えを呼ぶべきだった・・・しかし、今になっては気付いても遅すぎた。

すずか&アリサ（誰か・・・助けて）

その時だった!!

??「そこ！ちよつと待った！」

すずか&アリサ「え？」

男「誰だ！」

全員は声が聞こえた家の屋根を見る。そこには・・・

上条「貴様ら！その小学生に何しようとしている！」

すずか&アリサ「上条さん!？」

男達「……げ……幻想殺し!？」

一同は上条当麻の登場に驚きを隠せず、あちらこちらで彼の名を呼ぶ

男A「ば……ばかな。奴は病院に居るはず」

上条「病院？ああ……さっきまではな。貴様らみたいな腐った連中がアリサとすずかを狙ってくると聞いて黙っている上条さんだと思っな!！」

アリサ&すずか（上条さん……私たちのために助けに来てくれたの）

アリサ達は上条の言葉に感動し、上条を悪者から救ってくれる騎士に見えていた。

男A「ひ……ひるむな！たとえ奴は怪我を負っている。十分な力を出せないはずだ！」

上条「俺を侮るなよ」

上条は屋根から飛び降りアリサ達の所、降り立つ

上条「二人とも、急いでここから離れるんだ。」

アリサ「わ・・わかつているわよ！」  
すずか「分かりました。」

二人は上条が空けた通路を通り、すずかの屋敷に退避していった

上条「さて、これで存分に戦えるな・・・覚悟はいいな？」

男達「クッ」「クッ」「クッ」

男達は改めて上条を囲む・・・昔の上条なら、10人以上の大人数を相手には絶対しないに等しいが、今は100でも1000でも上条は1歩も引かない漢となっているため、恐れることは何もない。

男B「おりゃあああああ!!」

上条「ふん!!」

バキ!ドン!ドシャ!

上条の背後取っていた男の1人が一瞬、その場で倒された。上条はただ素手で急所を攻撃した。それは昔みたいな喧嘩のやり方ではなく、完全に人を倒すための八極拳に近いモノだった。

上条「人が寝込んだからって、いい気になるなよ」

男達「クッ」「クッ」「クッ」

上条の脅しは紛れもなく進化していた。昔は美琴を脅かすくらいし



かできなかったのが、今になっては1つの不良を怖がらせるまでにまでいったつているのだ。

男A「魔術だ！魔術で対応しろ！」

上条「そうは・・・させるか！」

ダッ！

上条「強化！筋力8：物理保護2！！」

上条は強化詠唱を唱えると先ほどの倍のスピードで敵との間合いを詰める。

上条「エセ神父から学んだ。八極拳奥義！八大招式！！」

ドカ！バキ！ドカ！・・・

連続8回の大技が襲撃者達に襲いかかる！

男C「くが！？」

男D「うげ！？」

男E「ぐは！？」

男F「ひでぶ！？」

8人のうちの4人が上条の八極の餌食になる。最後の男Fはオーバーキルに等しいほどの2撃を喰らい、壁のオブジェと変わっていた。

上条「あと、3人・・・バカみたいな幻想を抱いた奴はすべて潰す」

上条は残りの三人と対峙したその時！

ガシ！

上条「なに！？」

男C「まだまだ・・・まだ、終わっちゃいない」

上条「う・・・やはり、最初の攻撃は浅かったか」

上条は最初の攻撃を急所に当たらなかったことに気付かず、男Cに羽交い絞めにされた。

男A「よくやった。よし、このまま術を叩きこんでやる」

上条「しまった」

男達は魔力を込め、一気に上条を仕留めようとする。

上条「やべ、これはかなり」

その時！

シュン！シュン！

男A「ぎゃあ！？」

男B「ガッ！？」

上条「狙撃!？」

何の前触れもなく、矢が飛んできて二人の男を戦闘不能に追いやった。

上条「ふん!!」

男C「くそ!ぐは!？」

上条が振りほどこうとしたら、もう一発の矢が男Cの肩に命中した。恐るべき命中率だ……

上条「いたたた……かなでか？」

上条は狙撃してきた方向を見ると大きい屋敷の屋根に大型ボウガンを携えた少女が照準器を覗きこんでいる所が見えた。

男G「う……うわあああああ!!」

残された男Gは急いで逃げ出したが、狩人たる少女には容赦はない

バシユン!

男G「がああああああ!!」

容赦ない追撃が襲いかかる。男Gに罪のない少女を襲った報いであるかのような矢が突き刺さる。

これにてアリサ・すずかの2度目の襲撃は上条とかなでにより、失敗に終わるのであった……

アリサ「上条さん！大丈夫ですか！」

すずか「上条さん、ご無事で」

すずか達が家の使用人達を連れて上条の助けに戻ってきた。しかし、事態はすでに終わっていた。

忍「どうなっているの！？すずか」

すずか「え……それは」

鮫島「アリサお嬢様、敵は殲滅されたようです。」

アリサ「そのようね」

倒れた男達の真ん中に上条が1人立っていた。上条の格好を改めて確認すると、無理やり巻いた包帯の端があちらこちらで途切れ、風になびかせていた。それはここに来るために無理したという形が現している。

忍「あの人为上条当麻……」

月村忍は上条を見るのは初めてだった。そのため上条がどのような人物か知らなかった。

上条「……………」

上条はただ立ちつくしていた。その後ろ姿は漢らしさがにじみ出て

いた。

アリサ「ねえ、大丈夫？上条さん？」

すずか「あの？上条さん」

アリサ達が上条を触れた瞬間、上条は力なく倒れた……

アリサ「か……上条さん!？」

すずか「上条さん!」

上条には意識自体がなかった。その場で気絶していた。

その時、上条の身体は限界に達しており、そして日本に戻ってくる時に打った痛み止めが切れた瞬間、完全に気絶してしまった。

医者「上条さん！勝手に病院から抜け出して何をやっているんですか!！」

その時、白衣と丸メガネを掛けた男性が上条に近寄ってきた。

医者「この人はこちらで預かります。後のことは任せて下さい」

すずか「え……?」

アリサ「え……ええ!？」

医者は上条を背負うとそのまま走り去っていた。

忍「これは後でお礼を言わなきゃね。すずか」

すずか「そうですね。忍姉さん」

鮫島「お嬢様、あの人は素晴らしい人ですね」

アリサ「そうね。ほんと、いい人です」

そして、アリサとすずかの上条に対する好感度が上がった。そして、後日お見舞いに病室に向かったがその時、上条はそこにはいなかった・・・

ちなみに上条を回収したのは変装した士郎だった。

続く・・・

### 23・好感度アップ！ダウン！（後書き）

お久しぶりです！

話の更新がやっとできました！

いや〜話を進めたいと思っていたら・・・行き過ぎて、なのはs  
trikersにまで、跳んでしまいました！！

ははは・・・きまぐれで書いても行きすぎだろ・・・と思いますが、  
別の話で、strikers編を投稿したいと思います。

ぜひ、そちらも読んでみて下さい！

では、また次回をお楽しみに！！

## 24・行け！逃げ！上条君！！上編

24・行け！逃げ！上条君！！上編

これは上条さんがチート化してしまった理由・・・そして、なぜチート魔術や八極拳などとふざけた格闘術を使えるのか。その原因になった。バカげたお話です。

2ヶ月前・・・時計塔

シャルロツテ「ユリカ、上条の様子はどう？」

ユリカ「見たままです」

上条「・・・」

上条は丸焦げになっていた・・・

シャルロツテ「所で上条の魔術回路はどのくらいだったけ？」

ユリカ「今現在10本です」

シャルロツテ「少なッ！」

上条が丸焦げになった理由・・・それは大魔術を行使をしようとしたら暴発してしまったから

ユリカ「だけど、最初の1本よりはマシだと・・・」



シャルロツテ「バカか・・・それでよくあの埋葬機関なんか喧嘩したモノね」

ユリカ「その件はどうになりました？」

シャルロツテ「なんとかなったわ。あのバカ、知らない所で聖堂協会の知り合いを作っていたみたいで簡単に手回してくれたわ」

ユリカ「天下の上条当麻ですね」

シャルロツテ「どういう意味での天下の上条なの？」

それは色んな意味で・・・天下の旗男・不幸男など・・・

数分後・・・

シャルロツテ「こうなれば、上条を徹底的に改造するしかないわね！」

ユリカ「時間がないわよ。ゼルレツチに返す期間は後・・・2ヶ月くらいしかないわよ？」

シャルロツテ「いくらなんでも、埋葬機関・・・いや、代行者くらいの戦闘能力と大魔術の行使くらいできるようになってもらわないと！預かった私達の評価が下がるわ！」

ユリカ「その前に、今の期間が短すぎて無理がありますね。まあ、ルナスが体力面の方では鍛えくれたみたいだしね。後は、魔術面と

ということね」

シュルロツテ「それなら、あれしかないわね」

ユリカ「え！？まさか・・・あれをやるの？」

シュルロツテ「ユリカ・・・貴方の研究の成果を試す時だわ！！」

ユリカ「ちょ・・・ちよつと！？姉様！？たしかにあの術式は完成にしましたが、それでは上条の過去を変えることになりますよ！？」

シュルロツテ「私が責任は取ります！やりなさい！！」

ユリカ「・・・わかりました」

シュルロツテ「後、アインツベルンから押収した礼の聖遺物のレプリカを上条に封印しておきなさい！！」

ユリカ「え・・・え~~~~~~~~！！？それは危険では！？」

シュルロツテ「幻想殺しを持っている上条が持っていれば計算上では永遠に封印は解けないわ」

ユリカ「だけど、もし・・・上条が死んでしまった時どうすれば！？」

シャルロツテ「ユリカ・・・あなたが創った魔導器・・・使ってみれば？どうせ、封印指定で取られるんなら使って方がいいでしょ？」

ユリカ「・・・そうですね。上条がうまく使ってくれるのなら、私は満足です。」



ユリカ「時の次元・・・空間を転生せよ!!」

詠唱が唱え終わると上条は光に包まれ・・・そして・・・

上条「ん・・・どこはどこ?」

シャルロツテ「あららら・・・まさか・・・本当に成功するなんて・・・」

ユリカ「上条・・・かわいい」

上条「あれ?お姉ちゃん達誰?」

上条が!子供に戻っていた!15歳から10歳の若返り!!

シュツ!バキ!

上条「アタ!?!」

バタ!

シャルロツテの手刀で再び気絶する・・・これで3度の気絶である・・・

シャルロツテ「今のうちに終わらせるわよ」

ユリカ「わかりました」

二人は気絶している上条に聖遺物と魔導器を埋め込む作業を開始し・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

シャルロツテ「終わったわね・・・」

ユリカ「はい、無事に・・・しかし、上条には返しきれない恩を作  
つてしまいましたね」

シャルロツテ「大丈夫！最後にはルナスが上条をもらってくれるわ  
！だってあの子、上条に夢中だもの！」

ユリカ「・・・はあ・・・ほんと・・・返しきれませんね・・・恩」

色々といじられた上条自身ははまだ、目覚めずドンドンと話が進ん  
で行くのだった・・・

2日後

上条君「あの〜〜〜僕はいつ家に帰してくれるんですか？」

シャルロツテ「君の頑張りようで早く帰れるわよ」

上条君「いや、現在は上条君！10歳に戻ってしまったので「君」が付く！」

上条君「だけど、早く帰らないと父さんと母さんが心配しますし・・・後、学校が・・・」

シャルロツテ「私には知ったことではありません〜〜〜ん」

上条君（鬼だ・・・このお姉ちゃん）

シャルロツテ（かわいい・・・）

泣きそうな上条君を見てシャルロツテはドンドンと弄りをヒートアップしていく。

ユリカ「姉様・・・上条君が可哀そうよ」

上条君「うわああああん！ユリカお姉ちゃん！」

抱き！

ユリカ「あら・・・かわいい」

上条君はユリカに抱きつき救いを求める。ユリカはそれを受け入れる

シャルロツテ「私・・・完全に悪役ね」

ユリカ「姉様が悪い」

そして・・・数分後

コンコン！！

シャルロツテ「どうぞぞー！」

言峰「失礼する」

シャルロツテ「あら、早いわね」

入ってきたのはどこぞの神父だった。

シャルロツテ「言峰神父、さっそくだけど、あの子を預かって短期間で魔術師・・・そして、代行者並みの戦士に育成してください」

言峰「あの寝ている若者かね？」

上条君「zzzz」

シャルロツテ「無理？」

言峰「いや、1ヶ月くらいで魔術師としての素質と代行者の戦闘能力をつけるくらいなら」

シャルロツテ「おや？以外に楽しそうね」

言峰「ふふふ・・・そうかね？そう見えるかね？」

ユリカ「・・・・・・・・」

神父と姉の話をみているユリカはとても不快な気持で見守るのであった・・・

言峰「さて、さっそく冬木に戻って鍛錬を始めよう」

シャルロツテ「では、1ヶ月後を楽しみにしているわよ。言峰神父」

言峰「ふふふ。期待に答えよう」

言峰は上条君を抱き上げると転移魔術の陣に入り、消えていた・・・

455

数日後・・・言峰教会の庭

言峰「今日はこのくらいにするか」

上条君「あ~~~~いつまでこんな地獄の鍛錬をしなきゃいけないだ~~~~」

上条君は言峰の八極拳を叩きこまれていた・・・そのため、肉体的・精神的においてボロボロだった・・・





最後はお約束の空腹で倒れる。そして、生き倒れとなってしまうのであった

が、そこに!!!

はやて「先生、すみません。家まで送ってもらって」

石田「大丈夫よ。だって、女の子一人で帰らせるのはあぶないですよ？」

はやて「あははは・・・あれ？」

石田「どうしたの？」

はやて「あそこに人が倒れてる？」

石田「え!?!」

2人の目の前に1人の修道着を着た少年が倒れていた・・・上条君である!

石田「ちよつと君大丈夫!?!」

上条君「お・・・」

石田「お？」

上条君「おなか減った・・・後、疲れた」

倒れたまま石田医師に返答する

石田「完璧の生き倒れね」

はやて「さすがにこれは笑えへんな・・・」

2人は生き倒れの少年の処遇を考える。そこではやてが

はやて「先生、ついでだから連れていきましょう」

石田「いいの？」

はやて「だって、このまま放っておくわけにもいかないし」

石田「そうですね」

石田医師は上条君を背負うとはやて家に向かっていくのであった。

はやて家

はやて「い・・・いい食いつぶりね・・・」

石田「それほどお腹を空かしていたのね」

上条君「御馳走様！」

はやて「早ッ！」

石田「10歳と思えない行動力ね・・・いったいどんな生活を送っている・・・」

言葉に言えないほどの地獄の教会生活・・・なんて上条君の口から言えない・・・現にトラウマだから

はやて「そういえば、名前は？」

上条君「僕かい？僕は上条当麻！平凡な小学3年生・・・そして、分からない内にとある教会で修行中・・・ガタガタガタガタ」

はやて「どうしたんや!？」

上条君「トラウマが・・・地獄の鍛錬の断片が・・・ガタガタガタガタ」

石田「あまり、そこは話さなくていいから」

はやて「それで家はどこ？」

上条君「それがこの世界に・・・ない」

2人「はい!？」

上条君「家と言っても、教会だが・・・帰りたくねー！ー！ー！ー！  
ッ」

石田「これは教育委員会とか連絡とかした方がいいのかしら？」

はやて「それなら、家に住む？」

2人「はい!？」

上条君「何を血迷ったことを言っているんですか!？上条さんは獣ですよ。野良犬ですよ!？」

石田「はやてちゃん?いくら1人暮らしても・・・それは・・・」

はやて「いいじゃないですか!1人2人が居候が増えても変わらないもの」

上条君「よく考なよ!男ですよ!お・と・こ!もし、間違いが起きたらどうするんですか!！」

はやて「間違いって?」

上条君「たとえば・・・押し倒して・・・ブツブツブツ・・・」

はやて「その時は責任取ってや!一生私の面倒を見てくれてや!私車椅子生活だし」

上条君「ウツ!なんだ・・・その誘うような仕草は・・・」

はやては車椅子でくねくね身体を動かして上条君を誘惑する。

はやて「別にいいんやで～～?私は抵抗なんて出来ないに等しいやで～～?簡単に襲おうと思えば襲えるで～～?」

上条君「チヨツ!これでも教会で修行していた身なんだよ!？」

なことができるわけ……」

はやて「逆に溜まってるんじゃない？いいんやで？我慢しなくて？」

上条君「石田先生！どうして、はやてさんは大人に物事をあんなに詳しいの！？」

石田「それは……分からないわ」

上条君の質問を石田医師は顔そむけて答える……

はやて「とにかく、行くところがないなら、強制的に家や」

上条君「拒否権がないようだね……仕方ない。わかりました」

はやて「先生、ではそういうことで」

石田「わかりました。はやてちゃん。できれば、間違いは起こさないようにね！」

はやて「できればね」

上条「地獄の教会生活から……今度は地獄の快樂地獄に来てしまったか……不幸だ」

上条君は小声で言うのであった……

数時間後、石田医師は病院に戻り、はやて家に残ったのは家主のはやてと居候の上条君のみ……

はやて「さて、当麻君。さっそくだけど、お風呂に頼んでいいかな？」

上条君「うん、大丈夫だよ」

はやて「お風呂が終わったら、私の背中流してな」

上条君「は!?!」

はやて「男女の営みはそれでな」

上条君「自重してください」

はやて「だけど、拒否権はないで」

上条は「はい、わかりました」

はやて「いい返事や、さっそく頼むで!」

上条「イエス、ママ」

そして、上条とはやての共同生活が始まった・・・

続く

行け！逝け！上条君！！中編

行け！逝け！上条君！！中編

あゝ僕、上条当麻 10歳 好きなことはゲームなど 好きな女性のタイプは年上美人で家事などを出来る優しい人・・・なぜか知らないけど、自分のベットで寝ていたらから知らない内にどこかの世界の教会に連れて込まれていました。なんて不幸なんだ・・・僕は・・・だけど、この世界で誰かが不幸なら僕はその人の不幸を代わりになってあげたい。僕はどこへ行っても不幸な人間だもの・・・だったら、世界の不幸を僕が代わりに受け入れて上げたい・・・そう思っています。

そして、今現在1人暮らしの女の子・・・八神はやてさんに居候として暮らしているんだ。実際は戻るべき場所の教会に戻りたくないだけけど・・・

僕は鍛錬は好きでも嫌いでもないけど・・・座学も嫌い！カンタンに勉強自体が嫌い！だけど、家事や肉体労働・・・人助けは人一倍頑張る！そんな熱血少年・・・そこまではいかないけど・・・

さて、なんだかんだで僕の非日常的な日々が続く・・・今日も何とぞ。不幸ではありませんように・・・

はやて家に居候して数日・・・はやて家

朝



はやて「ふあゝゝゝ、もう朝か・・・当麻君！」

上条君「はいはい、ただいま」

上条が修道服にエプロンを付けた格好ではやての部屋に入ってきた。なんと不格好な格好だ・・・黒い修道服と白いエプロンという組み合わせは・・・

はやて「車椅子に乗るのを手伝ってくれへんか？」

上条君「お安ご用ですよ。お姫様」

はやて「いつも、すまないねゝゝ」

上条君「それは言わない約束でしょ」

上条君ははやてを軽々と持ち上げる。さすが、言峰の特訓を耐えていた男である。はやてくらいの女の子を2人は二人は軽く持ち上げそうな勢이었다。

上条君「よいしょ、これで大丈夫かい」

はやて「うん、これでええよ。ありがとな」

上条君「このくらいならいつでも・・・」

はやて「朝ご飯食べたら、着替えもよろしく頼むな」

上条君「ウツ！毎日思うのだが、なぜに天は僕に試練を与えるんだ！？」

はやて「試練でもないやろ？別に毎日やっていることだし。もう慣れたやろ？」

上条君「その慣れが一番怖い！女性の着替えを手伝うなんて人生にあるかないかのことだから！！」

はやて「あははは、大丈夫や！別に当麻君に着替え見られても恥ずかしくないから！」

上条君「俺って・・・男として見られてない？」

はやて「そんなことはないよ！んも・・・この話は終わりや！朝ごはんの準備しよっか」

上条君「それは問題ない！僕が先に作って置いた。後は食べるだけ！」

はやて「当麻君、いつも早いな〜。」

上条君「まあ・・・これも慣れという奴で・・・」

教会ではいつも4時から起きるのが当たり前・・・その間に教会の清掃・地獄の朝食の準備・・・上条君がすべて行う。そうしないと言峰がいつもの鍛錬を倍にするからだ！そのため、上条君はいつもその恐怖に脅されながら毎日4時には起床し色々と家事をこなすのである。

はやて「んじゃ、上条君が作っていた朝ごはんをいただきにいきますか！」

上条君「はやてには負けるけどね。」

はやて「そんなことはないよ。個性的で面白い料理だし」

上条君「ははは・・・教会で食べられるモノをかき集めて、自分の料理法だからね。味がなぜか、辛くなってしまふ。これって何かの呪いかな？」

はやて「そうやね。いつも思うけど、なんで当麻さんは辛い調味料を知らない内に入れてる時がよく見るよ？」

上条君「うわ・・・自分を殺すための殺人マーボの癖がでてしまふのか。これはやばいな」

はやて「大丈夫や！辛いといっても、ピリ辛くらいだから」

上条君「そ・・・そうなのか。ならいいけど」

はやて（あははは・・・なんかまるで自殺用の毒を作っていたみたいやな。当麻君）

はやては上条君が教会で何をやっていたか見当がつかなかった・・・

はやて「では、さっそくりビングに・・・」

バキ！

上条&はやて」「あ……」「

車輪が外れた。どういうわけか。数センチ前進しただけで車椅子が中破した。

上条君「……僕がリビングまで運ぶよ」

はやて「頼むわ……」

そして、上条君ははやてを背負うとリビングの方へ移動した。

外

言峰「ふむふむ、相変わらず面白い展開を作るな。愛弟子は……」

言峰は望遠鏡と使い魔（盗聴器付き）を使って二人の様子を見ていた。

言峰「さて、あいつは真面目なのか……朝早くから家事や掃除、鍛錬までも……あれなら少し修行プランを変更して鍛錬の数を増やしてもいいな」

本人は上条君の苦しむ顔を見て楽しんでいたのか。弟子たる人物のことはあまり考えていないらしい……

言峰「あいつはどんなにバカでも魔術師として力はある。もし、あいつが魔術を他人に見られたら・・・その時点で幸せな新婚生活みたいな生活は終わりだ・・・まあ、いつ終わるかは予想できんがあいつの運のなさは筋金入りだからな。一時の時間を過ごすがいい・・・上条当麻よ」

言峰はその場を移動しほかの観察ポイントに移動した・・・

はやて家

はやて「当麻君、どうする？車椅子が壊れちゃったから私は動けないけど・・・」

上条君「ふう〜〜〜こうなると困ったモノだね。僕も動けないし」

はやては車椅子がないと何もすることができない。足が不自由というのはホント大変である。

はやて「困ったね〜車椅子がないと・・・」

上条君「色々とお手洗いも満足にいけない・・・むしろ、あつたとしても僕の苦勞は変わらない」

はやて「ちょっと失礼ね！まるで私がどこぞの不自由なお年寄りみたいや！」

上条君「その前に五体不満足の人みんなそうだと思うんだが・・・」

「

はやて「うっ・・・否定できないし、突っ込めない」

障害を持つ人は老若男女問わずほとんど変わらない・・・そのため、介護する人が必要になる。そして、ここからが上条君の見せどころ！！

上条君「だが！ここは男の見せどころだ！！」

はやて「え！？」

上条君「別に1人にしなればいい話だ！」

はやて「でもどうやって？」

上条「こうやって」

はやて「こ・・・これは！！」

数分後・・・私立聖祥大附属小学校 校門前

なのは「おはよう！みんな！」

アリサ「なのは、今日は遅いわね」

すずか「うん、そうだね」

なのは「ちょっと昨日、家の手伝いでちょっと無理して起きるのが遅くなっちゃった」

アリサ「無理はよくないわよ」  
すずか「そうだよ。無理しちゃよくないよ」

なのは「大丈夫だよ。そういうことは慣れてるモノ」

アリサ「そんなこと言っているとどこかで行き倒れるわよ」  
すずか「そうそう、行き倒れみたいなことになれば後々大変なことに・・・」

バタッ！

3人「きゃー！！！！生き倒れだ！！しかも、女の子を背負って！！」

校門と逆の歩道で2人の男女が倒れている。それは女の子を背負っている修道服の男の子が倒れたからである

はやて「当麻君、無理はよくないよ」

上条君「大丈夫、こういうことは慣れてるから・・・はやては怪我は？」

はやて「私は大丈夫や」

上条君「そんなら、いきますか」

スタスタスタスタ・・・

再び立ち上がると何事がなかったようにその場を立ち去る。その様子を見ていた。3人は・・・

なのは「頑張るね。あの男の子」

アリサ「そうね。だけどあの服」

すずか「修道服だね。どこかの教会の子かな？」

言峰「ふむ、まさか背負っていくとは、面白いことを考えるな！」

・・・

3人（（（！！誰！？この神父さん！？）））

3人の後ろに修道着を着た男が立って笑っていた。

なのは「あゝあゝあの二人の知り合いですか？」

言峰「そうだな。あの修道服をきた少年の保護者というところだ。」

アリサ「あの子、なんで女の子を背負っているんですか？」

言峰「そうだな。五体不満足な少女の車椅子が壊れた為、介護している弟子が猿知恵で担いでやるべきことをやりにいくみたいだな」

すずか「へえゝゝゝまるで仲のいい若い夫婦見たい」



言峰「そう思うかね・・・ふふふ・・・いやはや、あの二人を観察している面白いモノだ。」

なのは「どこが楽しいんですか？」

言峰「ふふふ・・・あいつはああ見えても初でな。女の裸を見るだけで・・・ふふふ」

3人（（あ~~~~）苦勞してるんだね。あの子・・・）（）

人の苦勞を笑う言峰に対し、3人は上条君に同情するのであった・

病院

石田「お疲れ様ね。当麻君」

上条君「はい・・・」

色々と道を間違えるなど色々と不幸な展開がおき、そして目的の時間より遅れて到着・・・

はやて「こういうのも良かったから帰りも背負ってもらおうかな」

上条君「ちょい！あれだけ周りの視線が痛かったのにまだヤル気！？」

学校の前でも、町の中でも・・・2人のかなり目立っていた。はやてもそれはわかっていているけど、それでも彼女にとっては楽しい時間であったのに違いない

石田「はいはい、はやてちゃんも当麻君をあまり苛めない」

はやて「あははは、けど少しからかいたくなっちゃうや！なんかこう・・・」

石田「まるで家族みたいなの？」

はやて「そうそう！そんな感じや！」

上条君（家族か・・・）

上条君の心は複雑だった。家には帰りたいがはやてを1人にしていいのか・・・自分が出ていけば、はやてはまた寂しい生活に逆戻り・・・そんなこと見ていられない。だけど、帰らなきゃ両親が心配するし・・・と考えれば考えるほど複雑になっていく・・・

石田「当麻君？どうかしたの？」

上条君「あ！いや、何でもありません！ただ、今日の晩御飯をどうしようか考えてただけです！はい！」

はやて「少し早くない？当麻君？」

上条君「はやて、朝すべての在庫が切れらしたんだ！だから、買い出しが必要になったんだ！」

はやて「そうなん・・・それなら帰りに寄って行くこつや!」

上条君「そうしましょうか・・・僕は診察が終わるまで外で待っているよ。後、車椅子も忘れずに」

はやて「わかっているや。んじゃ!ちよつと待ててな!」

上条君「おう!」

はやては病院の車椅子に押されながら、診察室に消えていった。

病院の外

上条君「ふう〜〜やっと一息つける」

言峰「ずいぶん、健闘しているようだな。上条当麻よ」

上条君「!!! 言峰神父!」

上条は一瞬のうちに間合いを取り構える。

言峰「まあ待て、私は様子を見に來ただけだ」

上条君「言峰神父・・・あなたは何が望んで僕を鍛えているのですか?」

言峰「ふむ、それは後々わかることだ。この場では言えぬ」

上条君「後々っていつ分かるですか！」

弟子は師たる神父に怒鳴りつける。理由もないのに無理やり鍛えられては上条君は納得できないのだ。

言峰「そんなことより、愛弟子よ。お前はあの少女に熱が入っているな？」

上条君「だから、どうした」

言峰「フツ！別にどうしたことではない。ただな」

上条君「ただ？」

言峰「お前の存在があの子を不幸にするだけだと思っただけだな」

上条君「！……どういうことです。言峰神父」

言峰「少し考えればわかることだ。お前はあの少女を幸せにしたいと思っていると思うが今のお前にはその資格はない。」

上条君「僕では役不足とでもいうのですか！？」

言峰「あくまで今だ。そう考えるな」

上条君「今？どういうことですか？」

言峰「いずれ、わかることだ」

神父は勿体ぶって話さない。弟子はこのやり取りにむず痒さを覚え

る。

言峰「簡単にいうとだ・・・お前はただ、別れの悲しみを増やしているだけといっているだけだ。」

上条君「・・・・・・・・」

言峰「お前はいずれ、元の場所に戻らなければならない存在だ。その時、お前達が親密になる度に別れという不幸は増していく・・・お前は人の不幸を肩代わりしたいと思っっているようだが、お前の今の行動は逆の不幸にする方向にある。」

弟子は黙り、反論をしない。いや、できない。正論過ぎて返答もできない。どんなにバカでもいずれ別れるのにこれ以上、一緒に居ていいのかを迷わせる・・・

言峰「だが、一時の時間を過ごすいい・・・お前なりに少女を不幸にせず幸せにして見せるがいい」

そう言うと神父はその場から立ち去り、上条君はその場で神父が見えなくなるまで神父の去った方向を見続ける・・・

はやて「当麻君、終わったで・・・・・・・・どうしたの?」

上条君「ん?いや、ちょっと考え事を・・・」

はやて「何かあったん?」

上条「それは・・・」

家に帰ることを考えていた・・・なんて言えない。それに神父がいつていたことを考えていたなんて絶対に言えない

上条「それが今さっき、綺麗なお姉さんに声かけされたからつい、見惚れちゃって！」

プチ！

上条（ハッ！しまった！！）

はやて「そうなん・・・そういえば、当麻君って、年上美人が好きだったんやな・・・」

上条「いや、その・・・」

はやて「ええよ、別に！私は気にしてないから・・・ええ、気にしてないから」

上条君（怖い・・・（TOT））

はやての後ろに黒いオーラが・・・これは夜に恐ろしいことが起きそうだ・・・

はやて「家に帰ったら、新しい誘惑の仕方と試さないと・・・ブツ  
ブツ」

上条君（あれ？これってまさか、僕を殺す方法を考え中！？）

はやての独り言は聞こえないが、上条君はその様子から身の危険を察知する。これは後々大変だ・・・

はやて「・・・はあ~~~~考えるのも疲れるから、いつもと同じように図書館に行こうか?」

上条君「い・・・イエス・ママ!」

上条は恐怖のあまりどこぞの軍隊の掛け声を上げて、車椅子を押し現地に向かうのであった・・・

## 図書館

はやて「当麻君、その本もとって!」

上条君「はい」

はやて「おおきに」

現地に着くとさっそく本を搜索から始まる。ずらりと並んだ本の中から読みたい本を確実に取り出していく。

上条君「だけど、こんなに読み切れるのかい?」

はやて「読めなかったら、いつものように借りればいいや・・・それより、当麻君は本は読まないの?」

上条君「そういえば、この前のあのライトノベルをすべて読んじやったからな。読むモノないな」

はやて「参考書は読まないの？」

上条君「上条さんにそんなモノは見たら、頭がパンクしてしまます！それだけは勘弁を！！」

はやて「あははは・・・」

上条君はどこそその小説は読むことはあるが、参考書は読まない！実際勉強が嫌いだから！！

上条君「あ！少し離れるけど大丈夫かい？」

はやて「どうしたん？」

上条君「ちょっと気になる本を思い出したから。違う本棚にいつてくるよ」

はやて「そうなん。気を付けてな！」

上条君「おう！」

図書館 奥

上条「我を包み隠したまえ・・・」

上条は手帳みたいなメモ帳の詠唱を唱える。そうすると人払いの結



界が結成された。

上条君（言峰神父が言った本はこれかな）

上条君が見つけたのは古ぼけた大辞典だった。そこには魔術など術式や呪式などが細かく暗号化されていた。本の奥に行くほど術式や呪式などの高度など違ってくる。

上条君は奥の机に本を置き、ページをめくり始める。

そして、奥のページを見ている内に上条を止める魔術のページを見つける。それは大魔術の詳細とその魔術刻印だった。その術式には封印がされており、ちょっとやそつとでは解くことができないが・

バキーン！

一瞬にして封印が壊れる。上条君の右手は説明不要の幻想殺し！どんな異能の力を消してしまう能力・・・上条君にはホントは魔術の行使自体が無理だが・・・言峰神父の鍛錬と肉体改造により行使が可能になった。肉体改造といっても、上条君に結成された魔術回路の回路を変更したのみ・・・簡単にいうと幻想殺しが魔術回路を打ち消さないように右手の魔術回路を切断し、幻想殺しの影響を受け無くした。

さすがに幻想殺しも触れていないモノを打ち消すことが出来ず、結果、右手を除いてほかの魔術回路は正常に循環するようになったり、魔術師としての力が発揮できるようになったが・・・まだ見習いのためか使える魔術は少ない・・・

上条君「この術はまだ未完成・・・でも、封印指定を受けてる。この術は僕に適性じゃないかな？右手と同じ能力と似ているみたいだ

し」

そう言うと上条君は左手で魔術刻印を触れて・・・

上条君（神父が教えた通りにやれば、儀式は成功する・・・こういうことは得意じゃないけど・・・やるしかない！！）

そして、精神を集中し、近くに置いたメモ帳をみながら、なにかの詠唱を唱える。そうすると、本に刻まれている刻印が発光を始め、上条の左手に吸い込まれていく・・・

上条君「なんとか無事に終わったな。ふう~~~~ウツ!？」

いきなり、左腕から痛みが走る！上条君は急いで腕を見ると黒く発光する魔術刻印が刻み込まれていた・・・

上条君「・・・消滅の魔術刻印・・・使いこなすには鍛錬が必要か・・・それに使い方を間違えると・・・大変なことに・・・」

言峰『どうやら、魔術刻印の継承が済んだようだな』

上条君「!?!」

後ろから言峰の声が聞こえて振り向くとそこには1匹の鼠しかいなかった。

言峰『我が弟子も立派な魔術師として迎えられたわけだ。だが、不正だがな』

鼠からその声が聞こえる。どうやら、使い魔を使ったら通信方らしい

上条君「聞きますけど、どうしてこんな本がこんなところにあるんですか？」

言峰『世界は広い・・・どこかに宝が眠っているか。誰にも想像は出来ぬものだ』

上条君「僕がこの本を見つけて、こんな魔術刻印を取らせるような考えだったんじゃないですか？言峰神父？」

言峰『無論だ。お前と適性のある魔術はそこそこないから・・・むしろ、その魔術刻印の起源は消滅の魔術を行使するモノだ。今のお前には過ぎたシロモノだがな』

上条君は「・・・これで僕のやることは終わったのではやての所に戻ります」

上条君は立ちあがると本を元の場所に戻し、移動を開始する。

言峰『もし、少女が悲しむのなら、その力で・・・いや、お前の手で殺めてやれ』

上条君「!！」

上条君は振り向き、使い魔を睨めつける！

言峰『どうした？所詮、救いようがないのなら・・・お前の手で苦しみから救ってやるのが、お前のためになるが？』

上条君『ふざけんな！エセ神父ー！そんなことできるわけねー

だろ！！」

魔術的結界は張り巡らされているため、一般人には聞こえないが結界内に声が響き渡るほどの怒鳴り声……いつも優しい言葉使いの少年が完全に様変わりした！

言峰『ふふふ……お前にはまだ早かったか……だが、お前が少女に魔術関係のモノを見られた場合……』

上条君「なんなんだ」

言峰『教会の代行者として私が抹殺する』

上条君「！！」

言峰の所属する聖堂教会は異端のモノ（魔術や魔法）を許さず、破壊や抹殺をする……そのための代行者が言峰のようなモノや埋葬機関と言った殺戮者を指すのだ

上条君「そんなことさせるか！第一、あの平凡な生活にどこに魔術関連のモノがあるというんだ！！」

はやては普通の少女である。そんな所に魔術関係のモノがあるなど考えられない

言峰『ふふふ……それもそうだな。だが、覚悟だけはしておけ。お前がいるかぎり、彼女は命の危険に晒されるということ……』

言い終わると使い魔はその場から立ち去っていた……

上条君「…………僕ははやてを殺さないし殺させない…………僕はあの子の幸せにする…………それだけだ」

上条君の決意は変わらない。助けるモノは助ける。それは今も未来も変わらない思いだった。

・  
・  
・  
・  
・

はやて「当麻君、読みたい本は見つけられた？」

上条君「まあね」

はやて「どうしたんや？なんか暗いな？」

上条君「ははは…………ちよつと参考書ほくって…………」

はやて「そうだったか…………それは災難だったな…………」

上条君「ははは…………はあ…………」

実際は言峰との会話でテンションが下がっているのだ。

はやて「だけど、勉強は必要やでえ」

上条君「僕が勉強…………フツ！無理だ」

はやて「私が教えてあげるからそこに座りや！」

上条君「は・・・はやて先生！勘弁して下さい！上条さんは勉強をすると死んでしまいます！！」

はやて「さもないと当麻君の弱みを一つ一つ・・・大声で叫ぶで」

上条君「う・・・」

そして、渋谷合い向かいのイスに座るとはやての講義が始まるのであった・・・

はやて家・・・夜

上条君「はやて~~~~風呂入ったよ！」

はやて「んじゃ、当麻君、いつも道理でお願いな！」

上条君「あの~~~~ここ数日、この調子ですけどさすがに年頃の男女が一緒に風呂に入るのはどうかと・・・」

はやて「当麻君は私と入るのが嫌なの!？」

上条君「いいえ、むしろ、OK!・・・だけど」

はやて「だけど？」

上条君「さすがに湯船に入れるのと服の着衣の手伝いは勘弁・・・」

はやて「当麻君は困っているか弱い女の子が苦しむのが好きなんか！？当麻君はSM好きだったんやーーーーーッ！！」

上条君「なんでそうなるのーーーーー!?!」

こうして、上条君の日常の苦難の一番の苦難が始まる・・・人としての理性を荒削りにする苦難が・・・

・

・

・

・

・

風呂場

上条君「はあ~~~~」

はやて「どうしたん？溜息ついちゃって」

上条君「僕はよくこの状況で理性が持つな〜と思って」

ただいま、上条君ははやてのお背中を流し中！！はやては当たり前だが全裸・・・上条君は腰にタオルを巻いた状態で全裸状態・・・上条君のストライクゾーンには程遠いはやてでも女の子の裸体を直視するのは漢にとっての理性を削って行くのには変わりはない

はやて「なんや？私を見て興奮しての？なら襲ってもいいやで？」

上条君「全力で拒否します!!」

はやて「つれないな」

上条君「ううう・・・聞くけど、なんではやてはそうやって人をからかうんだ？そんなに僕の苦しむ顔がみたいの？」

はやて「そんなことはないよ!こうしている方が当麻君が面白い反応してくれるから」

上条君「人の理性が切れるかの瀬戸際なのにそんな話題はやめてほしいけど」

話をしながら上条君ははやての背中を直視せず、手だけを動かして背中を洗ってあげる。上条君はまだ男の子・・・まだ初です。

はやて「へえ・・・当麻君」

上条君「なんだい？」

はやての声のトーンが下がる

はやて「最近思ったんやけど」

上条君「な・・・なに？僕・・・何も隠し事はしてないよ!？」

上条君は完璧に思考が空回りしている。考え的には何か起こっているように聞こえたから

はやて「そうじゃなくて、当麻君・・・ここから居なくならない？」



上条君「え……」

はやて「当麻君には帰る所がある……それでいつ、帰ってしまうのを考えると……」

上条君「……………」

はやての顔は見えないが明らかに泣いていた……上条君もそのよ  
うなことを考えており気持ちは複雑だった

上条君「あ……………はやて？」

バツ！

上条君「ッ！！」

はやてがいきおいよく振り向き、上条君に飛びつき、押し倒す形に  
なった。

上条君は軽く頭を打ち、目を瞑ってしまった。

はやて「身勝手だと思っんやけど、ここにずっと居てほしいや！！」

上条「！！！！」

上条君は2重の意味で驚いた！はやての爆弾発言と生育途中の女の  
子の素肌が目の前に飛びこんできて、動揺して顔を背けようとする  
が……

はやて「当麻君、答えて！」

顔に背けようとするのははやてはそれを許さない。手が頭を固定して、どう足掻いてもはやてから逃れることはできなかった。

上条君「……………」

悩む…………上条君は悩む…………家のこと…………はやてのこと…………神父のことなどが10歳の男の子を悩ませる。

上条君「僕は……………」

はやて「はつきり言うで！私は…………当麻君のことが好きやー！  
ーッ！！」

上条君「!?!」

はやて「こんな数日だけ…………当麻君のところが好きになったんや…………当麻君がいないと私…………駄目なんや…………」

はやては泣きながら自分の気持ちを答える。さびしかった1人暮らしに一筋の光…………上条当麻が現れたことが彼女の冷え切った心を温めてくれた。彼女は始めは自分と話し相手欲しかったと思いい同居を進めたが、今になってはいなくてはならない存在になっていたのだ。

上条君（僕は…………どうすれば）

思いを告げられ、さらに迷う上条君…………はやてが必要にしてくれ

ている。それにここまで好いてくれる女の子の心を無下にはできない……そして、腹を決める。

上条君「うん……いいよ」

はやて「え……」

上条君「はやてがそれで幸せなら」

はやて「うん……ありがとう……当麻君……」

はやては上条君の上でうれし泣きをする。どうやら安心したらしい。上条君も優しく微笑む

上条君「さっきの好きッていうのはLoveではなくLikeのほうですよね？」

バキ！

上条君「グハッ！」

はやて「女の子の告白をなんだと思っているや——ッ！——」

上条君「ちょ……ちょっと！？はやて……グバあああああ」

はやて「この！この！この——ッ！——」

上条君「ふ……不幸だ——ッ！ガハッ！」

はやての鉄拳の雨が上条君の顔に降り注ぎ、鈍感な少年の悲鳴が密

室空間で響き渡るのであった・・・

続く・・・

行け！逃げ！上条君！！中編（後書き）

御感想をお待ちしております！

では、次回も楽しみてください！

海鳴市怪奇事件 1章(前書き)

予定を少し変えて、話が長くなります。

## 海鳴市怪奇事件 1章

海鳴市怪奇事件 1章

数日後・・・海鳴市 夜

上条君「いきなり呼びだして何の用です。言峰神父」

言峰「仕事だ。手伝え」

上条君「仕事？今から誰かを説教でもしに行くのですか？」

言峰「いや、異端者を排除する」

上条君「はい!？」

はいはい、僕、上条当麻 以下略・・・現在、はやて家の居候で子の目の前でバカげたことを言っている神父のわけわからない修行をやらされている可哀そうで不幸な男子・・・自分で言つと余計悲しい・・・うううう・・・

そして今、言峰神父の使い魔に呼ばれて、夜の公園に来ただけど・・・なんだか、僕を不幸なことに足を突っ込ませようとしているようなことになっています。

言峰「お前は初めてだと思つが、こちらにいるシスターは埋葬機関から派遣されたシエルだ」

シエル「こんばんは、久しぶりね。上条」

上条君「あれ？僕と会うのは初めてだと思いますが？」

言峰「シスター、そちらでは情報は回っていないのかね？」

シエル「あ！そうでした！ゴメンね。上条君。私と会うのは今日が初めてだったね」

上条君「？」

コソコソ・・・

シエル「ホントに子供に戻しちゃったんですか？あの上条当麻を？」

言峰「私はその場に居なかったので、はっきりは知らんがあ奴は間違いない上条当麻だ」

シエル「それで言峰神父はいつたい、あの子に何しているんです？」

言峰「クライアントから口止めされているため、はっきり言えんが・・・あ奴を一から鍛え直している」

シエル「それは・・・魔術師としてですか？その場合は上条当麻を異端と判断しますが」

言峰「まあ待てシスター、何も魔術師としてではないぞ」



シエル「では？」

言峰「クライアントには秘密にしているが、代行者としての修行も盛り込んである」

シエル「！！ それはもしかして！！」

言峰「あ奴は元に戻った時、教会側に引き寄せられることもできるようにも考えてある」

シエル「それはいいですね。彼は教会内でも支持率が高いですからね！」

言峰「だから、そちら側にもデメリットばかりはない・・・ということだ」

シエル「それなら、ビシ！バシ！と鍛えて下さい言峰神父！あの埋葬機関の化け物ナルバレックを倒すような！」

言峰「それはまず、これからの仕事のこなしてからだ。シスター」

シエル「はい、ふふふ・・・」

上条君（なに！？この嫌な寒気は・・・）

聖堂教会の上条当麻は、魔術師としても見られているが、魔術協会と聖堂協会の暗部を潰したことが多く評価され、異端者として狙われることはなく、むしろ、救世主と呼ばれるくらい・・・上条の考

え方に賛同する者が多く、教会側に招きたいと言う宗派まで現れるくらい人気が高い。簡単に言うところらの世界の上条勢力・・・

だが、上条君はそんなことは知らない。自分が5年後のことなど想像することができるはずがない。そして、自分がこの世界でどのくらい重要な人物だと分かるはずが無い

ちなみにシエルとはイギリスのカレ 専門店で偶然出会い、そのまま、いつものお約束・・・不幸なことに巻き込まれる・・・フラグは立てても彼女には思い人がいる。そのため、上条病には感染していない。

言峰「では、シスター・・・説明を」

シエル「はい、私が派遣されたのは正体不明の魔術師らしき者を拘束、もしくは抹殺する任務を受けました」

上条君「ちよつと、待ったー！ー！ーッ！！」

シエル「なんです？上条君？」

上条君「僕をまさか、人殺しさせるためにここへ呼んだですか？そんなことは僕は嫌です！それなら、僕は殺されようと貴方達の敵となります！」

上条君は構える。人助けなら喜んで引き受けるが人殺しの手伝いなんてもつてのほか、力で負けていても上条君はそんなことでは屈指  
ない

シエル「はあ〜、昔でも今でも考え方は変わらないんですね。上条当麻は」

上条君「？」

シエル「あくまで、抹殺は非常時の時、基本的に相手を拘束、とっ捕まえてそれでおしまい。わかった？」

上条君「・・・わかりました」

上条君は構えを解く。少し納得いかないが人殺しをしないところでよしとしたのだろう

シエル（こんなかわいい子が考え方もすべて変わらず、成長してしまっなって、どこぞの聖者ね。上条当麻は）

シエルの中では上条は考え方は甘い偽善的な発想をしているが、それでも人を救おうとする偽善者だと思っていたが、ここに来てこの年でも考え方が変わらない・・・完全に自己犠牲にしても偽善の正義を貫く正義の味方・・・いや、聖者に近き人物だろうと上条当麻と言う人物の見方を改めた。

そして、教会内で上条当麻を支持する聖職者達の気持もわかるようなきがするシエルさんだった・・・

言峰「シスター、説明の続きをいつまでものんびりしていると夜が明ける」

シエル「あ！はい、今のところ疑いがあるのは3人確認しています。2人は一緒に行動していますが、1人は別に行動しているみたいで

方向は全く異なります」

言峰「では、私が1人の方を追おう」

シエル「言峰神父、あなたは上条君と行動しないのですか？」

言峰「私はいいが、本人は嫌がっているようだしな」

上条君「こつちからお断りです」

シエル（この二人、仲悪いな・・・）

言峰「シスター、こいつはこう見えても代行者としての戦闘能力は備わっている。足手まといにはならぬ。安心したまえ」

シエル「そうですか」

言峰「それにこれも修行の一環だ。こいつの実力をその目で確認してほしい」

シエル「わかりました。ですが、任務が最優先です」

言峰「ああ、余裕があれば頼む」

上条君（寝みいゝゝ早くベットで寝たいなゝゝ）

上条君やる気なし・・・むしろ、教会の仕事に興味はない

言峰「上条よ。お前にこれを渡しておこう」

上条君「これって・・・黒鍵？」

言峰「使い方は教えた通りだ。後、お前が頼んだ礼装も届いていたぞ。受け取りたまえ」

上条君「やった!!」

まるで玩具を貰って喜ぶ子供のように、いや、子供・・・礼装の入っている包みを開くと中には

右手のみの滑り止め付き手袋と50センチくらいの棒が7本を束ねたモノと2挺の拳銃だった。

上条君「手袋がないと礼装を触れないからね。これで思う存分、力を発揮できます!!」

シエル「その棒の束は何なの？上条君？」

上条君「僕が考えた礼装です。修行と鍛錬を重ねている内に少し閃いて、作ってもらったんです!!」

シエル「この棒の1つ1つに洗礼の刻印が示されているわ」

上条君「はい、言峰神父が洗礼をしてくれたので異端のモノを破壊することもできるようになっています」

上条君は発想が豊か、子供として興味がある時期だからこそできる発想である。ただし15歳の元の上条には上条君のような柔らかい発想は無理!

シエル「この銃は？」

上条君「ああ、これ・・・アウトレンジの攻撃のために設計した礼装なんですけど・・・強力すぎて使いこなせない危険性がある礼装銃です。」

黙々と説明しながら、礼装を装備して行く上条君・・・修道服の中には黒鍵が10本・棒状礼装7本・双銃と弾丸・・・総重量10キロを軽く超えている！10歳の男の子が持てる重さを超えた。明らかに重量オーバー・・・しかし、短期間で鍛え上げられた改造された筋力と魔術によって、その重装備を持ちあげられるようになってるのだ・・・その分の反動（筋肉痛）は大きいが・・・

言峰「では、私は先に出る。シスターそちらは頼んだ」

シエル「はい！」

言峰はそのまま走り去っていた。あの図体でもものすごいスピード・・・  
・代行者って恐ろしい・・・

上条君「準備ができました！」

シエル「では、こちらもいきます」

上条君「はい！」

そして、残りの2人も目標の者に向かって移動を開始した・・・

海鳴市内

アルフ「フェイト」

フェイト「……」

2人の少女達が人気のない街の中を歩いていた。フェイトはなんだか暗く、アルフはフェイトを元氣付けようと必死に話しかけていた。

フェイト「私……母さんから必要とされていないのかな……」

アルフ「フェイト」そんなに落ちこまないで……まだ、見つけれない状況だから仕方ないよ……」

状況的には目的の物を見つけれなくて、フェイトはプレシアに罵声を聞かされて落ちこんでしまっているようだ。

フェイト「私って、生きてても意味ないのかな……」

アルフ「ちょ……ちょっと！フェイト!？」

かなりの重症のようだ。フェイトは生きる氣力もないようだ。

アルフ「フェイト、いい加減に元氣を……ハッ!！」

フェイト「どうしたの?？」

アルフ「殺氣がする」

フェイト「!! どこから?」

アルフ「周りから・・・」

シエル「そこで止まりなさい!」

2人「!!」

2人の近くの電柱の上からシエルの声が聞こえた。

シエル「貴方達を拘束します。抵抗しないでください」

アルフ「ちょっと! あんた! 誰だよ! 管理局の回しものかよ!」

シエル「管理局? 何のことでしょう? 私はただ・・・貴方達を捕ま  
るもしくは抹殺しろと命令されているだけです」

アルフ「なっ!?!」

シエル「それでは・・・教会の異端の疑いのある2名をこれより拘  
束します!」

アルフ「クッ! フェイト!」

フェイト「うん!」

フェイトは普段着からバリアジャケットに着替えた。



シエル「ほうく、魔術・・・いや、魔法か・・・どちらにする。異端です！」

アルフ「私があいつを止めてるから、フェイトはその隙に逃げて」

フェイト「う・・・うん」

シエル「逃がすと思っているのですか！」

シュン！シュン！・・・

アルフ「クツ！」

ガン！ガキン！・・・

アルフ「障壁にヒビが！？」

シエル「まだです」

アルフ「！！！」

シエルの投げる黒鍵がアルフの障壁を削っていく！ものすごい威力である。

アルフ「フェイト！早く逃げて！」

フェイト「だめ、逃げられない」

アルフ「!!」

フェイトの前に同い年くらいの修道服をきた少年が立っていた。

上条君「恨みはないけど・・・捕まってくれる？その方が怪我しなくてすむよ？」

フェイト「貴方も敵・・・ですか？」

上条君「そうですね・・・ホントは助けてあげたいけど、残念ながら敵になりますね」

そして、話しながら体勢を戦闘モードに移行する。フェイトも負けじとバルディッシュを構える

上条君「武器を構えたということは投降拒否と見て、攻撃を始めます・・・それでいいのですか？」

フェイト「プラズマ・ランサー　!!」

上条君「!!」

フェイトの先制攻撃！黄色く光る魔力弾が上条君に目掛けて飛んでくる

上条君「強化！」

ダン！！

フェイト「！！」

踏み込んだ瞬間、地面が吹き飛び、2人の間合いが一気にちじまる。フェイトの撃った魔法弾が何もない所に着弾する。

上条君「ちゃんと防いでね！」

フェイト「あ！？」

フェイトは目の前に障壁が張るが・・・

上条君「はあああああ！！」

ガキン！

フェイト「障壁が・・・」

掌底が障壁の中心に叩きつける。硬いはずの障壁がひびが入る。決して幻想殺しは使っていない。今まで鍛え上げられた技の切れが鋭かったのだ！

上条君「防ぐだけでは勝てませんよ？」

シュン！シュン！

追撃の2本の黒鍵がフェイトを襲う！

フェイト「ウツ！」

アルフ「フェイト！」

シエル「どこをみているのですか」

アルフ「クウウ」

アルフも押されていた。シエルの黒鍵の雨がアルフの防御を削って行く。反撃もするが、シエルの身体能力の高さに軽々と回避され、その分のカウンターが返ってくる。決して飛ぶことは許さなかった

上条君「あちらはそろそろ、限界のようですね。そろそろ降参してくれない？」

フェイト「それは・・・無理です」

フェイトも虫の息だった。上条君の予想以上の攻撃に対応が遅れてしまい、数回のダメージを負ってしまった。

上条君（今、逃がしてあげたいけど・・・その後のことを考えると捕まえた方が彼女たちのためだものね）

上条君は後先のことを考えていた。教会を敵に回すと彼女達は殺されてしまう。だけど、今捕まえておけば、結果的には命だけは助けられるかもしれない・・・と考えている

それが正しいか間違いないのかわからないが・・・色々と考えている

ようだ。10歳の少年なのに・・・

上条君「悪いけど、そろそろお縄についてもらいます」

フェイト「クッ！」

フェイトは急いでその場から逃げよつと飛行する。

その時、上条君の手には両手に3本ずつの棒状の礼装が出され・・・

上条君「set！」

シュツ！シュツ！シュツ！・・・

フェイト「なに！？」

フェイトに狙ったわけでもない。6本の棒がフェイトを囲む・・・  
そして、もう1本の礼装が左手に持たれ、魔術回路から魔力が注ぎ込まれる。

上条君「capture！」

フェイト「え！？きゃあ！」

ひも状の魔力が6本の礼装と連結し輪状になり、フェイトを拘束する。

上条君「フイーーーーーーッシュ」

フェイト「きゃあああああああ!!」

上条君の左手の礼装がフェイトを拘束している礼装と繋がり、まるで釣りで大物を釣り上げるように引く! フェイトは抵抗するが上条君の腕力に勝てず、そのまま上条君に完全に確保される。

上条君「つつかまえた」

フェイト「離して! クツ!」

フェイトは暴れるが拘束は解けない。

上条君「その程度では、この礼装『七枝』から逃げられないよ。多分・・・」

フェイト「?・・・なんでそこで自信がないの?」

上条君「これ・・・使つの初めてだから・・・」

2人「・・・」

フェイトは上条君の自身の無い礼装に突っ込みを入れてしまう・・・完全に悪党になれない上条君であった

シエル「あっちは終わったようね」

アルフ「フェイト・・・」

シエルもアルフを黒鍵で動きを封じて勝敗が決まったと同じだった。

シエル（あの神父が言うとおりね。代行者として使えますね）

シエルは戦いに集中して、上条の戦いを見ていなかったが・・目標を確保に成功していた。10歳でここまでの力を発揮できるのはそうそういない。いや、発揮できるように鍛え上げられたのだ短期間で・・・

シエル「ここまでですね。諦めなさい」

アルフ「くっそお・・・」

フェイトとアルフ・・ここでバットエンド直行か！

??「ちょーーーーーーっ！待ったーーーーーッ!」

全員「「「!」」」

アルクエイド「この私！ファンタズムーンがいる限り、この世に悪は栄えない!」

・  
・  
・  
・  
・  
・

上条君&フェイト&アルフ（（誰!？））

突っ込みどころ満載な金髪美人が白く痛々しい服を身に纏い、ハ

ト形のステッキを振り回し、シエルがいた電柱の上で全員を見下ろしていた。

シエル「このアンバー吸血鬼！　いつたい何のようです！」

アルクエイド「ふふふ・・・ここに来たのは、怪人カレー女を成敗して、か弱き乙女たちを助けに来たのよ！！」

シエル「このおおお・・・また、私の仕事の邪魔を」

アルクエイド「あんたはとつとと、故郷くにに帰れ！　カレー女！」

シエル「うるさい！　この（バ　　ン）歳のアバズレ女！」

3人「！！！！」

アルクエイド「そんなの関係ないわ！　だって私は真祖だから！　どこぞの死体女と一緒にしないでくれる」

ブチ！

シエル「殺す！」

アルクエイド「上等！」

バキ！　ドカ！　ガキ！　・・・



魔法少女？とシスターの醜い争いが始まった。

アルフはダメージが大きかったためかその場から動けず、上条とフエイトは二人の争いを眺めていた・・・

上条君「なんだか・・・醜いね」

フエイト「うん・・・」

上条君「本物（魔法少女）がすぐ近くにいるのに・・・」

フエイト「うん・・・え？私？」

上条君「そうじゃないの？まさか君も・・・」

フエイト「私は9歳です！」

上条君「ほら！完璧の魔法少女だろ・・・あの人は今を楽しんでいるんだな~~~~」

アルクエイドの歳・・・恐ろしいほどの数字だったためか。若い男女にはとても大きいシヨックを与えるのであった・・・

シエル「死ぬ死ぬ死ぬ~~~~」

アルクエイド「このカレー女~~~~ッ！くたばれ~~~~ッ」

人外達の戦いはヒートアップしていく・・・

上条君はフェイトとアルフを巻き込まない安全地帯に移動させて戦いを見届ける。

上条君「うわぁ〜女の戦いつて恐ろしい・・・」

フェイト「あの・・・なんで私達が捕まえたんですか？」

アルフ「そうだよ。別に悪いことはしてないぞ！」

上条君「僕の詳しいことが分からないけど・・・突然、正体不明の魔術師らしきモノがこの市街に入り込んだらしいから、多分その疑いがあるのかな〜」

フェイト「あの・・・私は魔術師じゃなくて魔導師なんですけど」  
アルフ「むしろ、私達は関係なくね？」

上条君「魔術師だろうと魔導師だろうと使う魔術や魔法は教会内では異端にされちゃうんだよ・・・冤罪でも・・・」

アルフ「なんか、ひどい・・・」

上条君「でも・・・そろそろ、いいかな」

2人「？」

上条君は2人を拘束している礼装を解く。

フェイト「どういづつもりですか？」

上条君「まあ、僕が油断して二人が逃げたことにすればいいと思っ  
てね」

アルフ「なんだよお前、私達を捕まえて逃がすのかよ？ いったい何  
がしたいんだ？」

上条君「これは僕の一存だよ。どうせ、教会本部に連れていかれた  
らどうなるか。わかったもんじゃない・・・僕は人を幸せにしたい  
と思うけど、不幸にしたいなんて考えがないよ」

フェイト「だけど、いいの？ 貴方に責任が」

上条君「別に、僕は手伝わされてだけだから得に責任はないよ」

アルフ「フェイト、こいつが逃がしてくれるって言っているだから  
逃げよ！」

フェイト「うん・・・！！ 後ろ！！！」

上条君「ハッ！」

??「があああああ！！！」

上条君の後ろからつめき声を上げた男性が襲いかかってきた！

ビシヤッ！！

赤い鮮血が空に舞い上がった・・・

シエル「ハッ！上条君！」

アルクエイド「ん？」

上条君「しくじった・・・」

持っていた黒鍵を無意識に男の心臓を貫く。その時、男の手の爪が右腕を引き裂き血が流れ出る。

上条君「シエルさん、こいつは！？」

シエル「死徒よ！そいつは人の血を啜る吸血鬼よ！」

上条君「死徒！？これが神父が言っていたあの・・・」

倒した男の遺体は霧散して消えた・・・しかし・・・、

があ・・・ああ・・・ぐお・・・

まるでバイオハザードのゾンビの群れを思わせるような死徒の群れ・・・通路を覆い隠すほどだった。

上条君「じょ・・・冗談でしょ！？」

シエル「アンバー吸血鬼！遊んでいる場合じゃないわよ！」

アルクエイド「そのようね」

2人は戦いをやめ、死徒の殲滅に移った！

上条君「2人とも急いで逃げるんだ！」

フェイト「で・・・でも」

上条君「いいから行け！そうしないと狙われるぞ！」

上条君は向かってくる死徒を黒鍵で薙ぎ払いながら、フェイト達の撤退を援護した。

アルフ「フェイト、急ごう！」

フェイト「うん・・・バルディッシュは！？」

フェイトは戦闘中にデバイスを落としてしまった。これでは飛行して逃げることはできない

フェイト「見つけた！」

デバイスは近くの道に落ちていた。フェイトは急いで取りに行く。

上条君「！！バカ！そっちは！」

フェイト「え！？」

次の瞬間、フェイトの横の通路から死徒が群がってきた！

アルフ「フェイト！」

上条「強化・・・間に合つてえー！ーッ！！」

アルフは魔法を使おうとするがフェイトに当たる危険性があるので止めてしまっていた。

フェイト「いやあー！ー！」

アルフが悩んでいる内に死徒はフェイトに襲いかかる。

上条君「やあああああ！！」

バシユ！バシユ！・・・

黒鍵がフェイトに襲いかかる死徒の眉間に命中する。そして、フェイトの近くに来ると礼装「七枝」を取り出す」

上条君「我に敵意を剥くモノに裁きを与えたまえ」

詠唱を唱えると7つの棒が1つに連結し、長い棒となる。

上条君「せい！」

襲いかかってきた死徒を薙ぎ払う。

上条君「何してんだ！殺されるぞ！」

フェイト「でも」

上条君「でも、じゃねえー！ツ！一番狙われやすい奴がほっつき  
歩くんじゃえー！ー！ー！」

フェイト「え．．．」

死徒は人間の生き血を啜ります。

アルクエイド．．．真祖

シエル．．．元ロア

アルフ．．．使い魔（狼）

上条&フェイト．．．人間　OUT！

上条君「僕たちは奴らの餌だ！だから、勝手に行動するな！」

フェイト「だけど、あれが無いと私は何もできないし．．．」

上条君「なんだよ。そのいざという時に力が使えない展開はー！  
ツ！ー！」

上条君は叫びながら襲いかかってくる恐怖を薙ぎ払っていく。

フェイトは上条君の近くで守られながら、デバイ스에近づいていく．  
．

フェイト「取れました！」

デバイスを回収したフェイトはすぐに報告をする。

上条君「よし！そのまま、ここから離れて！」

フェイト「うん！・・・え・・・きゃあああああ！？」

上条君「どうした！？・・・！！！」

その時、上条君が見たモノはマンホールから無数の手が伸び、フェイトを掴んで中に引きずり込むうとして光景だった！！

フェイト「離して！やだ！やめてー！ー！ー！！！」

フェイトはドンドンと引きずりこまれていく。抵抗しようとするが身体全体を掴まれてしまっているため、魔法が使えない。そして、奈落の穴に身体の半分が持つていかれていた！

上条君「掴まれ！絶対離すな！」

フェイト「助けて！死にたくない！」

フェイトは今まで味わったことのない恐怖に泣きながら助けを求め。そして、上条君の手をしがみ付く。今は誰でもいい。暗い奈落の中に落ちるのだけは嫌だ・・・と思うのみだった。

アルフ「フェイト！待ってて！今いく・・・邪魔すんな！」

アルフは群がってくる死徒の波に手間取っていた。

上条君「手を離すな」



フェイト「あわ．．．あわわわ．．．」

フェイトは恐怖で言葉も出せなかった。

フェイト「！！、後ろ！」

上条君「な！？しまった！！」

フェイト「きゃあああああああああ」

フェイトの手が滑り抜け、奈落に引きずり込まれていた。

上条君「クツソーーーーーッ！！」

上条君は背後にいた死徒を倒すと穴の中に飛びこみ、フェイト救出に向かった．．．．

数分後．．．

アルクエイド「なんとか、終わったわ」

シエル「でも、どうして死徒が．．．」

アルフ「フェイトーーーーッ！フェイトーーーーッ！どーーーーーッ！！？」

シエル「ハッ！上条君は！？」

2人はその場に居なかった。それもそうだ。マンホールの中に飛び込んだのだから……

シエル「もしかして、下水道の中に……」

アルクエイド「あららら……これは助からないわね」

アルフ「な!?!?どうしてそう言いきれるんだよ!?!?」

アルクエイド「中は多分、死徒が群がっているでしょうね。むしろ、巢穴と言ったところかしら」

アルフ「そ……そんな……んじゃ、フェイトは……」

アルクエイド「死徒の仲間入りになっているじゃないかな。血をすべて吸われると死徒化しちゃうから」

アルフ「フェイト……そんな」

シエル「で?どうするつもり?私は上条君を追うけど?」

アルクエイド「それは殺すため?」

シエル「最悪の場合……だけど、生きていると思うわよ。あの子だから」

アルクエイド「?」

アルフ「私も行く!フェイトを捜す!」

アルクエイド「いいけど、つらいモノを見ても知らないよ」

アルフ「そんなことはない！フェイトは生きてる！」

シエル「仕方ありません。死徒殲滅と要救助者の救出と参りますか・  
・・・完璧残業だ・・・」

アルフ「フェイト、待っててね！」

そして、3人の救出部隊も暗い奈落の穴に向かって降りて行くので  
あった・・・

続く・・・

海鳴市怪奇事件 1章（後書き）

御感想をお待ちしています！

どんな感想でもいいのでお待ちしております！

では、次回も楽しみにしてください！！

## 海鳴市怪奇事件 2章

### 海鳴市怪奇事件 2章

言峰サイド

男「は・・・早く・・・ジュエル・・・シード・・・を回収・・・をしない・・・」

男はジュエルシードの輸送を行っていた時空艦船の調査団の生き残り、たった1人になっても回収しようとしていた。

男「あれは・・・人為的に起された事故だ・・・犯人は・・・予想できる・・・この犯人候補のデータだけでも・・・管理局に・・・!?」

死徒「がああああああ!!」

男「ギャアアアアア」

男はデータの編集に気を取られてしまい、忍びよる怪物達に気付くことができず、そのまま死徒の餌食になってしまった。

言峰「ふむ・・・手遅れだったか・・・」

言峰が到着した瞬間、男は血を全て吸われ、死徒と化していた。

男「ああ・・・があ」

言峰「せめて・・・我が手で神の元へ行きたまえ」

死徒「があああああ！！」

言峰「ふん！」

バキ！グシャ！ゴキバキ！！ バシユツ！

言峰の格闘技が死徒達の身と骨を砕き、最後に黒鍵で止めを刺されていった。

死徒にされた者達は解放されたと言う微笑んだ表情で消えていった。  
・・・中には今さっきの男も入っていた・・・

数分後・・・

言峰「どうか、神の導きがあらんことを・・・」

殲滅が終わり、神父らしく最後は説教を唱え死者達の弔った・・・

言峰「・・・肝心の魔術師が死んでしまっただけでは話にならない・・・  
どうしたものか・・・ん？」

言峰は死徒と化した調査団の男の服の中から宝石のようなモノが転がっていた。

言峰「魔術的な細工らしきモノが見られる・・・」

言峰は物の試しに宝石に魔力を注いでみる・・・すると宝石は発光しスクリーンらしきモノが映し出された！

言峰「なるほど、これは何かのデータを保存するためのモノか」

神父はスクリーンに映し出される人物の情報に刮目する。するとある人物に目が止まった。

言峰「ジェイル・スカリエッティ・・・ふむ・・・」

そして、宝石の魔力供給をやめ、スクリーンを閉じた

言峰「面白いことを考える男だ・・・ぜひ、お会いしたいモノだ・・・」

言峰の中に新たな企みが生まれ堕ちた瞬間だった・・・そして、神父は心から喜ぶような笑みを見せ、その場から立ち去っていた・・・

地下道内

フェイト「うつ・・・あれ・・・私・・・」

上条君「やっと起きたか。はあ～～心配掛けさせるね。君は」

フェイトは気絶している内に上条君に背おられて地下道を移動していた。

フェイト「あの化け物達は？」

上条君「まだいるよ。ウジャウジャと・・・とてもじゃないが対処しきれないからその通路を塞いだよ」

フェイト「え？」

フェイトは後ろを見てみるとたしかに通路が塞がっている。まるでその部分が崩落したような形で土砂で埋まっていた

上条君「急いでここからでないと今度こそ、あいつらの仲間入りだよ。今さっきはホント危なかった・・・後1歩遅かったら二人とも死徒になっていた所だ。」

・  
・  
・

数分前

上条君「離れやがれ！この吸血鬼共！！」

バキバキバキ！！

力いっぱい、連結した礼装棒を振り、フェイトを捕食しようとする



死徒を薙ぎ払った！

上条君「おい！すっかりしろ！」

フェイト「う……」

上条君「よかった……まだ、生きてる」

フェイトはその時、死徒に数カ所噛まれていたが、幸い上条君がすぐに助けた為、死徒になることはなかった。

上条君「クソツこんなに地下にまだこんなにいるのかよ」

暗い空洞の中に度重なるうめき声と光る双眼の数々……まるで波のように上条君とフェイトに向かって突っ込んできた！

上条君（仕方ない……この際は）

手に持っている連結した礼装棒の7本の内、1本を外すと勢いよく死徒の群れに投げつけた！

上条君「枝よ。爆ぜよ！」

詠唱を唱えると礼装棒が光始め……

ドオオオオオオオオオオオオン！！

爆発した！礼装がまるで強力な手榴弾のような爆発を起こした！それ

に巻き込まれた死徒はすべて吹き飛んだ！

上条君「よし！いますぐにここから・・・！？」

次の瞬間、天井が崩れ始め、上条君はフェイトを庇い飛んでくる石から守った・・・

・・・

・・・

・

現在

上条君（結局は俺の判断ミスで来た道を塞いじやっただけどね・・・）

フェイトに告げたのは正しいことであるし嘘でもある。上条君の表情は何か苦しそうな顔をしていた。

フェイト「あれ・・・力がでない・・・」

上条君「血を吸われた。同時に魔力も吸われた・・・仕方ない」

フェイト「ちょ・・・ちょっと!？」

上条君「動けないのなら僕が背負って運ぶしかないでしょ」

上条君はフェイトを背負うとほかの出口に向かっていった。

フェイト「ねえ、どうして貴方は私を助けようとするんの？」

上条君「なんでそんなこと聞くんだけ？」

フェイト「だって、貴方は私を捕まえるためにきたんでしょ？」

上条君「何度も言わせないでよ。僕はただの手伝いで来ただけだつて・・・それに悪くない奴を不幸にしたくないだけだ」

フェイト「？ 貴方は私を知らないのにどうしてそんなことが分かるんですか？」

上条君「そんなの決まってるんだろ。君は間違ったこととか。ちゃんと、反省するし礼儀正しいしまだ若いんだし・・・」

フェイト「それ、理由にはあまり納得できません」

上条君「悪かったな。僕はそんな堅苦しいことは出来ないたちなんだよ」

フェイト「優しんだね・・・貴方は」

上条君「ただの偽善だよ。僕の優しさは」

上条君はフェイトの様子が落ち着いたらと感じた。声も震えていないし、むしる声に張りがあつた。

今さっきに恐ろしい体験で口も聞けないと思っていたが、すっかり

立て直していた。

上条君「聞いてもいいかな？」

フェイト「はい？」

上条君「君はなんで魔術に手を出したんだい？」

フェイト「魔術？私が使っていたのは魔法ですが？」

上条君「魔法！？また、とんでもないモノを使うね」

フェイト「え？」

上条君「魔法は魔術の上を指すんだ。簡単に言つとどんな願い事も叶えちゃつくりのモノだよ」

フェイト「そうなんですか。この世界では」

上条君「この世界？」

フェイト「はい、私はこの世界の人ではありません」

上条君は驚きはしたが冷静に話を聞く

上条君「どうして、ここに来たんだい」

フェイト「ちょっと、探し物を・・・」

上条君「探し物？」

フエイト「はい、母さんに頼まれて……でも、回収出来る自信がなくて」

そこでフエイトの声が泣きそうなほど低くなった

上条君「どうした？何かあったのか？」

フエイト「……母さんが……使えない……役立たず……って……私って、ホントは母さんに愛されてないのかな……」

上条君「なんと言うか。ひどいね……世界は広いが自分の娘にそんなことを言うなんて」

フエイト「私……どうすればいいか。わからない……うつつ」

少女は泣き始めてしまった。上条君は可哀そうという感情が芽生え始め、なんとか勇気付けようと考えた。

上条君「別にお母さんは愛していないわけじゃないと思うな……」

フエイト「え？」

上条君「お母さんは君にスパルタな教育をしているんじゃないかな？よくあるじゃない？獅子は子を千尋の谷に落とすって、娘をわざときついことを言っって強い娘にしようと思っっているんじゃないの？」

フエイト「でも……母さんは……」

上条君「怒鳴られても、それも1つの愛情じゃないかな。僕なんか

保護者と言う名目の神父に……ヤバ……トラウマが……」

フェイトに続いて、上条君も心が折れそうになっていた。言峰はいったい幼い少年の心を傷つけたのであるのか……

上条君「要するにだ！君が思っていることはすべて思いこみ！母親は人生の辛さをあえて若いうちに覚えさせるために怒っただけ、そう考えた方がいいよ」

フェイト「う……うん……そうだよ。母さんはそういうことを考えているんだね」

フェイトはここに来る前、プレシアの書齋に子供の教育方針などのスパルタ的な教え方などの書籍が置いてあったことを見たように見てないような……

フェイトは上条君の言葉に勇気づけられたのか。すすり泣きがやんだ。

上条君（なんだか、胸がいたな……こんなことは長続きしないのに……）

上条君はホントはプレシアを殴りに行って、フェイトをちゃんと愛するように説教したいと思っていたが……まだ、自分は未熟でそんなことができる年でもない……自分の身の程を分かっているのだ。

そのため、少しでも気持ちを楽しめるように嘘を言っしまい、心が痛んだ。

自分のせいで彼女はどんな虐待を受けるか、考えると余計に……

フェイトは元気を取り戻し、上条君は逆に元気を失う・・・

上条君（はあ〜、ろくな大人に慣れないな・・・僕は・・・）

この上条君の言葉が今後のフェイトの決意を固めたことは誰にも様子はできないのだった・・・

出口付近

フェイト「光が！」

上条君「ああ、なんとか出られそうだね」

2人の前に一筋の光が見えた。外に続く出口だった。これで地獄から出ることができると思いきや！

死徒「シャあああああ！！！」

上条君「クツ！」

ザシユ！

黒鍵が死徒の頭を貫通し、死徒は消滅した。だが、後ろからまるで湧いて出てくるような死徒の群れが向かってくる

上条君「ねえ、なんとか、飛べるようになったかい？」

フェイト「なんとか」

上条君「そっか」

上条君はフェイトを下ろす。

上条君「このまま、光に向かっていけば出口だ。一人で行けるね」

フェイト「でも！貴方は！」

上条君「僕のことはいいよ。まずは自分のことを考えなよ」

フェイト「私も戦う！」

上条君「飛べるのがやっとなのに無理だよ。それに、ここを抑えな  
いとどの道、脱出は無理だね。後、君は早く逃げないとあのシスタ  
ーに捕まるよ？」

フェイト「でも」

上条君「でもが好きだね。いいから行きなよ。君は帰る場所がある  
んだから」

フェイト「・・・」

上条君「!?!」

フェイトが上条君の背中に抱きついた。上条君は驚き、フェイトを  
見る。



フェイト「どうか、気をつけてください」

上条君「ああ！こんなところで死ぬ気はないよ」

フェイト「後、まだ名前を言ってませんでした。私はフェイト。フェイト・テストロッサ！」

上条君「フェイトか。いい名前じゃないか」

フェイト「貴方は？名前はなんて言っんですか？」

上条君「悪い、本名は仕事の都合上教えられないんだ。そうだな・  
・偽名だけど刀夜で覚えてくれ」

フェイト「トウヤ？」

上条「ああ！（すまねえ・・・父さん、名前使わせていただきます）  
」

・  
・  
・

数日前

言峰「上条よ。お前の本名はこれ以上使うな」

上条君「なんで！」

言峰「お前の名は色々と有名だからな、あの少女にはしかないと流

すが、これ以上、名が広まるとお前に関わったモノを不幸にしてしまつからな」

上条君「な・・・なんで？」

言峰「上条当麻と言う名に恨む者が多い。少しでもお前を出す犠牲者を減らすにはいいんじゃないか？」

上条君「・・・わかりました。」

・  
・  
・

上条君（ああ・・・嘘を言うのはホントしんどいな）

上条君は嘘を言うのは上手いが、その分の心のダメジは大きかったりする。

上条君「悪いが、これ以上の話は許してくれないようだ・・・早く！」

フェイト「う・・・うん！どうか、トウヤさん。気をつけて！」

フェイトは上条君から離れるとそのまま、低空で飛行し出口に向かった。だが、完全に魔力が戻っていないためか、速度が遅かった

上条君は最後は礼装棒をまた一つ後ろに投げつけた。死徒を狙ったわけではない。

上条君「枝よ！爆ぜよ！」

ドオオオオオオオン！ ガラガラガラガラ！

フェイト「なに！？」

フェイトは後ろを見るとさっきまで繋がっていた通路が爆発し、土砂が通路を塞いでしまった。

フェイトは気付いた。上条君が先に行かせたのは自分の退路を作るためだと

フェイト「トウヤ！」

フェイトは土砂の壁を叩く！しかし、それではビクとしない。魔法を使おうとしても魔力がない以上使うことが出来ない。

フェイト「私のせいだ・・・私が足手まといになるから・・・うう・・・うあああああああ」

フェイトの鳴き声はその通路に響くのであった・・・

上条君「さてさて、これでは僕が逃げるだけ・・・フツ・・・何してんだる僕・・・逃げ道はここしかなかったのに」

この通路は1本道でフェイトが向かった先には下水を排出する出口

しかなく安全で、上条君の場所は下水が合流する広間に近い所だった。そのためか、2人を追ってきた死徒の群れで溢れていた。

上条君「まさに背水の陣ってとこかな？あれ、僕はいつの間にかこんな言葉覚えられたんだろ・・・あ！昨日のはやての勉強か・・・ははは・・・まさか、こんなとこで出るなんて・・・」

上条君の頭の中には人生の走馬灯が掛け走る・・・しかし、上条君には後悔はない

上条君「ここで最後つてわけにもいかないからな・・・」

修道着に手を掛け脱ぎ捨てる！その中にタンクトップと短パン姿だった。両太ももに礼装銃を装備し、背中に残り5本になった礼装「七枝」と黒鍵4本を装備していた。

上条君「本気で行くぞ！」

身体全体の魔術回路が光り出した！白き光の線が全身に魔力を循環し加速して行く！

上条君「聖杯解放！魔力全力解放！全身強化！」

地下道の中が明るく照らす・・・まるで太陽のように・・・

上条君「大盤振る舞いだ・・・うーうーけーけーとーとーれーれーれーれーれーれー」

上条君の背中に装備している黒鍵の全てを投擲する！

ザシュシュシュシュ！！

黒鍵が死徒を貫通する・・・死徒の数が多く。後方の死徒に貫通して地面に着弾して死徒を吹き飛ばした・・・代行者の扱う鉄甲作用を無理やり強化の魔術で可能にした

そして、七枝の3本を投擲する！

上条「枝よ！爆ぜよ！！」

ドガガガガガアアアアン！

3つの礼装が大爆発を起こし、死徒の大部分を吹き飛ばす。しかし、後から死徒が湧いてくる。

上条君「うわ・・・まだ出てくる・・・これがホントに最後か」

背中から最後の2本の礼装を取り出し、両手で構える。

上条君「枝よ。我が剣となれ！」

詠唱を唱えた瞬間、左手の魔術回路の輝きが増し、礼装に魔力が注ぎ込まれていく。左の礼装の柄から魔力の紐が右の礼装の柄に繋がり、礼装の先端から白く魔力の刃が生まれた！

ホントは右手での魔力供給をするはずだったが、幻想殺しのため不可のため、左の礼装から魔力が供給される形になっている。

まるで、フェイトの真・ソニックフォームの形に似ていた。

上条君「これが最後だ。全魔力を使って全力で相手してやるよ！どうせ逃げられないんだし！」

踏み出した瞬間、上条君の姿が消えた。死徒は戸惑う・・・その瞬間！

上条君「やあああああああああ！！！」

バシユ！ザシユ！バシユ！・・・

群れの中に上条が現れ、死徒を斬り刻んで行く！斬られた死徒は消滅して行く。礼装に消滅の概念を入れてあるのか触れただけで死徒は消滅していった！

上条君「まだまだあああああああああ！！！」

全身の魔力を収束し、放出した！それは爆風に等しかった！

爆風はそのエリアに広まり、死徒の群れが巻き込まれていき、吹き飛び消滅して行った・・・

上条君「はあ・・・はあ・・・」

少年の体力が限界に近付いていた。さすがに大技の連続に行使はきついのだろう・・・

上条君「……まだ、いるのかよ……」

広間の敵は一掃したがまだ、死徒は湧いて出てくる……

上条君「はあ〜……はやて、ワリ……僕、死ぬかも」

再び剣を構え、群れの中に突っ込んでいく。少年は自分の命を少しずつ消費していった……

数分後……

上条君「はああああ！せい！やああああ！」

いくら倒してもしても次から次へと湧いてくる。もう軽く500以上の死徒を殲滅した。だが、まだ数は減らない

上条君の体力は限界を超しているが、信念で白く光る剣を持ち、敵を薙ぎ払う……

上条君「しつこい……クソ……逃げようとしても……どの通路も死徒だらけ……クツ」

近づいてきた死徒を薙ぎ払うと上条君は跪いてしまった。

上条君「はあ……ここで終わりか。でもいいや……女の子を1人救えただけでお釣りがくるよ……」

死徒「がああああああ！」

トドメと言わんばかりの死徒の群れが少年に一斉に襲いかかる。

バシユ！バシユ！・・・

当然応戦するが、数が数で対処し切れなかった。

上条君「痛！噛みつくんじゃないやねえ！！」

死徒が少年の腕に噛みつく。振り払うがそこから鮮血が流れだし死徒達を煽る

上条君「装甲（修道服）がないから、怪我すると痛い・・・」

今の上条君の防御力はゼロに近い。どんな攻撃も喰らったら最後だ・・・

そして、次々と死徒が少年に噛みつき血を吸われる・・・

上条君（ここまでか・・・ゴメン・・・はやて、マジで帰れなそう・・・最後に、礼装を爆発させてこいつらだけでも）

少年は礼装の爆発術式を唱えようとした・・・その時！

シエル「離れなさい！この死徒共！！」

アルクエイド「消えろ！！」



アルフ「邪魔すんな!!」

3人の乱入者が少年に群がる死徒を吹き飛ばす!

アルクエイド「カレー女、ここにいる連中を殲滅すれば終わりよ」

シエル「分かっているわ!」

アルフ「フェイト!どこにいるの!」

3人は残りの死徒を殲滅して行った・・・

シエル「上条君!上条君!しっかり!」

上条君「・・・・・・・・」

シエル「息がない・・・脈もない・・・血を吸われ過ぎた・・・」

決死で戦った少年は力尽きていた。後少し耐えていれば、なんとかなっていたのだが、運の悪さがここで出てしまった。

アルフ「フェイトがない。あいつがいてなんでフェイトがないんだよ!?!」

狼の使い魔は主を必死に探すが見つからず、吠えていた。

アルクエイド「あなたはバカ？よく見ればわかることじゃない？」

アルフ「なんだと！」

アルクエイド「あそこ！あそこ！」

アルフ「？」

アルクエイドが指した先には土砂で埋まった通路だった。

アルクエイド「あの子は自分の身を犠牲にしてあの子を逃がしたんでしょうね。その時、自分の退路を塞いだ。そんな感じかな」

アルフ「！！　じゃ・・・じゃあ、フェイトは生きてるってこと！？」

アルクエイド「そうなるわね」

アルフは心から喜んだ。自分の主人が無事と言うことに・・・

アルクエイド「ほら、さっさと行きなさい」

アルフ「そうする」

アルクエイド「だけど、あの子には感謝しなさい。自分の命を投げ出してまで守ったんだから」

アルフは力なく眠っている上条君を見る。心の中で何となく罪悪感が生まれる

アルクエイド「私が言いたかったことはそれだけ、行きなさい。あのカレー女が仕事に戻る前に・・・」

アルフ「・・・すみません」

アルフは別のルートの出口に向かってその場から立ち去った・・・

シエル「私のせいだ・・・私が遅かったせいで・・・」

シエルは少年の治療を続けるが少年の意識は戻らない・・・

アルクエイド（残念ね・・・あんな子ばかりが先に逝っちゃうんだから・・・）

アルクエイドは諦めていた。

シエル「駄目ね・・・もう手遅れ・・・あれ？」

シエルは気付いた・・・上条君の青ざめていた顔がだんだん赤みを取り戻していくのだ。浮き上がっていた青い血管も消えていった

アルクエイド「うそ・・・再生してる」

真祖は驚いていた。まさかの自己再生を起きているのだ

アルクエイド「すごいわね。どこそのカレー女と同じくらい」

シエル「なんですって、このアンバー吸血鬼！」

上条君「……僕、まだ生きて……」

ドカーーーン!!

上条君「不幸だーーー!!」

二人は醜い争いを再開した。そのすぐ横で自動復活した少年は起き上がった瞬間、飛び火を喰らいまた、元の状態に戻ってしまった……

外

アルフ「フェイト!!」

フェイト「アルフ……無事だったの……」

フェイトはその場から動かず、蹲っていた。

アルフ「フェイト?どうしたの?」

フェイト「トウヤが……」

アルフ「トウヤ?もしかして……この中で戦っていた男の子のこと?」

フェイト「アルフ!あの人に会ったの!?大丈夫だった!」

フェイトはアルフに飛び付く！

アルフ「……………」

フェイト「どうしたの？アルフ？」

アルフ「……………あの子は……………死徒に血を吸われて……………」

フェイト「……………嘘……………まさか……………」

アルフ「あいつらと同じになってなかったけど、血を吸われる過ぎて……………」

フェイトはそのまま、倒れこんでしまった。

アルフ「フェイト！今はここから離れないと！」

アルフはフェイトを無理やり抱き上げるとその場から立ち去っていた……………」

フェイトが立ち直るまで数日かかるのであった……………そして、上条君が死んだと勘違いするのであった……………」

続く……………」

海鳴市怪奇事件 2章（後書き）

はいはい、次回はフェイトの次になのはが上条君と接触!?

まだ、魔法少女にはなっていないなのはその2人の出会いはいいい・・・

では、次回もお楽しみに!!

ご感想をお待ちしております!

## 波乱な休息？

一時の休息？

2日後　はやて家　朝

はやて「最近思っちゃけど、当麻君。修道服以外の服は着ないの？」

はやてはずっと思っていたことを口に出す。上条君はいつもいつも変わらない修道服で日々過ごしているからである。

上条君「う〜〜〜ん、ほかの服を着ようと思ってても、他の服が無いだよね」

はやて「この前、教会から郵便で服らしいモノが届いたけどあれちやうの？」

上条君「ッ！！　あれはダメ！あれは服とは言えないむしろ、僕が着るものじゃない！」

はやて「ん？んじゃ、誰が着るもんなんや？」

上条君「う・・・そ・・・それは・・・」

言えない。とても言えない・・・送られてきたのが女物の下着と服でそれが、部分的に透けてたりして、女を強調するやらしい服があ

の神父から送られてきたなんて、言えるはずが無い……

ドサ！

上条君「ん？ハッ！」

はやて「黙っているなら、勝手に見るでえ〜」

上条君「やー！めー！ー！ろー！ー！はやてー！ー！ー！ッ！」

はやては上条君が悩んでいる隙に部屋か件の段ボール箱を持ってきて、ガムテープを剥がし、蓋を開ける……上条君は止めようとす  
るが時はすでに遅し

はやて「こ……これは」

上条君「あうあうあう……」

はやて「これはさすがに……着れんな。当麻君は」

上条君「見ないでー！ー！ッ！それ以上、人を疑われるようなモノ  
見ないでー！ー！ッ」

等々見られてしまった……あのエセ神父……いやエロ神父が自分  
を弄ぶために送りつけてきた18禁アイテムの1つを見られてしま  
った……健全（笑）のはやてには見せないように物置の奥の奥  
に置いたつもりが知らない内にバレていたようだ。



はやて「へえ～～～～、これ私が切れるようにサイズが合わしてあるな～～」

上条君「ちょ！？はやて！？何してんの！？」

はやて「ん？見ればわかるでしょ？送られてきた下着と服を見ているのや」

上条君「はやて！今でも少し痛いの子なりかけているのにそれ以上になったら、嫁の貰い手がなくなるぞ！」

はやて「何言つてんや。その時は当麻君が私を貰ってくれんやろ」

上条君「断固として拒否する！」

はやて「ふ～～～～ん、ここの部分が見えるようになってんやね。これなら、簡単に男を虜に出来るなあ～～」

上条君「人の話を聞けーーーーッ！」

はやて「なあなあ、当麻君。どっちが私に似合うと思う？」

上条君「ん？ブハッ！？」

ドサ！

はやての手には白と黒のいやらしい下着が持たれており、上条君は見た瞬間、顔を赤面に吐血して倒れた。

はやて「ふむ、どっちも威力は抜群やな！うん、今晚試しに着てみ

るかなあ  
」

上条君「嗚呼・・・神よ・・・なんでこの世界にこんなやらしい服が存在するのでしょ・・・この罪深き上条当麻・・・理性が保つ自信がありません」

上条君は倒れながら神に懺悔し始めてしまった。今のはやて家は一種の理性耐久試験場と化していた。その初代被験者たる上条君は今後のことを考えて懺悔を続ける・・・

はやて「おや？奥にサイズの大きいのがある。これもかわいいけど、私には着れへんな〜〜」

上条君「・・・あのエセエロ神父ううう・・・はやてが大人になった時用のモノを用意したな・・・ぶつぶつ」

上条君は師である。言峰を恨みつつはやての実験台にされるのであった・・・

蛇足、その後、服（大人用）などは上条君の手によって封印されるが新たな家族ヴィータ達に発掘され、女性4人の着た所を、ザフィーラが見て、失血死の手前まで追い込んだそうな・・・そして、ザフィーラはエロ犬と長い間言われたそうな・・・

2時間後

はやて「よし、当麻君。服を買いに行こうか」

上条君「……うん……だけど、お金ないよ」

はやて「そこは私が出すから心配しなくていいよ」

上条君「……わかったよ」

はやて「ほんなら、さっそく出発や!」

上条君「はいはい、分かりました。お嬢様」

上条君は何とか理性耐久実験に耐えたが、気力が下がりに下がっていた……が、ここからがホントの地獄一日の始まりだった……

デパート

はやて「これなんかどうや!」

上条君「ねえ、はやて」

はやて「なんや?」

上条君「前々から思っていたけど、はやてって服選びのセンスがおかしいぞ」

はやて「なんでや!??私のどこが悪って言うんや?」

上条君「見ればわかるだろ!どこそこのコスプレイヤーみたいじゃないか!」

修道服からバトラー……バトラーから迷彩服……迷彩服から軍服明らかにおかしい……

上条君「なんで私服を選ぶ予定がこんな特定の場所しか着ないような服しか試着しないんだよ！それにどうしてこんなモノまで置いてあるんだ。この店は！？」

今日の上条君は突っ込みが多い、いつもより多くボケに突っ込みを入れておりまゝす。そして、本格的に服を選び始めたのは数十分後も経つてからのことだった……

数時間後

はやて「おなか減ったな〜何か食べるにいかない？」

上条君「う……うん……気力も空腹度が限界だよ……どこかでスタミナが付くようなモノ食べたい……」

はやて「う……ん……あ！あそこにカレ バイキングがあるで！あそこ最近できたばかりで人気らしいでえー。試しに行ってみる？」

上条君「そうだね。行ってみるか……ん？カレ？」

上条君は何か嫌な予感が横切ったが空腹に負け、バイキングの中に入っていく……そして、中にはお約束のあの人が……

シエル「あら？上条君？」

上条君「ぶーーーーー！？シエルさん！？」

はやて「え？なんや？知り合いか？当麻君？」

シエル「知り合いも何もその子は・・・」

上条君（ダメーーーーッ！その先言っちゃダメーーーー！！）

ブンブン・・・・・・・・！！

上条君は頭と手を振り、全力でシエルの会話の先を言うのを食い止めようとす。

はやて「その子は？なんや？」

シエル「あ・・・教会内でも人気な優しいマスコットの修行僧の上条君と言おうとしたのよ！周りのシスター達から引っ張りだこの」

上条君「はい！？」

はやて「ほう・・・そうなん・・・当麻君？」

上条君「な・・・なんでしょ・・・」

はやて「帰ったら話があるから・・・逃げんなや」

上条君「ううう・・・わかった」

上条君は否定したくても出来なかった……どの道、どう足掻いてもはやての怒りを治めることはできない……この際は諦めて体裁を受けるしかないと諦める上条君だった。

数分後

はやて「へえ……、そうなん」

シエル「そうなのよ。だから、私は」

はやて「ふ……ん、シスターって大変なんや」

上条君（はあ……疲れた）

女二人は話が盛り上がるが男一人の上条君は黙って黙々とカレーと平らげる……それしか、今の彼の気力と体力を戻す方法がないからだ

そして、またしてもイレギュラーの人物が……

アルクエイド「あら？シエルにあの時の男の子まで？今、昼食中？」

上条君「もう、一々驚く気力がないですよ……アルクエイドさん」

今度は入ってきたのは真祖のアルクエイドさん、道を歩いていたら

偶然、見つけて近寄ってきたのだった。

シエル「ここで何しているのですか。アルクエイド」

アルクエイド「ん？たまたま見つけたから来てみただけよ？」

はやて「知り合いか何かですか？シエルさん？」

シエル「ええ、殺し合うほど仲がいいんですよ。私達、ほほほほ」

アルクエイド「そうね。殺し合うほどね」

はやて「？」

このリアルに殺し合っていることははやては知るよしもないが、上条君はここが戦場にならないことをせつに願うのである……

アルクエイド「そうそう、上条君だっけ？あの時助けた女の子とあの通路で何してたの？」

はやて「女の子？」

上条君「ギクツ！？あ……アルクエイドさん。その話は……」

アルクエイド「ねえ~~~~あの時の武勇伝をお姉さんに聞かせてほしいな~~~~」

上条君「あ……あわあわ」

上条君はゆっくりとはやての方に向くと……さっきより黒いオー

ラをまとったはやての姿があった・・・顔は笑っているけど心は怒っている・・・本気で

はやて「当麻君って、ホントに死にたがりやさんやな～～。さて、どうしようかな～～」

上条君「再び自由への逃走ーーーーーッ！」

上条君は勢いよくバイクングから逃げ出した。はやてを残して・・・

デパート内通路

なのは「さて、この後どうしようかな。」

同じデパートの中でなのは1人で買い物に来ていた。ホントはアリサ達と来る端だったが、予定が変わり1人で遊びに出ていた。

そして、階段のある通路を横切ろうとしたら・・・また、お約束の・・・

上条君「ちょ！？わあああああ！！」

なのは「きゃあああああ！！」

ドンー！



二人は正面衝突！偶然にも出来過ぎているタイミングで二人はそのまま数メートル先まで転がって行った。

上条君「う~~~~ん・・・んうう!?」

上条君の中でエマーゼンシーコールが鳴り響く！

仰向けに倒れている上条君の上に・・・なのはが覆いかぶさるように乗っていたのだ。だが、それだけでは収まらない・・・

上条君（ちょ・・・唇が付いてる!?や・・・やばくない）

そう・・・こともあるのか。二人の唇が完全に接触している・・・完璧なキスであった・・・上条君はあまりの衝撃に動けなかった

なのは「う・・・むううう!?」

なのはも目が覚め驚き、急いで唇を離し、上条君の上から降りる。

なのは「ごめんなさい。大丈夫ですか!?」

バツ！

上条君「すみませんでしたー！ーッ!」

なのは「ふええええ!?!」

上条君は一瞬にして土下座の体勢を取り、深くなのはに謝る。

上条君「こともあろうかと女の子と・・・き・・・キスをしてしまった。この罪深き僕を裁いてください！！できれば、苦しまないようにお願いします」

上条君の頭の中はフイーバ状態、何かを考えようとするとするが混乱し過ぎてまとまらなかった。

なのは（ふええええ！？どうしよう・・・初めてなのに・・・私はするればいいの！？）

同じようにパニック状態、こんなところで初めてを無くしてしまうなって・・・しかも知らない男の子と・・・

なのは「だ・・・大丈夫だよ！事故はカウントされないから」

上条君「だけど、異性とやったってことはカウントされる」

・・・

上条君「ここで責任とって自害しますから、介錯頼んでいいですか！？」

なのは「ふえええええ！？お・・・おちついてくださーい！！」

上条君の手にはどこから出したか分からない黒鍵の刃を自分に向けていた。

なのはは急いで上条君を抑えようと必死に羽交い絞めするのであった・・・

続  
く  
・  
・  
・

波乱な休息？（後書き）

次回！はやくから逃げた上条君はなのはとまさかのハプニングに！

さて、上条君の運命はいかに！

では、次回も楽しみにしててください！

## 波乱な休息？

波乱な休息？

戻ってバイキング

はやて「なんか騒がしいなあ〜」

シエル「そうですね。なにか事故でもあったのでしょうか？」

アルクエイド「もしかしたら、上条君が女の子と交通事故を起こして、拳銃にキスなんかしちゃったたりして」

はやて「あはははは、いくら上条君でもそんな運のいいことがあるわけないよ〜」

シエル（それが逆の意味で運悪いと意味に繋がるんだよね。あの子にとっては）

シエルは上条君の正体をしているから、なんともいえない顔でカレ―を頬張る。

はやて「それより、さっきの話の続きを聞かせてなあ〜」

3人は上条君のことは放っておいて、話に夢中になるのであった・

戻ってデパート内通路

上条君「で？俺の処分はどうします？」

なのは「う〜ん」

なんとか落ち着いた上条君の処遇を改めて考えるのは、そこではないことを思いつく！

なのは「じゃあ、私を今日一日楽しませてくれる？」

上条君「へえ？」

なのは「私、今日一人だから暇で仕方なかったの。だから、キスした代償は私を楽しました分で払うってどうかな」

上条君「楽しませるって・・・例えば、買い物を手伝うとか？」

なのは「うん、ほかに私を楽しませてくれればうれしいなの」

なのはの満面の笑みに上条君は苦笑する。

上条君「わかりました。この罪深き男でよければ、エスコートしますよ。お姫様」

上条君は片膝をついた忠義姿勢を取り、なのはは色々と戸惑う

なのは「そ・・・そんなに・・・周りが笑っているのなの!」

上条君「お姫様の思う存分、僕と言う奴隷をこき使ってください」

なのは「ふええええ!？やめてなの!私、誤解されちゃうなのー  
ーッ!？」

通行人達はクスクスと二人を見て笑ったりして、逆になのはが  
弄ばれているようにも見えるのであった・・・

その頃、3人はバイクングを出て、買い物をしていた。

シエル「ねえ、上条君を捜さなくていいの?」

はやて「ええよ。夜になったら、家に帰ってきてくれるもの」

アルクエイド「ふ~~~~ん、あの子つて、貴方んちに泊ってるんだ。  
てつきり、シエルの隠し子だと思っちゃったわ」

シエル「なっ!？あんた好き放題」

はやて「うふふふ、二人はホントに面白い人達やなあ」

女三人は楽しくやっているものであった・・・

その頃、2人はデパート屋上

なのは「あ〜〜楽しかった」

上条君「それはなによりだよ」

2人は服を見たり、他の色々な所を見て回り最終的に屋上で涼んでいた。

上条君「風は寒くない？まだ、春になったばかりだし」

なのは「へいきだよ。色々と回って熱くなったから、今がちょうどいいよ」

2人は後、5歳くらい年取って見ると仲のいいカップルに見えただろう・・・しかし、今はそのような青春を漂わすような空気には届かなかった。

上条君「う〜ん、だけど、まだキスの代償は払いきれないな〜」

なのは「無理じゃなくていいのよ。これでも十分楽しかったから」

なのははそう言うが本人は納得いかなかった。あれだけのことをしてただ買い物の手伝いだけでは足りないかと上条君はそう思っていた。

上条君「・・・あ！そうだ！なのはは花畑とか好きかい？」

なのは「うん！大好きだよ！だけど、今はまだ寒いからお花さんは咲いてないよ？」



上条君「よし、んじゃ。なのは、少し跳ぶか！」

なのは「ふえ？うわ！？ちょ・・・ちよっと！？」

上条君「しっかり掴まってね」

上条君はなのはをお姫様だっこで持ち上げるとそのまま、助走し始める

なのは「そこは何もないよー！ー！ーッ」

上条君「舌嚙むよ！口は閉じて！」

ドン！

なのは「ふええええええええ！？飛んでる！？」

上条君「ちなみにこれは跳んでいるっていた方が正しいかな」

上条君は得意な強化魔術を使ってビルとビルを飛び越えていく

なのは「すごーい、まるで鳥さんになったみたい」

上条君「鳥じゃないけど・・・まあ、こっ跳ぶのも悪くないね」

2人は目的地に向かって跳んでいくのであった・・・

シエル「あら？」

はやて「どうしたの？シエルさん」

シエル「いえ、なにも」

シエルはかすかな魔力を感じたような気がしたが、勘違いで流し買  
い物の手伝いに戻る・・・

とある林の中

上条君「到着」

なのは「ここって、近くの林だね？」

着いた場所、樹に囲まれた林のひらけた場所だった

なのは「ここって、もう少し経つとお花畑になって綺麗だけど、今  
はまだ早いよ？」

上条君はなのはを下ろすとポケットの中からデパートで買った。花  
の種を取り出す。

上条君「なのは、今から今日だけの少し早い夢を見せて上げるよ」

なのは「ふえ？」

上条君は勢いよく種の入った袋を空に投げ、その後、黒鍵の柄を通りだし、刃を結成させ、袋に投げつける。

パン！

袋は空中で弾け、地面に種が降り注ぐ。その後、上条君は左手を地面に触る

上条君「

」

なのは「？」

上条君はブツブツと何かを言っているがなのはにか聞こえなかった。

上条君「なのは、少し目を瞑ってて」

なのは「え？どうして？」

上条君「目を瞑らないと夢は見れないよ」

なのは「うん」

なのはは言われた通り、目を瞑る

上条君「僕がいいと言つまで目を瞑っててね」

なのは「うん」

そして、再び上条君は何かを言い始める。気になって目を開けそうになるがそこは堪えて我慢する

上条君「いいよ。目を開けて」

なのは「うん・・・わあ~~~~!!」

なのはが目を開けると広間が花畑になっていた！今さっきまで何もなかった所に一面の花が咲きほこり、広間を縁取る桜は満開に咲いていた。

なのは「すごい！すごい！ねえ！どうやったの!?!」

上条君「言ったでしょ？これは夢だって僕は君を夢の中に誘っただけだよ」

なのは「夢でもすごいよ！ねえ、貴方は魔法使いなの？」

上条君「いや、僕は魔術師兼修行僧って感じな。中途半端の能無しだよ」

なのは「能無しじゃないよ！だってこんなにきれいなモノを見せられるんだもん！」

なのはは花畑を駆けまわりながら、上条君を褒める。

上条君「ありがとう・・・じゃあ、一時の夢を楽しんで」

なのは「うん！」

なのはは夢の中の花畑を楽しむのだった。

ちなみにこれは夢ではなく現実の花畑である。上条君が買った花の種を魔力で成長を速めて、無理やりに花畑を再現したモノだ。これははやてを驚かすために考えた魔術だが、今回は特別になのはを楽しませるために行使した。

上条君「よしできた。なのはは！」

なのは「なに？にやあ！？」

なのはの頭の上に花の冠が被せられた。白・赤・黄色の春の花がなのはを輝かせる。

なのは「ありがとう」

上条君「どういたしまして」

なのは「意外と手先器用なんだね」

上条君「まあね。ほんの少し・・・女の子を喜ばせるくらいはね」

なのは「私、そういう人好きだよ。にやはは」

上条君（ドキ！）

上条君の心が一瞬揺れた。なのはの嬉しそうな顔があまりにも魅力的だったのか。少年の中で何かが動いたのは明らかだった。

なのは「ふえ？どうしたの？顔が赤いよ？」

上条君「ハッ！いや、なのは優しい子でいい子だな〜と思ってただけだよ」

なのは「よくみんなから言われるよ。にやはは・・・」

上条君（この僕が同じ年の女の子に心が揺れるだと・・・バカな僕のストライクゾーンは年上だぞ！たしかになのはは気配りとか温厚さは入るけど・・・いや、何考えてんだ僕は！）

上条君は認めていないが明らかに初恋と言うモノが芽生えようとしていた・・・はやてと比べるとワンランク上に二階級特進って感じな「偶然出会った異性」から「気になる異性」と認識するようになる。

なのは「こっちこっち！早く来てー！ー！！」

上条君「ハッ！うん、今行くよ」

上条君は考えるのやめて、なのはとの一時の時間を過ごすのであった・・・

その頃、はやて

はやて「すまないなあ〜荷物を持ってもらって」

シエル「このくらいならどうってことはないですよ」

はやては車椅子のため荷物を持ってないため、シエルが代わりに運んでいた。ちなみにアルクエイドは途中で帰ってしまったため、シエルがすべての荷物を持つことになったのだ

はやて「だけど、当麻君はどこに行ったんや？デパートには居なかったし・・・」

シエル「多分、はやてちゃんが怖くて、先に家に戻ったんじゃないかな」

はやて「私、そんなに怖かった！？それはちょっとやりすぎたなあ〜」

シエル「うふふふ、だけど、はやてちゃん。そんなに怒ってばっかりいると当麻君に振り向いてもらえないですよ」

はやて「え！？ならどうしたらええんや!？」

シエル「上条君だって、好きで女の子と関わっているわけじゃないのよ？ただ、そこに困っているから助けようと必死になるだけ、はやてちゃんだって、上条君のことはわかるでしょ？」

はやて「う・・・うん」

はやては上条君がどのような人間かしているけど嫉妬してしまう、それに恐れていた・・・上条君がどこか行ってしまふのを・・・

シエル「だから、もう少しやさしくなっただけでね。そうすれば、自然と上条君の方から振り向いてくれるから」

はやて「そうなん・・・うん！わかった」

2人は笑顔で夕日に沈む道を歩いていくのであった・・・

その頃、上条君となのは・・・

なのは「何してんの？」

上条君「ん？それは秘密」

なのは「？」

上条君は黙々と何かを作っていた。なのはは気になって仕方ない様子だが、上条君は見ないように言われるため、仕方なくほかのことをする。

そして、陽はほとんど落ち、気付くと楽しかった時間はあっという間に過ぎていた。

上条君「なのは、そろそろ家に帰ろうか」

なのは「え！？もうそんな時間なの！？」



上条君「一人で帰るのもなんだから、僕が家まで送るよ」

なのは「ありがとう」

上条君「お礼は言われることはしてないよ。僕は今日一日、なのはを楽しませると約束したからね」

なのは「あ、そうだったね。にやはは」

上条君もなのはにつられて、にこやかに笑い夢の花畑を後にした・

住宅地に着くころには陽が完全に落ち、満月が暗い夜道を照らしていた

なのは「ねえ、この際だから、ご飯も食べていかない？」

上条君「え！？それはどうして？」

なのは「今日一日付き合ってもらったし、それに大勢で食べた方が楽しいじゃない」

上条君「ああ・・・そうだね」(まずい、はやてのことすっかり忘れてた)

上条君はいくら、帰りたくななくても1人ぼっちの女の子を放っておくのはさすがに心苦しいようだ

なのは「ここが私の家なの！」

上条君「うわ・・・屋敷だね」

なのは「にやはは、よく言われる」

そして、門を開けて中に入ると・・・

恭介「なのは、こんな遅くにどこ行ってたんだ？」

美由紀「心配してたわよ。なのは」

兄と姉がなのはの帰りを待っていた。さすがに9歳の妹を放っておくことができず、探しに行く一歩手前だったみたいだ

なのは「お兄ちゃん！お姉ちゃん！お友達連れてきたよ！」

恭介「友達？アリサちゃん達か？」

なのは「うんう、違うよ。ほら、私の後ろに・・・あれ？」

後ろには誰もいなかった。たしかに一緒に門を潜ったが、そこには上条君の姿はなかった

美由紀「なのは？熱でもあるの？」

なのは「だって、今さっきまで一緒に・・・」

恭介「はあ・・・なのは、遊ぶのはいいが心配する俺達の身も考えてくれ」

なのは「お兄ちゃん！お姉ちゃん！」

2人は家の中に入っていく・・・なのは誰もいない後ろをもう一度見て、仕方なく兄と姉の後に続いて家に入るのであった・・・

はやて家

上条君「た・・・ただいま〜」

はやて「お帰り、当麻君」

上条君「は・・・はやて！」

はやて「どうしたんや？当麻君」

上条君はどの道、ただでは済ませれないってことは分かっているも、はやて家に帰還する

上条君「はやて・・・怒ってないの？」

はやて「何をやあ？」

上条君「いや、その・・・色々・・・」

はやて「はあ〜、当麻君は私がそんな器が小さいと思ってるの？」

上条君「え!?!」

はやて「ほら、早く上がって、ご飯食べよ」

上条君「はやて、どうしたの・・・何か怪しいモノでも食べた？」

はやて「いや、何も」

はやては奥のリビングへと消えていった。

上条君（ど・・・どういうことだ！？てつきり、また、ハリセンでも喰らうと思ったけど・・・）

上条君はてつきり体裁でもされると思っていたが、予想外のはやての反応に驚きつつも、はやての後を追うのであった・・・

数時間後

はやて「当麻君、今日は一緒に寝てくれへん？」

上条君「ど・・・どうしたんだい!？」

はやて「いいから」

上条君「わ・・・わかった」

はやてと一緒に寝ることは日常茶飯事だが、なぜか今日は様子がおかしかった。それに昼間のこととかで怒っていないことがおかしいのだ・・・

上条君は素直に今日ははやてのベットで寝ることにした・・・

数分後

上条君（もうすぐ、12時か・・・）

上条君はベットから出ようとしたら、はやての手が上条君の手を掴んだ。

はやて「どこ行くんや？当麻君？」

上条君「はやて・・・ちょっと、行かないことがあるんだ」

はやて「それって、女の子の所？」

上条君「う・・・うん」

はやての質問に素直に答える上条君・・・ホントははぐらかすつもりが素直に答えてしまっ・・・はやての目が今日に限って誤魔化すことができなかったからだ

はやて「どうして行くんや？もしかして、その女の子のことが好きなん？」

ドキー！

上条君「い・・・いや、好きとかそういうモノじゃなくて約束がある

から・・・」

上条君の心がまた少し動くしかし、そこはあえて約束と誤魔化す

はやて「ふ~~~~ん」

上条君「明日になったら、約束破っちゃうから行かなきゃいけないんだ」

はやて「ええよ」

上条君「え!?!」

はやて「早く行ってあげなあ」

上条君「いいのかい?はやて」

はやて「だって約束なんやろ?」

はやては手を離すと上条君は近くに掛けてあつた修道服の上着を手に掛け部屋の扉を開ける。

はやて「だけど、早く帰ってきてなあ。一人だと今日は寝つけないんや・・・」

上条君「・・・うん、すぐに戻ってくるから待ってて、はやて」

上条君は急いで玄関を開け、外に飛び出していた・・・

一人残されたはやては泣いていた

はやて「当麻君・・・当麻君・・・うつつ」

少女は願っていた。少年と一緒に居てくれれば、他は何もいらないと・・・

だけど、その少年は他の人を助けるために少女の傍から離れていく・・・たった1つの願いなのにどうして、運命はそれを許さないのか。少女はこの世の残酷さに涙するしかなかった・・・

深夜零時まじか・・・

なのは「はあ～～あの人。どこ行っちゃんだろ」

なのはもはやて同様にベッドで寝つけない時間を過ごしていた

なのは「眠れないな～～どうしよう・・・ん？」

なのはは窓を見ると何かの花弁が飛んでいくのを見た。

なのは「花弁？今はお花は咲かないのに・・・」

窓を開けて外を見るとどうやら屋根から花弁が舞っているように見えた。そして、なぜか置いてある梯子がなのはの部屋の横に掛かっていた。

なのは「行ってみますか」

なのはは梯子を上り、上の様子を見る・・・そこには

上条君「てつきり、気付いてもらえないと思っていたよ」

なのは「あ・・貴方は！」

そこに居たのは修道服を着た少年だった。お昼の時は私服を着ていたが、今は違っていた。

上条君「遅くなったね。さて、そろそろ時間だから来たよ」

なのは「どうして、あの時居なくなっただんですか！？ちゃんと後ろにいましたよね！？」

上条君「あははは・・・僕はなのはに夢を見せているだけだから、僕は他の人から見えないんだ」

なのは「え！？そうなの？」

上条君「まあそんなところかな」

実際は気付かれないように逃げ、はやて家に戻っただけで決して、他の人には見えないというのは嘘である

なのは「所で、時間ってなんですか？」

上条君「ああ、なのは・・・名残惜しいけど、この夢は終わる時間が来たんだよ」

なのは「ふえ！？どうして!？」



上条君「言ったよね。今日一日にだけの夢だつて……」

なのは「そう言っただけでも、まだ夢をみたいよ!」

なのははまだあの花畑に未練でもあるのか……それとも思い出を消したくないのか……

上条君「じゃあ、もし僕の問題に答えられたら、夢を延長するよ」

なのは「ほんと!」

上条君「ああ、んじゃ、問題……僕の名前はなんて言うんでしょっ?」

なのは「なんだ。簡単だよ。貴方は……あれ?」

答えようとするが名前が出てこない……いや、名前自体聞いていないのだ。

上条君「……どうした?なのは?」

なのは「え……え……と……」

上条君「……残念……時間切れです」

なのは「ふえええええ!」

なのはは等々答えられずに終わってしまった

上条君「残念だけど、夢から覚める時が来たよ。なのは」

上条君は夢の終わりを告げる

なのは「う〜ん、ちよつと残念・・・だけど夢は終わりでいいから、貴方の名前を教えてください！」

上条君「残念だけど、教えられない」

なのは「どうして！私から初めてのキスを取ったのに」

上条君「だからだよ。僕の存在はなのはの記憶から消えるから・・・始めのキスのことは無かったことになるんだよ」

なのは「え！？」

少女は凍りついた・・・あれだけの幸せの時間が記憶から消されてしまふなんて・・・ショックな出来事もあつたけど、それはなのはにとっては大切な思い出だった

上条君「これは夢、夢の住人は大人しく忘れられるもんでしょ？」

なのは「納得いかないよ！どうして忘れるようにするの？私は別に構わないのに」

その時、時計が深夜の零時になった・・・

上条君「もう時間か・・・」

なのは「あ・・・」

上条君の身体が花びらが散るように消えかけていく……

上条君「ホントに名残惜しいけど……お別れだね。なのは」

なのは「待つて！行かないで！」

少女は消えていく少年を行かせないように抱きついた

上条君「なのは……」

なのは「行かないで……せつかくできたお友達なのに」

上条君「君にはちゃんとした友達にいますでしょ？」

なのは「だつて……だつて」

少女は泣きだしそうだった……少年は心を痛める

上条君「それじゃ……ごうしょうか」

なのは「ふえ？」

上条君「これを上げるよ」

なのは「これ、十字架のペンダント？」

上条君「うん、僕が作ったお守りだよ」

なのはに渡されたのは花畑で上条君が作っていたモノだった。木を削り、白く塗装とワックスを掛けた十字架の先端に金のチェーンを

通した。簡単なペンダントだった。

上条君「一応、これを持っていれば、夢のことは忘れない」

なのは「でも、貴方は」

上条君「・・・僕のことは残念ながら・・・」

なのは「それじゃ意味が無いよ！私は貴方と居た時間が一番楽しかったのに！」

ドッキン！

上条君（う・・・まただ・・・なんで、なのはは俺を動かそうと出来るんだ！？）

少年の心がなのはと離れることを拒絶する反応を見せる。頭の中では忘れさせなければならぬと思っっているが心がそれを許さない・・・

上条君「じゃあ・・・もし、僕の存在を覚えてていれば・・・」

なのは「ふえ？」

上条君「僕の名前を呼んで・・・そうすれば、また、会えるよ」

なのは「だけど、名前のヒントが無いのにどうやって」

上条君「ペンダントにヒントが書いてあるよ」

なのは「え!？」

たしかに書かれていた・・・「K・T」と・・・

上条君「僕の頭文字だよ。ヒントはそれだけ」

なのは「わかった・・・これで貴方の名前を当てて見せる!」

上条君「ああ、頑張って」

なのは「だけど、消える前に」

上条君「なのは?むううう!？」

まさかの予想が出来ない事態がまた発生した。今度はなのは自身の意思で上条君にキスをした。

なのは「これで二回なの。これで忘れない」

上条君「な・・・なのは!？」

なのは「約束して、問題が解けたら、また貴方と過ごした夢をもう一度見せるって約束して!」

少年は動揺するが・・・

上条君「うん、いいよ。いつでも待っているよ。なのは」

なのは「絶対だよ」

少年は笑顔で消えた。あの花畑で過ごした花の香りを残して・・・

なのは「・・・大丈夫、絶対に忘れない。そして、また、会うんだもん」

少女は決意し、自分の部屋に戻っていくのだった・・・

そして、少し離れた場所で消えた本人、上条当麻がなのはが無事部屋に戻ったことを確認すると彼もはやての待つ家に向かい始めた

上条君「はあ〜まさか、2回もキスされるとはね・・・正直、予想外」

心の中には未練だらけであった。自分では認めていない初恋の相手の記憶から自分を消そうなんてこと考えられたことがない。しかし、魔術を使ってしまうて見せたことにはかわりはなかった。そのため、記憶をその部分だけでも消去する必要があった

上条君「じゃあね。なのは・・・おやすみ・・・そして、バイバイ」

少年は満月の光に照らされて、自分を待つもう1人の少女の元へ戻るのであった・・・

その後、なのははあの時の少年のことを必死に思い続け、名前を捜

し続けた・・・しかし、名前が見つからず、少年だけが記憶から消えていた。

そして、ジュエルシード事件が起きた頃には少年のことは忘れてしまっていた・・・原因は彼女の意識が少年以上の人に向けられたからだ・・・その人の名は上条当麻・・・5年後の少年の姿だった・・・

続く・・・

波乱な休息？（後書き）

休息終了！

次回は事件の解決とクライマックス！

短いようで長い幼い上条君の物語が幕が下ります

そして、上条君の存在は strikers で大きく関わっていきます

では、次回も楽しみにしてください！お願いします！



## 休息の最後（前書き）

上条君の話もいよいよ終わり近づいてきました！  
今回は平和な一時の最後です。  
ではどござい！

## 休息の最後

休息の最後

3日後・・・言峰教会

ギイイイイ・・・

上条君「何の用ですか。言峰神父」

言峰「来たか・・・意外と早かったな。上条よ」

シエル「おはよう、上条君」

上条君「あ、シエルさんもいたんですか」

朝早く呼び出された上条君は急ぎ教会に戻ってきた。

言峰「ふむ、人も集まった。これより、海鳴市で起きている死徒の増殖原因についての対処について行っ」

上条君「ん？ たった3人で対処するんですか？」

シエル「仕方ないのよ。上の方で人が出せないと言うし、エリートが2人も居れば問題ないだろうって言うてくるんだもの」

上条君「ちょ！？まさか、僕はまた手伝い（パシリ）ですか！？」

言峰「予想以上に頭の回転がよくなったな」

上条君「クツ・・・また騙された・・・」

シエル「ごめんね。でも、人手が足りないのよ」

上条君「いいですよ・・・どの道、避けて通れない問題ですし、いつ、はやてに危険が及ぶかもわからないし」

シエル「そういえば、はやてちゃんは元気にしてる？」

上条君「元気過ぎて、僕の理性をドンドン削っています」

シエル「あははは、それは何よりね！だけど、問題を起しちゃう駄目よ？」

上条君「はい？」

言峰「シスターよ。もし、問題が起きてもこちらで処理しよう。ふふふふ・・・上条よ。その時は責任婚はこの教会で無償で行おう！安心するがいい」

シエル「それはいいですね。うらやましいかぎりです」

上条君「するか！問題ってどんな問題だ！この変態エロ神父&シスター！」

ギヤー！ギヤー！と吠えながら顔を赤くする初な少年は反論する。その様子をからかう聖職者達は少しの間、若き少年を弄るのであった……

言峰「ふむ、話を戻すでしょう」

上条君「ぶつぶつぶつぶつ……」

シエル（ちよっと弄りすぎたかしら）

少年は何か独り言を言いながら教会の端で体育座りをしていた。精神的ダメージはかなり大きかったようだ。

言峰「真祖が現れたことは何か関係あるのかね。シスター？」

シエル「それはわかりません。彼女も予想外だったらしいので」

言峰「ふむ……手掛かりは無しか」

上条君「ぶつぶつ……ん？　！！　アーーーーーッ！！」

「「！！」」

シエル「ど……どうしたの!？」

上条君「はやてとの約束の時間が過ぎてる!!急がないと殺される  
—————」

ドン!

レディ（笑）との待合わせを完全に忘れていた少年は扉が外れるほどの力で扉をこじ開けそのまま疾走していた……

そして、教会に残された二人は上条が遠ざかって行くのを眺めていた

シエル「あの……ほっといいていいんですか？」

言峰「かまわん、放っておけ」

シエル「わかりました」

言峰「それより、シスター」

シエル「はい？」

言峰「この我々の最終的的目的が協会が気付いたらしい」

シエル「な!？」

シエルは驚きを隠せず、動揺してしまった

言峰「邪魔をされる前に、ケリをつける。今のうちに英気を休めたまえ。シスター」

言峰は言い終わると協会の奥へと消えていった・・・

その頃、はやて・・・病院入口

はやて「・・・遅い。何分待たせるつもりや」

少しイライラさせている車椅子の少女は待ち合わせした時間を過ぎることに黒いオーラが強くなっていく・・・受け付け付近の患者達は黒くなりつつあるはやてから避けていた

ドドドドドドドドドドドド キイイイイッ

上条君「ゴメン！遅れた！」

はやて「待たせすぎや！いったいどこに行ってたんや！」

はやての怒った声が上条君に降り注ぐ。

上条君「きょ・・・教会に行ってくるって言ったじゃないか。そんなに怒らないでよ」

はやて「乙女を待たせた罪は重いで、覚悟しとき」

上条君「うづう・・・弁明をする間も与えてくれない・・・」

はやて「・・・まあ！仕方ないやろ？教会の仕事が終わらなかつたんやろ？」

上条君「ああ・・・！！、許してくれるの!？」

はやて「だ・め・や。遅れたことは別や」

上条君「ノーーーオオオオオオオツ」

どの道、上条君の罪の重さは変わらないのだった

はやて「さて、診察が終わったから遊びにいこっか？」

上条君「・・・はあ〜、そうだね。で？どこ行く？」

はやて「そっちな〜・・・あ！そっや！ここに行こ！」

はやては膝に乗せてあった広告の地図を上条君に見せた

上条君「ん？こいつて」

はやて「私って、病院通いであまり行ったことないんや。駄目？」  
上条君「いいんじゃないか。はやてが行きたいんでしょ？なら行くか。」

はやて「うんー！」

上条君ははやての車椅子を押し始め、目的に向かうのだった

時計塔・・・シャルロツテの部屋

シャルロツテ「あの神父が、上条をかすめようとするのは決定的ね。教会に居た神父に頼むのが間違ってたわね」

ユリカ「私のミスです。姉さんを止められなかった・・・」

シャルロツテ「いいのよ。私が責任を取るっていったでしょ？」

上条当麻を若返らせてしまった二人の姉妹達は言峰の目的・・・上条当麻を教会側に無理やり引き込むことが最近になって気付いた

ユリカ「でも、どうします？上条を取り戻すって言っても・・・」

シャルロツテ「それは・・・」



ガチャ！

「「！！」」

ゼルレッチ「失礼する」

シャルロツテ「ッ！ 大師父」

ゼルレッチ「久しいな。マジスティア家の娘達よ」

部屋に入ってきたのは上条を姉妹に預けた本人だった

シャルロツテ「お久しぶりでございます。大師父。何かご用でも？」

ゼルレッチ「お主たちに預けた上条当麻を回収にきた」

シャルロツテ「申し訳ありませんが、お約束した日にはまだ早いのですが？」

ゼルレッチ「教会が上条を奪おうとしておる。このことを鵜呑みにするほど、わしも衰えておらん」

シャルロツテ達は何も言わずとも分かっていた。ゼルレッチは今、途轍もなく機嫌が悪いと・・・

ユリカ（ガタガタガタ・・・）

シャルロツテ「心配なく、もう手を打ってあります。今しばらくお時間を」

ゼルレツチ「もうよい！わしが自ら上条当麻を取り戻す」

シャルロツテ「大師父が自らですか！？」

ゼルレツチ「上条を他人に任したのはわしだ。責任がある。この後はわしがすべてやる」

ゼルレツチはシャルロツテの話を最後まで聞かずに部屋から出ようとした。

ユリカ「お持ちください。大師父！上条に行使した魔術は私が掛けたモノです。私もあの姿にした責任があります。私もお供してよろしいですか」

ゼルレツチ「うむ、行き先の供を頼もうか」

ユリカ「ありがとうございます」

ゼルレツチの後にユリカも続き、部屋に残ったのはシャルロツテだけになった。

シャルロツテ「クッ！なんてことなの……まさか、大師父まで出てくるなんて……」

シャルロツテは急いで、部屋の受話器を手に掛け、ボタンを押していった

シャルロツテ「お願い。繋がって」

『ただいま、連絡に出ることができません・・・』

ガシャン！ガン！

受話器を床に叩きつけた。長女は自分のミスに腹を立てた

シャルロツテ「あの2人なら任務を十分こなせる・・・だけど、大師父とユリカが乱入したら・・・どうなってもおかしくない」

白薔薇姫が先に手を打ったこと・・・それは一流の魔術師を送り込み上条当麻を回収、それを妨害するモノを排除することだった。しかし、今さつき出て行った二人が介入するとその地域が焦土になってもおかしくないのだった。

シャルロツテ「ここは祈るしかないわね。無事に物事が終わることを・・・」

日本・・・空港

男「ふう〜、思ったより早く着いたね」

空港のホールでタバコを出すと火を付け、口にくわえた。その時

女「ここは禁煙のほうですが？」

後ろから礼儀正しい女性の声が聞こえてきた。

男「硬いことを言わないでくれ。妻の前では吸えないんだ」

女「ここからは任務です。気を入れて下さい」

男性モノのスーツを着た女性は黒いコートを着た煙草を吸う男性に喝を入れる。

男「ああ、言われなくても分かってる」

男の目が穏やかな目から狩人の目に変わった。

女「では、行きましょう。魔術師殺し……」

男「ああ、よろしく頼むよ。封印指定執行者さん」

ここに戦闘に長けた魔術師達が任務遂行のため、目的に向かう……  
・そう、海鳴市に

その頃、はやて&上条君

上条君「ゲーセンなんて久しぶりだな〜」

はやて「上条君、始めは何して遊ぶ？」

はやて「がきたかった場所は、ゲームセンターだった。」

上条君「う〜ん、はやてが面白そうなモノを選んでよ」

はやて「んじゃ、あれはどうや!」

上条君「ん?ボー ーブレイク!？」

はやて「カードを作ってやってみよかあ!」

上条君「はやて、まさか、いきなり難しいのからやるのはちょっと・  
・」

はやて「あれ〜?どうしたんや?まさか、自信ないん?」

上条君「な!?!いいよ!やってやるうじやないか!絶対に負けないぞ!」

はやて「その意気や!」

ゲームスタート!

はやて「遅い!遅すぎや!」

上条君「なーーーーッ！ズル！迫撃攻撃なんて！」

はやて「あはははは、強襲型なんて恐れるにも足らずや！」

上条君「おのれ・・・ん？ノオオオオオオ！！コアが強襲されてる  
ーーーーっ!？」

はやて「さすがや、私の指示にちゃんと従ってくれてる。さすがは  
ポーター達や！」

上条君「クッソーーーーッ！早く防衛を・・・」

はやて「甘いで！ここには私達が居るでーーーーッ！」

上条君「ギャアアアアア！」

結果、10回の全国大戦ではやては6勝4敗、上条君4勝6敗・・・  
こうなった理由ははやての場合は戦略で押し進め、上条君の場合は  
戦術で圧倒した。どっちも良い戦いしたが結果ははやての方が上回  
った

数時間後

上条君「はやて、そろそろ帰る？もうすぐ夜だよ？」

はやて「あゝゝもうそんな時間なん。楽しい時間はすぐ過ぎるんね」

上条君「そつだね。ホントすぐだね」

上条君はゲームに区切りにつけたはやての車椅子を押し、店から出ようとした。

はやて「あ！ちょっと待って！」

上条君「どうした！？なにか忘れものか!？」

はやて「違つよ。始めに目的にしていたモノをやるのを忘れてたんや！」

はやては上条君に指示に店の奥に行く・・・そこには

上条君「プリクラ？」

はやて「私達の写真って、まだ一つもないでしょ？だから、記念に」

上条君「う・・・うん、いいじゃないかな」

はやて「どうしたんや？」

上条君「いや、僕、プリクラ一度も使つたことないから」

はやて「大丈夫や！そこんところは私ができるう」

そして、はやて操作を任せて写真を取ることにした。

はやて「上条君、もっと笑ってや！」

上条君「え!？」

はやて「顔が引きつってる」

上条君「そう言う、はやてだって」

はやて「ウツ！仕方ないやろ。久しぶりなんだから」

はやては車椅子でプリクラには入れないため、上条君にお姫様抱っこで抱かれている状態で密着しており、はやては近くに上条君の顔があるので、少し焦っていた

『写真を取ります。5・・4・・』

上条君「ちょ!?!まだ気持ちの整理が!？」

はやて（ここはやるしかない!）

はやての手が上条君の顔に触れる

上条君「はやて?・・・んむ!？」

『2・・1・・』カシャン!

その時、上条君の時間が停止する・・・上条君は目を見開き、なのはの時並みの衝撃が再び襲いかかった



プリクラのテレビ画面に大きく、男と女の唇が重なり合ったベストアングルが映し出された。

上条君「は・・・はやて！？これは何の冗談だ！？」

はやて「どうや！これはインパクトあるやろ」

上条君「・・・ハッ！な・・・何してんだよ！あんたはーーーーッ！」

そして、2回目は普通に取ったが、最初の写真は結局プリントされたのだった。しかも大きく

はやて「うわ・・・これは少しやりすぎたなあ」

上条君「うつつ・・・僕、お婿にいけない」

はやては自分で起したアクションの写真で顔を赤くし、上条君も同じ写真を持ち頂垂れながらシクシクを泣いていた・・・

そして二人が過ごした時間の1つの思い出が遠からず、上条君とはやての心に焼きついただろう・・・

そして、夜が更けていく・・・

海鳴市・・・高い建物

「近い、この町にジュエルシードがある」

赤い宝石をぶら下げた小動物が町の周りを眺めていた

「早く回収して、責任を取らなきゃ。」

そして、その場から離れて行った・・・そして、その近くの道で・・・

志貴「まったく、アルクエイドの奴どこ行った？」

そこにもう一人の主人公がヒロインを捜していた。

志貴「この町に何かありそうだけど、あいつ・・・まさか!？」

そして、メガネの少年は急いで人探しを再開する・・・

そして、役者達は舞台に集結しつつ、物語の終局に向けて動き出すのであった・・・

続く・・・

## 休息の最後（後書き）

次回、上条君の最後の夜です！海鳴市怪奇事件と上条当麻争奪戦が海鳴市を戦場へと変えていきます。

そして、本編が始まるための終わりが始まります……

次回は楽しみみして下さい！感想も受け付けていますので、よろしく願います！

海鳴市怪奇事件 3章 (前書き)

お待たせしました！

最近、就活やらテストやら資格試験やらで更新が遅れており、これから少し遅くなると思われまので、そのところをご了承ください。

では、続きをどうぞ！

海鳴市怪奇事件 3章

海鳴市・・・夜

楽しい時間は終わり、二人の男女は我が家に向かって歩いてた・

はやて「あ~~~~楽しかった」

上条君「そうだね」

はやて「なんや？まだ、写真のことを根にもっているのか？」

上条君「持つわ！あのなハプニングを忘れられること自体がおかしいぞ！」

はやて「あはははは。ええやんけ！当麻くんのええ思い出になったんだし」

上条君「・・・俺ははやての今後の将来が心配だよ。たしかに思い出には残るけど、もっと自分を大切にしなよ」

はやて「ええよ。私は当麻くんになら、何されても許すよ」

上条君「されるって、一体何!？」

はやて「わかっているく・せ・に」

上条君「つつ・・・頭が痛い」

純粋な少年は小悪魔的な関西少女に頭を痛めさせられるのであった・

だが、少年は少女と話すのは楽しかった。下の世界の彼は不幸の避雷針・・・及び、疫病神と呼ばれるほどの不幸な男の子だった。

しかし、今はどうだ。非現実的な事件や人物に関わっているが、彼の近くに彼を必要としてくれる人物がいる。

今の上条君には不満もなかった・・・このまま、変わらない時間が過ぎてほしい・・・だが、

上条君「ッ!」

はやて「どうしたんや。当麻くん?」

少年は歩むのをやめ、そのまま、固まってしまった

はやて「ん?前に誰かおるなあ?」

静まり返った住宅街の道に男性だろうか?とにかく誰かがそこにいる。

はやて「まあ、人の一人や二人に会っても不思議じゃないやろ?ほな、行こうか?とう・・・」

??」「がああああああ!!！」

はやて「え?何!?きゃああああ!!！」

ガーーーーーン!

はやて「え?」

上条君「こんなところまで……」

はやて「と……当麻くん?」

少年の手には手に余るような大きい拳銃が握られており、銃口から煙がでていた。

はやて「ひ……人を撃つたの?当麻君!？」

上条君「本当に人なら……ッ」

あ……あがああ……ああ……

上条君「クツ・・・はやてを巻き込んでしまっなんて」

はやて「ね・・・ねえ・・・あれって、人だよな・・・そうだよね!？」

二人の目の前にうめき声を上げながら、人の姿をした獣の群れが近づいてくるのだった。

上条君「数が多すぎる!?!どうしてこんなに・・・ハッ!」

少年は周りを見渡すと・・・家々の窓を見ると・・・

上条君「うつ」

見たモノは悲惨な光景だった。2階の窓に血の付いた惨劇があった光景だった。

上条君（まさか!?!この住人が全部!?!）

少年は戦慄を覚えた。血に飢えた獣達の正体は・・・ここに住んでいた住人達であつた!

はやて「なんや!?!これは夢!?!ねえ!?!そうだようね!?!当麻君!?!」

はやては完全にパニックに陥っていた。無理もない。この状況で冷静にいられる自分がおかしいくらいだ。



上条君「はやて！早く僕の背中に！」

はやて「え？車椅子は？」

上条君「そんなモンに乗っていたら逃げ切れないよ！」

急ぎ、はやてを背負うと、上条君は急いでその場から離れようと走り出す。

はやて「後ろ！追いかけてる！」

上条君「チツ！」

ガン！ガン！ガン！・・・カシャン・・・カン・・・カカン！

両手で拳銃を照準を固定し、連射する！弾は命中する・・・外すし  
ようがない。道一面に死徒で埋めつくされているのだから・・・弾切れ  
になるとリボルバーから空薬莖を捨てポケットの中から弾丸を取り  
出し、装填する。しかし、はやてを背負っているのでうまくい  
かない・・・

上条君「あ・・・ッ」

マグナム弾を落としてしまった。

上条君「チツ！」

仕方なく予備の弾を取り出し、装填していく

カシャン！

やっと、弾込めが終わった。後ろは相変わらず死徒が向かってくる

はやて「前！前！」

上条君「ハッ！」

上条君は立ち止まった・・・前にも後ろにも死徒・・・逃げ道を塞がれてしまった

上条君（どうすればいいんだ。はやてを守りながら、戦うにしても限界があるぞ）

はやて「い・・・いやや・・・死にたくない・・・」

上条君「大丈夫だよ。はやて。僕がいる限り、はやてを守るから」

はやて「ううう・・・」

はやては上条君にすっかり、しがみつき、絶対に離れないように上条君に掴まるのだった

上条君（だが、どうする・・・こっちの武器は礼装銃の『アレス』と『アテネ』の2挺にマグナム弾、24発の内・・・6発を撃って・・・6発を落として・・・残り12発・・・後、炸裂魔弾を6発に取って置きが3発か・・・）

上条君の残り弾数は計21発の弾に対し・・・死徒の数・・・30強・・・弾数の倍である。

しかし、うまく使えば、殲滅はできるかもしれないが・・・はやてを庇いながら戦うのは難しい・・・

上条君（腹を括るしかないか・・・）

はやて「当麻くん・・・」

上条君「はやて！しっかりと掴まって！」

少年はそのまま、真っ正面の群れに走り始めた。

上条君「うおおおおお！！」

ガン！ガン！ガン！

ガン！ガン！ガン！

空いていた右手にも礼装銃が取り出され、双銃から火が吹く

があ！ぐえ！ぎゃあ！？・・・

人と思えないような叫び声を上げながら、吹き飛ばれていき、粉塵と化して消えていった。

上条君「よし！突破！」

死徒の壁に穴が空いた・・・その瞬間を逃さない！

上条君「いくぞ！」

足に魔力と力が溜まった・・・

ドン！

はやて「わあ!?!」

はやては振り落とされそうになった。しかし、何とか持ちこたえた・・・

そして、体勢を持ち直し、周りを見ると・・・

はやて「飛んでる!?!」

上条君「もう一度、行くよ。しっかり、捕まって！」

ダン！

2階建ての家の屋根に着地するとまた、高い跳躍し、死徒を振り切った・・・

??「ほう・・・珍しい・・・あの若造、なかなか見処のある器を持つ

ているな」

使徒の中から一人だけ、理性を持った男の姿の化け物がいた。

??「ふっ・・・興味がわいた。後を追うか」

男は上条君達を追いかけようとしたが・・・

アルクエイド「あら？どこ行くつもり」

??「!」

アルクエイド「あんた、なんで生きてんのよ」

真祖の女は男を生きているのを疑いを持ちつつ、殺気を漂わせていた。

??「これはこれは、アルクエイド・ブリュンスタッド。再びお目にかかれて光栄だよ」

アルクエイド「ふん、あんたの顔なんて2度と見たくない。とつと、地獄に落ちなさい!」

アルクエイドは容赦なく、男に襲いかかる。

??「仕方ない。お前を倒して、あの若造を追うするか」

アルクエイド「調子こいてんじゃないわよ！ロア！」

そう・・・男の名はミハイル・ロア・バルダムヨオン・・・最古の死徒である。

この話では志貴に殺されているが、なぜか生きている。しかし、どうあれ、ロアが今回の怪奇の元凶であることは間違いないだろ・・・

こうして、月姫のラスボス戦の再現が今ここに始まった・・・

はやて家

上条君「はあ・・・はあ・・・はあ・・・何とか撒いたな」

はやて「私・・・生きてる」

上条君「ああ、ちゃんと生きてるよ。はやて。もう安全だから」

上条君ははやてを部屋に運んだ。はやても安心したのか。さっきまで力一杯に掴んでいた腕の力が軽くなっていた

上条君「よっこらせ。ふうっはやて、大丈夫かい？」

はやて「ええ、なんとか落ち着いたよ」

はやてをベットに下ろすと上条君も気が抜けたのか。その場で座り込んだ。

はやて「でも・・・あのゾンビみたいなのが、家に入ってこないのかな・・・心配や」

上条君「心配ないよ。この家に守護結界を張ってあるから、相手は気付くことができないし、もし、気付いても入ってくる事ができないから安心して」

余談だが、はやて家に張られている結界はA・Sの時にヴォルケンリッターの魔力を遮断し、管理局の索敵にも引つ掛らず、結界の役割をちゃんと果たしているらしい・・・

はやて「でも・・・当麻くん？君は一体なんなの？」

はやては長い間、一緒にいて、上条君の正体に気づくことはなかった。それは本人が隠していたのだから仕方ない

上条君「僕は魔術やら教会やら、色々と手を染めている少年なんだ。だけど、僕は望んでやった訳じゃないよ」

もうこうなったら、話すしかない。もうはやてを騙すことはできない。それに本人も隠し事は好きじゃない・・・

上条君「これで、話すことはすべて話したよ。さて・・・」

はやて「ッ！どこに行くんや!？」

上条君「あれを放って置くわけにはいかないからね。」

はやて「私を一人にしないで！当麻くん！行かないで！」

上条君「はやて、あれを放って置くくと被害が増えて、海鳴市がなくなるかもしれないんだ。それにいつもみたいにすぐ帰ってくるから」

はやて「ほんとに？」

上条君「約束するよ。ちゃんと帰ってくるよ。それまで待ってて・・・」

はやて「うん・・・分かった・・・だけど、気を付けてや・・・ほんで、あんまり待たせないでや」

上条君「できるだけ努力するよ」

上条君ははやての部屋から出ていきドアを閉めた・・・

はやて（どうか、当麻くんが無事で帰ってきますように・・・そして、また普通の生活に戻れますように・・・）

はやては願うのだった。上条君が無事に帰ってくることを・・・

倉庫

ガチャ！



倉庫に入ると奥に仕舞っていた大きいトランクを取り出し、開くところには服などの装備品が入っていた

上条君「今回はあの時と様子が違う、死徒のみだけではなく、その元凶も近くにいるはずだ」

上条君は私服のジャンパーを脱ぎ、予備に用意しておいた。魔術で強化した戦闘服を着用する。左右の腰には礼装銃を装備し、背中には礼装棒『七枝』の2本と黒鍵の柄を十個を装備した。

上条君「そういえば、神父達から連絡がこないな・・・こんな惨事で連絡が来ないのは不思議だな」

もとより、事件の担当者たる人間がこの事態を気づいていないわけがない。

これは何かあったということなのか。上条君を悩ませる

上条君「仕方ない。僕一人でも死徒の相手くらいできる。よし、行くぞ」

少年は玄関を出た。そのとき！

上条君「ん？」

ユーノ「あ・・・」

上条君「イタチ？オコジヨ？いや・・・誰だ？お前？」

上条君の直感なのか？もしくは予想なのか。ユーノの正体を見破っ

た。

ユーノ「あなた、僕が何者なのか。わかるんですか？」

上条君「それだけ、魔力を出していれば気が付くよ」

ユーノ「なら、元の姿に戻っても問題はなさそうですね」

目の前の小動物が人の姿に変わっていった。

上条君「人だったのか・・・てっきり、使い魔だと思った」

ユーノ「残念ながら、僕は人間です。この世界で探し物をしているんです」

上条君「・・・まさか、君もこの世界の住人じゃないってこと？」

ユーノ「はい、そうなります。」

上条君「これで二人目だよ。君を同じ状況だった奴」

ユーノ「はい？ いったい、それは誰ですか・・・」

ドーーーーーン！

「「！」「」

遠くで大きな爆発が聞こえた。聞こえた場所は死徒と遭遇した場所だった。

上条君「その話は後回しだ。力貸してくれ！」

ユーノ「え？どうしてですか？」

上条君「今、この市の住人が危険に晒されているんだ。死徒を殲滅しないと更に被害が広がるんだ」

上条君は会ったばかりのユーノに手を貸すように頼む。さすがに上条君1人で戦うのは無理があるのでサポートが欲しいようだ

ユーノ「わかりました。困っている人を放って置くわけにもいきません。お手伝いします」

上条君「ありがとう。後でお礼するよ」

ユーノ「お礼はいいですよ」

上条君「んじゃ、行きますか！」

ユーノ「はい（微かだが、ジュエルシードの気配もする・・・もしかしたら、行く場所にあるのかな）」

こうして、上条君は臨時だが、ユーノを仲間に付け、戦地に赴くだった・・・

続く・・・

海鳴市怪奇事件 3章 (後書き)

次回、ユーノの参戦により、頼もしいサポートを仲間に付けた上条君はアルクエイドとロアの戦いに介入し、死徒の殲滅を行います！

そして、音信不通の神父達は……

次回も楽しみにしてください！ご感想もお待ちしております！

行け！逝け！上条君！！下編（前書き）

こんにちは！久しぶりに投稿しました！

上条君編はそろそろ大詰め！予定では後2話くらいで終了を考えています！

そのあとは元のプリズマイリア編に戻った後、途中でいきなりですが、半年後に飛ばす予定としています。

話の矛盾や理解しがたい部分が出てきてしまうと思いますが、頑張って書きたいと思いますので応援よろしくお願いします！

では、続きどうぞ！

行け！逃げ！上条君！！下編

行け！逃げ！上条君！！下編

海鳴市 市街近く

シエル「言峰神父、急いでください。予定より遅れています」

言峰「ああ、分かっている」

上条君達が死徒に襲われている頃、言峰達は事件解決と上条の確保のため、急いで海鳴市に入った

言峰「……………どうやら、ことは思うより早く進んでようだ」

シエル「急ぎましょう……………グッ!?!」

言峰「!?!」

バシユ！バシユ！…………ドシヤ

シエルの頭部1箇所と胸部2箇所に風穴が空いた！いきなり、狙撃された。

シエルはそのまま、冷たいアスファルトの地面に倒れ込んだ。いや、即死だったというべきか

言峰「ツ・・・思ったより早かったな」

??「貴方の判断ミスです」

言峰「!!」

シュツ！バコーン！

言峰の後ろから人と思えないほどの鉄拳が襲いかかってきた。回避できたが横にあったコンクリートの塀がまるで積み木の壁のように崩れた

言峰「久しいな。バゼット・フラガ・マクレミツ」

バゼット「ええ、久方振りです。言峰神父。悪いですがここで消えてもらいます」

言峰「ふむ、お嬢さんの命令かね？」

バゼット「はい、あなたが契約を反する行為を犯し、上条当麻を奪おうとしているので・・・」

パキッポキッ・・・

バゼット「スマートに消さしていただきます」

言峰「なら、全力で相手をしよう」

とあるビルの上

??「・・・言峰・・・綺礼・・・」

黒いコートの男性がWA2000・・・スナイパーライフルのスコップを覗きながら、言峰に照準を合わせてようとしていた。

??「チツ、うまく射線にバゼットを入れてくる」

言峰は狙撃の場所を把握したのか。近接戦闘を仕掛けるバゼットの影に隠れて狙撃を封じていた。

??「あの男は気に食わない。ここで潰しておきたい・・・ん？さつき、倒したシスターがいない」

男は言峰に気を取られていて、倒したシエルのごとは忘れていた。気づいた時にはシエルの遺体はなかった。

シエル「さつきはありがとうございました。おかげで一度死にましたよ？」



??」・・・・・・・・」

男は黙って、立ち上がりシエルを見ながらタバコを吸う。

シエル「かの有名な魔術師殺しに出会えて、光栄ですよ。魔術師殺しの衛宮切嗣さん」

切嗣「ふうふう、まさか、頭と心臓を撃ち抜かれて死なないなんて、初めてだよ。君みたいな例は」

タバコを吸いながら、感想を述べる切嗣、経験で撃たれて死なない人間なんて見たことがない。

シエル「それで、一応聞きますけど、あなたはなんで私を殺したんですか？」

切嗣「それは仕事だからさ」

シエル「それだけですか？」

切嗣「・・・・・・・・」

シエル「わかりました。これ以上話しても無駄と言うことですね」

切嗣が無言になることは話すことがないと悟ったシエルは黒鍵を構える。

切嗣（・・・使わないといけないな）

シエル「やー！ー！！」

黒鍵を投擲する！しかし、

切嗣「固有時制御・・・2倍速！」

詠唱を唱えた瞬間、切嗣が途轍もない速度で黒鍵を回避し、シエルの背後を取ると

ガチャ・・・ダダダダダダダ！

コートの中から短機関銃キャリコM950が取り出され、反撃を開始する。

シエル「ッ」

シエルは急いで物陰に隠れて難を回避する。

切嗣「・・・・・・・・」

ダッ！

切嗣はある程度、射撃するとビルの中に消えていた。

シエル「逃げた・・・いや、誘っているわね。このまま逃すと後々、

危険ね。」

シエルは畏だとしておきながら、切嗣を追う。

しかし、中に入ろうとした瞬間！

ピン！

シエル「な！？」

ドカーーーーーー！

入口に仕掛けてあったクレイモア爆弾が炸裂した！無数の鉄球がシエルを切り刻む！

切嗣（やったか）

シエル「い……たいわね。女の子に爆弾を使うなんてどんな神経してんの」

切嗣（……不死か？爆弾で吹き飛ばされても元に戻るのか）

切嗣は改めてシエルの再生能力を確認した。今戦って相手を雑魚ではなく強敵と改めた

切嗣（仕方ないね。建<sup>ビル</sup>物を使う準備をしておくか）

シエル「たく、噂通りひどい戦い方ね！こうなったら、トコトン付き合ってやるうじゃないの！」

ダダダダダダダ！

シエル「ッ！」

光の弾がシエルに向かってくる。しかし当たらない

シエル「そこね！待ってなさい！」

切嗣（乗ってきた）

カチッ！

シエル「ちょっ！？また・・・」

ドーーーーー

切嗣が逃げ込んだビルはもはやトラップハウスだった。シエルが動くたびに次から次へと罠が発動していく・・・



天井のガレキはシエルに降り注ぐ・・・案の定、シスターは埋まっ  
た・・・

ガラ・・・

シエル「ぶはー！ぜつつつたいに捕まえて、神の前でいや、  
私の前でひり伏せさせて、生きていることを後悔させてやるー！  
ーっ！」

今まで猫の皮を被っていたシスターの本性？を現し、どこぞの山姥  
のように逃げる獲物を追うように建物内を徘徊する。

罾を仕掛けて逃げ回っている切嗣はビルの管理室の監視カメラで様  
子を見ていた。

切嗣（・・・自滅してくれるなら世話ないな）

シエルが堪忍袋がはじけた瞬間、暴走するシスターは罾という罾に  
ハマりながら切嗣を探す。

しかし、当本人は、ビル内から退避しており、シエルはビルの中で  
一人相撲をやらされるのだった・・・

その後、そのビルは使い物にならないほど、ぼろぼろな廃墟になり、  
新しく建て直したそう・・・

戻って、住宅地・・・

ロア「どうした。どうした！？アルクエイド、おまえはそんなもんじゃないだろ！」

アルクエイド「ッ」（なに！？此奴の魔力、こんなに高いなんて）

真祖と死徒の戦いでは、アルクエイドが苦戦をしいられていた。思っていた以上のロアの力が強く、徐々に押されていた。

アルクエイド（やば、このままだと・・・流れる的に私って死ぬ（デット）よね！？）

軽く自分の死が近いのではないかと少し心配する余裕のあるアルクエイドさん。たしかにこのまま続けば、死は近いかも・・・

ロア「あの時の力はどうした！？俺を殺したお前はどこ行った！？」

吠える死徒、憎しみを込めた言葉と共にかなりの魔力の放電魔術が真祖の姫を襲う。

アルクエイドも爪で応戦するが、手間で防御結界にはまばれてしまいい。攻撃が通らない。

アルクエイド（ああ~~~~もう！こんな時だけに硬いだから）

伊達に月姫のラスボスではない。使う魔法はすべて上級、もちろん結果も例外ではない。

ロア「貴様が本気を出さないのなら」

死徒の手に刃先の長い包丁が取り出され、アルクエイドに切りつけてくる。

アルクエイド「あつぶないわね。志貴の真似事はやめなさいよ」

ロアには直死の魔眼と似た能力を持っている。物の死線は見えないが生き物の死線はハッキリと見えて、死点も見える。

さすがにアルクエイドも死線か死点をつかれれば間違デットいなく死である。

ロア「いつまで逃げるつもりだ。やれ！」

ロアが指示すると周りにいた。死徒がアルクエイドに目掛けて襲いかかる。

アルクエイド「邪魔よ！クソ、離しなさいよ！この！！」

死徒群れは予想以上に多く、さすがに対処しきれず、死徒達におさえつけらされてしまった。

ロア「つまらん。本気を出さない貴様の相手は飽きた。とつとと死ね」

アルクエイド「ッ」



アルクエイド、絶体絶命！しかし・・・

バシユツ！

ロア「な！？」

ロアの背中から黒鍵刺さり・・・黒鍵が爆ぜた！

ロア「ぐあああああああ」

叫びはすぐに消え、その場にはミンチになったロアの肉片が残った

そして、近くの民家の屋根に二人の少年がいた

上条君「よっしゃー！命中！」

ユーノ「危なかったね。もう少しであの女性が殺されるとだった」

上条君「いや、あの人はそう簡単に死なないよ」

ユーノ「え？どうして？」

上条君「う〜〜〜ん、まあ・・・あれだ。色々とはっちゃけているから」

ユーノ「理由になってないよ」

アルクエイド「あの子か。隣の子は誰だかわからないけど、助かったわ。だけど志貴じゃなかったのは少し残念」

少し残念がるアルクエイドさん。その頃、遠野志貴、ご本人は・・・

志貴「くっそおー！ー！なんなんだ。この死徒の量は！？」

月姫主人公はアルクエイドの搜索中に死徒の群れと遭遇してしまい、相手に手間取っていた。

志貴「だあああああ！邪魔だ！この先にアルクエイドがいるはずなのに邪魔すんな！」

現場に到着するのはかなり先になりそうだった・・・

もとに戻って

上条君「そんなこんなで、手を借りることもなかったな〜なんか

悪いね」

ユーノ「いいですよ。僕はここに来て日が浅いですから、道を覚えるのに役立ちました。」

上条君「そう……んじゃ。僕は帰ろっかな。はやてを待たせているし……ッ!？」

アルクエイド「やっぱり、そう簡単に行ってくれないようね」

少年達と真祖は飛び散って形を留めていない肉の塊を見た。

ユーノ「あ!あれは!」

ユーノは気づいた。肉の塊に異様に光る宝石らしきものとその魔力を

ユーノ「ジュエルシード!あれが原因か」

上条君「ジュエルシード?なにそれ?」

ユーノ「僕が探している石です。まさかこんなところにあるなんて」

上条君「……あれ、回収すんの?」

ユーノ「もちろんです」

上条君「わかった。無理やり手伝ってもらったんだから、力になるよ」

ユーノ「ありがとう」

2人が会話しているうちに肉の塊が元の姿に戻っていた。ロアは屋根にいた二人を睨む付ける

ロア「貴様、よくも吹き飛ばしてくれたな」

上条君「お前に殺された人達の苦しみの一つだ！これから、ドンドン食らわしてやるから覚悟しろ！」

ユーノ「ついでに貴方がもっているジュエルシールドをいただきます」

ロア「いい気になるなよ。ガキどもがーーーーッ!!」

アルクエイド「ちょっと、色物キャラのアンタはさっきのでおしまいついていのがお約束でしょ！さっさと退場しなさい！」

ロア「色物だあ！？俺が色物キャラだと！？調子こくな。出番がないヒロインが！」

アルクエイド「なっ・・・言ったわね！志貴が居なくてもアンタを殺してやるわ！覚悟しろ！色物！」

ロア「俺は色物じゃねえーーーー！！！」

真祖と死徒の戦いが再び開始された！そして、二人も・・・

上条君「ユーノ、僕たちもいくぞ！」

ユーノ「うん、え〜〜と、名前聞いてなかったね」

上条君「名前は教えるなど言われているから、疫病神とでも言ってくれ」

ユーノ「疫病神って・・・」

上条君はもう自分の名前に関する情報操作がめんどくさくなったのか。元の世界でよく呼ばれていた疫病神と呼ぶように答える。

本人はと言われようが抵抗はない。現に認めてしまっているのだから

上条君「んじゃ、いくぞ！」

上条君は勢いよく屋根から飛びおり、アルクエイドの支援に入っていた。

ユーノ「あなたは疫病神ではありません。本当なら僕が疫病神といわれてもおかしくない人間なのに」

ユーノは接近戦が苦手なので、屋根から援護魔法を発動するのであった。その時の心中はかなり悔やんでいた。

この惨事を引き起こしている怪物を作り出してしまったのが、自分のせいだと・・・

続  
く  
・  
・  
・

行け！逝け！上条君！！下編（後書き）

ロアの復活原因はジュエルシード！さて、3人はどうやってロアを倒すか・・・それは次回のおたのしみで

では次回も楽しみにしてください！

## 最後の夜？（前書き）

ひさしぶりです！

いや〜〜〜忙しくて更新が遅れてしまいました。

Strikerの方もこちらが進まないと書けない状態になってしまい、そのため、当分こちらのみの更新になると思いますのでよろしく願います。



## 最後の夜？

激戦地（住宅地）

いきなりだが、ラスボス戦が開始された。ロア含め死徒、数十体に  
対し、上条君と真祖のアルクエイドと異世界の魔導士のユーノ、3  
人の戦闘が開始された

上条君「うわ！？危な・・・グッ」

アルクエイド「無理なら早く帰りなさい。坊や」

上条君「む・・・無理じゃないさ。今は効いたけど・・・」

ロア「ちょこまかとうるさいガキが、いい加減黙りやがれ」

上条君に放電魔術の一部が直撃したが、なんとか体勢を立て直し、  
ネロの次段の攻撃を躲し続ける。

アルクエイドは上条君が困になっているうちにロアにダメージを負  
わせるが、相手は急速に回復するので意味がなかった。

があああああ！

アルクエイド「ッ！」

死徒の群れがアルクエイドの背後を取り襲いかかってきた。だが、

ユーノ「二人の邪魔はさせない！」

ユーノが援護に入り、結界で死徒の突進をせき止める。

そしてすぐに体勢を立て直したアルクエイドの鋭爪により、死徒のむれはバラバラに刻み込まれてた。

アルクエイド「ありがとう」

ユーノ「はい」

ロア「ええい、さっきまで逃げていたガキが調子に乗りやがって」

上条君「ふん。人の大切なものを手をだしたのが運の尽きだよ。さつさと消える。死徒！こっちは人を待たせてんだよ！」

バキーン

ロア「なっ!?!」

上条君は右手の手袋を脱ぎ捨てるとそのまま、ロアに突き出す。右手に握られた瞬間、ロアの片腕が消滅した。とっさの出来事にすぐに距離を開ける。

アルクエイド「まだまだ、私がいるわよ！」

ザシュツ！

ロア「ぐあああああ！」

頭上から真祖の鋭爪がロアを引き裂き砕く！一瞬にして、ロアは肉の塊になった。

しかし！飛び散った血が刃となり、上条君とアルクエイドに襲いかかる。

上条君はアルクエイドを庇うと右手で血の刃を消し去った。そして、少しの時間でロアは元の原型に戻った。

ロア「小僧、やはり、その右手に細工があるのか」

上条君「生まれつきだよ」

ロア「ほお、貴様の体質のようなものか。厄介だ」

上条君「お前はこの右手が弱点か。なんだか知らないけど、僕でもお前を倒せるってことか！」

ロア「はん！調子に乗るなよ。小僧が！」

アルクエイド「調子こいているのは、あんただよ。ロア」

ロア「なんだと」

アルクエイド「あんたがその子に気を取られている内に、あんたの手下。潰しといたわよ」

ロア「なっ!?!」

周りを見るとさっきまで30強もいた死徒が全員、消滅していた。

アルクエイド「これで残りはあんただけよ」

ロア「ッ」

ロアは急いで撤退しようとしたが、転移魔術が使えない

ユーノ「無駄です。ここから出す訳にはいきません」

支援に入っているユーノが結界を展開し、離脱されないようにした。これによりロアは離脱不能になった

アルクエイド「今度こそ年貢の納時ね?色物ロア?」

上条君「そうそう、人様に迷惑かけんな!色物吸血鬼!」

ロア「俺は色物じゃねー!」

ユーノの結界の中でロアは大規模魔法をまき散らす。周りの家々が吹き飛んでいく。

ユーノ「2人とも、早くこっちに！」

足元に円状の魔方陣が展開し、二人を呼ぶ。

ユーノ「防ぎます！」

嵐のような放電魔術がユーノたちを襲う。しかし、ドーム状の結界がすべての魔術を防ぐ。

アルクエイド「やるじゃない」

上条君「すげっ」

2人は驚くしかできなかった。防ぎようがない魔術を1人で防いでいるのだ。

ロア「小賢しいガキが」

魔術の出力を上げ、魔力を収束させた雷の槍が結界に少しずつヒビが入れ始めた。

ユーノ「ッ」

上条君「ユーノ、下がれ！」

ユーノ「え!？」

上条君「打ちーーーー消せーーーーーッ!」

バキーーーーン!!バキバキーーーーー!!

結界が崩壊した瞬間、上条君に雷の槍が降り注ぐ。

雷は上条君の右手に吸い込まれていくように打ち消していく・・・

上条君「痛ッ」

ユ一ノ「だ・・・大丈夫かい？」

上条君「な・・・なんとか」

防ぎきつたが・・・右手から血がポタポタと流れる。幼い少年の右手ではすべてを防ぎきれなかった。

上条君「ッ!」

ユ一ノ「み・・・右手が!」

上条君「ちょ・・・ちょっと、次は魔術を受け止めるのは無理かも」

ユ一ノ「手を出してください。治癒魔法を使います。あ・・・あれ?魔法が効かない!？」

上条君「わるいね。そういうのは受け付けないんだ。僕の体質は」

ポケット中からハンカチを取り出すと右手に巻き、応急処置を施し

た。だが、ハンカチはすぐに赤く染まってしまった。この状態だと幻想殺しは使えそうにもなかった。

アルクエイド「もういいわよ、帰りなさい。あとは私でやるから」

上条君「帰れって、この状況で……」

ユーノ「ははは……無理だね」

2人の目線の先には……

ロア「貴様ら逃がさねえ。アルクエイド諸共、消し潰してくれる」

ブチギレた死徒が手に魔力を放出しながら3人に近づいてくる。それをみて少年たちは苦笑する。

上条君「乗りかかった船に途中では降ろしてくれなそうですよ？それに……」

ユーノ「このまま、あの人を逃すと被害が広がります」

アルクエイド「……好きにきなさい」

真祖はそのまま怪物に向かって突っ込んでいき、再び交戦が始まった。

残された少年たちはお互いの傷の応急処置を申し合う

上条君「このままだと消耗戦で不利だよ。何かないかい。ユーノ？」

ユーノ「うーん、あの人の中にジュエルシードがあつて、延々と魔力を供給しているから、一気に倒さないとすぐに復活してしまう……なら」

マントの中から何かを探しはじめ、何か取り出した。

上条君「うん？なにそれ？」

ユーノ「これであの人とジュエルシードを封印します。」

ユーノの手に赤く丸い宝石らしいモノが取り出された。

上条君「それであれを封印？できんの？」

ユーノ「わかりません。だけど試す価値はあると思います。これであの人を封印してみせます」

上条君「………わかった。それで？僕は何すればいいんだ？」

ユーノ「準備が出来るまで、アルクエイドさんと一緒に注意を引きつけてください」

上条君「OK 任せてくれ」

ユーノ「はい、10分以内に終わらせますので、それまで持ちこたえてください！」

上条君「おう！死なない程度に頑張るよ！」



そして、ユーノは人からフェレットに変わるとその場を離れた。

上条君「さて、あともうひと踏ん張り！待ってる、はやて！すぐにもどるから」

少年は戦いに戻る。大切の人を守るため、この戦いを終わらせるために………

はやて家

その頃、はやてはベッドの上で上条君の帰りを寝ずに待っていた。夜の空には大きな満月が外を明るく照らし、先ほどの戦慄を覚えるような惨事がなかったような時間が過ぎていく

はやて「……………いいのかな。私……………いつも上条君を待つだけで……………」

はやては悩んでいた。このまま待てば、上条君は帰ってくるだろう。……いつものように愛想笑いをしながら……………しかし、今日に限って上条君が無事に帰ってくるなんてわからない。下手をすれば永遠に帰ってこないかもしれない。幼い少女の心にまた大切なものを失うという絶望感が再び蘇りかけていた。

はやて「いやや、また大切なものを失いたくない……………迎えに行く？ダメや！私が行っても足でまといになるだけや。でも……………」

それでいいのか？このまま彼を待っていいのか？いつまで自分に甘えて彼が帰ってくるのを期待してていいのか？

襲いかかる不安……もしかすると数分前のことで今生の別れになるかもしれない……すなわち、少年の……死

はやて「ダメ！ダメや！そんなことを考えてはアカン！絶対……絶対帰ってきてくれる！だから私は待つんや！……ん？」

部屋の床に白く猫やウサギの様な謎の小動物が月の光に照らされながら、はやてを見ていた。

「君はこのままでいいの？」

はやて「え？しゃべった……」

啞然となるはやて。小動物が人語ではやてに問いかけてきたのだから仕方ない

「君はこのままで本当にいいのかい？このまま少年を待ち続けて、帰ってくる保証はあるのかい？」

はやて「うるさい。上条君は必ず帰ってくると約束したんや。私はこのまま待つ。どう言われようと約束は守るで」

「これを見ても？」

猫やウサギの様な謎の小動物の赤い双眼から明るい光が壁を照らす。

まるで映画館のスクリーンのように映像が浮かび上がってきた。

はやて「あっ！上条君!？」

映し出されたのは、今戦っている少年の様子だった。何度も何度も人のカタチをした怪物に銃や剣のようなモノで攻撃するがすぐに回復され、なぎ払われる……。しかし、すぐに立て直し次の攻撃に映る……。これが何度繰り返される。

「見てのとおり、少年は苦戦している。もう一度聞くけど君はこのままでいいのかい？」

はやて「……………あっ!？上条君!？」

タイミング悪く、上条君が怪物の電撃に直撃し、吹き飛ばされる。音声はないが少年の顔には痛々しい表情で悶え苦しむ。しかし、すぐに立ち上がり、戦線に復帰する。

はやて「上条……君……」

(ふふふ……もう少しかな)

はやての不安がだんだん限界に近づいていく。ただでさえ不安なのに、見ている中継を見ただけで我慢が耐えられなくなる。

??「このままでは、君とあの子は永遠にお別れだね」

はやて「なっ!？何を言ってるんや！よく見てみ！上条君はまだピンピンしてるやんけ!」

??「あつ！大魔術を受け止めた」

はやて「！！ 上条君！」

雷の槍を防ぎきったが彼の手は血だらけ・・・腕の方も魔術であちらこちらに傷ができ、鮮血が地面に流れ落ちていた

??「このままだと、あの子は殺されるね。だってまだあの子は戦う気力が残っていない。死ぬまで戦うだろうね」

はやて（やめて・・・もうやめてや・・・上条君・・・本当に死んでしまうや）

上条君は傷つくにつれ、はやての心も限界に近づいていく。その様子を白い小動物は逃さなかった。

「もし、君がその場にいたら、彼はこれ以上傷つかずに済むかもね」

はやて「なにを言ってるんや！私は足が動かないよ。もし行けても空を飛ぶみたいなきことをしなくちゃ、間に合うわけないでしょ！」

「もし、足が動かせたり、鳥のようにそらを飛べるとしたら？」

はやて「な・・・なにが言いたいんや？」

「君が望むのなら、好きな願いを1つ叶えてあげるよ」

はやて「はあ!？」

「だから、君の願い事を1つ叶えてあげるって言っているだよ」

はやて「願うごと？なんや、それは主にどういうことや！？」

「簡単だよ。例えば、あの子を助けたいという願いがあれば、幸せになりたいって願いも考えられるよ？」

はやて「……………それで？もし願いを叶えてくれたら、見返りはなんなの？」

「鋭いね……………仕方ない。僕が見返りにやってほしいことは……………」

はやて「やって欲しいことは？」

「僕と契約して魔法少女になつてよ！」

はやて「！？」

はやては驚いている、いや混乱している。小動物はいきなり現れて何を言い出すと思えば、意味不明、理解不能の見返りを要求してきたのだ。さすがのはやても突っ込むことができなかつた。

「君には素質はある。だから魔法少女になれば、好きなことができるよ！歩けたり、飛んだり、魔法を使って遊ぶことも、デメリットはないと思うよ？どうだい？君には今、僕が必要だと思うんけど？」

はやて「……………」

「もちろん、魔法少女になれば、僕が使った魔法も使えるし、君が失ったモノを元に戻せるかもしれないよ？」

はやて「ッ」

失ったもの……失ってしまった家族……幸せで懐かしい生活……それがこんなふざけたことで取り戻せる……こんな夢みたいなこと、この世にあつていいものなのか……

「さあ、答えを聞こうか？君は願い事するかい？するよね。こんな奇跡、2度はないんだから」

はやて「……………」

「あれ？どうしたの？」

はやては無言でクローゼットの中から車椅子を取り出し、おぼつかない動きで車椅子に座った。

「どこに行くんだい？まだ、僕の話が……」

はやて「決まってるよ。契約はしないで」

もうはやての目には小動物の姿は入っていない。むしろ、背を向けている

小動物は冷静に、はやてに理由を聞く

「どうしてだい？」

はやて「そんな都合のいい話・・・受け入れられるわけないよ。もし魔法なんてモノがあれば、使ってみたい・・・だけど、使ってしまうと私が私でなくなってしまう気がするんよ」

「君はなんでも願いが叶う奇跡があっても、何も願い事をしないのかい？」

はやて「ない・・・って、言うのは嘘になるけどな。これ以上欲張るとばちが当たりそうなんや」

「ん？そうになると君はもう願い事は叶っているのかい？」

少女はクスリと笑い、車椅子を操作し小動物と向き合う。そのときはやての顔は清々しい笑顔だった。

はやて「うん！だから迎えに行くんや。私の願い事を叶えてくれた上条君を迎えに！」

今さっきの落ち込んでいた少女の面影なく。幸せでいっぱいな少女の姿が目の前にいた。

小動物の誤算だった。追いつめれば、間違いなく彼女は話に乗ってきただろうと思っていた考えがアダとなり、逆に彼女に勇気を与えてしまった。

はやて「せっかくの話だけど、私はいらへん。だって、私が臨んだモノが来てくれたんだから」

そして、はやては部屋の扉を開き、少年がいる外の世界へと飛び出していった。

その様子を謎の小動物は見守りつつ、残念そうに息を漏らす

「残念だね。彼女には本当に素質があっただけど、願い事がなければ仕方ない……。さて、違う街に行つてまた新しい魔法少女を探すかな」

その場にいたモノがいきなり消えた。小動物の姿はなく。夜の静けさがその場を支配していくのだった……

続く……



最後の夜？（後書き）

うゝゝゝん、わかると思う人はわかると思いますがね。猫やウサギの様な謎の小動物……。もちろんあれです。違う魔法少女のあれです！

さて、上条君とユーノの作戦はうまくいくのか？

次回に期待してください！それでは、今回はここで失礼します！

## 最後の夜？

最後の夜？

商店街

上条君達が死闘を繰り返している頃、魔術師たちの戦いは激しくそして、過激になっていた・・・

言峰「クツ・・・さすがは封印指定執行者は伊達ではないな」

バゼット「ツ！・・・代行者としての腕は衰えていませんね」

格闘家達の戦いはヒートアップしていく一方だった。周囲には何十本もの黒鍵が地面に刺さり、店のガラスケースのガラスがバラバラに散らばり、コンクリートの壁も道に所々砕かれ、今さっきまでの戦いの激しさがものがついていた。

バゼットの鉄拳が嵐のように言峰に襲いかかるが、言峰はそれを受け流しながら。しかし、流すので精一杯でなかなかカウンターをする暇を与えてくれなかった。

言峰「！！」

シュン！

言峰の頬に何かがかすめた。正体はライフル弾！

シエルを撒いた切嗣が言峰を仕留めと再び狙撃を開始したのだ。

言峰（シスターが敗れたか・・・）

初弾には気づけなかったが、次弾からは確実に回避していく。

切嗣「チツ・・・さすがに2回も空きはくれないか」

本人もさすがに狙撃を続けても意味がないと悟った。

切嗣「なら、仕方ない。商店街に仕掛けた爆弾を使って生き埋めに・・・ん？」

望遠スコープを覗きながら、何かの無線スイッチを取り出す。

しかし、スイッチをオンにしようとした瞬間、あるモノが目に見えた！

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

バゼット「いやあああああ！！」

言峰「フン！！」

??「そこまでーーーーっ!」

「!」

怒鳴り声に似た男の子が戦闘を止めた・・・バゼットと言峰は互い間合いをあける。

切嗣「おやおや、大師父様のおでした」

その場に現れたのはゼルレッチだった。その後ろにはお共に付いてきた女性、ユリカがいた

ゼルレッチ「お主ら、一体ここで何をしておる」

バゼット「き・・・キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ!」

言峰「なぜ、死徒二十七祖がここに」

いきなり現れた乱入者に、代行者と執行者は驚く。表世界に出てくるかどうかわからない賢者もしくは化け物であるので仕方ない。

ゼルレッチ「わしが何処いようと関係ない。ところで上条はどこだ?代行者よ」

言峰「さて、あ奴がどこにいるか。私もわからんがね」

ゼルレッチ「そうか・・・それで?なぜ、わしの前に立ちはだかる

「？」

言峰「そうですね。我々の敵たる死徒が目の前にいるということは・・・どういうことか。お分かりになるはずだが？」

黒鍵を構える言峰、代行者としての役目を果たすつもりなのか。ゼルレッチにエモノを向ける。

エリカ「大師父、ここは私が」

ゼルレッチ「いや、よい」

エリカ「!？」

お供のエリカがゼルレッチを護衛しようとする前に出ようとしたが、手で遮り静止させた。

言峰「では、ご老体・・・」  
「ご覚悟を」

バゼット「やらせると・・・」

ゼルレッチ「小娘、下がっておれ」

バゼット「・・・」

バゼットもゼルレッチを守るうとするが、止められる。

言峰「正気かね？自らの守りを捨てるとは」

ゼルレッチ「わっはっはっはっは！若造に心配させられるとは、わしも

落ちたものだの」

老人の笑い声が商店街内に響きわたる。その表情はそこらのじいさんとかわからなかったが・・・それと裏腹のものすごい覇気が代行者にプレッシャーをかける。

言峰「ッ！」

プレッシャーに負けず、死徒二十七祖の4番目の化け物に向けて、突進を掛ける・・・だが、それが言峰の大きなミスだった。

ゼルレッチ「だが・・・残念ながら、わしは遊んでいる暇がないのでな。お主は違う世界にでも、遊んでくるがよい！」

言峰「む！？」

ゼンレッチの少し前に魔法陣が現れる。そこに言峰が完全に入ってしまった。

ゼルレッチ「わしからのサービスだ。存分に楽しんでくるがよい！」

魔法陣が現れ、地面に亜空間への入口が開く。ワームホールでも言うべきか。魔法陣内にいる言峰を吸い込んでいく。

言峰「ぬおおおおお！？」

一瞬の出来事だった・・・消えた・・・この世界から・・・言峰綺礼という人物は消えた・・・どこぞの時空の彼方へと・・・

ゼルレッチ「さて、上条よ。どこにおるのだ？」

バゼット「あの神父・・・災難ですね」

エリカ「ええ・・・せめて、冥福を祈りましょう」

ゼルレッチは何もなかったように上条を心配して、女性2人は言峰が違う世界でも幸せに暮らせるように手を合わせるのであった・・・

切嗣「ふう〜、呆気ない終わり方だな。言峰」

ビルの上でタバコを蒸す。切嗣・・・彼も縁はないが、吹き飛ばされた神父の冥福を少し祈るだった・・・

670

住宅地

その頃、上条くん達は攻防入り乱れる戦闘が続いていた。

上条君「はあ！」

ロア「東洋の武術か・・・年に似合わず、難しい武道ができるのか」

上条君は攻勢にでて、ロアに八極をぶつけていく。元々、単体で戦う武道のため、技のキレがよく、ロアをドンドンをしていく。

ロア「だが、まだまだ未熟だ！」

上条君「!?!」

剽を打ち込もうとしたが簡単に弾かれてしまい、空きができってしまう。ロアの手には鋭利のナイフが握られており、上条君の死線に向けて、ナイフを振る。

アルクエイド「あらよつと！」

ロア「なっ!?!」

アルクエイド「あゝゝ危なかったね」

上条君「た・・助かりました」

間一髪の所をアルクエイドが上条君の襟元を掴み、ロアから引き離し、即死の攻撃から難を逃れたが・・・

上条君「痛! いたたた! あ・・アルクエイドさん! ぶつかってます! 色んなものが体に! ! ! ツ!」

アルクエイド「あら、ごめんねゝゝ、必死になってて周りのことを忘れてたわ」

上条君「あたたた・・・樹にぶつかるわ。電柱にぶつかるわ。勘弁してくれ」

代わりに周りモノにぶつかるという悲惨事態があつ。だが、死ぬよ



りはまだマシだった。

上条君（ユーノまだか・・・もう5分は立つぞ）

上条君は別行動を取っているユーノのことを考えていた。陽動で時間稼ぎをしているがそろそろ体力の限界が近づいてきており、正直限界だった。

上条君（ユーノ・・・早く、これじゃ全滅だよ・・・）

声には出さないが心の中で弱音を吐く上条君、それはそうだ。接近戦で何度殺されかけて、ひどい目にあつたことか・・・そのため、戦法を変えて遠距離攻撃に切り替えようと腰にぶら下がっている大口径の双拳銃を取り出し、残弾数はもう数えるくらいしかなく。『マグナム弾9発』と『とっておきの3発』しか残っていない。

ロアに一撃離脱を仕掛けて、全弾を打ち込んで相手に一度だけ致命傷を与えることができるが、ホントに一度だけ・・・すぐに回復されてしまうため意味もない。

さすがに今の状況でジュエルシードを回収するのは無理！

だから、上条君ができることはユーノを待つことのみ・・・

アルクエイド「いや・・・そろそろまずいわね・・・」

上条君「あら？真祖でも疲れモノは疲れるんですか？」

アルクエイド「そりゃ、そうよ！私はこう見えてもか弱い乙女なのよ？」

上条君「か……か弱い？」

アルクエイド「あら？なにその疑問形は？」

上条君「いえ！なんでもありません！」

引っ掛かる言葉にツツコミを入れてしまうと直感的に危険を察知した。そのため、ツツコミをするのは避けた。

ロア「はん！貴様らに俺は倒せん。何度もやってもな。あははははは！」

上条君「ん？アルクエイドさん、何か色物が吠えているよ」

アルクエイド「放っておけば？無駄に突っかかると無駄に疲れんだから」

上条君「いや〜〜でも、あれを倒さないはこの戦い終わりm」

ユーノ（待たせしました！準備ができました。二人であの人の動きを封じてください！）

「「！！」」

二人の頭の中にユーノの声が響いてきた瞬間、次の行動を決めた。

ロア「何をほざいている貴様ら……ん？一人足りな……」

上条君「！！・・・アルクエイドさん！」

アルクエイド「りよ〜〜かい」

2人は一気にロアに接近し二人で羽交い締めする。アルクエイドが左を上条君が右をガツチリを封じ込める

ロア「なっ！？貴様らーーーーっ！！！」

上条君「魔術は使わせない！」

ロア「なにーーーー！？なぜだーーーーなぜ魔力がたまらない！？」

羽交い締めしながら、負傷した右手をロアの体に接触させ、ロアの体内の魔力を根こそぎ、消滅させる。これにより魔術を行使しようとしても魔力が供給されないため、魔術が使えない

アルクエイド「ん？これは好都合ね。オラオラオラーーーー！！！」

ロア「ぬおおおおおおお！？ギブギブブーーーー！！！」

アルクエイドの怪物じみた力でロアの左肩をドンドン締めていく？いや、あれは関節を折っている？

上条君「今だーーーー！！！！ユーーーーノーーーー！！！」

ユーノ「……………光なれ……許されざる者を封印の輪に！」

詠唱を唱え終わったユーノがロアの頭上から降ってきた！手には赤い宝石のようなモノを中心とした魔方陣を展開していた！

ユーノ「ジュエルシード！封印！ハア……………！！！」

ロア「なめんな……………！！！」

ガキン！

ユーノ「チツ……………」

上条君「嘘だろ！？右手で魔力を打ち消しているのに……………ユーノ！！！」

ユーノ「ダメだ。突破できない！」

ロア「……………（ニヤッ）」

バチン！

ユーノ「うあああああああああ」

上条君「ユーノ！」

ロア「馬鹿め！そんな力で俺を封じ込めることは！」

上条君「ぐお！？」

ユーノは結界に弾かれ、上条君は蹴りで吹き飛ばされ、コンクリートの塀に激突する！アルクエイドは自己判断でロアから離れ、上条君達と合流した。

アルクエイド「大丈夫？二人とも」

ユーノ「ううう……ごめんなさい。失敗してしまいました。」

上条君「イタタタ……ドンマイ、ドンマイ………だけど……」

上条君とユーノの顔が優れない。

アルクエイド「どうしたの？もしかして、さっきのでネタ切れ？」

2人「……………」

二人は無言でお互い俯く………さっきので決めるはずだったが失敗してしまえば仕方ない

アルクエイド「はあ……なら下がってなさい」

上条君「あれ？あ……アルクエイドさん？」

周りの空気がいきなり変わった……上条君の目の前に立つ真祖の雰囲気がいきなり変わった。目の前にいるロアより……深く暗い殺気……

上条君「!!(ゾクッ!)」

ユーノ「な……なに!?この魔力?」

ロア「アルクエイド……貴様まさか……空想具現化を使うつもりか!?!」

アルクエイド「初めからこうすればよかった……とつとつと死になさい……ロア」

アルクエイドの目の前にミニチュアサイズのガラスケースのようなものが現れ、その中に目の前と同じ格好したロアが映し出されていた。

上条君「待った!待った!大技使っても死なないだよ!?あいつの中のモノを取り出さないとおわ」……

アルクエイド「だから……だから……その後は」

上条君「ん?……!!そっか!」

上条君はアルクエイドが考えている作戦に気づき、ユーノの肩を掴み、顔を寄せた。

ユーノ「どうするんだい？」

上条君「ユーノ！もう一回、ロアにさっきのできるかい？」

ユーノ「え？・・・うん。でも接近して叩き込まないと・・・」

上条君「・・・それって、お前にしか扱えないのか？」

ユーノ「え？いや、僕でもうまく扱えていないから、叩き込むくらいしか・・・」

上条君「なら、僕でも使おうと思えば使えるんだな？」

ユーノ「は・・・はい！」

上条君「よし！なら、ユーノがやろうとしたことを僕がする！」

ユーノ「だ・・・大丈夫ですか!？」

上条君「任せろって！これでも魔力は温存してあるし、一撃で終わらすことくらい・・・ッ」

体から今まで受けたダメージが今になって襲いかかる。さっきまで痛みを無視することは出来ていたが、血だらけの右手を見た瞬間に体中の傷が痛み始めたのだ。

ユーノ「無理しないでください。僕が待たせてしまっていないケ

ガを・・・」

上条君「いいから、教えてくれ。お前が持っている。その道具の使い方を」

ユート「・・・わかりました」

アルクエイド「これで・・・おしまい!!」

ザシュツ!

ミニチュアのロアが碎けた。その瞬間、本物のロアも碎け、再び肉片と血の水溜まりとなった・・・

アルクエイド「はあ・・・はあ・・・」



真祖の体力は尽きかけていた。これが現状で最後の攻撃になることを悟っていたのか。その場で座り込んでしまった。

アルクエイド「あとは頼むわよ」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ユーノは手に握りしめていた赤い宝石を上条君の左手に置いた。

ドクン！

上条君「……………(？)……………お前……手伝ってくれるのか？」

RH「……………」

ユーノ「いいですか？それはレイジングハートといって、僕が持ってきたインテリジェントデバイスです。契約する必要がありますので僕と同じ詠唱を唱え……」

上条君「ユーノ……これって、形を変えることができるのか？」

ユーノ「え？まあ、使用者に合わせた形にかえることが……」

上条君「それなら大丈夫だ！」

ユーノ「僕の説明をちゃんと聞いてください！」

上条君「大丈夫！ユーノが言っていた。あの詠唱を真似すればいい  
だろ？」

ユーノ「ま……まあ……って！ちよつと待って！」

ユーノの話を聞かず上条君は立ち上がり走り始めた。

上条君「悪いけど手伝ってくれよ。レイジングハート」

RH「OK」

さつきまで肉片だったロアが半分以上、元に戻っていた。上条君は  
強化の魔術で足の筋力を強化し、更に速度を上げる。

上条君「レイジングハート！お前、槍になれないか？」

RH「Yes！」

上条君「よし！なら槍になれ」

RH「OK！Reims mode」

左手の宝石の周りに何かのパーツがドンドン集まって行き、最終的に短槍クラスの1mくらいの十文字槍となり、十字の刃の真ん中に



ロア「ぐおおおおおおおー！」

上条君「これでーーーーーっ！」

バキーーーーーン！

ロア「なっ！？」

弾切れになった礼装銃を放り投げ、そのまま、空中から自由落下で  
降下し、幻想殺しで結界にトドメ刺す！

そして、十文字槍のRHを左手で掴み、着地し、そのままロアの懐  
に飛び込む！

上条君「終わりだーーーーーっ！」

ロア「！！」

急いで後退しようとしても上条君より逃げられない……RHが  
まっすぐロアの心臓を目掛けて進み……

ズシャッ！

ロア「ぐあー！？」

ロアの心臓にRHが突き刺さる・・・

上条君「貴様の幻想ぶち壊す！」

ロア「ぐああああああ！き・・・キサマーーーーーッ！」

上条君「ジュエルシード、封印！」

RH「sealing」

ロアを復活した根源の魔力がドンドン減少していく。そしてロアは魔力で保ってきたため、ジュエルシードの魔力と共に存在が消えていく。

ロア「ま・・・まだだ。俺はこれくらいでーーーーッ！」

上条君「痛ッ！往生際が悪い・・・いい加減にーーーーッ」

ロアがRHを掴んでいる左手に噛み付いた！上条君も負けずと槍を深く刺していく。

ロア「ふ・・・ふはははは・・・まだ早いが・・・貴様に・・・  
(ニヤリ)」

上条君「なに!？」

ロアは苦しそうなニヤケ顔で上条君を睨みつける。上条君はロアが何をしたいのかわからないが、封印に精神を向ける。

次の瞬間、ロアと上条君は明るい光に包まれ・・・



これで無事この事件も終結する……はずだった……

ユーノ「あの……ありがとうございます！おかげで1つのジューエルシードを封印することができました。なんてお礼いえば……」

上条君「……………」

ユーノ「ん？……どうしましたか？あの聞いて……」

上条君「……………(ニヤリ!)」

ザシュツ！

ユーノ「……………え？」

ユーノの脇腹に十文字槍のRHが貫通した……ユーノは何が起きたか分からなかった。

??「おっと……悪い……手が滑った……すまんな小僧」

ユーノ「ハッ！ま……まさか……」

??「やはり、転生してすぐには手元が狂ってしまうな……次は確実に逝かせてやるよ……ユーノ」

狂気に満ち溢れた笑みでRHを引き抜く上条君……いや、違う  
あれは上条君ではない……あれは上条君の姿をした……

??「死ねーーーーーッ!!」

RH「Standby Mode」

??「なっ!?!」

RHが勝手に槍から元の宝石に戻り、ユーノの元に戻っていった。

??「使えん!なら、俺の手で……ぐあ!」

ユーノを殺そうとしたが、アルクエイドの攻撃が上条君を襲い、吹き飛んだ!

アルクエイド「早く逃げなさい!」

ユーノ「でも……」

アルクエイド「あれはさっきの子ではないわ。あれは……口アよ!」

ユーノ「え?どうして!?!ロアって、さっき倒した」

アルクエイド「あれもロア。今襲ってきたのもロアかもね。」

ユーノ「どうして!?!」



アルクエイド「ロアは転生する。死ぬ時にあの子に何らかの魔術で転生先にしたのかもね」

ユーノ「そんな……」

さっきまで戦ってくれた少年は勝った……しかし、勝った代償が自分の体を奪われるという結果……考えたくないそんな結果……と思うユーノ……そして、心の中から罪悪感が沸いてくる。

ユーノ「僕のせいだ……僕がちゃんと止めていれば……」

アルクエイド「……怪我人はとつと行きなさい！あんたが居ても足でまといよ！」

ユーノ「でも！」

アルクエイド「行きなさい！どうせ、殺すことはできないだから」

ユーノ「殺す……あの人を？」

アルクエイド「そうよ。転生先になった人間は元には戻れないのよ。だから、殺してあげた方があの子のためよ」

ユーノ「ま……まって……うっ!?!？」

さっき刺された脇腹から激痛が走り、その場で倒れ込む。

アルクエイド「貴方には無理よ。早くあの子が命掛けたモノを持ってここから去りなさい」



最後の夜？（後書き）

いや〜〜〜自分のどの方向で終わりにするんだかわからなくなってきたしまいましたwwww

それじゃ、だめじゃん！

まあ、冗談はさておいて、ロア化してしまった上条君の末路はどうなるか？そして、上条君ははやての下に帰る約束を果たすことが出来るのか？

でも、はやてが先に家を出てしまったので帰る約束というよりは再会できるかと言った方がいいでしょうか？

さてさて、10歳の上条君の結末はどうなるのか・・・作者たる私でも予測不可能です！自分で書いておいて何を言っているでしょうね。私www

次回も楽しみにしててください！  
感想とかもお待ちしております！

最後は夢の中で……(前書き)

うおおおおおお!!

久しぶりの更新!

上条くん編本日で終了!

では、本編どうぞ!

最後は夢の中で……

時刻はもう深夜零時を過ぎていた……

上条君との約束を破ったはやては雲一つもない空の満月に照らされながら、車椅子で少年の下へ向かっていた。

はやて「上条君……どこ……いったいどこにいるんや？」

はやてのいる場所は先程、死徒に襲われた道だった。その場には死徒が暴れた形跡が生々しく残り、静かな世界が広がっていた

はやて「ここちゃう……いったいどこに……」

道をよく探していると目の前から冷たい向かい風がはやてを煽る……  
・そして、風と共に何かか聞こえてきた……

??「大師父！さっきの魔力」

??「うむ、上条のモノかもしれんのお」

はやて「？」

若い女性「しかし、なんでしょう。上条の魔力だけではなくほかの魔力も混ざっているようです」

老人「うむ・・・何か良からぬことが起きているかもしれんのお」

若い女性「位置はある程度把握はできました。しかし・・・」

老人「行くしかならう？上条がそこにいるのなら出向くまでだ」

若い女性「しかし、ここでいったい何が起きたのでしょうか？周りに血と淀んだ魔力が渦巻いています」

老人「お主は初めてか？これは死徒が人間を食い散らかした跡だ」

若い女性「死徒に・・・！！まさか、上条は死徒に！？」

はやて「！！」

老人「まだそう決まったわけではあるまい？この目で確かめる必要がありそうなお」

若い女性「はい！魔力の根源はこの先の住宅街を出た小さい公園です！」

老人「うむ！では急ぐとしよう」

若い女性「はい！」

二人の男女はその場を後にした。はやては二人に気づかれないように違う通路の影から二人の話を聞いていた。

はやて「あの人達、上条君の知り合い？でも、あの人達が言っていた場所に行けば上条君に会えるんや。ほな、急いで目的に行かきゃ」

はやては車椅子を操作しながら、上条君がいると思われる公園に道路を決めるのであった……

アルクエイド「すばしっこい」

ロア「クッククック……それでは俺を捉えることは無理だぞ？」

アルクエイド「チツ……」

一撃必殺の空想具現化を使用したことによりアルクエイドの消耗は激しい……何分不利だと思われるが……

アルクエイド「はあ！」

バシュ！（切り裂き！）

ロア「チィ！まだ体がいうことがきかない……緊急とはいえ、  
代用した素体の反発が激しい……」

上条君の躰を乗っ取ったロアだが、上条君の意識が抵抗してうまく  
動けない。

その様子アルクエイドは……

アルクエイド「……」（ロアを殺すなら簡単……だけど  
あの子が……私もやさしくなったものね）

今がかなりの空きがあり、倒すのは簡単だがロア化している上条君  
が自力で肉体を取り戻せるのではないかと期待して、つい待ってし  
まう。

ロア「うおおおおお！邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ  
邪魔だ邪魔……だ！！この体はもう俺のもんだ！貴様は



消える――――!!」

「僕の中から出て行け!僕はやり残していることがあるんだ!貴様みたいな色物に負けている暇はない!」

ロア「色物!?色物だと!?貴様――――!!」

「出て行け!僕の中から出てけ――――!」

ロア「なめんな――――!!小僧!」

アルクエイド「ふあ~~~~~なんて愉快的な動きなこと」

上条君の体の中では主導権をめぐる戦いが繰り広げられているが・  
・外側ではロアの独り言と妙な動きが続いていた。アルクエイドはトドメをいまずぐにでもさせるが、ロアが転移先に潰されかけているように見え・・あえて傍観している・・むしろ、幼い子をひき肉にするのは気が引けるからだ・・

アルクエイド「でも、いつになったら終わるのかな~~~~?」

??「相変わらず呑気なのね。アルクエイド」

アルクエイド「あら？珍しいのが来たわね」

公園の入口にゴスロリで黒髪の少女が立っていた。

アルクエイド「アルトルージュ・・・なんであんたがここにいるの」  
アルトルージュ「ふん！あなたには関係ないことですわ。私は・・・  
あの忌々しい蛇をこの手で葬ってやろうと思ひましてね」

少女の微笑みは黒かった・・・ロアに余程の恨みがあるのか。鋭い爪の指先をパキパキと鳴らす。

アルクエイド「・・・別に私は構わないけど、今ロアがあの子の体から追い出しそうなのよ。だから、襲うのは・・・って！ちよつと！」

ロア「き・・・貴様ーーーーッ！！」

「僕は・・・お前に負けない！僕を待っていてくれる人がいるんだ！だから、負けない！そして、戻るんだ！はやてのところに！！」

ロア「く・・・くそーーーー！！こんな小僧に俺が負けるとは・・・  
・だが、覚えておけ・・・俺はいつでも貴様の心の闇に潜み・・・

お前のなにも奪ってやるぞ!!」

内側では決着がついた・・・ロアの魂は上条君の信念より上回ることはなく、たったの数分天下でロアは上条君の心に食いつぶされてしまった・・・

「僕は・・・お前に躰をやるつもりはないし、譲る気はない。まあ、僕の心の中で眠るがいいよ・・・僕が死ぬまで」

そして、上条君は自分を取り戻した・・・

上条君「・・・・・・・・あぶなかった。あともう少しで・・・・・・・・え？」

ブシュッ!!

アルトルージュ「死になさい。ロア」

上条君「ぼ・・・くは・・・ロア・・・じゃ・・・ない」

アルトルージュ「?・・・あれ、まさか・・・ロアに心が打ち勝

「つた!？」

ゴスロリ少女は上条君の胸に手を突き刺した……。そして、貫通……。上条君の背中からアルトルージュの手とその手に握られている少年の心臓が出ていた。

上条君「そ……んな、せ……かく……も……どつて……これた……のn……」

上条君はそのまま、絶命してしまう……。どこの知らない人に心臓をもぎ取られ……

アルトルージュ「……ロアの転移を拒み、それを飲み込んでしまっなんて……」

アルクエイド「アルトルージュ……!」

アルトルージュ「!」

ヒュン! シュン!

真祖の本気の斬撃がアルトルージュを引き裂こうをするが回避される。

アルクエイド「あんた……私が止めたのに……あの子を」

アルトルージュ「まさか、復活するとは思わかったのよ。普通、ロアに転生された人間はロアに意識を食われ、そのまま体を奪われる……あなたもそこをわかっているでしょ？」

アルクエイド「それは普通の転生先はそうなるが、あの時、あの子に乗り移ったのはあくまでその場しのぎだった。だから、打ち勝つことができるんじゃないかと、私は期待してた……それをあんたは……」

アルトルージュ「まあ……これは仕方ないことよ。どの道結果オーライよ。ロアは殺したし、それにこれは仕方ない犠牲よ。そのところを」

ヒュン！

アルクエイド「……殺す。久しぶりに殺し合おうじゃない。え？アルトルージュ？」

アルトルージュ「あら？あなたがその気なら付き合っただげるわよ？」

アルクエイドは切れていた。本編で見たことのない……真祖の本気の顔……とても、口では表しきれない。

アルクエイド「あんたのその長い髪と首をあの子の墓前に備えてやる！」

アルトルージュ「なら私は殺したあの子の詫びとしてあなたの首を備えてあげようかしら」

二人の世界の怪物はその場から離れた……そして、遠くで神の戦い近い殺し合いが始まるのであった……この殺し合い跡地は半径数十mのクレーターが残されていたらしい。

……公園には静かな時間が戻った……しかし、そこに一つの音が近づいてくる。

はやて「ここがあの人たちがゆつてた。公園やな……当麻君はいった何処にいるや？」

その場に現れてたのははやてだった！はやては近道を知っていたため、上条君を探す不思議な2人組より先に到着することができた。そして、ゆっくり公園内に踏み込む

はやて「あの人たちの言うとおり、ここに当麻くんがいたのは間違いないね」

更に奥に進むと街灯の光が届かない場所があった……そして、そこに何かがあるとはやては察知した。しかし、暗くてよく見えない

はやて「暗いな〜夜目は慣れとるはずなんやけどな〜そうだ！懐中電灯で」

車椅子の後ろに付けているポケットから懐中電灯を取り出し、電源を入れる……

はやて「あれ……人？え

絶句する……眩しい光に照らし出されたのは……血の水たまりで倒れている上条君の姿だった。

はやて「上条君！！」

車椅子を飛び降り、足を引きずりながら上条君に歩み寄る……どれだけ血に濡れても構わない……今は少しでも近くに寄りた

い・・・

はやては上条君に触れる・・・だが、彼の胸を触った瞬間、心の中が空っぽになる。

はやて「上条・・・君・・・」

人にあるはずのない胸の穴・・・そして、人になくてもならない臓器・・・心臓がない・・・人並みの暖かさも脈の鼓動も伝わってこない・・・目は閉じているが、赤い血の涙が流れていた・・・はやて「うそや・・・うそに決まってる！・・・だって上条君は・・・」

現実を受け止められないはやては上条くんから離れる・・・が、付いた血が彼女を現実に戻す

彼女の心は今にも壊れそうだった・・・幼いのに残酷な光景と大切な人の死を見てしまえば仕方ない・・・だが、現実是非情にも更なる絶望を与える。

「がああ・・・このままだと肉体の維持ができない・・・」

はやて「え？」

上条君からその声が聞こえてきた・・・それは本人の声ではなく、





あと少しではやてを喰らうことができるところまで来たが、いきなり、苦しみ始める

「は・・・や・・・て・・・逃げる・・・俺の意識が持つ間に・・・」

両眼が朱い目だったのが、片目だけ元に戻り、口調も元の上条君に戻っていた。

はやて「上条君・・・」

「いいから・・・俺は大切な人を傷つけない・・・喰らいたくない・・・だから」

片目から血の涙が流れる・・・ということが効かない躰をなんとか抑えて、はやてが逃げる時間を稼ごうとするが、はやては動かない・・・  
・・・そこどころか

はやて「もうええよ。上条君の気持ちがよくわかったから、もう苦しまなくてええよ」

「はやて・・・」

はやて「わたしはもう一人で帰りとうない・・・上条君が帰れるようにわたしは待つ・・・もう一人は寂しんや」

逃げるどころか。逆に抱きつかれる・・・このことに上条君は焦る。このままだとロアにまた意識が持っていかれ、はやてを食い殺してしまう・・・少年は頑張つて、少女を突き放そうとするが体が動かない時点でそんなことができるはずもない

はやて「べつに私が上条君に食べれてもええよ。その方がずっと傍にいられるものな」

「はやて・・・いつたい何・・・言つてやがるんだ・・・やめる・・・離れる・・・俺は・・・俺は・・・」

はやて「上条君は化け物じゃないよ？」

「なに・・・？」

はやて「こうして、上条君はわたしを殺してない・・・なにがあつたかしらんけど。ちゃんとここに上条君はちゃんとここにいます。だから、私は待つよ？私が好きな上条当麻が元に戻るまで」

「は・・・や・・・」

再び意識が途切れ始め、体が勝手に動き出す。先ほどまで力が抜けていた腕がはやてのからだを掴み、首元に鋭い牙を近づけいく・・・

誰か・・・お願いだ・・・こんな結末はいやだ・・・だから、

誰か……お願いだ……はやてを救ってくれ！そして、俺を消してくれ！

ドン！

「がああああ！？」

はやて「上条君？」

頭に何かか命中する。そして、何かの紋章がひたいに浮かび上がる

女性「呪式ルーンを打ち込みました。後は儀式のみです！」

老人「うむ、心得た」

女性「目標を固定……術式を作成……」

老人「む……なにやら、よからぬものが取り付いているようだが」

女性「大丈夫です。今の上条と元の上条は違う存在です。元々、幼い今の記憶を取り出し、元に戻して移植するのが今回の目的だったので」

老人「なるほど、偽りの少年時代の姿を作り、その記憶を本体に移植か……あまり関心はせんな」

女性「姉さんの暴走を抑えられなかったのは、私の責任でもありません……しかし、今は」

老人「うむ、頼んだ」

術式が完成すると少年の体が分解され始めた……

上条君「よかった……僕は……はやてを殺さずに済んだ……」

はやて「上条君！体が……」

上条君「ん？ああ……消えてる……だけどこれでいいんだ」

はやて「よくない！わたしを置いてどこ行くきゃ！」

上条君「天国かな？いや、地獄かも……ハハハ」

はやて「一人にないでといて、寂しいのはいやや！」

上条君「大丈夫だよ……僕以外にも病院の先生とかいるから」

はやて「そうじゃなくて……うつつ」

上条君「はやて、僕は感だけど……もう少し経てば、はやてに新しい友達と家族が出来ると思うよ。僕みたいな仮初な生活じゃなくて、幸せな生活に……」

はやて「そんな生活はいらぬ。今の生活が一番楽しいや！だから、消えないで、明日も怒ったり笑ったりする日常に戻ろう……ねえ？」

上条君「……ごめん……つらい……思いさせて……ごめ……」

はやての前から少年の姿が消えた……はやては老人と女性に睨みつける

はやて「あんた達、上条君をどないしたん！返して！私の上条君を返してや！」

はやては腹の底からこみ上げてくる怒りを二人にぶつける。

はやて「わたしの大切なひとを……大好きなひとを……わたしの楽しかった日常を返して！」

老人「……後始末は任せた」

女性「……はい」

老人は公園から立ち去り、残った女性ははやてに近づく……

はやて「あんたは鬼や！悪魔や！いや、人の幸せを奪う外道や！」

女性「ええ……そうね。だから、そんな外道のことを……忘れてください」

女性ははやてのひたいに人指差しを向ける

はやて「なに……をするや？ちょ……ちょっと!？」

ドン！

はやて「え!？」

女性「あなたが見たのはすべて、悲しいひと時な夢です。だから、眠りなさい」

はやて（い……や……消えていく……上条君が……  
今までの……楽しかった思い出が……いや……忘れ  
たくない……忘れとうない……）

女性「良い眠りを……」

はやては意識を失った……。そして、深い眠りの中で楽しかった思い出が消え失せていく……。

石田「はやてちゃん！大丈夫!？」

はやて「先生……どないしたん？」

石田「はやてちゃんが道端で倒れていると聞いて先生は心配でしたばい……」

はやて「わたし、夢見てた……」

石田「はい？」

はやて「わたしはゆめに出てきた子が好きになって、一緒に暮らした夢を見たんや……。名前と顔は忘れけど……。だけど、その子は最後まで私を最後まで思ってくれたんよ……。最後の最後まで」

石田「それで？」



はやて「最後はいきなり、目の前で消えてしまった。わたしに予言みたいなことを残して」

石田「え？」

はやて「新しい友達と家族がすぐにできるって」

石田「……………」

はやて「でも、私的にはその子と一緒にいた方がええやけどな」

はやては話す度に涙がこぼれる。実感はないがなぜか悲しくなる。いつも隣にいてくれた男の子の姿を思い出そうとする度に胸が苦しく涙が止まらない

石田「その子は多分、はやてちゃんに幸せになって欲しかったじゃないかな〜」

はやて「え？」

石田「その子は寂しそうなのはやてちゃんを慰めてあげようと夢の中だけでも、幸せになってほしいと思っていただけ、夢は覚めるものだから、最後に幸せになるような願いを込めて、はやてちゃんに予言を残したんじゃないかな？先生はそう思うけど」

はやて「でも、わたしはあの子がよかった。そこまで思ってくれるのなら、いなくなっただけはほしくはないよ」

石田「……そうね……はやてちゃん。今は疲れているようだから、もう一度、寝ましようね。もしかしたら、夢の続きが見れるかもしれないし」

はやて「そうよね……なら、もうひと眠りします」

はやては病室のベッドの上で眠りにつく……決して見れない夢の続きを追い求めるように……

ロンドン

ユリカ「お帰りなさい。上条、そして、ごめんなさい」

上条「なんか、すごく……く長い夢を見ていた気がする」

ゼルレッチ「まったく、つまらんことに巻き込まれおって」

上条「そんなことを言われても……」



チャンスがほしい！そして大切な人を幸せにしたい！

暗い闇の中で、役目を終えた少年は叫ぶ！もう一度・・・もう一度と・・・

上条君編 終了

続く・・・

最後は夢の中で……（後書き）

ヨッシャー……！！

これで本編にもどります！

プリズマイリア編を少しやった後、時期を冬に飛びます！

（ノ。ノ。ノ オオオオオ -

我ながらなんて適当さ……

でも頑張って更新しますので応援よろしく！

では、次回もおたのしみに！！

ご感想などもお待ちしております！

全機！応援頼む！

## 25・新・魔法少女誕生！（前書き）

さてさて、本編に戻りましたが・・・今回はかなり駆け足！

そして、また新たな登場人物！

では、本編をどうぞ（／＼）（／＼）（／＼）（／＼）

## 25・新・魔法少女誕生！

上条「・・・ん？」

士郎「気づいたか・・・大丈夫か？」

上条「ああ・・・なんとか・・・ここはどこだ？」

士郎「お前んちだ。」

九郎「そうそう、いきなり運ばれてきたから何事だと思ったぞ」

アル「若いもんは盛んだが、自分の体を労われよ。なれ」

上条「俺・・・何か昔の夢を見ていた気がする・・・」

海鳴市の戦闘からまだ数時間しか経っていないが、上条当麻は夢の中でもう一人の自分が納得できない終わり方をした話を見ていた。

上条「くそ・・・なんだか胸くそがわるい・・・」

士郎「おい、当麻・・・これからどうする？」

上条「とにかく休もう・・・俺は疲れた」

九郎「あ！おい上条！伝えたいことが・・・」

上条「Z・・・Z・・・」

九郎「寝ちまいやがった・・・」

アル「なれも少しはこいつの身を休ましてやれ。相当疲れていたの  
であろう」

九郎「そうだな。んじゃ、俺も寝ますか。ああ！士郎さんはどうす  
るかい？」

士郎「俺は帰るよ。当麻によろしく言っといてくれ」

九郎「おう！」

アル「気をつけて帰れよ！」

上条のことを任せて士郎は家に向かって帰っていた。

九郎「俺らはどうするか？寝るか？」

アル「それもいいが、あの娘たちはどうする気だ？」

九郎「・・・まあ、どうにかなるでしょう」

アル「お主は・・・そう言う細かいところは気にしないのだな」

九郎「オマエな」



二人も部屋に戻っていった……

その頃、冬木市のとある場所では……

イリヤ「どうすればいいの!?!」

美遊「クツ……力が違いすぎる」

イリア「ここは一時撤退を……」

美遊「したければ、するといい……私はあれを仕留める」

鏡面世界ではイリアたちはクラスカードの回収をしていた。目的のキャスターを倒すことができたが、乱入者が現れた……それはセイバーの黒化英霊である。その圧倒的な力に美遊達は押され、負け戦の形になっていた。

美遊「サファイア・・・ランサーのクラスカードで・・・」

サファイア「無理です。一度使ったカードは数時間は使用不可能です」

美遊（敵をどうすれば・・・考える・・・考えるんだ・・・美遊）

イリア「ねえ！考える前に行動するのはどうかな？」

美遊「死ぬ気ですか？」

イリア「いっしょや、違うよ。私たちでは相手にならないけど、あの  
人たちなら・・・」

美遊「・・・なるほど」

作戦を伝え実行する。イリヤと美遊は突貫するふりをして、後ろで倒れている二人にルビーとサファイアを・・・向かわせてる

凛「よくもやってくれたわね」

ルヴィア「先ほどの礼は倍にして返してあげますわ！」

黒化セイバーにやられていた2人がマジカルステッキを受け取ったことにより復活！そしてとても痛い服装に・・・

凜「一気に潰す！ルヴィア「華麗にやられなさい！」

さすが優秀な魔術師である戦いがさまになっており、ドンドン黒化セイバーを押ししていく！

凜「これで止めよ！」「ルヴィア「受け取りなさい！」

凜&ルヴィア「ショットファイア斉射！！」「

間髪入れない止めの一撃……実力の差を見せつける。

美遊「すごい……」「イリア「さすがは本物の魔術師だね」

これで戦いが終わったと全員は思った……しかし……

「エクス（約束された）……」

「「「「え？」「」「」

「カリバ（勝利の剣）――――！！！」

黒い魔力の波が凜とルヴィアを飲み込む！この場に絶望と恐怖を残された二人に与えた。

美遊「殺された……あの二人を……」  
イリア「……ガタガタ」

目の前に倒されたはずの黒い甲冑を付けた怪物が姿を現し、二人の恐怖が極限まであがる。

美遊（殺される……助けて……当麻お兄ちゃん）  
イリア（殺される……いやだ……まだ、やりたいことがあるのに、まだ……）」

その時、イリアスフィールに何かの鍵が外れた……

イリア「倒さなきゃ……」

美遊「え？」

イリア「あいつをたおさなきゃ」

美遊「前に出ると危ない！」

イリア「インストール夢幻召喚」

美遊「!!！」

イリアはまるで別人だった。美遊は止めようとしたが、イリアはなぞの魔方陣を展開し、光に包まれた。

イリア「トレース……オン」

美遊「そんな……クラスカードでそんなことが……」

美遊は驚きを隠せなかった。先ほどのイリアがまるでどこの英霊の姿をしていたのだ。

イリア「……………」

無言の突進、手に弓が……そして、矢ではなく剣が現れていた。その剣を弓につがえ……そして、放つ！そして、次々と剣を召喚し！弓を放ち続ける！

美遊「うそ……今のあの子は完全に英霊化している……あれがさっきのあの子なの……」

どうこうしているうちにイリアは黒化英霊を追い詰め……

イリア「トレース……オン」

両手に目の前のセイバーと同じ剣を現れる！そして、その剣に膨大な魔力が集まっていく……そして、黒化セイバーも……

「「エクス……カリバー……！！！」」

二人はほぼ同時に膨大な魔力の塊は放つ！黒と白の光はぶつかり合い押し合う！

イリヤ「いやああああああああああああああああああ！！  
ふん！」

白い魔力が黒い魔力を飲み込み・・・そして黒化セイバーものみこむ・・・この戦い、イリアの勝ちで終わった・・・

美遊「大丈夫・・・」

イリヤは気絶していた。この出来事を目撃したのは美遊と途中で戻ってきたサファイアのみだった。

ちなみに凜とルヴィアは死んでません。エクスカリバーの攻撃が直撃の直前にルビーが地中に埋めたので無事である・・・

そして、朝・・・上条邸

上条「・・・もう、朝か」

美遊「おはようございます。当麻おにいちゃん」

上条「お・・・美遊・・・わりい・・・色々と家を空けていて」

美遊「いえ・・・それより、外に何か荷物が」

上条「荷物？」

中庭を見るとヘリで運んだような大きな箱が置かれていた。

上条「あれ？あんなもの・・・あつたけ？」

美遊「お兄ちゃん、電話」

上条「え？・・・ありがとう・・・はい」

シャルロツテ『ハロ〜かな？そっちでは』

上条「げ・・・シャルロツテ」

シャルロツテ『な〜に〜？そのあからさま嫌な返事は』

上条「あんとと話していいことあったか」

シャルロツテ『ふ〜ん、今回は報酬の件で話をしようと思ったんだけど』

上条「聞きます！」

シャルロツテ『ならよ〜く聞きなさい。あんたの家にその報酬を



置いておいたけど確認した？』

上条「ああ、一応、大きい箱は」

シャルロツテ『んじゃ、中身は確認してないのね……ならいいわ。今説明するわ。あれはあんたが望んでた空間移動装置よ』

上条「……はい？」

シャルロツテ「いやだから、空間移動装置！大師父がマジカルステツキを飛ばした時の空間を擬似的に作り出す装置よ』

上条「……そういえば、結構前に大師父とそんな話がしたっけ……」

シャルロツテ『そうよ。その話を大師父から聞いて私の独自で開発してみたの。まだ、試運転はしてないけど』

上条「……なんか今、とてもいや……な言葉が混じってたよ  
うな」

シャルロツテ『試しに使ってみるのをオススメするわ。じゃあね〜』

電話が切れる。

美遊「どうします？」

上条「……………とりあえず、中身を確認してみるか」

二人は箱を開けていく……………2メートルの正方形の箱を開くと中によくアニメで出てくるようなとても怪しい転送装置が入った。

上条「また、怪しいものを……………」

美遊「ん？お兄ちゃん……………これ動いてる」

上条「え……………まじ？」

気がつくくと装置は稼働していた。そして、起きて欲しくない不幸な形に……………

上条「美遊！危ない！」

美遊「当麻お兄ちゃん!？」

上条「うあああああああ!？」

上条が美遊を突き飛ばした瞬間、上条は装置が発生させた歪みの中に吸い込まれていった……………

上条「う……ここは」

気がつくとそのはすべてが透明で辺りがすべて見渡すことができるような空間だった。まるでロンドンに飛ばされた時に通った空間のような感じだった

上条「……不幸だ……仕方ない。奥へ進みますか」

奥に進むと誰かの鳴き声が聞こえてきた。上条は奥に走り出し、その声の本人を見つけ出す！

「う……うつつ」

上条「ねえ、君大丈夫かい？」

「ふえ？お兄ちゃん誰？グスン」

上条「あれ……フェイト？」

「フェイト？誰それ？私はアリシアだよ？」

上条「アリシア!？」

特徴的なツインテールの金髪について、フェイトと誤認する・・・いや、その前にこんな場所にいるはずもない人物がいることに驚く!

アリシア「お兄ちゃん? 私のことを知っているの?」

上条「ああ、色々とあつてね・・・君の母さんと妹のこと色々だね  
~~~~~」

アリシア「かあ様はわかるけど、妹って?」

上条「あ・・・そうか、アリシアはフェイトのことを知らないんだ  
った」

アリシア「フェイト?」

上条「アリシアが眠っている間に妹ができたんだ」

アリシア「え! 私に妹! お母さん、私のお願いを叶えてくれたんだ  
!」

上条「まあ・・・理由はいろいろあるけど・・・あれ? アリシア  
ってたしか、学園都市で治療中ではなかったけ? どうしてこんなと  
ころに?」

アリシア「わたし、かあ様の所に行こうとして変な空間を歩いてい  
ただけで、迷子になっちゃって」

上条「プレシアのところに……あれ？プレシアはたしか学園都市に戻ったんじゃない」

アリシア「そんな……これじゃかあ様に会えないよ」

上条「大丈夫、俺がついてる。ちゃんと、プレシアにあわせてやるよ」

アリシア「うん！ありがとう！おにいちゃん！」

上条「お兄ちゃんって……俺は上条当麻、よろしく。アリシア」

アリシア「かみじょうとつま……うん！当麻おにいちゃん得意やー！」

上条「……なんだかフェイトと違う意味で正反対な感じだね……アリシアって」

アリシア「え？そうなの？」

上条「ふ……会えばわかるさ……でも、今はどこ行けばいいのやら」

アリシア「こっちこっち！この道をまっすぐ！」

上条「む……この道はさっき」

アリシア「ふふふ……私の本能が叫ぶのよ。この道を進めとー！」

上条「はあ〜しゃくない。お姫様アリシアに従いますか」

アリシアを背負うともきた道を戻っていく……そして、少し経つと……

アリシア「あ！見てみて！出口！」

上条「ほんとだ。アリシアのおかげだな」

アリシア「えへへへ、もっと褒めて」

上条は出口に向かって走る。しかし、そう簡単には出られない

アリシア「お兄ちゃん！上！」

上条「ウ！」

ギリギリのところまで回避する……上条たちの目の前に見たことのある機械が道を阻む

上条「学園都市の駆動鎧HSPS・15！？どつしてこんなところに」

本来は有人で動く機械だが、何かの故障しているのか自動的に動く。  
・・・そして、当麻たちを襲う！

上条「チツ！メサイア！」

メサイア「久しぶりの出番です」

デバイスのメサイアを起動する。右手にパイルバンカーの形をした  
デバイスを装着する、駆動鎧のアーム攻撃を回避しつつ、チャンス  
を待つ

上条「横ががら空き！いただき！」

アームの攻撃を受け流し、駆動鎧の横ががら空きになり、脇からパ  
イルバンカーを打ち付ける！

上条「一丁上がり・・・」

アリシア「当麻お兄ちゃん！まだ動いてる！」

上条「うそ・・・」

横を射突型のニードルが貫通して終わったと思っただが、駆動鎧は動  
いている・・・ニードルを引き抜くのにタイムラグが発生し、動

けない状態に……駆動鎧の非情な一撃が当麻の脇腹に直撃する。

上条「ぐは!?!」

直撃だけではすまない……当麻とアリシアはアームの馬力より吹き飛ばされる。そのとき、上条はアリシアの必死になってかばった。

アリシア「うう……あれ?当麻お兄ちゃん!」

上条は先程の一撃で気を失ってしまった。そうしている間に敵は徐々に接近してくる!

アリシア「お兄ちゃん!起きて!お兄ちゃん!」

必死になって上条をさするが全然反応がない。このままでは殺されるとアリシアは焦りながら、上条を起こそうと必死になる。

アリシア「ううう……起きて……起きてよ!このままじゃ……」

幼いアリシアは泣きながらも必死上条を起こそうとする……ただ死にたくないがために……



メサイア「……あなたは立ち向かわないのですか？」

アリシア「え……デバイス？」

メサイア「私は上条当麻のデバイス……メサイアといいます。もう一度聞きますが、あなたは立ち向かわないのですか？」

右手のデバイスから声が聞こえる。

アリシア「だって！私には力がないし……デバイスもないし……」

メサイア「……力とデバイスがあれば、あなたは戦うのですか？」

アリシア「まあ……そうかな……」

メサイア「なら私を使ってください」

アリシア「でも、君はお兄ちゃんの」

メサイア「構いません。今は非常時です。あなたが私を使いこなせれば……ですが」

アリシアは悩む……しかし、悩む暇はない。人型の駆動鎧HSP

S - 15は徐々に近づいてくる・・・

アリシア「わかった！君を使う！私は戦う！」

メサイア「その意気です。降りかかる恐怖を倒しましょう」

メサイアは待機モードに戻る。そして、アリシアはメサイアを拾い上げる。

アリシア（お兄ちゃん・・・ごめんなさい。借ります）

メサイア「デバイスの使用方法はわかりますか？」

アリシア「大丈夫！それはかあ様から習ったから！」

メサイア「結構です・・・詠唱は自動カットしています。私をどのような武装にするかを想像してください」

アリシア「OK・・・想像できた・・・」

メサイア「さあ・・・念じてください。あなたの求める力を」

魔方陣が展開し、すべての準備が整う・・・アリシアは心を決め最後のセリフを言う！

アリシア「メサイア！セットアーーーーープ！！」

メサイアは宙に浮き、召喚されたパーツとドッキングしていく。  
アリシアもバリアジャケットに着替えていく……

メサイア「セットアップ完了です」  
アリシア「準備万端！いつでもいけるよ！」

斬新なデザインだった……バリアジャケットが純白の軽装甲胄・  
……例えるのなら、セイバーリリイのようなバリアジャケット

デバイスはライフルの銃身に日本刀を接続した純白のガンブレード！

ここに純白の魔法少女が誕生した！

メサイア「……使えるのですか？この武装？」

アリシア「え？だって格好いいじゃん！アニメで出てくる魔法少女  
と違う感じが出てて！」

メサイア「無事に戦闘が終わるか心配です……」

セットアップ成功に喜んでいると駆動鎧は背中に収納していた大口  
径のショットガンを取り出し発泡する！

アリシア「うああああ！？どうしたら」

メサイア「Protection」

とっさにメサイアがバリアを展開し、危機を回避する。

アリシア「ありがとう」

メサイア「次来ます。急ぎ回避を」

次弾が発射されアリシアは回避する・・・

アリシア「すごい！すごい！体が軽い！」

メサイア「バリアジャケットは防御重視ではなく、機動重視に設定  
しています。そのため、敵の攻撃の直撃は回避してください」

アリシア「わかった！んじゃ、今度はこっちの番だよ」

鞘付きガンブレードを構える。魔力を銃身にチャージする。

アリシア「当たれーーーー！！！」



スリーショット形式は放つ、3発ずつ撃つたら、数秒のチャージの時間が入る。

9発の中5発が命中！しかし、駆動鎧のダメージは少ない

メサイア「よく考えましたね。チャージと発砲アクションを替える  
とそれにより魔法弾の性質も変わります」

アリシア「でも、全然食らってない・・・」

メサイア「さきほどはスリーショット・・・名前のとおり3発ずつ  
弾を撃つ設定です。先程のフルオート魔法弾より魔力の質が上が  
り、弾速及び威力が上がります。そして、追尾能力も着きます」

アリシア「！！なら、さつき撃っていた魔力を一つに集めたら・・・  
」

メサイア「さすがです。アリシア。まさにその通りです・・・し  
かし、その前に複数の魔法を教えます」

アリシア「え！なににに！」

メサイアの話に夢中になるが・・・しかし、敵は待ってくれないシ  
ョットガンでアリシアを狙い撃つ・・・しかし、アリシアのスピ  
ードに相手の弾幕が追いつけず、回避される

メサイア「上条は飛ぶという発想より跳ぶ法を考えました。でもあなたなら飛ぶ方ができるはずです」

アリシア「あ！そうか、魔法少女は飛ぶものなものね！」

メサイア「……いえ、ただ発想力のあるアリシアならできると思いました」

アリシア「なら、実行あるのみ！」

イメージする。空を飛ぶイメージを……それを読み取るようにメサイアは背中に2枚の白い半透明の羽を形成する。

アリシア「んじゃ！あ~~~~い、きゃ~~~~ん……ふら~~~~い!!」

勢い良く空に跳ぶ！……そして、空中に停滞する……成功である。

アリシア「やった！やった~~~~」

メサイア「お見事です。では、最後にバインドを教えます」

アリシア「バインド？」

メサイア「拘束魔法です。敵をその場で行動不能にします。この魔法は戦闘において重要なものです」

アリシア「戦闘でその魔法を行使されたら、やられちゃうもんね」

メサイア「その通りです！ですが、バインドは相手が動いている状態では行使が難しいです。そのため、相手が止まっている時に行使するのが基本です」

アリシア「あそこで撃っているあのロボットみたいなことを言うの？」

メサイア「はい！理解が早いですね」

先ほどから撃ち落とそうとショットガンを連射する駆動鎧……しかし、射程外のため弾が届かない。

アリシア「へへん！ならいいこと思いついた。ならさっきのことを応用してみる……バインド！」

ガキン！ギギギ……

駆動鎧の肢体に複数のバインドが巻き付き、動きを止める。先程のガンブレードを鞘を抜き……一気に駆動鎧に接近する。

アリシア「今さっき考えた必殺技！行くよ！」



高速で駆動鎧の寮腕を切り落とす……そして、後ろから両足を切り落とす！そして、ガンブレードを鞘に戻し射撃体勢に移行し……

アリシア「フルチャージ・マグナムショット！」

ガン！

アリシア「きゃあああああ！」

物凄い反動と共に魔法弾を発射する！アリシアは何とか持ちこたえる。

744

ガキン！ドカン！

魔法弾は駆動鎧の重装甲を貫通し、内側から弾け爆砕した！

メサイア「敵の破壊を確認、頑張りましたね。アリシア」

アリシア「えへへ……正直怖かった……」

メサイア「そういうものです……しかし、バインドで敵の動き

を封じ、その間に近接攻撃をしつつ、その間に魔力をチャージ……  
・そして、圧縮した魔力弾である硬い装甲を貫き止めを指す……  
理想的な攻撃でした」

アリシア「メサイアのサポートがあつたからよ。ありがとう」

メサイア「いえ、この結果は貴方の実力です」

これにてアリシアの初めての戦いが終わった……

上条「……う……あれ？」

アリシア「起きた？当麻お兄ちゃん」

上条「ハッ！あの駆動鎧は！」

アリシア「ロボットならあたしが倒したよ」

上条「え？まじ」

メサイア「私がサポートしましたので」

上条「う……悪い……アリシア……怖い思いをさせて」

アリシア「おにいちゃん、謝らないで！別にお兄ちゃんが悪いわけじゃないんだよ？」

上条「いや、上条当麻、不覚にも気絶して少女に怖い思いをさせるなんて当麻さん的にはこれほどの失態はありませんことよ！」

上条は悔やむ、あんな旧式の駆動鎧にやられて、アリシアを危険に晒したなんて、上条には自分が許せなかった。

アリシア「ねえ！当麻お兄ちゃん！お願いがあるんだけど」

上条「ん？なんだい？」

アリシア「メサイアをわたしにちょうだい！」

上条「……なん……だと」

アリシア「わたし、強くなりたいの！だからお願い！」

上条「はあ……上条さんは幼い子に武器を与えたくありません」

メサイア「でも、この子は魔法の制御が出来てません。そのため、

制御方法などの訓練が必要です」

上条「め・・・メサイア！？知らないうちにアリシアのほうに？」

アリシアの胸元にペンダント型の待機モードをしたメサイアが見えた。

メサイア「この子の成長に興味が湧きました。そのため、上条・・・ご許可を」

アリシア「当麻お兄ちゃん、お願い！」

上条は悩む・・・この暴れ馬のデバイスをこんな幼い少女にあずけて大丈夫か・・・しかし、アリシアも成長すれば魔法を使うようになる。そのため、どうしても魔法の制御を訓練する必要がある・・・そして、悩んだ結果・・・

上条「わかった。ただし、メサイア！あくまで教えるのは制御くらいにしとけよ！へんな魔法や試作段階の魔法をアリシアに使わせるなよ！」

メサイア「さすが上条、話が早い」

アリシア「わーーーーーい！ありがとう！当麻お兄ちゃん！」

デバイス・メサイアのマスター

上条当麻

アリシア・テストロッサ

に変更されました。

上条「それより、出口はどこだ……」

アリシア「あ！あそこ！あそこ！」

背負っているアリシアの指す先にさきほどの亀裂が見つかる！

上条「よし……！上条さん列車は特急に変わりました！ご乗車の皆様はちゃんとお掴まりになってください」

アリシア「きゃあ！きゃあ！」

上条さんの猛ダッシュ！亀裂に向かって急行していき、亀裂にジャンプ！

上条「うお!？」アリシア「きゃあああ」

二人は眩しい光に目をつぶった……そして、二人は光包まれて  
いった……

「……ちゃん、当麻兄さん!」

上条「う……美遊……か」

美遊「よかった。当麻おにいちゃん……戻ってきてくれた」

士郎「どこ行ってたんだ。当麻、心配してたぞ」

クロエ「まったく、みんなを何ヶ月も心配させるなんてひどい人だ  
ね上条さんって」

イリヤ「あんたが出ると面倒だから引っ込んでなさいよ！」

上条「あれ・・・土郎さんにイリヤちゃんが・・・2人・・・これは夢か」

美遊「夢じゃないよ。当麻おにいちゃんが消えて、もう3ヶ月は経ってる」

上条「さ・・・三ヶ月ー！？こっちはたったの数分しか経っていないのに!？」

アリシア「あれ~~~~~」

上条の次にアリシアも目覚める。

土郎「当麻、その子は？」

上条「話せば長くなる・・・カクカクシカジカ」

ある程度の出来事を話し理解してもらったことができた・・・そして、こちら側の三ヶ月の出来事を聞く・・・

士郎「それでこの子がうちの従姉妹？のクロエ・・・」

クロエ「クロエ・フォン・アインツベルンです。よろしく」

上条「ああ、よろしく。三ヶ月も美遊を任してすみません。みなさん」

上条は土下座でその場にいる衛宮家の方々に感謝する。

イリア「いやいや、こつちも色々和美遊のおかげで楽とかさせてもらったし・・・」

士郎「おれも居場所がないとき、ここで泊まらせてもらって迷惑かけたし・・・あまり気にしないでくれ」

上条さんのいない間、みんな好き勝手、屋敷と美遊を使ったらしいのであんまり、お礼を言われると逆に心が痛むみたいである。

アリシア「当麻おにいちゃん・・・かあ様とフェイト？にいつ会えるの？」

上条「す・・・すまん。アリシア・・・プレシアに会えるのは時間かかるかも・・・」



アリシア「え？どうして？」

上条「この世界は・・・過去の世界なんだ・・・ブレシアと会うには後3ヶ月くらいかかるかも」

アリシア「ふっふっふん、そうなんだ」

上条「あ・・・あれ？怒らないのか？」

アリシア「だって、三ヶ月待てば、かあ様とフェイト？に会えるんじゃない？それまで待てばいい話じゃない」

上条「・・・どうして、フェイトといい・・・アリシアといい、なんでこんないい子なんだろう・・・うっうっ」

士郎「当麻・・・泣くなよ」

上条「・・・いや、だって・・・上条さんはここまでやさしい純粹な子を自分の世界で見たことがあります・・・上条さんは感動の極みです」

しみじみ感動する当麻さん・・・今思えば、学園都市で純粹無垢なロリっ子は会っていない・・・

美遊「あなたはこれからどうするのですか？」

アリシア「あ・・・考えてなかった」

上条「美遊、わりい・・・こんな事態になるとは思ってたんだ。それにアリシアの親とは知り合いなんだ。当分アリシアはうちで面倒をみるよ」

美遊「当麻兄さんがそうするなら・・・わたしは何も言いませんけど」

アリシア「よろしく！お姉ちゃん！えっと・・・名前は？」

美遊「美遊みゆよ・・・上条美遊。よろしくアリシア」

アリシア「えへへ 色々と迷惑をご迷惑かけます。美遊お姉ちゃん！」

イリア「私たちもいるよ！」

クロエ「あははは！アリシアちゃん！お姉さんたちを遊ばない？」

イリア「ちよつとクロ！アリシアちゃんを悪い道に進ませないですよ！」

美遊「ふ・・・二人とも喧嘩はよくない」

アリシア「あははは！お姉ちゃん達おもしろい」

知らないうちに溶け込んでいる女の子達を見て主人公たちは・・・

上条「これで一件落着ですかね」

士郎「今のところな……当麻……明日の学校の言い訳……  
頑張れよ」

上条「ふ……不幸……だ……!」

上条当麻のお約束のセリフを青々とした大空に叫ぶ……  
・時季は夏に入りかけた暑い日だった……

続く……

## 25・新・魔法少女誕生！（後書き）

うおおおおお！！

最終的にかなり話を飛ばした気がする・・・個人的に胸が痛む・・・

さて、いきなり登場したアリシアは *strikers* の方でも登場しますとこんなところで報告します！

次回は・・・更にとぼして・・・12月に跳びます！なのは達は闇の書事件が終了し平穏を取り戻した頃・・・その中で冬木とある儀式の準備を開始される・・・上条たちは強制的に参加を強いられる。

申し訳ありませんが、飛ばした数ヶ月は物語が一通りした後、番外編の形で出します！『フルメタ編』『デモンベイン編』『型月編』の三つを予定しています！

話がややこしくしてしまって誠に申し訳ありません。一生懸命頑張りますので応援よろしくお願いしますm( )m  
では次回もおたのしみに！

ご感想などをお待ちしております！（o・o・o）／

## 26・アインツベルンの森(前書き)

こんにちは( ^o^ )ノ

新章突入！出番がなかったなのは達も登場！

さて、闇の書事件が終わった世界に新たな動きが！

ではどござ(ノ ^ )ノ。(。|。 )ノ

## 26・アインツベルンの森

12月下旬 冬木市郊外・・・アインツベルン城

切嗣「さて、集まったか・・・二人とも」

士郎「オヤジ、こんな所に呼び出して何を考えているんだ」

上条「しかも、俺まで・・・何か大変なことでもあったんでせうか？」

冬木の郊外にある森の中に密かにそびえ立つ城がある・・・そこは衛宮切嗣とその妻アイリスフィールが密かに建てた魔術で構築された鉄壁な城である。

切嗣「来てもらったのは、これから起きる魔術儀式に参加して欲しいだ」

上条「魔術儀式？」

切嗣「そうだ・・・聖杯の話は聞いたことはあるかい？」

上条「・・・たしか、選ばれた者の願いを叶えるって・・・」

切嗣「その聖杯を召喚する儀式をこの冬木で行う・・・いや、やるつもりだ。ロンドンの奴らは」

士郎「それはどういうことだ。オヤジ？聖杯戦争はもう行わないはずじゃなかったのか！？」

切嗣「最近、どこぞの魔術師達が、世界が崩壊するほどの魔力を海鳴市の海上で漏らしたせいだ。ロンドンの奴らはそれほどの魔術儀式とやったのなら・・・もうやらないと決めた魔術儀式をやっても問題がないと決め付け、ここ冬木で行うと決めた」

士郎「それはいくらなんでも横暴だ！」

上条（・・・闇の書事件はこの世界に色々と影響しているのか・・・）

切嗣が話していることは2割当たっていて8割が間違っている。闇の書の防衛プログラムとの戦闘でもものすごい魔力が境界から漏れていたかもしれない・・・それが運悪く協会の魔術師に観測させられしまった。

上条（元の世界とあまりやることはかわらないな・・・魔術師って）

どのみち、魔術師は元の世界やこの世界でも変わらないと上条は思う・・・

切嗣「そこでだ。僕たちはその儀式に参加して召喚する聖杯を破壊する」

士郎「そんなことができるのか！オヤジ」

切嗣「ああ・僕は苦手だが、なるべく一般人に被害が出ないように極力努力する」

上条「……分かりました。俺は切嗣さんの話に乗ります……それでその儀式の名前は？」

切嗣「……聖杯戦争だ」



兇「ふふん ふふん ふふん」

その頃、海鳴市では一人の青年、伊井諾兇いひのりが鼻歌びなうたを歌いながら、とあるストアーで買い物をしていた。

シヤマル「あら、兇さん。今日も買い物ですか？」

兇「あ！シヤマルさん。あははは・・・最近、よく食べるのでつい」

シヤマル「うふふ・・・まだ育ち盛りですからね。仕方ありませんよ」

兇「あははは、そうですか？いや～～～そう言ってもらえるとうれ

」

P r r r r r r r r ! P r r r r r r r r r !

兇「あははは・・・すみません。ちょっと呼び出して・・・」

シヤマル「引き止めてしまつてごめんね」

兇「いえいえ・・・」

青年は急ぎ外に出て電話に出る。

兇「はい、今こっちは明日生きるか死ぬかの問題になっているんだ！後にしてくれ！」

シャルロツテ「あら？いがいと元気そうね・・・兇さん？」

兇「う・・・シャルロツテ・・・」

シャルロツテ「あなたに頼みたいことがあるのですけど？」

兇「なんですか？また、どこぞの秘密組織でも潰してこいとも言うんですか？」

シャルロツテ「うふふ・・・それもいいかもしれませんが・・・ただど残念、今回は違うのよ」

兇「違う？」

シャルロツテ「迎えを向かわせましたわ。それと合流しなさい。話はそのあと詳しく」

その頃、上条邸では・・・

アリシア「あ~~~~こたつっていいな~~~~」

イリヤ「あ~~~~まったくそのとおりよ」

クロエ「極楽極楽~~~~」

美遊「アリシアがイリヤ達の悪いところをドンドン吸収している・  
・早く何とかしないと~~~~」

その頃、冬木の魔法少女達はこたつに入りながらみかんを食べつつ、  
ゆっくりしていた。

アリシア「当麻お兄ちゃん達はまだ帰ってこないのかな~~~~？」

美遊「アリシア、当麻兄さん達は大事な話をしているのよ」

アリシア「大事な話って？」

美遊「それは~~~~」

イリヤ「どうやら、ただことならぬことを知っているようだね。美遊」  
クロエ「美遊~~~~隠していることすべて話なさ~~~~い。さもないと縛り上げてひい~~~~ひい~~~~言わせるまで、拷問しちゃうわよ??」

イリヤ「クロ、それは美遊の人格崩壊と健全なアリシアちゃんの教育上よろしくないから……」

アリシア「それって、美遊お姉ちゃんがMってこと？それともいがいと打たれ弱いSなの？」

……

美遊「あ……アリシア！そんなことどこで知ったの!？」

アリシア「クロエお姉ちゃんが面白いつて言っただから見せてらったアニメだよ？」

イリヤ「く……クロ……あなた、いったいアリシアちゃんに何見せたの!？」

クロエ「え?……『撲殺天使 クロちゃん』だけど?」

イリヤ「ブーーーーー!!なんでそんな血みどろアニメを見せてるのよ!クローーーーー!!」

クロエ「だって印象的でしょ?あのOPと血飛沫」

美遊「最近、よくアリシアがなにかテレビを見ていると思ったら・・・」

アリシア「ねえ〜メサイア〜あなたならエスカリルグになれない？」

メサイア「魅力的ですが、全力で拒否します」

アリシア「え〜面白そうなのに・・・」

イリヤ&美遊「犯罪になるからやめなさい！」

アリシア「なら、殺人濡れタオル・・・」

イリヤ&美遊「名前の時点で犯罪だからダメ！」

アリシア「ぶ〜ぶ〜ぶ〜」

イリヤ達に怒られ、ふてくされるアリシア・・・

イリヤ「それはともかく、美遊〜隠していることを離さないど・・・」

・・・本気でいじちゃっわよ」

美遊「い・・・イリヤ・・・顔が・・・正気じゃない・・・」

はあーはあー言いながらイリヤは美遊に近づいていく・・・美遊はイリヤが近づくことに後退りする。

イリヤ「ルビー」

ルビー「はいです!」

イリヤ「美遊が素直なる薬と『はあーはあーいわせる媚薬』ある?」

ルビー「はい!もちろんここに!」

美遊「ッ!サファイア!」

クロエ「ざんねん、サファイアはここに」

サファイア「すみません。美遊様・・・捕まってしまいました」

サファイアに助けと求めたが・・・クロエがサファイアを捕まえてしまったため、助けにこない。

美遊「アリシア！たすけて！」

アリシア「私は美遊お姉ちゃんが素直で可愛くなるところみたいな  
~~~~~」

アリシアは助けるどころか傍観者を気取る・・・

美遊「アリシア・・・あとで説教ね・・・」

イリヤ「さあ、覚悟はいい？美遊？」

美遊「わかった！わかったから！話すから！」

イリヤ「うふふ・・・そういう素直な美遊はわたしは大好きだよ」

美遊（最近、イリヤがドンドンスになってる・・・）

イリヤ「でもここここまできたら最後までやっちゃおうか？」

美遊「え？ちょ・・・ちょっと！？きゃあああああ

イリヤ「へへへ・・・いい悲鳴だのう」

ルビー「美遊ちゃん！かわいいです。ならもっと可愛くしてあげま・す？」

美遊「やめて~~~~い・いや~~~~助けて!当麻兄さん~~~~!!」

上条邸に一人の少女の悲鳴が響き渡った……

数日後……海鳴市

なのは「ふえ~~~~」

アリサ「なのは?前見えてる?危ないわよ」

フェイト「……」

すずか「あの……フェイトさん?前危ないよ?」

なのは&フェイト「え?」



ゴーーーーーン!!

二人は思いつきり電柱に頭をぶつける・・・完全に気づいていなかったようだ。

アリサ「なのは達、最近ゆけてるわよ？」

すずか「そうね。当麻さんを見なくなったら・・・」

ピクン!

アリサ「今、当麻さんで反応したわよ」

すずか「相当重傷だね」

なのは「ふえ〜〜大丈夫だよ」

フェイト「当麻は別にいなくなっただんじやないから・・・帰っただけ元の世界に戻っただけだから・・・元の世界に・・・」

上条達が元の世界に帰って二日ほど経過した頃、なのは達は……魂がゆけているような日々を過ごしていた……とくに重傷なのはこの2人……なのはとフェイト

更にテンションが下がる2人……親友たちはなだめようと思ったけど、逆効果になりそうなので突っ込まなかった。

アリサ「はあ……どうにかしないと、なのは達ドンドンおかしくなるわよ」

すずか「当麻さんでもいてくれたら……ってあれ？」

アリサ「どうしたの？」

すずか「あれって……当麻さんじゃない？」

ぴくー！

なのは「どこに当麻さんがいるのー!？」

フェイト「トウママ……?どこにトウママ……?」

アリサ「食いついたわ……」

すずか「怖いほどにね」

なのは「それでどこ？すずか！」  
フェイト「黙ってないで教えて！」

すずか「あ・・・あその人が当麻さんに似ているから・・・」

すずかの指を指す方向に4人の女の子と男の子が立っていた。

なのは「あれ・・・女の子だよ？」

フェイト「人違いじゃないの？」

すずか「そこじゃないよ。その女の子達の前の2人の男性だよ！」

女の子たちの前にたしかに二人の男性がいる・・・2人は大きい頑丈なキャリアケースを持っていた。

なのは「う~~~~遠いなの」

フェイト「もう少し近づかないと確認できない」

なのは達は二人の男性に夢中になるが・・・アリサ達はその後ろにいる女の子たちの動きが気になっていた。

アリサ「あの後ろにいる子達・・・前の男の人達をおっているわよね？」

すずか「そうだね。後をつけているみたい……」

四人の女の子たちは全員、帽子に黒いサングラス、茶色のコートを着ていた。唯一の特徴的は黒髪、金髪（2人）、銀（2人）である。

アリサ「なのは、私たちはさきに……ってあれ？なのは達は！？」

すずか「あ……あそこ！」

なのはとフェイトも違う方向から男性の追跡を開始し始めていた。  
・アリサ達とはその時かなり離れていた。

アリサ「……どうする？」

すずか「放っておくわけにもいかないでしょ？アリサちゃん」

二人はため息をつきながらなのは達を追うのだった……

アリシア「うゝゝ当麻お兄ちゃん達、いないと思ったらこんなところだ」

美遊「 〓 ( . . \* ) ハア… 」

イリヤ「美遊… 本当なんだね。お兄ちゃんと当麻さんが聖杯戦争に参加するって」

美遊「… 私も詳しくはわからないけど… 」

クロエ「ふゝゝん、どの道、私は因果から抜けだせないのね」

ギル「僕はそういうのは興味ないけどなゝゝまあ、未来の僕が何をしたかは覚えているけどwwww」

5人の少女（一人少年）のグループは大きなキャリケースを持った上条と士郎を追っていた。二人は最近、家に帰るのが遅かったり・不思議な行動をとるようになった。そのため、兄貴を大切に思う・いや、ブラコンの妹（野郎は除く）ヒロイン達は本当に聖杯戦争が始まるのか確かめるべく、二人を追っていた。

アリシア「あ！森の中に入っていた！」

美遊「この先は… よく兄さん達が向かう城のための森」

イリヤ「城？」

クロエ「あんななんも知らないんだね・・・森の中に城があるの・・・アインツベルン城が」

ギル「ああ！そういうえば、イリヤさんの心臓を引き抜いた場所だね。あそこ」

.....

イリヤ「はい？」

ギル「未来の僕が聖杯戦争のマスターだったイリヤさんを手刀で・・・」

イリヤ「やめて！なんだか胸がすーすーしてきた」  
クロエ「わたしも・・・そのはなしはやめて」

知らない人はFate/stay nightのUBWを見てね！

アリシア「ねえねえ！急がないと見失っちゃうよ！」

美遊「イリヤ・・・急ごう」

イリヤ「わかってる！みんな急ぐよ！」

「「「「おー！ー！！」「」「」

すずか「あ・・・森の中に入った・・・」

アリサ「あそこの森って昔から気味が悪いのよ」

なのは「たしかに当麻さんに似ていたな~~~~」  
フェイト「うん・・・あのツンツンした髪型はとくに」

まだ、男性のことしか見ていない二人に・・・親友たちは以下略

アリサ「なのは達、今回はここまでにして・・・家であそ・・・」

すずか「アリサちゃん・・・行っちゃったよ。なのはちゃんたち」

すでに親友の声まで届かなくなったか・・・なのはとフェイトは森の中に入っていた・・・

すずか「アリサちゃん・・・」

アリサ「分かってる！言わなくも行くわよ！ううう・・・入りたくないのに」

いやいやで二人もあとを追う・・・だが・・・これがなのは達にとって恐ろしい思いをするとは・・・今の4人は知る由もなかった・・・

イリヤ「どっちいけばいいの？」



クロエ「こつちよ・・・」

美遊「あれ？クロエ、道解るの？」

クロエ「私は小聖杯になるはずだったイリヤで、だから聖杯戦争のための拠点の行き方くらいは知っているわ」

アリシア「へ〜〜クロエお姉ちゃんも大変だったんだ」

ギル「僕はただ、突き進んだだけだけどねwww」

イリヤ&クロエ「お願いだから、あんたは喋らないで！！」

少年ギルがこの森の中でしゃべるとイリヤとクロエはなぜか不快の気持ちになるらしい

アリシア「結構歩いたけど・・・あれ？霧が出始めたよ」

クロエ「みんな私から離れちゃだめよ。ここで迷うと遭難するから」

美遊「この霧・・・なんだか魔術も混ざっている気がする・・・」

クロエ「その通りよ。美遊。この霧は森の侵入者を惑わし命を奪うのよ」

美遊「城に行かせない防御魔術・・・」

クロエ「美遊は賢いわね。それに比べて、こいつは」

イリヤ「私だってある程度は理解できてるわよ！」

クロエ「はいはい」

イリヤ「なによ。そのあゝもどどでもいって顔は！」

アリシア「お姉ちゃん達、喧嘩しないで！」

ギル「ホント仲がいいねwww」

霧の中で5人はゆっくりと先へと進む……クロエはふいに後ろを向いて……

クロエ「うふふふ……後ろの子達は本当に哀れね」

イリヤ「何か言った？クロ？」

クロエ「べっつに~~~~ふざけて誰かを置いていこうかな~~~~  
って」

美遊「それは冗談じゃすまないからやめて」

クロエはなのは達が後ろをつけていることに気づいていた……  
そしてこの霧もなのは達が侵入したため、防御魔術が起動したものであった……

その頃、なのは達……

なのは「ふええええ!?!?ここどこ!?!?」

フェイト「さっきここ通った……なのは」

なのは「アリサちゃん達ともはぐれちゃったし……」

フェイト「その前に私たちと一緒に二人いた?」

なのは「あ……忘れてた」

「きゃああああああああああ」

フェイト「!!!! なのは!」

なのは「うん！アリスちゃんたちの声だ！」

二人は急ぎ、声が聞こえた方向へ向かう……

なのは「アリスちゃん！すずかちゃん！」

アリス「なのは……見てないで……助けてよ」

すずか「く……くるしい……」

なのは達が駆けつけると……アリスとすずかの二人が巨大な木の化け物のつるに絡め取られていた！

なのは「ふええええええ！？なにこれ！？」

フェイト「ジュエルシード……いや、違う。何か違う！」

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「うん！」

二人はバリアジャケットに着替える……

フェイト「いやー！」

フェイトの斬撃で二人を縛っていたツルを切りおろし……

なのは「デイバイン……バスター……！！！」

「おおおおおおおおおおお！……」

なのはの魔砲が一撃で木の化け物を仕留める……

アリサ「死ぬかと思った……げほげほ」

すずか「ありがとう……なのはちゃん。フェイトちゃん……」

なのは「ごめん……つい夢中になって……」

アリサ「ごめんで済むはずがないですわ！よりもよってこの森に入るなんて」

フェイト「ん？この森に何かあるの？」

アリサ「ありまくりよ！この森の奥は冬木市の市内に入るのよ！」

フェイト「それが？」

アリサ「本題はここからよ！この森が冬木市に近づけば近づくほど幽霊やらさっきの化け物・・・奥までたどり着けば大きな城があるって噂よ！」

フェイト「それがさっきの・・・」

アリサ「私は昔、ふざけて入って怖い目にあつたのよ・・・だからわたしは・・・ううう」

すずか「アリサちゃん・・・なのは、わたしもね。この森には近づくなつて忍お姉さんに言われているの・・・昔、忍お姉さんも入って恭也さんと美由紀さんにかなり迷惑をかけたつて怖い目にあつたつて・・・それで」

なのは「ふええええ！？お兄ちゃん達まで・・・」

我が家の最強の兄姉すらも恐れる魔の森・・・それを知らなかった二人は巻き込んでしまったことに深く謝罪し反省する。

フェイト「でも、トウマはどうしてこんな場所に？」

アリサ「あれって、やっぱり、当麻さんだったの？」

フェイト「断定はできないけど……」

なのは「でも……もし、当麻さんならすぐに私たちの所に来ると思っけど、どうしてこんな場所に？」

アリサ「人違いじゃないの？」

フェイト「でも……あれは……」

すずか「ねえ……」

なのは「う〜〜〜ん……これはちゃんと調べないと気がすまないの」

すずか「ねえ！」

フェイト「なのは、ここは私たちだけで調べましょう……アリサたちは先に帰って」

アリサ「ちょっと！私たちだけで戻っていうの！？冗談じゃないわ！」

すずか「ねえってば！みんな！」

「「「ちよつと、待ってて！」「「「

すずか「それどころじゃないよ！みんな！」

「「「……え？」「「「

辺りを見渡すと森に霧が出はじめ……周りから何か近づいてくる音が複数……いや、たくさん！

すずか「み……みんな！忍姉さん達が恐れたのがくるよ！早く逃げよう」

アリス「すずか……ぐす……まさか……」

なのは「え？なんなの？なんなのー！？」

フェイト「なにか……くる」



ああ．．．．がああ．．．

「「「ひっ!?!」「」」

周りから．．．先程倒した木の化け物のほかに半分腐敗した人が  
ぞろぞろとつめき声を上げながら近づいてくる．．．

なのは「あ．．．あれって．．．まさか．．．」

アリサ「ぞ．．．ゾンビ．．．だよね!?!」

すずか「ううう．．．あれが、恭也さんと美由紀さんが恐れた．．．

」

フェイト「なのは．．．敵が多過ぎる」

なのは「フェイトちゃん!急いで空に．．．きゃあ!」

フェイト「なのは!うっ!?!」

なのはとフェイトの魔法を使うことを森が学習したのか。木のツル  
が二人を拘束し、身動きを取れなくする。その後詰めか、地面から  
木が生えてきて二人を取り込んでしまった．．．

アリサ「なのは！フェイト！」

すずか「アリサちゃん……」

なのは達が迎撃できないため、二人にホラーで出てくる怪物が近づいてくる。

「「いやー……！！！」」

二人の悲鳴が森の中に木霊する……そしたら突然、何かが風を切る音……

バシユツ！バシユツ！

危ないところに二本の剣が二人に襲いかかろうとした怪物の首を切り落とす！

士郎「ギリギリ……」

上条「うわ……誰かにつけられていると思ったけど、まさかの面子だった……」

士郎「俺は防御魔術の方を足止めしながらあの二人を確保するから、

当麻はあの木に拘束されている二人を頼む！」

上条「了解！」

二人は解散し、防御魔術で現れた化け物を潰していく。

上条「邪魔だ！」

バキン！

いつものように右手で殴りながら化け物を消していく……そして、無事になのはとフェイトの所へ着く

上条「今助けてやる。二人とも」

バキン！

右手を二人を取り込んだ木に触れる……木は枯れ……朽ちた場所から二人を救出する。

上条「なのは！フェイト！しっかりしろ！」

返事がない……二人とも気絶しているようだ。

上条「士郎さん！こっちは終わったぞ！」

士郎「ああ！こっちも2人とも確保した。」

最後に上条は右手をかかげ、霧に触れる……その瞬間、何か割る音と共に霧は晴れていく……

士郎「4人とも気絶しているのか」

上条「なのはとフェイトを倒してしまうなんて……すごいなアイツベルンの防御魔術は……」

士郎「どうする？このまま、放置すると凍死するぞ。この子達……」

上条「そうですね〜もう夕暮れだし、すぐに暗くなる……から街に戻るのは危険だな〜」

士郎「とりあえず、運ぶか・・・城に」

上条「あそこに置いてあるキャリアケースと女の子を二人ずつ運ぶのは辛くないせうか？」

士郎「それなら・・・トレース・・・オン！」

士郎は近くに倒れている倒木に手を当てる・・・そして、倒木は姿を変えていく!!

上条「リヤカー・・・だと」

士郎「頑張つて運ぶぞ。当麻」

上条「 〓 ( ・ ・ ・ \* ) ハア…ハイハイ」

士郎が投影したリヤカーにキャリアケースと4人を乗せる・・・そして4人が風邪を引かないように士郎の気遣いで毛布を四人にかけてあげる。

士郎「んじゃ、そ〜の！」

上条「うおおおお!!結構重い!しかも急な坂道！」

士郎「我慢だ！後、城まで3キロだ！体に強化の魔術で強化して一  
気にいくぞ！」

上条「くっそー！ー！ー！明日はモロ筋肉痛確定だ」

士郎「弱音を吐くなよ。こっちも言いたいぐらいだ。」

上条「あれ・・・雪？」

士郎「！！当麻急ぐぞ！ここで雪は降ると着いた時は吹雪だ！」

上条「まじ？んじゃ、凍える前に一言・・・不幸！ー！ー！ーだ  
！！」

士郎「うおおおおおおお！！」

二人の青年は全力でリヤカーを引き、城に向かう・・・空には白  
い雪が降りつつ森を白く染めていった・・・

続く・・・

## 26・アインツベルンの森（後書き）

山に登山の場合は天候はちゃんと確認しましょう~~~~って違う！

さて、次回！気絶したなのは達が目覚めるとそこはとある古城の部屋！通路から不気味な物音、そして、凶器を持った白い影・・・雪の古城で恐怖の時間が始まる・・・

では、次回もおたのしみに！（o・・・o）／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6546t/>

---

とある幻想殺しの戦い

2012年1月6日22時45分発行